
恋愛、先手必勝法！

ねこきち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋愛、先手必勝法！

【Nコード】

N2692L

【作者名】

ねこきち

【あらすじ】

「俺、あんたみたいな女、好きじゃないから」その上好きな人がいると言われても、諦められるワケがない。だって好きなんだもん。私にも、その優しい目を向けてはくれませんか？

——片思いの男に片思いする諦めの悪い女の奮闘話。

※本編完結しました。今後は番外編を時折更新です。

簡易登場人物表

※本編開始時の設定です。苗字とか名前とか人とか増えたり減ったり適当に。

●相庭悠
あいばゆう

猪突猛进主人公。多分ヒロイン。恐らくヒロイン。勝利に猛烈片思い中。

●笹原勝利
ささはらしょうり

硬派っぽいヒーロー。多分硬派……でもなくもない。片思いの相手がいる。

●明石
あかし

勝利のクラスメイト兼友人その1。人間関係観察が趣味。

●鈴木
すずき

勝利のクラスメイト兼友人その2。フツウのいいひと。

●東山明菜
ひがしやまあきな

悠のクラスメイト兼友人その1。女王様。

● 頼子よりこ

悠のクラスメイト兼友人その2。フツーフェチ。

● 相庭天地あいばてんち

悠の父親。神出鬼没な謎の格闘家「TENCHI」。娘超ラブ。

● 笹原直刃ささはらすぐは

勝利の祖父。男子に厳しく女子に優しい。実家の道場の師範。

● 笹原雄大ささはらゆうだい

勝利の父親。

● 笹原政子ささはらまこと

勝利の母親。

● 笹原広大ささはらこうだい

勝利の兄。

● 笹原剣矢ささはらけんや

勝利の弟。

● テッド・バロー

天地を崇拜する謎の一味の一人。悠にストーク片思い。

01. 諦めません、勝つまでは!

相庭悠、16歳、――恋をしちゃいました。>br<

そして。>br<

「俺、あんたみたいな女、好きじゃないから」>br<

笹原勝利、16歳、に――ファーストコンタクト見事玉砕。>br<

でもですね、でもでもですね、だからなんだっていうんですかね。

>br<

世の中に溢れる恋人同士が全て好き同士から始まるとでも? お見合
いから始まった出会いには恋愛を育めないとでも?>br<

ノンノン、ナンセンス。>br<

「好きな人いるの?」>br<

「……いる」>br<

笹原君には珍しく返事に間が空いた、応え辛い相手と認識。>b

r<

「その人は恋人なの?」>br<

「何でお前に答えなきゃならない」>br<

ごもつとも。>br<

しかしこれで引いては女が廃る、もとい、これで引くほどこの恋は
伊達じゃないんですよミスター。>br<

「恋人じゃないんだね。ならオッケー。今後もアピールしますんで、
しまりますんで、1-Aの相庭悠を今後ともどうぞよろしく!」

>br<

恋の始まりは日々の繋がりから、日々の繋がりは笑顔から。>b
r<

って事で自分的に目一杯の笑顔で微笑んで見せた、……が、敵もさ
るもの、「何だこいつ頭おかしいのか」という顔でむっつりしたま
ま踵を返されてしまいました。>br<

勿論そんなの想定済み、今時恋愛も情報が言う時代なのよ、笹原君の大まかな性格も告白された後のリサーチも完璧拔かりなし。

>br<

「付いて来るな」>br<

隣に並んだ私を突き刺すような目で見る。>br<

イヤン、恋する乙女にとってはそれもまた甘美な刺激、好きな人の為なら乙女はマゾにもなれるのよ。>br<

しかし聞きしに勝る眼力だ。>br<

中学剣道で全国の覇者になった男は迫力が違う、無愛想で大概無口でいつも人を睨むような顔をしている彼には男の子でもちよつとやそつとじゃ近付けない雰囲気。>br<

それでも勇猛果敢な恋する乙女達は清水の舞台から飛び降りるかって勢いで告白をするけれど、大体が近寄って睨まれただけでUターン、頑張ってもさつき私が聞いた一語一句違わない台詞と無表情に撃沈。>br<

長身で格好いい剣道界の若きエースは入学当初、飛ぶ鳥も落とす勢いでモテていたけれど、蓋を開けて見ればコレでソレでアレで、夏休みも間近という今に至ってはすっかり触らぬ神に祟りなしと眼福の為の観賞物と化している。>br<

普段から愛想はないけど決して冷たい人じゃない、むしろ仲のいい男友達には義理堅いとさえ称されている、だからこそ私が惚れたんですけどね！えへ！>br<

sonでもって私は何より好きなのはこの突き刺すような目だ、剣道部で練習している彼を見てキタと思いました。>br<

予感確信に変わり、知れば知るほど好きになって現在に至ります。>br<

宝くじだって買わなきゃ当たらないのよ、見てるだけなんて性に合わない、当たって碎けても立ち直って必ず勝利を掴んでみせますとも！……笹原君の名前だけにシャレっぽいな。>br<

「私もこっちだから。ストーカーじゃないから安心してね。襲わな

いし取って食いもしないから、逃げなくてもいいよ?」> b r <

にこにこ言えば、笹原君は実に目も合わせず嫌そうな顔をした。

> b r <

「絶対にこいつ頭おかしい、ヤバイ、付き纏われる」って感じかな。

> b r <

いやね、それでも研究しましたのよ、何せ恋する乙女な上笹原君たらまあ微かにしか表情変えないもんで意思が読み辛いんです。>

b r <

何か言って相手の反応見て「バッチリ好印象!」とか絶対ない訳なんですよ、精々「あーこりゃヤバかったかな」と思わせられる。>

b r <

しかも同中の友達ですら笹原君の笑顔なんて見た事ないってレアな笑顔なんで、大体の人は何言っても失敗したとしか思わないだろうな。> b r <

しかし、しかしですよ、恋する乙女のパワーをナメてもらっちゃ困るんです、ここ数ヶ月研究に研究を重ねましてワタクシ、見事大体何考えてるかを把握するまで達成致しました、拍手。> b r <

「つーかお前、俺の事恐くない訳?」> b r <

逃げてでも追い掛けて来て騒がれると思ったのか(大正解)、笹原君はぶっすりとしたまま隣を歩く私にボソリと言う。> b r <

予想外のお言葉を賜り、思わず笹原君を見上げてしまった私。> b r <

私これでも167cmあって女子じゃまあ高い方だと自負してるけど、186cmの笹原君じゃやっぱり見上げる感じになる。> b r <
別に背の高さに拘る訳じゃない、笹原君なら150cm以下でも全然オッケー。> b r <

これでもかときよとん顔になった私が笹原君も予想外だったのか、不機嫌な表情から少し涼しげな目を見開いて驚いた顔になっている。> b r <

これもかなりの笹原君上級者でなければわからないレベルだろう。

> b r <

「え、あれ？ 笹原君、私の笹原君データによると記憶力は良かったはずなんだけど。……データ書き直しかな……」> b r <

成績が特にいい科目からしても、今日起こった事をすっぽり忘れるほどには悪くないはずだ。> b r <

この私とあろう者が見誤ったか？> b r <

「何だそのデータって……」> b r <

「あ、だからストーリーとかじゃないから安心してね。友達に聞いたりとか自分で見た感じの笹原君の分析データってだけだから。ホラ笹原君暗記物の成績いいでしょ？ だからね、記憶力はいいって感じに」> b r <

因みに名前、生年月日、身長体重（他の男子と比較してデータ採取）、趣味、行動傾向……ってくらい？> b r <

「………………。で？ 何で俺が記憶力悪いって？」> b r <

うん、これは「一々こいつにツッコんだら負けだ」ってとこか。

> b r <

「ええ？ だって私言ったでしょ。好きです、付き合ってくださいって。もしくは恋人前提にお友達からよろしく願いますって。十数分くらいしか経ってないのに忘れてる訳じゃないでしょ？」> b r <

「大体の女は俺が断ると泣くか怯えるかする」> b r <

「私に言わせりゃ好きじゃないって言われただけで引く方がどうかしてるんだけど」> b r <

流石に私だってクラスも違う知らない奴からいきなり告られたら困るし、その場で即お断りされるのなんか想定内。> b r <

大体嫌いと言われたからって諦められるもんじゃない、少なくとも私は。> b r <

「まあ私だってせめて知り合ってからと思ったんだけどさ、だってちっとも笹原君と接点ないんだもん、理由もなくお友達になっただけなんて言う方が怪しい感じでしょ、キャッチっぽくて。だからせめて知れる範囲で知ってから挑みたかったのね」> b r <

そう言い切ると笹原君はまるで宇宙人でも見るような目で私を見た――と思う。>br<

「そうじゃなくて。だから、俺の事恐くない訳？」>br<

「どこが？」>br<

心底わからなくて聞いたら、心底わからないという顔をされてしまった。>br<

ううん、やっぱこうして近くにいると微かな表情の機微がいつもよりわかる。>br<

「愛想ないし、相手見ただけで睨んでるとか言われてるだろ」>br<

「あー、笹原君眼力強いもんね。いや、私としてはそこがいいって言うか！大好きな訳なんですけども！」>br<

キャ、大好きって言っちゃったっ。>br<

「眼力で済む問題か？」>br<

違う問題はスルーですか、流石中学剣道全国覇者、スルースキルも全国レベルですか。>br<

うむ、相手にとって不足なし。>br<

「恐くないよ、全然。別に殺気籠ってる訳じゃないし、笹原君の目凄く格好いいと思うもん。剣道してる時のなんてもう最高ですよ！」>br<

「冷たいって言われるけど？」>br<

「本当に冷たい人にあんな友達出来ないよ。人となり見たらわかるもんじゃない？だから笹原君が面倒見いいとかわかるよ」>br<

実は内緒なんですが、笹原君の中学の時からのお友達の明石君はちょっとした協定を結んでおりましてですね。>br<

これでも目立たないようにバレないようにさり気なく情報ゲットしていた私なんだけど、明石君では鼻が利くというかまるっとわかったりみたいで、以来ちょこっと交換条件で情報を提供して貰っちゃったりしてる訳なんですハイ。>br<

ちゃっかりしてんなーと思うけど、「お膳立てしてやろうか」って

お誘いをお断りしたらどうもお氣に召して頂けたようで、割と最近
は明石君が積極的に情報を下さる、お代官さまさま。>br<

だって自分の恋愛なんだから自分で何とかしたいもんね、誰かの
力でお膳立てして貰っても、私と同じように笹原君を好きな子達に
申し訳ないし笹原君だってちょっとは明石君の顔を立てたいと思
ってしまいかもしれないし、そうでないとは思うけど断ったら断っ
たでちょっとは氣まずいと思うんだ。>br<

割と当たり前の事だと思っていたけど、将を射んとするにはまず馬
からと、明石君曰く結構明石君経由で笹原君に近付こうとする子達
もいるみたいだ。>br<

そんなんでいいですかねえと正直思う。>br<

まあ持てる武器は使うのがいいと思うけど、こういう事はやっぱ素
手で体当たりと行きたいじゃないですか。>br<

「……お前、変な女って言われないか？」>br<

「よくよく言われますが何か問題でも？」>br<

そりゃあそうだ、何せあの親父様に男手一つで育てられてマトモ
に育ったと思う方がいっそどうかしてる。>br<

うちの親父様は所謂格闘マニアなのだ、しかも見る方じゃなくて実
施する方。>br<

その上ありとあらゆる格闘技を娘にも習得させる方。>br<

お陰様でその一人娘は特に好きでもマニアでもない格闘技を幼さ特
有の吸収力でガンガン身に着けていきましたとさ。>br<

そう、問題大アリだ。>br<

幼い頃は親父様に教わった通り常識もクソもなく、正義感だけを振
り翳して技を使った。>br<

勿論相手が相手だから、精々まだ小さいんだから危ない事しちゃい
けませんって周囲の大人に叱られるくらいで、助けた人達には感謝
されたもんだけどさ。>br<

でも少しずつ周囲を、世間を、自分を知るようになって、わかっ
てしまった。>br<

スポーツとしてやっている訳でもない私は、女として奇異な存在だ
って。> b r <

——今でも蘇る、初恋の苦い思い出。> b r <
だから性格はどうしようもないけども、私はどんなに親父様にさめ
ざめと鬱陶しく泣かれようとも、もう人に自分の技は揮わないと決
めた。> b r <

……あんまりにも親父様が鬱陶しいから、今は体型維持の名目で少
々嗜んでおりますのよオホホ程度。> b r <

もう、もう絶対に、二度と、同じ轍は踏まない。> b r <
好きな男の子に——あんな目で見られるなんてゴメンだ。> b r <
もう顔も名前も覚えていない、でも、あの子のあの時の目だけが、
今も鮮明に——。> b r <

「俺ここだから」> b r <

「え、笹原君ちって実家が剣道場なんだ。へえ、納得」> b r <
さっさと立派な門構えの中に入ろうとした笹原君の足がぴたりと
止まって、また怪訝そうに私を見る。> b r <

なんか私もう笹原君の中で宇宙人として確定されてそうだ、……他
にないという点で喜んでいいものかどうか。> b r <

「うち近いし……それこそ実家知らない奴の方が少ないと思うぞ」
> b r <

ああ、だからすんなりここが家だと教えたのか、……そんなシマ
ッタみたいな顔しなくてもいいのに。> b r <

そんな顔も見れて嬉しいですけど、キャ。> b r <

「ああー、いや、私のデータ、性格分析重視だったから」> b r <
今度はなんか呆れた顔をされました。> b r <

というか明石君といるところを見てもこれだけ表情の変わる笹原君
なんて見た事なかった。> b r <

貴重？もしかして超レア！？……ああああでも写メ頼んだら流石
に拳が飛んできそうだしなー！> b r <

「なんじゃ勝利、そんなとこボケっと突っ立って。皆待っとるぞ、

早う入れ」>br<

えへっと私が照れ笑いをしていると、門から出て来た着物姿のお爺さんが笹原君に声を掛けた。>br<

「爺さん」>br<

「さ、笹原君のお爺さん!？」>br<

私の声にお爺さんも私に気付いたのか目を向けた。>br<

ここで会ったが百年目……じゃない、笹原君の身内とあってはこれは丁重に挨拶をしなければ!>br<

「初めましてお爺様!私、相庭悠と申します!不束者ですが今後ともよろしくお願い致しますっ!」>br<

礼は九十度、カンペキ。>br<

「嫁みたいな挨拶すんな!」>br<

「ならないとも限らない!」>br<

「ならない!」>br<

「なりたい!」>br<

「断る!」>br<

「だがそれも断る!」>br<

睨み合った私達の間に朗らかな笑い声が響き――……。>br<

「キャー!!」>br<

「何してんだジジイ!」>br<

「ほー、ええ娘さんじゃー。ボンツキュッボンってやつじゃな」>br<

「…………尻を触りくさりやがりましたよこのエロジジイ様。>br<

「なんじゃい、カノジョか勝利。そんなら中に入って貰ってお茶でも出して役所行って婚姻届を出してお菓子でも食べなさい」>br<

「間に妙なものの挟むんじゃねえよ!」>br<

「ハイ、お言葉に甘えて末永くよろしく願います!」>br<

「お前も乗るな!!」>br<

にこにこ笑い合っている私達に怒号でツツコンでから、盛大な

溜息を置いて笹原君は中に入って行ってしまった。>br<
そしてその場に二つの「ぶはっ」という音が飛び出す。>br<

「あいつは昔から照れ屋さんでのー」>br<

「キャー、笹原君のツツコミなんて初めて聞いた!」>br<
にこにこにこにこ、私達は笑い合う。>br<

やっぱり笹原君も家族の前では随分印象違うんだなあ、新しい発見だ、データに追加と。>br<

あとはお爺さんも笹原君に似ていい人、あとノリがいい、と。>br<

うーん、今日この数十分で大収穫だ、大満足。>br<

フラれた?好きな人がいる?ノンノン、そんなものでめげませんとも。>br<

告白しただけでいいなんて冗談じゃない、不戦敗なんて絶対嫌、泣くのはすべてやる事やってからだ。>br<

決意も新たにして気合を入れた私はお爺さんに向き直って改めて頭を下げる。>br<

「それではお暇します。会えてとっても嬉しかったです」>br<

「は?」>br<

「は?」>br<

……「は?」とは?>br<

あれ、いつの間にか私何かやらかした?いやさっきまでお爺さんも笑ってたよね?え、あれ嘘?>br<

もしかして不屈きな女が孫に近付いてないかどうか探る為の硝子の仮面?……お、恐ろしい人!>br<

「上がって行きんさい。勝利は近所の子らに教えとるから、ちーとお待たせしてしまうがの。何なら見学して行きんさいな」>br<

アガッティキンサイ……それは素敵な魔法の呪文………ではなく!>br<

「いいいいいいんですか!お邪魔しますお邪魔させて頂きます!」>br<

「ホホ。かーわいらしい娘さんじゃのー、ボンツキュツボンじゃしのー、勝利も隅に置けんのー」> b r <

「えへっ」> b r <

「ホホッ」> b r <

お互いににこつと笑い合った後、お爺さんに連れられて私は家の長い廊下を渡り、繋げて作ってある道場の方へと足を踏み入れた。

> b r <

さっきお爺さんが言った通り、子供達の威勢のいい声が響いている。
> b r <

うーん、実は剣道も一通りやったんだよね私、ちょっと懐かしいな。
> b r <

でも習いに行っていた所の師範を数ヶ月で叩きのめして事実上のクビになったのは思い出さない方向で。
> b r <

……だから、私もあの頃は常識とか体裁のわからない子供だったのよ。
> b r <

「うわあ……」> b r <

ヤッバイ、学校でも見て思ったけど、胴着姿の笹原君超カッコイイ……。
> b r <

自分の腰ほどくらいの子供ばかりだから手加減はしてるけど、面から見える眼差しは真剣で変わらない。
> b r <

涎垂れてないよね？じっと集中して一点を見たりすると私口開ける癖あるんだよね、気を付けないと。
> b r <

ああでもこれは涎モノの光景ですよー。
> b r <

でも本人の許可ない撮影は自分のご法度と戒めております私！我慢の子！
> b r <

剣道部ってうちー先生が厳しいから部活中はギャラリー規制してるんだ、だから笹原君の剣道姿を見るのはいつも遠くから目を皿のように……。
> b r <

「何でお前がここにいる」> b r <

……していたら子供達に自主練を命じた笹原君が目の前に来てい

た。>b r<

「直刃さんから見学許可を頂きましたので!」>b r<

えへん。>b r<

「……………直刃さん?」>b r<

「やっぱり笹原君たら記憶力悪いの? 自分のお爺さんの名前でしょ?」>b r<

「そうじゃなくて。なんで俺の爺さんの名前をお前が呼んでるんだって事だ」>b r<

「そう呼んでって言われたから」>b r<

なかなかどうしてフレンドリーなお爺様をお持ちで。>b r<
お父さんとお母さんは共働きの事で会えなかったけど道場に出るまで家政婦さんには会ってご挨拶はした、やっぱり好きな人のご家族にも好かれたと思うのが真情。>b r<

家政婦のトミさんには「あら、坊ちゃんにこんな可愛らしいお嬢さんが!」って言われちゃった、キャ。>b r<

「……………変人同士気が合ったか…………」>b r<

「自分のお爺さんに変人はないよ」>b r<

「聞いてんなよ!」>b r<

「笹原君の声ならどんな小さくてもキャッチ出来ると自負!」>b r<

えへんえへん。>b r<

「……………で、爺さんは?」>b r<

「トミさんとお茶用意してくれるって言ってたよ。お構いなくって言っただけど、多分聞いてなかった」>b r<

「……………トミさんにまで会ったのかよ…………」>b r<

「いい人だよねトミさん。やっぱり笹原君の周りの人は皆いい人ばかり」>b r<

やっぱりこれが人となりというやつなのね。>b r<

私の親父様は特例として。>b r<

なんだか凄く嬉しくなる、だって私の好きな人がそんな人達の中

にいる、同じように優しく育て今があると思うと好きになって本当によかったと思う。>br<

「変な女」>br<

そう呟いた笹原君はすぐに背を向けて、「先に部屋行っとけ」とぶつきらぼうに言った。>br<

初対面の女がここまで家に馴染んでしまったのが気に食わないのか、笹原君は私が通された客間に来てももうむっつりと黙ったままだつたけれど、多分部屋の外で様子を窺っていたんだろう直刃さんが来てくれてお茶会になった。>br<

客間に差し込む日差しが茜色になって、本当にもうお暇しますと立ち上がると、直刃さんが「勝利、可愛いお嬢さんを暗い中一人で帰すんじゃない」と発破をかけて立ち上がらせた。>br<
不機嫌そうな笹原君を伴って外へ出れば、丁度道場を終えた子供達
が帰って行くところだった。>br<

「勝利兄ちゃんバイバイ！」>br<

「勝利兄ちゃんカノジョー？」>br<

「さっさと帰れ！」>br<

キャハハハと笑いながら手を振り走って駆けて行く子供達に私も手を振り返して見送った。>br<

本当にちよつと懐かしい光景だ、……………大体どこ通っても数ヶ月でクビにされてあんまりそういうところで友達は出来なかったけれども。>br<

いや、むしろ師匠扱いされた妙な件は多かったけな……。>br<

「って事で、ここでもいいよ。ここから私の家もあんまり遠くないし」

>br<

「え、お前近所？」>br<

「私高校に上がるのと同時に引越して来たから」>br<

この町を選んだ事だけは我が親父様に拍手だ、グッジョブ！>br<

他は全くちつともさっぱり全然褒められたもんじゃないけど、偶に

は役に立つじゃないの親父様ったら。> b r <

引越し早々フランスに暴れ熊退治しに行くとかぬかしくさってホイ出て行ったのが帰って来た暁にはボッコボコにするところをボコで許してやろう。> b r <

「じゃあね、今日はどうもありがとう」> b r <

「オイ」> b r <

背を向けて歩き出した私を低い声が呼び止めて、パブロフの犬のように私は振り返る。> b r <

今は読めない無表情がそこにあった。> b r <

「俺は、――好きな奴しか好きにならない」> b r <

淀みなく、迷いのない、笹原君の真っ直ぐな目のような声。> b r <

それも、私が大好きな声だ。> b r <

「他の女は、好きにならないし、なれない」> b r <

私はそれににっこりと笑った。> b r <

「惚れ直した!」> b r <

実に、実に私は目が高いと思った、心底惚れた、惚れ直した、骨抜きだ。> b r <

僅かに目を見開いて、すぐに笹原君は苦虫を噛み潰したような顔になる。> b r <

いつもの微かな表情の変化じゃなく、顔一杯に「通じてない」って顔。> b r <

貴方が私を好きじゃなくても、貴方が私を嫌いでも、私は好きだ、大好きだ、とてもとても好きだと思った。> b r <

猪突猛進、それでどうにかなるとは思わないけど、これが私だ。> b r <

まだ大丈夫、私はまだ「かなり変な、普通の女の子」でいる。> b r <

笹原君の目に――あの子のような色は浮かんでいない。> b r <
今度こそ、私は間違わない。> b r <

あの日閉じ込めた拳を、強く握った。> b r <
> b r < > b r < > b r < > b r < > b r <
> b r <

02. 早起きは三文の得

「……なんでお前がここに……」 > b r <

「俺が相庭の弁当駄目にしちゃったから」 > b r <

「そういう訳でパンくれるって言うから」 > b r <

翌日ウッキウキで登校した私を待っていたのは廊下の角で明石君と出会い頭正面衝突するというイベントだった。 > b r <

お互い転校生でもなく朝食を損ねたパンを啜えてもいなかったので、ドキッとかいうのもなく（当然だ）、フツーに私が持っていたお弁当箱が宙を舞って再起不能になったただけだけど。 > b r <

これならお互いドローと思うけど、ところがどっこい明石君のおドジったら、足滑らせたの堪えようとして私のお弁当踏んじやったんだよね。 > b r <

また丁度私も今日やたら早朝に目覚めてルンルンで気合入ったお弁当作ったのはいいけど、超ウカレポンチだったからお弁当袋忘れちゃってただ手提げにお弁当箱入れて来ただけだったもんで、中身飛び散るわ拳句大丈夫だと思った半分は踏まれるわで、どう考えても食べられない。 > b r <

そんなこんなで明石君が昼に買うというパンを私もご相伴する事になった。 > b r <

しかし！ いやしかし！ あんな百害あって一利もなしだと思っていたイベントにこんな盲点が！ > b r <

そういえば明石君のパンをご相伴に与るイコール明石君と一緒にご飯を食べる（大抵購買近くの空き教室で食べるらしく、貰いに行つて私が教室まで戻るの面倒という事で）イコール笹原君とも一緒に昼休みが過ごせる！！ > b r <

明石君グッジョブ！ ナイスイベント！ > b r <

「だからストーリーじゃないの、安心してね」 > b r <

「いっそこうも偶然の方が恐えだろ」 > b r <

「まあいいじゃん、相庭と飯食ったなんて、俺教室戻ったら超自慢しよ」>br<

能天気な訳のわからない事を言うのは二人の友達の鈴木君、こちらには明石君と違ってその大概の事は気にしてなさそうな能天気さ經由のお友達と思われる。>br<

まあ笹原君の友達なんだから、薬にはならずとも毒にもならずって感じかな。>br<

笹原君と明石君が目立つ人種だけにちっとも脚光を浴びてはいないけど、私の友達の頼子には絶大な人気を誇ってる（彼女は「大概恋愛対象にはして貰えない」所謂いい人」フェチなんだそうだ）。>br<

「ははっ。そういう俺も相庭に関しちゃあいつらに超自慢出来っかな」>br<

「何の話？私もしかして珍獣扱いされてる！？こんなに大人しくて目立たない子なのに！？」>br<

そう言ったら明石君も鈴木君もお腹抱えて爆笑し出してしまった、笹原君さえ「お前のどこが大人しいんだ」的な目で見ている。>br<

うう……だから別に人に自慢出来るようなレア珍獣じゃないってーの！>br<

過去の経験を踏まえてそれでも私なりに大人しく慎ましく高校生活を過ごしてるっての。>br<

運動系の部活には入ってないし、勧誘も断ってるし、体育の授業だってそれなりに気を使ってるし、今入ってるのなんか茶道部ですかね。>br<

親父様に報告した時には電話越しに電波みたいな奇声上げられましたよ、……やっぱシメとくかな。>br<

中学の時もうっかり体育の授業だけとは張り切っちゃったら毎日のように部活勧誘に追い掛け回されて大変だったもんなあ。>br<あれこそストーカーでしょ、私なんてストーカーが聞いたら鼻で笑

うレベルでしょ。>br<

お前が？ハッ（嘲笑）、て感じでしょ。>br<

そういえば朝だとか休み時間だとか放課後だとか、かなりの鬼ごっこを校内でやらかしたから目立ってた……かな？>br<

「測量テストでなんか凄い数字叩き出したとかだろ？先輩達が目の色変えて追っ掛けてたもんな」>br<

やっぱそれかい。>br<

中学の教訓を踏んで控えめにしようとしたっていうのに、ついつい楽しくなって張り切ってやっちゃったからなあ。>br<

「相庭超目立ってんよ。可愛いっつかビジンだし、スタイルいいし」>br<

「そんなお世辞的に褒めても何も出ないよ鈴木君」>br<

これが笹原君なら何か色々なものが出て来るかもしれないけどね。>br<

「しかし相庭、告られても全員撃墜してると思ったら、よりによって笹原狙いとはなー。すげー趣味してんね」>br<

「やだそんな、目が高いなんて褒められると照れるよ！」>br<
バシッと鈴木君の背中を叩いたら鈴木君と明石君に奇妙な目で見られた上、笹原君は心底呆れたという顔を逸らされてしまった。>br<

んもう、ホントに照れ屋さんですこと。>br<

でも私としてはそこも可愛いって言うか大好きって言うか！>br<

「つか、この無愛想のどがいい訳？常々コイツにビーム放って撃沈してる女子に聞いてみたかったんだけど」>br<

「ああそれ俺も思った。つか今じゃ近寄られもしねえのに、相庭すげえな」>br<

「ええー、乙女の秘密と言いたいところだけど、やっぱり最初は眼力かなあ。なんかこうビビッと来たって言うか」>br<

「古！あー、でも眼力はハンパねえよな」>br<

うんうんと頷いた鈴木君に言ってる傍からジロリと刺すような笹

原君の視線が飛ぶ。> b r <

ああ、それそれ！そこにシビレルアコガレルう！！> b r <

「でも私は笹原君の全部が好きだから！」> b r <

「……お前が俺の何を知ってるっつーんだよ」> b r <

「ある程度は知ってるよ。小さい頃は道場が嫌でプチ家出したとかその後お父さんに散々怒鳴られ殴られて押入れに閉じ込められて大泣きしたとか、あと」> b r <

「あのジジイ喋りやがったな！？」> b r <

「そんな微笑ましいエピソードワンも好きだよー」> b r <

因みにエピソードイレブンくらいまで聞きました、笹原君がトイレ行ってる間に。> b r <

どうやら笹原君は小さい頃結構泣き虫で今とは似ても似つかない子だったらしい。> b r <

「お爺さん、写真見せてくれるって言ってくれたんだけど、私断腸の思いで断ったから！」> b r <

やっぱりメモリアルアルバムは二人きりで一緒に見るのがセオリーだよ。> b r <

いやしかしまさに断腸の思いでした、身を切られるとはこの事を言うんだなあ、喉から手が出るとか。> b r <

胸を張って言い切った私に笹原君は嫌そうな顔を向け、そして次には不思議そうな顔……いや怪訝そうな顔をした。> b r <

「そこで見てないけど貰ったとかいうオチじゃねえよな」> b r <
「本人の許可ない撮影は自分のご法度と戒めております故！」> b r <

見損なっちゃあ困りますよ、ええと肖像権の侵害に当たるんでしたっけ？> b r <

ぶっちゃけ私だって無断でそんな事された日には、校舎裏にちょっと面貸せの刑執行ですよ。> b r <

もう一丁胸を張った私に笹原君は今度こそ不思議そうな顔をする。> b r <

いや、だからストーカーじゃないと言ってるのに。>br<
「え、でも相庭の写真は結構撮られてるよな。許可してんの？」>br<

「うわバカ鈴木っ」>br<

「あら鈴木君そのお話ちよつと詳しく」>br<

明石君が頭を殴る前にぐつと身を乗り出した私に鈴木君がなんとも脳がお天気な……失礼、暢気そうな笑顔で頷く。>br<

「写真部が秘蔵入手したとか言って、一枚幾らで売り出されてんじやん。知らねえの？」>br<

ほう、写真部とな……となると部長は3-Cの中込先輩だな、副部長は3-Aの柏木先輩。>br<

オーケー、標的データ照合グリーン、明日の昼休みに刑執行。>br<

うふふ、首洗って待ってる。>br<

「当然無許可だから、買ってる人見たら止めてね」>br<

「あ、俺買っちゃったー」>br<

「何故買う」>br<

のほほんと言った鈴木君に思わず笹原君と声がハモってしまった。>br<

ああ！これが二人の初の共同作業！？>br<

「だって水着写真はプレミア付くかもって言ってたから」>br<

あのねえ鈴木君、そんなものは付かないからそういう口上で売り出されるんだよ。>br<

ていうか、さあ。>br<

「水着って何！？」>br<

「スク水、学校の、プールん時の」>br<

……簡潔なご説明どうもありがとうございます。>br<

これは面貸して貰ったくらいじゃ済まないかも、ひよつとしたら闇に葬ったはずの過去の私が顔を見せる事になるかもしれないね。

>br<

うん、とりあえず今日の放課後、中込先輩の兄の確保から始めるか。
> b r <

「わかった、ありがとう、かなりいい情報だった。鈴木君の分は不問にする」> b r <

「よっしゃー!」> b r <

「楽しい人だねえ、鈴木君は」> b r <

「相庭も相当だと思うけど俺」> b r <

ニヤリと言った明石君にそうかなあと首を傾げてしまう、いやそんなはずはないのよ。> b r <

そりゃ確かに入学当初不本意にも鬼ごっこ開催しちゃって皆の記憶には新しいかもしれないけど、そんな超不本意な珍獣扱いで写真まで出回っているんだとしても、そんなちよっとばかり悪目立ちしちゃったフツの子だからね私。> b r <

「ていうかスク水とかなくない?」> b r <

「あー、まあ盗撮だし、しかも水着とかやっぱ犯罪だよなあ」> b r <

「え、でも可愛かったよ」> b r <

「ありがとう鈴木君。でも私もっと可愛い水着持ってるんだけど」> b r <

体重体型は維持してるけど、でもほらまだまだ成長期の女子ですから縦にも横にも大きくならなくとも、年々高くなっちゃうところもある訳なんですよ。> b r <

そんなんで毎年買い換えるんだよね、勿体無いから着倒すつもりでプールやら海三昧してるけど。> b r <

今年なんて高校生になった事だしと思って可愛くもぐっと大人っぽいのか買っちゃったんだから、胸の谷間がそりゃもうスゲーナスゴイデス! って感じのやつをさ。> b r <

それに比べりゃスク水なんて足元にも及ばないわ! マニア向けとか問題外!> b r <

「そうだよ、どうせなら今年買ったエロカワ水着のやつで撮ってく

ればいいのに！あつ、もしかして笹原君はスク水派だったり！？
だとしたら私海とかプールでスク水も吝かじゃないんだけど……」

> b r <

やっぱり好きな人の好みに合わせたいのが乙女心なのよね、キャ。

> b r <

「……一人で勝手に好きなの着てろ」> b r <

ああんもう、絶対零度の冷ややかな視線もまた堪りません！乙女の前には温度差など何のその！> b r <

人がうつとりと笹原君を見詰めているのに何故か明石君と鈴木君は大爆笑。> b r <

いや勿論笹原君の友達だし、実際いい人達だとは思うけど……よくわかんないわ。> b r <

「今のどこに笑いのツボが？」> b r <

まさかこの最大にして最強のEカップ美乳に何か？> b r <

「つか相庭マジおもしれー！こんなキャラだとは思わなかった」> b r <

「笹原前にするとそうなんのな、なるほどねえ」> b r <

ゲラゲラ笑う鈴木君の隣で何やら頷いている明石君、そして我関せずと無視を決め込むマイクル笹原君。> b r <

「いやいや、男子もどうせならそう思うでしょ。写真に収められるのに、ジャージでいいと思ってるの？」> b r <

「そりゃ問題が違うつしよ。鋭いかと思えば、案外ボケだな相庭」> b r <

褒められているのか貶されているのか、非常に微妙なところですよ明石君。> b r <

「その点笹原なんか、ジャージだろうが海パンだろうが無視だもん。あ、諦めてるのか」> b r <

「え！？笹原君も盗撮被害に！？」> b r <

笹原君に目を向けると僅かにその眉が顰められて肯定を表している。> b r <

わ、私の（予定）笹原君の写真を無断で撮った挙句売り捌くなんて不届き千万！>br<

ムシャムシャとパンを食べ切った私はすっと立ち上がった……そう、今こそ立ち上がるべき時！>br<

「わかった、全て私に任せて」>br<

「え、相庭？」>br<

「3-Cの中込先輩、3-Aの柏木先輩だったわね」>br<

「お、おい、あの人達に何か言っても無駄だぞ？あの人達——」>br<

「大丈夫、平和的に話し合いで解決するから」>br<

まあ反省してくれるまで、ただちょっぴり……お仕置が必要かもしれないけどね？>br<

「笹原君の肖像権は私を守るから！」>br<

ぐっと拳を握り締め決意も新たに私はその場から飛び出して三年生のフロアへとダッシュした。>br<

予定変更、恋する乙女はいつだって彼の為に臨機応変なのです。

>br<

>br<>br<>br<>br<>br<>br<

その放課後……いや帰宅途中、私は悩んでいた。>br<

そう——今晚の夕食はロールキャベツにするかコロッケにするかで。>br<

いや待て、そもそも今年はキャベツが高騰しまくってる、コロッケにしてもキャベツ必須だ。>br<

あれ、根本的に問題を抱えてるわ……ハンバーグにでもしようかな、冷凍したひき肉余ってるし。>br<

今日はちよつと昼休みにちよつぴりハッスルしちゃった所為で買い物に行く気力が湧かないんだよねえ。>br<

まあ感情的にちよつぴり高ぶっちゃっただけで、何したって訳じゃないんだけど。>br<

どうも昔から冷静さに欠くと後でどつと疲れるタイプなんだよね。

> b r <

それでも普段は昔と違ってコントロールも会得してるし、こんな風に疲れるほど感情を動かす事はなかったのに。> b r <

ああ、これってやっぱり恋なのね……！> b r <

「あれ？あれー！さっさはらくーん！！」> b r <

とぼとぼ歩いていたら前方に目標確認、ターゲットロックオン！> b r <

さっきまでの疲れも何のその、手を振りながら駆け寄ったら、嫌そうな顔をされなかったので逆に驚いた。> b r <

やだ、まさか私ったら笹原君に嫌な顔をされるのが快感になっているとかじゃないわよね………否定はしませんが！> b r <

「どどどどうしたの！具合でも悪いの体調おかしいの頭痛腹痛腰痛神経痛筋肉痛……どれ！？」> b r <

「何言ってるんだお前は……」> b r <

はあと心底呆れたよな溜息を吐き出され、それが私が知る笹原君のいつもの表情でほっとする。> b r <

ほっとしたついでに漸く状況把握しようと思ったら、いつの間にか笹原君の家の前まで来ていた事に気が付いた。> b r <

「あ、今から出かけるところ？」> b r <

「お前を待ってたんだ、ちょっと……聞きたい事があって」> b r <
！！！！> b r <

「ええと！相庭悠、五月二十日生まれ、O型、身長167cm体重は乙女のお秘密！スリーサイズは上から65E、59、83！家族構成は父と」> b r <

「そうじゃねえよ！」> b r <
んじゃ何ですか。> b r <

「お前……写真部の奴らに何言った？ていうか、何した？」> b r <
あらその話ですかいお代官様。> b r <

「ナニも？強いて言うならちよっぴり感情的に怒っちゃったかな、てへっ」> b r <

でもほらそこは仕方がないじゃない、私の（近い予定）笹原君に
オイタしてくれちゃっただけでも腸が煮え繰り返るのに、あまつさ
えやってる事は犯罪行為ですから。>b r<

あ、ついでに私の盗撮も止めさせておきました。>b r<
今年のエロカワ水着を激写するならともかく、スク水とかセンスな
さ過ぎ、写真部が聞いて呆れるわ。>b r<

「怒ったくらいであの連中が土下座までするかよ。俺が言ったって
聞かなかった奴らなんだぞ。それにあいつら、この辺の族と関わり
合いがあるんだ、お前それ知ってんのか」>b r<

「そ、それって……」>b r<

「あいつらに逆らって怪我だけじゃ済まなかった奴らもいるって話
だ、それも狙われるのは本人だけじゃない。お前が何言ったか知ら
ねえけど、危険に首突っ込みたくなかったらこれ以上はあいつらに
関わるなよ？」>b r<

「それって……私の事心配してくれてるのね！？笹原君が私の
！心配を！して！くれてるの！ね！？」>b r<

瞳孔開くかってくらい瞠目した私を呆れの一言に尽きる表情で笹原
君は見下ろした。>b r<

「キャー！超アニバーサリー！！笹原君が心配してくれたから、今
日は私のアニバーサリー！」>b r<

カレンダーや手帳に丸とかだ、花丸とかだ。>b r<
うわあ、これ生きててよかった。>b r<

今の今まで親父様にでさえ心配のしの字もされた事ないのに初心配
が笹原君なんて幸せ過ぎるなんて私はラッキーガールなの！>b r<
ああ、感動で目が潤んで来た。>b r<

「おい……」>b r<

「ああちよつと待って、ハンカチを」>b r<

「うわ、兄ちゃんが女の子泣かしてるー！」>b r<

「いーけないんだーいけないんだー！」>b r<

後ろから聞こえて来たケラケラという笑い声に笹原君はあつとい

う間に目の前の私も後ろの子供達も物凄い眼力で睨み付け、小さな舌打ちと共に私の腕を強く引いて家の中に入った。> b r <

わー、笹原君に触られちゃったよ！今日どんだけアニバーサリーなの、花丸どころじゃ済まないよこれ！> b r <

ずかずかと廊下を渡って奥のドアを開けるなり放り込まれるようにして中に……事実放り込まれた。> b r <

んもう、私の超人的なバランス感覚がなかったら中世の貴婦人の如く床にしなだれつつ倒れちゃうところだよ。> b r <

……倒れて見せるところだったのかここは！？> b r <

「あの、笹原君……？」> b r <

お陰で涙も引っ込みまして、珍しく全開にしかめっ面でどんがり床に胡坐をかく笹原君を見下ろす。> b r <

うーん、見下ろす笹原君もなかなか……。> b r <

「仮にもお前、俺の名前出して関わってんだろ。俺にも今回の件が無関係な訳じゃない」> b r <

あ、そういう事で。> b r <

「大丈夫だよ、笹原君には一切接触しませんて、……あ、そうだ、念書書かせて来たんだった。はいコレ」> b r <

持っていた鞆から写真部部长副部长連名で書かせた念書を差し出す。> b r <

ルーズリーフなのはご愛嬌、あの時それしか持ってなかったみたいだし。> b r <

「あれ、ていうか、笹原君の前に顔出さなって言っておいたのに……見事な契約違反だなあ」> b r <

どうしてくれよう、あのメガネとあのロンゲ。> b r <

「ああそうだ、ちゃんと顔見て笹原君に最後謝れって言ったんだった」> b r <

「あいつら……俺からもお前に謝っておいてくれと言って来た」> b r <

「私はいいけど。もう二度としないって言うから、笹原君も写真の

事は過去と思って水に流してあげて」>br<

「本当にお前何したんだよ。あいつらが逆恨みしてこれから族に訴えないとも限らないんだぞ」>br<

まあ、そうでしょうね。>br<

「いやまあ、大丈夫大丈夫」>br<

そんな事より笹原君のその気遣いにメロメロです。>br<

ああもうこの人これ以上私を骨抜きにさせてどうするつもりなの、まさか食べちゃうつもりじゃ……なら熱烈歓迎！>br<

呆れを深くさせるように笹原君は目を細めて私を見上げる。>br<

そんな顔は何度目だって感じだけど、それすら好きだなんて思っちゃうんだから、ホント恋する乙女につける薬はないってね。>br<
「お前マジで無謀過ぎ、猪突猛進っか。それで学年十位以内とか詐欺だろ」>br<

うん、軽く「バカっぽい」と言われてる訳ですね、わかります。

>br<

「実際バカだし。ほら言うじゃない、人は恋をするとバカになるって」>br<

貴方が好きだから！——とトラックの前にでも飛び出して続けたかったけど、笹原君は見事な受け流し技を覚えた！相庭悠の攻撃はすでに見切られている！相庭悠はそこも素敵だとメロメロしている！>br<

「あ、もしかしてそれ教えてくれるのに家の前で私が通りかかるの待っててくれたの？」>br<

「別に……」>br<

「んもう笹原君いい人過ぎ！そこに惚れ直す！」>br<

「別につつてんだろ！……とにかく、俺にも無関係な訳じゃねえから、……何かおかしい事があったら言えよ」>br<

「嬉しい！ありがとう！だが断るっ！」>br<

「何でだよ！お前な、あいつらをどうこう出来たからって、族を相

手に出来ると思ってんのか？この辺の奴らは警察でさえ迂闊に手出し出来ないでいる本物の悪党なんだぞ」>br<

「わかってるよ」>br<

笹原君が優しい人なのはわかってる、いや更に理解を深めたというべきか。>br<

ああ、私ってばなんて目が高いの！>br<

そりゃ流石に初恋じゃないけど、二度目の恋でこんなに高レベルの男子を好きになるなんて流石私。>br<

「わかってねえよ」>br<

「はは、笹原君てば頑固」>br<

「お前がだろ。……マジで変な女」>br<

「自覚してるから別に困らないもん」>br<

すっと笹原君の前に座って、訝しげにするその表情を見詰めた。

>br<

どうか、願わくはその強い光を放つその目が……そのままで私を映してくれますように。>br<

「笹原君に迷惑はかけないよ、その為に念書書かせたんだもん。笹原君こそ、またあの人達が何かおかしな動きしたら教えてね」>br<

「なんでお前に教えなきゃなんないんだよ」>br<

「そりゃ、私が笹原君を好きだから。私にとって笹原君の事は無関係じゃないの」>br<

ぶっちゃけ私は笹原君みたいに優しくくない、例えば逆の立場なら私は笹原君みたいに相手の心配なんかしただろうかと思う。>br< むしろテメーが蒔いた種はテメーで刈れや！と胸倉をグワッシはするかもしれないけど。>br<

「私も笹原君みたいに優しくなれたらいいんだけどねえ。でも私、好きとどうでもいいがハッキリしてるタイプだから無理そう。あ、もし笹原君が優しい子が好みって言うなら努力も吝かじゃないから！」>br<

笹原君は無表情の中にちらりと片眉を上げた。>br<

「お前さ、結局あいつらに何したんだよ」>br<

「え、だから平和的にお話し合いで解決」>br<

私も丸くなったもんだよねえ、昔は尖ったナイフみたいな正義感だったのに。>br<

これでも血の滲むような努力があったと心の中では訴えておきたい。
>br<

少女漫画も読んだし、女の子が好みそうな洋服やアクセサリーも身に着けたし、言葉使いもなるべく丸くするようにしたし、流行のドラマもアイドルの名前も覚えた。>br<

自分の性別も何もわかっていなかったあの頃に戻りたくはないから。>br<

「……信じてないでしょ」>br<

「信じる要素がねえだろ」>br<

「疑う要素がどこにあるの。確かに感情的になってちょっと怒っちゃったけど、オネガイしたらちゃんと言う事聞いてくれたよ」>br<

「むしろあいつらがお願いされただけで土下座するとは思えねえんだけどな」>br<

「あれだよ、謝罪の体言。日本人の謝罪ときたらやっぱスライディング土下座でしょ」>br<

「なんでスライディング」>br<

はあともう一度心底な溜息をついて、笹原君はひらひらと顔の前で手を振る。>br<

「わかった。ただ俺の後味が悪くなる、だから何かおかしいと思ったら俺に言え」>br<

絶対言わないだろうけど、その気遣いが嬉しくてつい頷いてしまった。>br<

ああもう気分は恋の奴隷。>br<

「心配してくれて本当にありがとうね。じゃあそういう事で、私そ

ろそろお暇するよ。これから買い物に行かなきゃだから」>br<

「買い物とは？」>br<

「夕飯を買いに、二丁目のスーパーに」>br<

「ほう、それじゃあ勝利、買い物に付き合っただけで家まで送ってあげなさい」>br<

「はあ？なんで俺が」>br<

「いいいいんですよ、近くだし」>br<

「いやいや、こーんな若くて可愛いしかもボンツキュッボンな娘さんに何かあつては一大事じゃ」>br<

「いえそんな……って、直刃さんいつの間に！」>br<

「また人の部屋に勝手に入ってきたやがったなジジイ！」>br<

この私が気配を全く感じなかった……あ、侮れないわ直刃さん……。>br<

>br<>br<>br<>br<>br<>br<>br<

新婚さんみたいねと私が言ったらなら、散々冷たい視線を貴方が投げる、今日は二人のアニバーサリー。>br<

そういう訳でちゃっかり荷物まで持って貰って再度帰宅途中。>br<

はあ、まさか昨日の今日でまた笹原君家にお邪魔出来ただけでなく、またしてもこうして二人並んで歩けるなんて。>br<

幸せ過ぎて溜息しか出て来ないっつの、誰だ溜息つくと幸せが逃げるとか言った奴出て来いやー！>br<

「しかしお前買い過ぎ……」>br<

「あははは、ちょっと調子乗っちゃった」>br<

袋五つ分だもんなあ、これ幸いにと洗剤やら何やらも買ったし。>br<

もうちよつとでも笹原君と長くいたかったばかりに、あれもこれも買い過ぎたか。>br<

「お前ん家、家族多いとか？」>br<

「何、私の家族構成に興味が！？」>br<

「一般的な世間話だ!」>br<

あーそー。>br<

「や、父だけ。今現在单身おフランス。家には私一人、兄弟もなし」>br<

「ただらなんでこんな買い込むんだよ」>br<

「それは色々乙女のやんごとなき事情ですよ」>br<

流石に買い物付き合って貰って送って貰ってもおきながらバカ正直にペラペラ喋りません。>br<

でも必要な物といえそうなんだよねえ、神出鬼没な親父様はいつ帰って来るかわかんないし、訳のわからん格闘家仲間も連れて帰って来たりするから、突然大量に洗剤やら何やらが必要になる。>br<

夜中帰って来たりした時に洗剤が切れてて、大量の洗濯物を放置された日には悪臭と戦うというえらい目に遭った。>br<

あれは私の戦歴の中でもトップクラスに梃子摺った相手だったわ。>br<

ファブってもファブっても、姿は見えぬが悪臭消えず、ゴキよりある意味性質悪いわアレ。>br<

ていうかあの悪臭撒き散らすほど一体どんな生活してたのって話、よく飛行機乗れたよあれで。>br<

「笹原君家は賑やかでいいよねえ、お爺さんとお婆さんとお父さんとお母さんとトミさんと、お兄さんと弟君もいるんでしょ? 笹原君家の方がよっぽど買い込むよね」>br<

「細々したもんはトミさんが買うけど、大体は俺達兄弟が使いっ走りだから」>br<

「男手があるのはいいよねえ」>br<

その点うちの親父様の役に立たなさときたら泣けるレベルだよ、掃除洗濯炊事まるでダメ男。>br<

私も兄弟とかいけば違ったかな、笹原君みたいな兄弟とか私にもいたら………ダメだー! 確定的に禁断の失樂園ヘレッツゴー

！> b r <

血が繋がってなくてよかった。> b r <

「あ、その先の家」> b r <

「……一軒家にお前一人で住んでんのか？」> b r <

「そだよ。広過ぎだから掃除が面倒だけどね」> b r <

あれほどアパートかマンションにしろと言ったのに、でも親父様が連れて来る格闘家仲間の数がまたハンパない時あるから、その時はいつそ狭いくらいなんだけど。> b r <

しかしもう家に着いちゃったのね……名残惜しいわ離れ難いわメソメソ。> b r <

玄関に荷物を下ろしてもらって、向き合う私と貴方はさしずめロミオとジュリエット。> b r <

「今日も送ってくれてありがとう。買い物まで付き合わせちゃった上に荷物も持たせてごめんね」> b r <

「いや、別に……」> b r <

「何？」> b r <

その表情は、うーん、「あれ、おかしいな？」って顔かな。> b r <

って、何が？> b r <

「……寄って行けとか、言わないのなと思って。あ、寄りたい訳じゃないからな」> b r <

「はは、まあ名残惜しいのは確かだけど。笹原君はお家でご飯用意されてるんだろ？から、家族で一緒に食べた方がいいよ。それに家に上がって貰っても、無事で返す自信ないし……」> b r <

「どういう意……いや言わなくて——」> b r <

「でも大丈夫！女の一人暮らしの家にこのこ上がって来たからといって、何も私だって最初から取って食ったりしないから」> b r <

「言わなくていいつつってんだろ！……帰る、じゃあな」> b r <

「気をつけてねー！今日はホントにありがとー！！」> b r <
道路まで出て真っ直ぐな背中にぶんぶんと大きく手を振る。> b

r<

するとそのまま消えて行くだろうと思われた背中が予兆もなく振り返った。> b r<

「ちゃんと戸締りしろよ、ボケ」> b r<

「……。はい！」> b r<

無表情の中にもどこか居心地の悪さを匂わせて、笹原君はそのまま駆け出して通りの向こうに消えてしまった。> b r<

それを見送り続けて、ずっと振っていた手を私も下ろす。> b r<

じゃあ言われた通り戸締り万全にしようかな、……。心の扉はいつでも笹原君に向けてオープンですけどね！> b r<

> b r<> b r<> b r<> b r<> b r<> b r<

03. 追わなきゃ一兎も得られない

じいっと見られちゃったので、じいっと見返しました、目には目をってやつね。>b r<

十秒、二十秒、三十……。>b r<

「うわあ、やっぱダメだ！こっち見んな！」>b r<

「自分から見ておいてなんだその言い様。アキちゃん、どったの、急に睨めっこなんかして」>b r<

16にして童心に返ろうって？>b r<

「あんたもある意味相当目力あるわよね、なんかうっかり奴隷に……トキメキそうになったわ」>b r<

奴隷にしたいという心の本音がうっかりだだ漏れですよお姉さん。

>b r<

「やだ、私の心は笹原君のものなの、ごめんなさい」>b r<

「そう言われるのも逆にむかつく。じゃなくて、あんたこのところ凄い事になってるじゃない」>b r<

ちよ、また珍獣疑惑か。>b r<

今やこんなに恋する普通の女の子の私に向かって失礼ぶっこきまくりじゃないですか？>b r<

「この一週間、あんたの一番の友と自負している私が観察したところによると、いつの間にか随分あの大魔神と仲良くなってんじゃないのよ」>b r<

「大間陣？」>b r<

「発音がおかしい、大魔神。笹原勝利に決まってるでしょ。剣道界どころじゃなく、校内でもフツーにこの二つ名で通ってるわよ。知らないの？」>b r<

存じ上げませんでした、二つ名とかそんな格好いい感じの通称が存在したなんて。>b r<

お爺さんの話じゃ、勝利っていう名前の所為で昔凄くからかわれた

らしいけど、今じゃその名に偽りなしって連勝ぶりだし。>br<
でも昔があるからか、明石君曰く名前を呼ばれるのは好きじゃないみたい。>br<

そういえば笹原君の友達は何「笹原」って苗字で呼んでるっけ。>br<

ていうか、私自分の目と足で集めたものしか信じてないから、通称とかはさっぱりわかんなかったなあ。>br<

私としては笹原君を「ア・ナ・タ（はあと）」って呼ぶ予定だし。>br<

あ、勿論籍入れてからの話だけど。>br<

「あんたが大魔神が好きだとか抜かしてから……入学式後だった？だからもう三ヶ月近くになるか。全然接触してないみたいだったのに、何がどうしてそうなったんのよ」>br<

「話せば長い事ながら、十日ほど前に告っちゃいました、そして断られちゃいました」>br<

「短っ、そしてイミフ！なんでフラレたくせに逆に仲良くなってるの」>br<

「やだアキちゃん、そんな、恋人同士みたいだなんて嬉しい事、もつと言ってえ！」>br<

「誰も言ってるえっつーの」>br<

アキちゃんこと、東山明菜は私の小学時代に苦楽を共にした友達だ。>br<

私が小学の時にアキちゃんの住んだところに引越して行って、中学ではアキちゃんが引越して、それでまた私が元々の出身地であるここに引越して来てまた引越したアキちゃんと高校で再会と相成りました。>br<

まあ引越し民族仲間とでも言うか。>br<

なんとも笹原君どころじゃない感じにクールでドライなフレンドです、そしてM男が好物なDS女王さ……女の子です。>br<

頼子といい、私の友達ってちょっと趣味変わってるわ。>br<

私は至ってフツーって言うかこれが惚れずにおれるかの的なデスティニーな訳だけど。>br<

「ま、あんたがフラレたくらいで諦めるとは思わないけどね。でも私が見る限りじゃ笹原もフツーに相手してんじゃん」>br<

「そう見える？だいたいなあ、例え諦めの境地だとしても。悟りを啓くなんて流石笹原君」>br<

「むしろあんたの頭の中が開けてるって。しかしまああんたにや丁度いい相手かもね。告られんの少なくなったでしょ、大魔神相手にやり合おうなんて根性ある男がそうそういる訳じゃないしね」>br<

「笹原君を傷付けようとするなら、むしろ私が相手なんですけど」>br<

「本末転倒」>br<

いやいやいや、恋する乙女としてはもう戦いも辞さない覚悟ですよ。>br<

なんだったら恋する戦乙女とでも呼んで！>br<

でもそれとは違う女の戦いもちよつとは想定したんだよね。>br<

r<

だってほら、笹原君てば幾ら最近は観賞用に成り果てても超モテ男だし、確かに最近私が笹原君と廊下で会ったら普通に会話するくらいにはなってるから、近付けない女達の妬みや僻みや嫉みなんかを想定してイメージトレーニングも準備万端に積んでた訳なのよ。

>br<

ところがどっつい、どこに潜んでいるんだと思うほど音沙汰なし

……逆に不気味。>br<

私ならこんな女が登場したらもう居ても立ってもいられないけどなあ、だからって負けるつもりもないですが。>br<

「そーいや、あんたや大魔神の事こそそ付け回してた写真部の連中も見ないわねえ？」>br<

「おっと、詮索はご法度ですぜ旦那。カタギが足を突っ込んでいい

世界じゃあねえ」>br<

「誰に向かって言ってるんだ?」>br<

ですよねー女王様。>br<

「いやまあ、ちょびつとね、ありまして」>br<

「ほほう?」>br<

「いやまあ、ちょびつと、校舎裏にツラ貸して貰っちゃったと言いますか」>br<

「なるほどねえ。流石の大魔神も絆された、と」>br<>br<

「そんな、くんずほぐれつ、だなんて」>br<

キャ、恥ずかしいっ。>br<

「……」>br<

あら、バナナで釘が打てそうなその凍て付く視線。>br<

でもやっぱり私の（近未来）笹原君には勝てないけど。>br<
笹原君のあの瞳に見詰められたらクールダウンどころかホットでパッションでヒートテツ……違う、ヒートアップなんだもの。>br<

「ん? 悠、鳴ってるのあんたのじゃない?」>br<

そうですね、机の脇の鞆から軽快に流れるジョーズの着信音はまさに私のケータイですとも。>br<

ええ、ええ、わかっておりますよと、アキちゃんに向かってにこにこ。>br<

一瞬訝しげな顔をしたアキちゃんはすぐに察して呆れたように肩を竦めた。>br<

おお流石、言葉なくしても思考が通じる、文字通り心の友よ!>br<

「つか、おじさんまだ相変わらずなんだ……」>br<

「ええ、まーだまだ」>br<

死んでも治らないとはまさしくアレの事だろうと思う。>br<

「あの闘魂さえなければダンディなオジ様って感じなのになぁ。…

…血かしら」>br<

なんですかそのそれさえなければ的な、非常に残念な人間に向け

る視線は!?!>br<

否、断じて否!>br<

確かに遺伝子上は鉈でぶっ千切ろうが切れない縁かもしれないけど、私がアレに似ているなんて事は断じて!断じて否!>br<

ぶるぶると首を振った私にアキちゃんは「ハイハイ」よろしくひらひらと手を振って来る。>br<

……そんな投げっ放しジャーマンな……この憤りをどうしろと。>br<

「今度はどこに行ってるの?」>br<

「おフランスざます」>br<

「また似合いそうな似合わなさそうな」>br<

はつきり言って構わなくてよグラン・スール、月とスッポンだと。

>br<

「あれじゃないの、世界を転々として最強の娘を倒す為にライバル探しを……」>br<

それなんて柔道漫画?>br<

「いやいやいや、そんな高尚な事出来るならあれを真の父親と認めてもいいよ私は」>br<

「認めてないんかい。って、出ないからメール着たんじゃない?」

>br<

ハイ残念ボツシュート、の曲が鳴り終わったケータイを渋々鞆から取り出す。>br<

珍しくメールなんか寄越して、一体何の用なんだか。>br<

あんたの恋する一人娘は今父親のメールを読んでる暇もないくらい胸が一杯だというのに。>br<

ぱかっとケータイを開いてメールを見てみる。>br<

——……。>br<

「ハイハイ、一瞬で見なかった事にしな〜い」>br<

引き止めるアキちゃんの手に閉じ掛けたケータイを押し付けてやる。>br<

こうしてメールを見た者は複数の人間にメールを見せないと呪われ
続けてしまうというアレですね。>br<

「うわあ、またこれ強烈」>br<

そうでしょうとも。>br<

何が悲しくて「もうちょっとで帰るよマイラブリー（＊、3、）／
ちゅっちゅ」（はあと）」なんてメールを貰わにやなんのですか。
>br<

顔文字付きもさる事ながら、小さい「あ」が更にイラッとする。>
br<

しかも教室の後ろで見ていたかのようなこのタイミングにもゾワッ
とする。>br<

「36にもなってこれとか……………ねえ、吸血鬼って実在すると思
う？」>br<

「いたとしてもDNAを抜いてくれる訳じゃないって」>br<

なんて役に立たない架空生物。>br<

返されたケータイからサクッとメール削除して、出て来るのは盛
大な溜息しかない。>br<

帰宅を予告するならもっと日時を正確に寄越したらどうなの。>b
r<

「よし、無視！」>br<

「イイ笑顔で言い切ったわね」>br<

「だってほら、私色々忙しいし。笹原君の事とか笹原君の事とか、
笹原君の事だったり、あと笹原君の事とか」>br<

「……血かしら」>br<

なにおう！？>br<

>br<>br<>br<>br<>br<>br<>br<

そんなこんなで今日は学食で昼食を満喫した後、委員会の集まり
があると早々に行ってしまったアキちゃんを見送って、一人教室に
戻りながらブラブラ。>br<

もうちょっと夏休みだ、窓の外の緑が濃くなってて綺麗だなあ。

> b r <

そういえば夏休みはどうしようかな、叔父さんの家でバイト頼まれてる以外は特にない。> b r <

精々アキちゃんや頼子と今年の水着を着倒すべく海とプール三昧で。

> b r <

親父様は……まあ引き続きシカト続行として。> b r <

予定があんまりないと却って夏休みって長いよねえ。> b r <

一ヶ月も笹原君に会えないとか、一目すら見れないとか、一体私は一ヶ月をどう乗り切ったら……。> b r <

……、……………、……………。> b r <

今私何考えた？> b r <

「あー！さ、笹原くーんっ！！」> b r <

顔見知ってみればこのところは廊下でもよく出会ったりする。>

b r <

今まではただ擦れ違うだけだったり、遠目に見るだけだったりしたけど、今の私は違う！> b r <

ダッシュで駆け寄って、「げ」みたいな表情を僅かに出した笹原

君に私は訴えた。> b r <

「非常事態！」> b r <

「何言っ……なんかあったのか？」> b r <

少し目を陰しくさせた笹原君に思わずうっとり……してる場合じゃないなかった、今は。> b r <

うっとうしのご利用は計画的に。> b r <

ぶんぶんと首を縦に振る私に笹原君は言葉を促して来る。> b r <

大変だ、大変に非常な事態です。> b r <

「夏休みに入ったら笹原君と会えなくなっちゃうよ！及び視界に入られなくなっちゃうよ！」> b r <

どうする私！？続きはWEB……いやこれはリアルだ！> b r <
半泣きの私にやっぱり心底呆れたと言わんばかりの顔しか見せない
笹原君ははあと溜息をついた。> b r <

しかし最近笹原君たら表情が豊かになり過ぎて、私の『ドキッ！笹原勝利君だらけの分析データ！ポロリはないよ！』のお世話になるまでもない。>br<

見れば大体分析データに照合しなくてもわかるくらいには変わったと思う。>br<

……鈴木君辺りは「背景の間違い探し（例…雲の形が違う等）みたいなもんだな」と言うけど。>br<

しかもこんなに笹原君が心置きなく当たり前のように溜息をついてくれるようになったなんて、悠カンゲキッ！>br<

「間違っても家に押し掛けて来るなよ？」>br<

「間違ってみないとわからない！」>br<

「だからそもそも間違うな」>br<

「いっそ間違いを起こしたい！」>br<

「起こそうとするな！」>br<

「諦めたらそこで試合終了なんだよ！？」>br<

「だからっ……あー、もういい。お前のボケに付き合っていると疲れる」>br<

「そんな付き合ってるだなんて！私達まだ手も繋いでな……あーっ、行かないで笹原くーん！！」>br<

カムバック！！>br<

とか心で叫びつつ追い掛けてしまう私。>br<

追わなきゃ一兎も得られないって言うじゃない？言わない？>br<

長い足でスタスタ先に行く笹原君と同じスピードで歩いて隣に並んでみる。>br<

ああもう二人で並んで歩けたら、学校の古ぼけた廊下だって素敵な街路に早変わり。>br<

そして二人は自然に手をそっと伸ばして指先が触れ合う……。>br<

「ねえ、笹原君……」>br<

「何」>br<

「そういう訳で、間違わずに笹原君家に遊びに行っても構いませんでしょうか」>br<

自分で言っておいて何だけど、うっかり忘れるところだったよ本題。>br<

いやあ、我ながら便利な巻き戻し機能が付いてる。>br<

「さっきの人の話聞いてなかったのか、俺は押し掛けて来るなど言っただ」>br<

「笹原君の言葉を一音たりとて逃す私じゃないよ。だから、正々堂々正面から、遊びに」>br<

「俺は遊びたくない」>br<

いやん、クール通り越してコールドなお言葉っ。>br<
だがそこもいい！>br<

「じゃあ、遊びじゃなくて、真剣なお付き合いを」>br<
「断る」>br<

早撃ちガンマンもビックリなコンマの世界で拒否されてしまったよ。>br<

「ええー、じゃあどうしたらいいの」>br<

「なんで俺が無茶言ってるみたいになってんだよ！だからそもそも来るなっ」>br<

「いやきつと無意識に行っちゃうし」>br<

「ストーリーキングか」>br<

「わかった！」>br<

ナイスアイデア！頭の上に電球が光らないのがむしろ惜しいくらいだよ！>br<

ほんと古典的に掌を拳で打ってみる。>br<

「家がダメなら道場に行けばいいじゃない」>br<

どこぞの女王も真っ青なこのアイデア、とくと見よ。>br<

「却下」>br<

しかし笹原君は悠の攻撃を跳ね返した！悠はカウンター攻撃で心にそこそこの傷を負った！>br<

しかし悠はさっさと自己再生した！>br<

「確か笹原君家の道場は門下生を募集ち」>br<

「問題外」>br<

「せめてチューまで言わせてっ」>br<

してくれとは言わないから！……今は。>br<

だったらどうしようかなあとはいつつ、笹原君の隣を歩き続けて屋上まで来てしまった。>br<

天気良くて暑くない日には私も友達と昼休みにご飯食べに来たりバレーボールをやりに来る。>br<

この高校高台にあるから結構眺めがいいんだよね。>br<

笹原君もこの屋上気に入ってるのかな、ふむ、データに追加と。

>br<

「あれ」>br<

「ん？……ヒィッ！」>br<

上がって来た場所から裏の方へ行こうとしたら、前方から見知った顔発見。>br<

しかし人の顔見るなり血の気引かせて息を飲むとか、超失礼じゃないですか？>br<

全く、今時の先輩は礼儀がなってないなあ。>br<

「こんにちは、中込先輩」>br<

「こっこここっコンにちワ！」>br<

声が裏返ってますよ、肖像権侵害罪の前科を持つ写真部の部長さん。>br<

「いいお天気ですねえ、こんな日はいい写真が撮れそうですね中込先輩」>br<

「ソウデスネ！ボボボクは今屋上に咲いたタタタンポポを撮っているいいところなんだナ！？」>br<

「おにぎりが大好きな大将の真似ですか中込先輩」>br<

「そそそそうなんだ！だからばか失礼するよ相庭悠様！」>br<
ビシッと敬礼よろしく手を上げて脱兎の如く屋上から走り去る間

際先輩の目尻には何故か光るものが。>br<

「んもう、中込先輩ったら後輩に様付けなんかして、お茶目さんっね、笹原君?」>br<

にこにこと見上げれば突き刺す如くの訝しげな目。>br<
そ、そんなに見詰められたら私……思わず両手を胸の前で組んで上目遣いの乙女のポーズをとっちゃう!>br<

四年間も鏡の前で我ながら自分探しの旅に出たくなるほど頑張つて会得したポーズだというのに愛しの笹原君たら華麗なるスルーだよ。>br<

これはもう全国どころか、遙か彼方の銀河系レベル。>br<
笹原君こそ私のマスターオブスルー!>br<

なんてやっている間にもさっさと視線を外してスタスタ歩いて行く笹原君を追い掛け、誰もいない一角のフェンスの前で立ち止まる。>br<

笹原君はただじっとフェンスの間から遠くを見詰めていた。>br<
それを私は隣でじっと見詰める。>br<

今度はスルーなんてレベルじゃなく、隣にいるはずの私は空気ですらなくなった。>br<

大好きな笹原君の真っ直ぐな目が、遠くの「何か」を見詰めている。>br<

真っ直ぐ、真っ直ぐ。>br<

無意識に握った私の掌がじわりと痛んだ。>br<
多分強く握り過ぎて、頭のどこかでわかつているのに止められない。>br<

今まで、ほんの数週間前まで、私は笹原君にとって目にも入らない存在だった。>br<

なのにどうしてだろうなあ。>br<

今の瞬間が一番、笹原君との距離を感じる。>br<

困るなあ、だってこんなのはちょっと流石の私でも困っちゃうよ。>br<

笹原君の見詰める先に「好きな人」がいるって、わかっちゃう。

> b r <

> b r < > b r <

困るなあ。> b r <

その目が強くて優しいのがわかるから、なんか胸が痛いのに……その表情を見て嬉しくなっちゃうから。> b r <

ちょっと、困るよ。> b r <

> b r < > b r < > b r < > b r < > b r < > b r <

04. 気持ち、大事に！

「めそめそ」>br<

「……」>br<

「めそめそめそめそ」>br<

「……あーもう鬱陶しい！口に出してメソメソ言っていないでいっそ黙ってメソメソしてなさいよ！」>br<

イエス、女王様。>br<

って、いやいや。>br<

「口に出してた？」>br<

「思いつき」>br<

向かいの席でアキちゃんが深く頷く、視線を斜め前にやると頼子までうんうんと頷いている。>br<

「それは失礼」>br<

「フツ―口に出して言うか？」>br<

「ザワザワを口に出して言うみたいなものだね」>br<

さわ……ざわ……。>br<

いやそんな一部の人にしかわからないネタやってる余裕なんてナツスイングなんですよ。>br<

はあ、溜息が出ちゃう……恋ね。>br<

「今度は溜息とか……恋ね、とかやってんじゃないでしょうね」>br<

いつからアキちゃんはエスパーになった訳ですか、事務所に許可とってからにして下さいよ。>br<

ああ〜でもそんなツツコミ口に出せるほどの気力が湧かんよバトラッチュ。>br<

僕もう疲れたよ、なんだかとっても眠いんだー。>br<

「一体何があったつーの。あんたホント極端過ぎ」>br<

「そうだよ。悠がさあ、元気ないから、私先輩とかにまでどうした

のかつて聞かれたし」>br<

ありがとう心の友達よ、でも机から顔が上げられない……このまま気持ちよく合体したらどうしよう。>br<

机人間としてどこかの研究機関に拉致られた挙句、学会に発表されてしまうよ。>br<

出るのは溜息ばかりなり。>br<

「ついこの間まで笹原笹原ってバカの一つ覚えみたいにやってたのに。何、もう飽きた？」>br<

NOT秋田！>br<

ふるふると振る首にも我ながら顔が濡れて力が出ないよ。>br<これが……涙……？>br<

……あーダメだ、モチベ上がらん。>br<

「なんだろうなあ……これが俗に言う、夫と若い女との浮気現場を目撃した妻の心境ってやつ？」>br<

「いや、笹原はあんたの夫じゃないし」>br<

トドメ的ツッコミグッジョブアキちゃん！と言いたところだが、今日はマジで瀕死ですよ。>br<

ああもうこれ絶対私のステータス画面が真っ赤になって超点滅してるって。>br<

あと紫とか黄色とか緑かもしれない、なんという多重苦。>br<

「じゃああれだ、必死でダイエットやって停滞期にドカ食いしてあつという間にリバウンド的なエンドレスリピートみたいな」>br<

「そっちの方が近いかも」>br<

「さっきよりはね」>br<

うう、なんて手厳しい心の友。>br<

あーあーあーあー、もう脳内BGMはすっかりこなあああああああゆきいいいいいいいい。>br<

ねえ。>br<

我ながらいつも以上におかしいわ、こりゃダメだ、次行ってみよ
l。>br<

「え、帰んの？」>br<

「んー。早目に退くとえっちゃんに伝えて……へへ、明日娘の誕生日プレゼント買いに行くんだ……」>br<

「死亡フラグ！」>br<

「悠が早退とか聞いたらえっちゃん腰抜かすかもね……」>br<
最近えっちゃん（担任）腰痛で悩んでるって言ってたからな、傷害罪で訴えられない事を祈る。>br<

脇の鞆にあれこれ詰めてすちゃっと片手を上げる、去り際は爽やかに。>br<

「皆様、オ・ルヴォワール！」>br<

「ハイハイ、ごきげんよう」>br<

「また月曜にねー。あ、帰りぼーつとしてトラックを跳ね飛ばさなようにね？」>br<

頼子、それ「トラックを」ちゃう、「トラックに」や。>br<
何故か戸惑い気味のクラスメイト達にも手を振ってぶらぶら帰る事にした。>br<

先日の屋上の一件から早五日、口から抜けた魂が戻って来ません。

>br<

なんていうかなあ、やっぱこう、ちょっと堪えちゃったかな。>

br<

私って実はスピリチュアルアタックには打たれ弱かったのかも。>

br<

校舎から出て手はぶんぶんと鞆を振り回す勢いで足はとぼとぼ歩く。

>br<

頭にこびりついたみたいなの、あの時の笹原君の顔がもう夢まで毎日出て来てラッキーやら何やら。>br<

お陰様でいと寝不足。>br<

もうはっと起きた瞬間笹原君の夢を思い出すところきゅーっと胸が痛くなってですね……私、恋の病だわ。>br<

アキちゃんはナントカに付ける薬はないって言うけど、恋は不治の

病とも言うものね、わかるわ。> b r <

なんとなくいつもの道から迂回して、のろのろと歩いて目についた公園の中になぞ入ってみる。> b r <

結構広い、遊具も沢山ある。> b r <

幼稚園頃の子供達がお母さん達に手を引かれて帰って行く最中、脇のベンチに腰を下ろしてリストラされたサラリーマンよろしく公園を黄昏ながら眺めてみた。> b r <

私が前に住んでたところは隣町でここからも結構近い、そっちの町内の同じような公園にはよく遊びに行ってたっけ。> b r <

懐かしいなあ、あのまさにお山の大將だった時代。> b r <

子分達を引き連れてよくヒーローごっこだの探検ごっこだのしてあちこち回って遊んだ。> b r <

誰かとやり合う時にはかすり傷一つ作らなかったのに、遊び回って帰った日にはよく後で傷に気付いたりして。> b r <

楽しかったなあ、今思えばホントあり得ない子供だったけど。> b r <

そういえば初恋の子に会ったのも公園だったなあ。> b r <

あの日も皆と一緒にヒーローごっこして遊び倒してて、それで自分達より年上だった当時小学生の男の子達に場所を取られそうになって……ついヒーローごっここのノリで悪者退治しちゃったんだっ
た……。> b r <

そうそう、あの日のノリはある意味皆異常だった。> b r <

勿論勝利を収めた後、その子達に場所奪^{ラムネ}われてた他の子達に場所譲
って、英雄気取りで皆と他の場所行って祝杯あげたっけ。> b r <

その後だよなあ、夕方くらいになって公園戻って見たらまたあの
いじめっ子達がいて、一人の男の子が虐められてた。> b r <

——そう、その虐められてた子に一目惚れしちゃったんだよね……。> b r <

笹原君とは全然違う感じだったけど、その子の泣くのを堪える目が
凄く綺麗で……。私は目フェチか？> b r <

もうそれからはちよつとあんまり憶えてない。> b r <

我も忘れていじめっ子達に飛び掛って行って、気が付いたら泣き喚いて帰って行くいじめっ子達と――恐ろしいものを見る目で私を呆然と見るあの子が残ってた。> b r <

「……うわあ……」> b r <

思わず両手で顔を覆って自己嫌悪。> b r <

マジであり得ない、あれはなかった、私の人生の汚点且つ分岐点だった。> b r <

立場が逆ならカンペキ初恋から両思い成立フラグだったのに自らバツキバキに折りましたよ私。> b r <

もうショックなんて話じゃなくて、我に返ったんだか何だか、私は友達も置いてその場から飛び出して家に帰って……親父様に飛び蹴りかまして多少冷静さを取り戻したんだよなあ。> b r <

でも落ち込んだなんてもんじゃない、それから町を引越す間恐る恐る公園に様子を見に行ってもあの子はいなくて。> b r <

自分が何をしていたか漸く理解して、泣きに泣いた。> b r <

まあそりゃそうなんだけど。> b r <

何を好き好んで、幾ら自分を虐めてた奴から助けたとはいえ人をフルボッコにした女なんて、そりゃ怖いわ。> b r <

むしろ自分もそんな目に遭わされるんじゃないかと思うわ、そりゃーそうですよ。> b r <

でも正義感振り回してそれが当たり前だと思ってた当時の私はそれまで全然気付かなかったんだよね。> b r <

そんな「女の子」が「男の子」からどう見えるかなんて、考えもしなかった。> b r <

それまで男女の垣根なんかなくて、そういうものなんだと思ってた。> b r <

両手で頭を抱えて一人身悶えたりなんかしてみる……通報されないよね？> b r <

「あの子今頃どうしてるかなあ」> b r <

なんとなくだけど、綺麗な子になってるんじゃないかなと思う、
アイドルっぽい感じの。> b r <

会いたいなあと思わないでもない、もしその子があの時の事憶えて
いたらダッシュで逃げるけど。> b r <

でも憶えていたら逃げるのはその子かなあ。> b r <

何せ後で友達にあの時の自分の様子聞いたら「鬼だった」って真顔
で返って来たし。> b r <

やる直せるもんならあれだけはやり直したい過去だわ。> b r <

人生のリセットボタンで一体どこにあるんだろ。> b r <

いや例え良好な気持ちで会えたんだとしても、私にはもう笹原君
という然るべき人がいる訳だからいいんだけどね。> b r <

「うぐう……」> b r <

イカン、うっかり思い出して自殺点だよ。> b r <

複雑だ、恋は複雑だ。> b r <

勿論笹原君に例えば愛してる人がいるとか言われても、私の気持ち
は消せそうにないしぶっちゃけ消そうとも思わない。> b r <

私は笹原君が好きだし、人の心にいちゃもんは付けられない。> b
r <

今はまだ私が恋人な訳じゃないし……。> b r <

あの時の笹原君の表情や目を思い出すと、またなんかこう全身が
ぐるんぐるん回転してるような気分になる。> b r <

本当はあんまり歓迎したくないんだ、笹原君が他の誰かにそんな目
を向けるなんて。> b r <

出来れば力一杯、そういうのは私に向けて欲しい、私だけに向けて
欲しいんだ。> b r <

でも優しくて切ないようなその目を、私はまた好きで堪らなくな
ってる。> b r <

……複雑です、乙女心はかくも複雑なのです。> b r <

> b r <> b r <> b r <> b r <> b r <> b r <

センチメンタルな思いを抱えて一人家に帰ると、前方に未確認歩

行物体発見。>br<

だが無視！それが私！>br<

「待て待て待て待て！ちょ、待てよ！久しぶりに帰って来たっていうのに何そのガン無視！？ここは、パッパアーン会いたかったわっおっかえりなすわっいいって抱き付いてほっぺにチュー……まだ話途中ー！！」>br<

何を思っただけで玄関のど真ん中で待ち構えていたのかは考えたくない。

>br<

しかもこのタイミングで帰って来るとは……踵落としを希望していると見なすがよろしいか。>br<

「んもう、相変わらずつれないマイドーター、イ・ケ・ズ」>br<

「おフランスくんだりまで行って覚えて来たのがそれかと」>br<

「そんな事ないぞマイガール、これおフランス土産の饅頭」>br<

「ツッコむ気も失せる」>br<

「イヤン、バカン。って、ぶわあ！！毒霧！ノー毒霧！！」>br<
とりあえず悪臭の元はファブる、これ常識。>br<

それからさっさと部屋に行って着替えてから戻って、今日は気力ないんで店屋物ケッテーイ。>br<

景気付けにお寿司だな、特上。>br<

早速お電話、毎度お馴染み一河寿司さん。>br<

「出前お願いします、特上一人前……」>br<

電話の前で尻尾をフリフリ振った犬が一匹いる。>br<

「……と、いなり寿司一人前」>br<

お、尻尾が地の底に垂れた。>br<

しかし無視して番地と名前を告げて注文完了、後は待つだけ特上寿司。>br<

「パパお腹空いてるんだけど」>br<

「偶然、私もお腹空いてる」>br<

「パパもせめて梅コース食べたかった」>br<

「残念だったね」>br<

やっぱりお寿司には日本茶でしようとキッチンで淹れてリビングに行く、床にのの字を書きまくってチラチラこつちを窺うUMAと目が合う。>br<

テーブルにどんがり置いたお茶をちびちび飲み出して親父様はまたチラチラ私を見た。>br<

「こっち見んな」>br<

「もー！まだ反抗期なのかい、マイルスイート！」>br<

これが反抗期なら一生反抗期だと思う。>br<

何度も言うけど帰るならせめて前日に連絡入れて。>br<

「それで？」>br<

それで？>br<

テレビのリモコンをぼちぼちやりながら首を捻ってみた。>br<すると両手で頬杖をつき唇を尖らすという乙女しか許されない禁断のポーズを無駄に披露した親父様はじっと私を見た。>br<

「何が」>br<

「だからあ、なんか元気ないワケ。飛び蹴りも回し蹴りも踵落としもアイアンクローもDDTも一本背負いもして来ないワケ」>br<

「別に話すような事じゃ……」>br<

「パパは聞きたい！」>br<

「噂になると困るし……」>br<

「難攻不落の幼馴染みヒロイン気取りですか！」>br<

「好感度の情報屋気取りか！」>br<

ぜえぜえ、はあはあ、お互いに怒鳴り合ってからお茶を啜ってみる。>br<

しかし流石に侮れない、レアモンスターの如き頻度でしか会わないにも関わらずこの洞察力。>br<

キラキラと目を輝かせて親父様は鬱陶しい事この上なく「ん？」「ん？」と首を捻っている。>br<

これと結婚した我が母は一体何を考えていたのやら。>br<「わかったあー！ズバリ恋だな、我が娘よ！？ファイナルアンサア

アアアアアアアアアア!!」> b r<

そこでチャイム。> b r<

早速お寿司が来たよ、近所といえど物の三十分もかかってないよ、流石「美味しい・早い・安い」の一河寿司。> b r<

うむ、今日もいい仕事してますぜ。> b r<

代金払ってお茶を啜りながら二人で黙々とお寿司を食べる。> b r<

合間にリモコンをまたぼちぼちとしてみるけど、特に面白いのはやってない。> b r<

そういえば頼子がハマって見てるとか言ってたドラマっていつやってるのかな。> b r<

ドラマは続けて見れないからあんまり見てないんだよなあ。> b r<
お寿司を平らげてからは折角なので、おフランス土産とは名ばかりの空港土産の饅頭を二人で頬張る。> b r<

しかしまたこれパッケージに凱旋門とか書いてあるけど……そんなバカな。> b r<

「あー食った食った、これ結構イケてね?」> b r<

「まあフツー。そういえば今日は連れがいないの?」> b r<

「来週には来るよ多分、検閲で引っ掛かってさあ、アイツら」> b r<

一体何しでかした、ソイツら。> b r<

「他にも土産あるからその辺漁っていいぞー。パパのお薦めはおフランス産熊の木彫り」> b r<

そんなバカな。> b r<

と思いつつも荷物漁ったら本当に出て来た………おフランスという名の北海道に行つて来たんじゃないかな?> b r<

他にも似たり寄つたりの土産物がごろごろと出て来る。> b r<

その中の一つを手にとって親父様に見せた。> b r<

「なんぞ、これ」> b r<

「あ、それねー。熊から助けた奴になんか貰った」> b r<

あっ!?!?」>br<

そうですよ、恋しちゃってるんです私。>br<

>br<>br<

05. 情報収集も、大事に!

「笹原くーんっ!!」>br<

相庭悠が、貴方の相庭悠が帰って参りましたぁーっ!!>br<
「あれ、相庭。音沙汰なかったけど、風邪でもひいてたん?」>br<

「少々やんごとなき事情がございましてですな鈴木君。ほぼ一週間ぶりだね笹原君元気だった笹原君期末試験に向けては順調笹原君!」>br<

落ち込んだりもするけど、私元気です!>br<

「相庭、意気込み過ぎて疑問符が抜けてる……」>br<

ご忠告ありがとう明石君、肝に銘じるよ。>br<

じつとり……いや、ねっとり……いや、じっくり一週間ぶりの笹原君を網膜に焼き付けなくては!>br<

と思っているのにマイダーリンたら肩を落として華麗なるターン、アイドル顔負け。>br<

ううん、私の心のアイドルは笹原君、貴方でキ・マ・リ!>br<
本当なら休日中にでも笹原君家に行こうと思ってたんだけど、目をギラギラに輝かせた親父様を捻じ伏せるのになかなか手間取ってしまったという次第。>br<

闘魂な上にロマンス好きとか、あの36歳はどこに向かってるんだろ。>br<

まあどこでもいいんだけどアレは。>br<

「で、何の用だよ」>br<

疲れ交じりのセクスイーヴォイスも素敵です笹原君。>br<

「一緒に昼食をとろうと思って」>br<

突撃! 笹原君の昼ごはん!>br<

「何せ一週間ぶりだし、積もる話もあるし主に笹原君が一週間何してたか聞きたいし」>br<

「生きてた」>br<

「そうだと思った！生きててくれて嬉しいよ笹原君！」>br<

って、何故そこで明石君と鈴木君に助けを求めるような視線を投げるんですか笹原君。>br<

ホラ二人共親指立てて笑顔で私達の未来を祝福してくれてるよ。>br<

ありがとうございます、私達幸せになりますこれからも！>br<
足取りも軽くツーステップぎみで笹原君の隣に並べるこの幸せと来たら……。>br<

うーん、私今生きてるー。>br<

「相庭って弁当自分で作ってんの？」>br<

「そだよー」>br<

私の抱っこ状態で抱えているお弁当箱を物珍しげに見る鈴木君。

>br<

お弁当持つてる女子に男子がこう質問するのもお約束だよねえ。>br<

流石ベストオブツゥー、これを聞いたら頼子が喜ぶよ。>br<

これも何かのご縁なので「紹介とかする？」って女子らしく聞いた私に向かって真顔で「鈴木君は女子と付き合えないからこそいいんだよ。付き合うとか無理」と返されました……。あいつ只者じゃねえ、真のイイ人ドフェチだ。>br<

「母親仕事してるとか？」>br<

「母がいないからね」>br<

「あ、そうなんだ。じゃ大変だな」>br<

「そうでもないよー」>br<

むしろあの親父様がいて大変だ、一人で一万と二千人分の大変さだ。>br<

「親父さんにも作ってんの？」>br<

「父親らしき人には作ってないよー」>br<

その必要もないと言うか、家にいる時はニートよろしく家でぐだ

ぐだしてるし。>br<

全く一体何をどうしているんだか、あれでも毎月本当にナニやっ
て金だって金額が口座に振り込まれている。>br<

……裏家業の娘とか嫌なんですけど、笹原君のご家族に申し訳ない
し。>br<

ああでも愛さえあれば職業なんて乗り越えてみせるわっ！>br<

「……らしき人？え、義理とか？」>br<

微妙な顔になってる三人に首を振った。>br<

いっそ義理だとしても願ってDNAまで調べた私の純情を返せと熨斗
つけて返せと。>br<

「や、精神的に」>br<

「な、なんか複雑な事情？」>br<

「精神的にね」>br<

思わず遠い目をしてしまった……。>br<

「殆ど物心ついた時から家事やってるからその点は心配しないでね
笹原君」>br<

「何の心配もしてない」>br<

「そう言われると照れるよ！」>br<

「そういう意味じゃないっ」>br<

「お前らの夫婦漫才も板について来たなー」>br<

明石君が笑って言ったのにもう瞬殺という眼光を突き刺す笹原君
……ヤバイ、カッコ良過ぎる……。>br<

むしろ私のハートはあの目に射抜かれちゃったのね。>br<

イエース、フォーリンラブ。>br<

「あ、飲みモン買って来んの忘れた。ちょい行って来るわ」>br<

「笹原君私もお供ー！」>br<

「いらん！お前にも買って来てやるから大人しくしとけっ」>br<

「逃げるなよ笹原」>br<

ケラケラ笑う鈴木君に蹴りを入れてから屋上手前で階段を引き返
して行く笹原君を見送って、ぽーっとしながら二人と共に適当な位

置に腰を下ろす。>br<

ああ、ああ、聞いた？聞きました？今の、ねえ聞いた？>br<
笹原君が私に飲み物買って来てくれるって！これが記念すべき笹原君からの初プレゼントになる訳ね！>br<

何かって来てくれるかウキウキワクワクのサプライズ的な感じが堪りません。>br<

ああどうしよう飲みたいけど飲めないかもしれない、どうしよ、こは仏壇に供えて母に報告してからにすべき？>br<

でも私ならバレンタインのチョコはやっぱり笹原君にすぐ食べて欲しいもの、女ならここはぐっと堪えて全て飲み干すか！>br<

「相庭……感動に浸ってるとこ忍びねえんだけど」>br<

「他ならぬ笹原君の友達の明石君の言う事だ、構わんよ」>br<
頷いて受け入れ体勢を整えると、明石君は後ろ手に紙切れを渡して来た。>br<

それをちらりと確認して頷いて見せるとほっとしたように明石君が笑う。>br<

まあちよつと面倒そうだけど、惚れた相手の友達の頼みだ。>br<

「相庭、浮気かぁ？」>br<

鈴木君の言葉に思わず笑ってしまった。>br<

いつものようにのほほんとした風でありながらも、その裏には心配そうなものが少し含んでいるのがわかる。>br<

流石頼子が認めたフツのイイ人、そして流石私の（近い将来）笹原君の友達。>br<

明石君と一緒にぽんぽんと鈴木君の肩を叩く、そのままいてね鈴木君……例え頼子の言う通り彼女が出来なくとも。>br<

敷いたハンカチの上で正座して待ちながらこちらも一週間ぶりに見るフェンスを眺める。>br<

あの向こうのどこに、笹原君の好きな人がいたんだろう。>br<
ここから見える場所だろうか、それとももっと遠くだろうか。>br<

……ぶっちゃけ敵の姿も見えないってところがまた。>br<
大体ちよつと想像もつかないんだよねえ、笹原君の好みに合いそう
な女の子って。>br<

過去の告白戦歴によれば、お姉様タイプから清純派美少女までまー
見向きもしない人ですから。>br<

笹原君があれだけ惚れ込んでるって事は相当何かが光っちゃってる
人には違いないだろうけど。>br<

……私だって光り輝くものがあるよ！……えっと、……えー
と、まあとにかく何かあるよきつと！>br<

そりゃ今はその子に負けてるかもしれないけど、これからはどうだ
かわかんないじゃない。>br<

そうだ、戦わずして負け戦などこの私の戦歴に汚点を残す訳にはい
かないのよ。>br<

「よし！」>br<

「お、気合入ってんね」>br<

「勿論。負けるのを恐れて戦に挑む私じゃないのよ」>br<

うむ、早速笹原君の気配がします母さん！>br<

「お帰り笹原くーわ、とっとつ」>br<

「茶でいいよな」>br<

「勿論！笹原君がくれる物ならお茶でもジュースでも左手の薬指用
の指輪でも婚姻届でもスポーツ飲料でも！」>br<

「だから後半に余計なものを挟むな！」>br<

んもう、余計な物だなんて、一つ家庭に収まる事になったら必
要になるのに。>br<

腰を下ろした笹原君にそそと近付いてみる。>br<

二人でランチ、これを五日も逃してたとかバカ過ぎるわ私、お蔭さ
まで会うのすら一週間ぶりとかないわ。>br<

「……人を睨むな」>br<

「ダメー。網膜に焼き付けておかないと！あーわー！暴力反対、イ
ジメカツコワルイ、ダメ絶対！」>br<

じつとり見ていたら顔を手で押し退けられてしまった。>br<
ううん、今日もつれない、だがそこもいいから許す。>br<

さっさとパンに噛り付いている笹原君に気を取り直してお弁当箱を開いて差し出してみた。>br<

本日のメニューは野菜入りの玉子焼き、ウズラの卵入りミニハンバーグ、豚肉と野菜のカレー炒め、わかめご飯、プチトマト。>br<
さあ、さあさあさあ！どれから行く！？>br<

「……なんだよ」>br<

「え、ほら、まず料理において心配点はないか確認して貰おうと思って。笹原君の好みそうなの作って詰めて来たんだけど」>br<
「誰から聞いた」>br<

唸る、と言う感じで笹原君が低く言う。>br<
そういえば笹原君の声変わりは結構早かったって直刃さんが言っていたつけ。>br<

ボーイソプラノな笹原君の幼少期もお目にかかりたかったけど、過去を欲しがってもどうしようもないしね。>br<

それにあれですよ、私が欲しいのは今の笹原君だし。>br<

キャ、私のものにしたいだなんて、私ったらおハレンチ！>br<

や、でも正直十代の恋愛なんて勢いあってナンボでしょ、今から将来考えて守りの体勢取りたくないって。>br<

それにやっぱり先手必勝、私はこれが性に合ってるからね。>br<

……あれとところで何の話だつけ？アーウチ！私とした事が笹原君の質問を忘れるなんて！>br<

ううん、記憶の録画ビデオを巻き戻せばすぐに思い出せるから待っててね笹原君！>br<

——で、思い出したんだけど（総所要時間0・2秒）何聞かれてるのかわかんないよ……。>br<

「何が？」>br<

「だから、俺の好みなんて誰から聞い……お前か」>br<
じろりと隣を睨んだ笹原君に明石君はひらひらと手を振る、次に

刺し殺さんばかりの視線を鈴木君に投げるとぶんぶんと取れる勢いで首が振られる。>br<

やがて笹原君の視線は私の元へ。>br<
お帰りなさい、待ってたわ！きつと私のところへ帰って来てくれるって私信じてた！>br<

「別に誰からも聞いてないよ。今まで見かけた笹原君の昼食メニューを分析して割り出しただけ」>br<

前はハンバーグサンド食べてたし、お弁当の時には必ず黄色い玉子焼き入ってたし、それからカレーパンも食べてたし、学食じゃわかめの味噌汁頼んでたし、そのいずれもサラダだの煮付けだのと野菜が付いている。>br<

ので、まあ、こんなもんかなと。>br<
あ、プチトマトは完全に彩り要員ですが。>br<

でもわかりやすいっちゃわかりやすいよねえ？>br<

「相庭、お前ホント無駄に頭いいな」>br<

「頭の使いどころ間違えてねえ？」>br<

「やっぱスーカーだろお前」>br<

三者三様のお言葉を有り難く頂戴致しまして、再度恭しく笹原君にお弁当箱を掲げてみる。>br<
ははー、どうかお納めを。>br<

「つか、俺が食ったらお前の分なくなるだろ」>br<

「ご心配に及ばず！パン持参して来た」>br<

朝食の余りの食パンだけど、BLTならぬHLC。ハムレタスチーズ>br<

ちゃんと親父様にも作ったんだよ、Mサンドを。マーガリン>br<

「いや、全部は食わないし」>br<

「一口食べたなら止められない止まらない！」>br<

「わかったわかった！とにかく、一口は食うから」>br<

うーん、脱力して肩を落とす笹原君もス・テ・キ。>br<

その姿をオカズにご飯食べられそう、あー写メりたいけど将来幾らでもある機会なんだから今は我慢ー。>br<

目からビーム発射する勢いで笹原君が一口ハンバーグを食べる様をガン見する。>br<

脳内録画脳内録画。>br<

って折角録画してるのにまたしても顔を押し退けられてしまった。

>br<

暴力反対、イジメカッコワルイ、ダメ絶対！でもぶっちゃけ顔触られてニヤけるくらい嬉しい！>br<

「どう？」>br<

「……」>br<

あれ、なんですかその微妙な顔、普通に不味かったのかただ口に合わなかったのか……ジャッジしかねる。>br<

「これ自分で作ったのか？マジで？」>br<

「私笹原君に嘘ツカナイ」>br<

「……………美味かった」>br<

いよっしゃああああああっ！！思わず渾身のガッツポーズ！！>br<

作り置きしてたの多いけど、今朝五時起きてよかったあー！やりました、相庭悠、見事やりました！>br<

「いーなあ、笹原あ。早速愛妻弁当かよ」>br<

ニヤニヤしている明石君に笹原君の見事な鋭い突きが一発。>br<

うん、今日もツッコミが冴えてるね笹原君。>br<

しかし私もニヤニヤデレデレドロロキュンキュンしながら残りも食べてと再度お弁当箱を掲げる。>br<

躊躇いの後見事献上完了。>br<

あー今日は実にいい仕事したな自分。>br<

これで笹原君にも私が料理に抜かりない女だとインプットされれば完璧っ。>br<

これで残る問題は私のエプロン姿に笹原君が萌え……いや燃えてくれるかどうかよね。>br<

………新妻のエプロンと言ったらやっぱりフリフリヒラヒラかなあ。>br<

でもそれを見て笹原君がキッチンに立つ私を後ろから襲い掛かってくれないとむしろ無用の長物な訳で。>br<

うーん、若干考慮の余地あり。>br<

「俺達お邪魔みたいだから？席外すし？後はお若い二人で仲良くやんな」>br<

言うなり鈴木君の首根っこを掴んで立ち上がった明石君と素早くアイコンタクトを交わす。>br<

うむ、お気遣い痛み入る、例の件は安心して任せられよ。>br<
片手を上げて去って行く明石君に元気よく手を振って見送った。>br<

「つて、待って待って待って！待った！異議あり！」>br<

「何だよ」>br<

一緒に立ち上がろうとする笹原君の袖を行かないでいけずつれないお方、とよろめきながら引っ張ってみる。>br<

「えーっと、実はちょっとお聞きしたい事がございまして」>br<

「何」>br<

諦めた様子の笹原君にこちらも佇まいなどを直してみる。>br<
しかしどう切り出せばいいものか、そもそもどう切り出しても内容は変わらないんだけど。>br<

でも敵を知り己を知らば百戦危うからず、と言いますから。>br<

己を知っている以上、次は敵な訳でして、ええ。>br<

そう、つまり、所謂、その。>br<

「笹原君の好きな人ってどんな感じ？」>br<

わー、口から勝手に直球キタ！どれだけ正直者なんだ自分！>br<

超高校級ピッチャーの速球も真っ青だよ、ある意味感心した。>br<

「それ聞いたら諦めんのか」>br<

「いや、それはない」>br<

そんなもんがあったら最初から間違ってるよ私。>br<

ノーと言いつけると笹原君ははあとどデカイ溜息をおつきになられまして、ちらりと私を見る。>br<

キヤーツ、笹原君にチラ見されちゃった記念日としてこの日を（以下略）。>br<

なんてやりながらも内心ドキバクなので小心者丸出しだな！>br<

いやいや、聞く前からビビってどうする、私の戦歴に不戦敗など有り得ないっ。>br<

昔とは意味が違うが、戦うべくして生まれた女、それが私。>br<

「何が聞きたいんだよ」>br<

「え、えー…：そうだなあ」>br<

ヤバイ、特に考えてなかった、なんだこの切り替えし、惚れ直す。>br<

「まあ出来る限り。容姿とか笹原君から見たイメージ的な性格とか、なんで好きになったのかとか、どこがよかったのかとか、只今どんな関係とか」>br<

「すっかり言え、と」>br<

「まあ、噛み砕いて言うようになりますね」>br<

えへへ、恋する乙女は好きな人の事なら何でも気になっちゃうのが道理でしょう。>br<

ああー、ドキドキする、こんなに緊張したの笹原君に告った時以来だよ。>br<

「俺の好きな奴、か…：」>br<

またどこか遠い目をするその横顔を、やっぱり私は切ないような嬉しいような、そんな気持ちで見上げた。>br<

06. 後悔はするべからず

思わずぐくりと喉を鳴らして待ち侘びる――……が、待てど暮らせど音沙汰ないんですが？ >br<

なんですかあれですかあれなんですか好きな人に思考が飛んじやうと嵌っちゃって現実に戻って来れない系ですか私もよくやりますけど流石にここは空気を読んで欲しかったこれじゃここで待ち惚ける私が放置プレイよろしくでもそう考えるとそれはそれでみたいな新しい自分発見！>br<

でも戻って来て笹原くーん！私はここよー！！>br<

「そうだな、つまり……俺には高嶺の花ってやつなんだと思う」>br<

にゃんと！？よりもよって校内一のモテ男である笹原君がたかにえのはにゃとな！？>br<

度肝抜かされ過ぎて脳内でも嘔んだよ！>br<

「マ、……マジで？」>br<

思わずそう聞くと一つしつかりと頷かれる。>br<

その攻撃に最早私のHPもMPも赤ランプ超点滅してるんですけど、むしろ点滅し過ぎて点きっ放しなんですけど。>br<

というか、た、高嶺の花って、一体どういう……？>br<

「え、えっと、美人とか？」>br<

「顔は………悪くはないと思うけどな。まあ俺、女の綺麗可愛いはよくわかんないから」>br<

「さ、さいですか。えーっと、じゃあ、性格が聖人君子並みだとか」>br<

「……どうだろうな、優しいんだとは思うけど」>br<

うう、何この攻撃を受け流す、ある意味防御と見せ掛けた攻撃は。>br<

ていうかなんだって笹原君てば好きな人の事だっのにこんな他人

事臭いの。>br<

好きな人って言ったら、もっとこう、胸やら下半身やらにぐつぐつ
滾る思いとかその他があるでしょうが健全な男子高生として！>br<

「じゃあ、ええと、なんで好きになったの？」>br<

「惚れたから」>br<

ギャフン！いきなり最終奥義出して来ちゃいますか、流石笹原君、
こんな赤ランプ点滅で瀕死の状態の人間に対しても容赦ないなっ。

>br<

だがそこに惚れ直す、どうあっても惚れ直す、反論は受け付けない。

>br<

うぬぬ、これで負けては女が廃る、相庭悠いつきまーす！>br<
「どこがよかったのどこを好きになったの今どういう関係なの！」

>br<

「せめて一拍間を置け！」>br<

ご尤も、うっかり力み過ぎてブレスの存在を忘れて究極のエコす
るところでした。>br<

「別にどこって言うか……気が付いたら惚れてたって言うか。どこ
ってのもわかんねえよ、ある意味全部がよかったから惚れたんだろ
うし。今は………赤の他人じゃね？つかなんでこんな話しなきゃ
ならないんだよ！」>br<

うぐぐぐぐ、これは落ちていいのかほっとしていいのか。>br<

笹原君の照れ顔を追い掛けてガン見しつつも、どうにももやっと
したものが頭にも胸にも広がる。>br<
ていうか。>br<

「赤の他人なの？」>br<

「ウルサイ」>br<

あつれえ？そういう感じには見えなかったんだけどなあ笹原君。
>br<

こうやって確かに照れ屋さんですけども、戦法を見るからに敵前で手を拱くような人じゃないはず。>br<

いやそりゃ恋愛とスポーツは違うんだけど、なんて言うかな、もっと根本的なところ。>br<

……なんか変だなあ、好きな人がいるって嘘ついてるようにも見えないし。>br<

大体笹原君が好きな人いるとか嘘つくキャラでもないもんなあ。>br<

私に読み間違えはないはずんだけど、なんだろこの違和感。>br<

なんか、なんかさあ、やっぱ違うでしょ。>br<

「好きだって言うならなんで踏み込まないの？ 笹原君らしくないとは言わないけど、そんなんでいい訳？ 赤の他人のまま、彼女が誰かとかくっ付くの、なーんにもしないで見てるだけなの？ 好きなんですよ？ だったらなんで何かしないのよ。笹原君なら出来るよ、私が保証するよ、頑張ってよ！」>br<

思わず胸倉掴む勢いで言った、正確には口から突いて出た。>br<

あ、と思った瞬間には笹原君が物凄い勢いで噴き出して、次の瞬間には顔を背けて肩を揺らしている。>br<

……………えーと、爆笑されてる？>br<

「おまつ、俺を応援してどうすんだよ。仮にも俺に告つていて」>br<

仮にもってなんじゃい！ こちら超ガチ！ あと笑い過ぎ！>br<
あああああでも笹原君の爆笑とか超レアなもの見れて嬉しいー！
この矛盾した乙女心をどげんかせんと！>br<

「そうなんだけどさあ！」>br<

「いや、そうだよな。なんか勝手に諦め入ってたっつーか。どうしようもねえかなとか思ってたなりした」>br<

遠くを見上げて、そして笹原君が私に顔を向ける。>br<

b r<

――ない。> b r<

「いつの間に帰った!？」> b r<

油断すると目からビヤツと涙が出そうになるのを堪えて再び校門まで猛ダッシュ（陸上部に入れと顧問が追っ掛けて来たのを振り切りながら）。> b r<

T字路をきよろきよろと見回し、私の尖ったナイフのように鋭い勘で左をセレクト。> b r<

待ってて笹原君、貴方の（確定的近未来）相庭悠が今行きます！> b r<

だがお約束のように見付からない、と。> b r<
なんだろうね、無くした物って探してる時は出て来ないで必要ない時に出て来るもんだよね。> b r<

いやいやいやいやいやいや、笹原君を必要としない時なんてないから！おはようからおやすみまで私は常に笹原君を欲しているから！> b r<

うわーん、ないないの神様、笹原君はどこですかーっ。> b r<

「何やってんだお前」> b r<

「って、いたあ!？」> b r<

いつの間にか入っていたこの間の公園で、振り返れば笹原君がいる。> b r<

アーウチッ、この私ともあろう者がテンパリ過ぎて後ろのベンチにも気付かなかった。> b r<

こりゃ一本取られたね、と。> b r<

ないないの神様ありがとう、私はこれからも貴方の従順な僕であります。> b r<

「まさかお前やっぱりストーリー」> b r<

「むしろこっちは探した方だよ。マジでストーリーカーなら楽だと今心底思った」> b r<

「わかった、お前はストーリーカーじゃない」> b r<

ううん、何その見事なサバト回避。>br<

楽だなど思っただけでなるなんて言っていないじゃないっすか。>br<

「なんか用？」>br<

「何も。強いて言うならこっちもサバトフラグ回避？」>br<

「何言ってるんだ」>br<

流石に切れた息を整えて、笹原君のお隣に腰を下ろす。>br<
目の前には相変わらず子供達が遊び回っている懐かしげな光景。>br<

「笹原君は何やってたの？」>br<

これが笹原君でなければリストラされたリーマンよろしく黄昏ていると思わざるを得ない。>br<

うーん、恋のフィルターって摩訶不思議アドヴェンチャー。>br<
じっと子供達を見守っている様子を見詰めていると、ふと視線を横にやった笹原君が何かを差し出して来て反射的に受け取る。>br<

これが笹原君でなければ戦いの先手よろしく突きを入れて来たと判断し投げ飛ばさざるを得ない。>br<

うーん、本当に恋って（以下略）。>br<

手の中の缶コーヒーをお礼を言いながら後生大事に手で包んでいると低い声が降って来る。>br<

「何かしようと思っただけだな。……何していいか、やっぱわかんなくなってた」>br<

「好きな人の事？」>br<

小さく頷いた笹原君はふと自嘲するように息を吐いた。>br<
その様子が酷く頼りなげで、なんでもしてあげたくなっちゃう。>br<

「え、えーと、とりあえず声を掛けて知り合ってみるとか」>br<
だからなんでアドバイスとかしてるんだ自分っ。>br<

んもう、そんな捨てられた子犬みたいな空気出しちゃって笹原君た

ら、この魔性の男め！>br<

私に理性がなかったら攫って連れ帰ってるところだよ。>br<
うん、私がマトモな事に感謝して貰いたい。>br<

……おっと手が伸びてた………オホホ、これは笹原君の肩に付いていたゴミを払おうとしただけですのよ。>br<

「無理」>br<

「なんで」>br<

思わず素でツツコンじゃったじゃないか。>br<

「とにかく無理」>br<

「決め付けるのよくないよー。未来には無限の可能性が広がっているんだから」>br<

勿論タキシード姿の笹原君の隣に純白のウェディングドレスの私も、だ。>br<

「お前はなんだってそうバイタリティに溢れてんだよ。結構複雑な家庭事情なんだろ？」>br<

「いや単純通り越して複雑怪奇なのは親父様だけだけど。昔ちょっと悟ったんだよねえ、何も考えないで突っ走るんじゃないって、少しは未来のビジョン見詰めて悔いのないよう行動しようって」>br<
「突っ走ってるだろ。ていうか考えた末の行動がそれなのか」>br<

「私だって考えてますー」>br<

主に笹原君との純白な未来をー。>br<

「だから、後で食い縛り過ぎて歯を磨り減らす思いは沢山だと思うたのよ」>br<

「どれだけ食い縛ったんだ……」>br<

「しかもやり直すどころか補う事も出来なくなっちゃってさ。まあ未だに思い出して過去の自分が恥しくてもんどりうってあああああああああっ！！」>br<

「うるせっ、ちょ、オイ何ー」>br<

笹原君の声が瞬時に遠く聞こえるほど猛ダッシュ、なんか今日私

走ってばかりいませんか、青春ドラマだけで充分ですよそんなもん。> b r <

公園の端の大きな木にそのままの勢いで飛び付いてガリガリ登る、登るったら登る。> b r <

ふっ、この程度の木、木登りの悠ちゃんと呼ばれたこの私にかかればチョロイって。> b r <

さっさと目的の枝まで辿り着いてその先にいる真の目的に手を伸ばす。> b r <

「そこのお坊ちゃん、助かりたいなら手を伸ばしなさい」> b r <
「ううううう」> b r <

枝の先の方にしがみ付いたお坊ちゃんたら恐怖で唸り声しか立てやがりません。> b r <

下りれないなら登るな素人が！大体私はその年の頃にはむしろ木から飛び下りて遊んでたよ。> b r <

はあと息をついてよじよじしながら近寄ると、そっとお坊ちゃんのしがみ付いてる手を外して自分にしがみ付かせる。> b r <

全く、最近の子はひ弱だな。> b r <

……当時お前が規格外だと近所の兄さんに言われたのはまあ置いておくとしてだね。> b r <

「お坊ちゃん、ここから落ちたらどうなると思う？」> b r <
「うーっ、怖い！」> b r <

「そうだねえ、骨がぼきっと折れる事間違いなしだね。それでもって折れた骨が肉を突き破って出て来るかもね」> b r <

「うわああああああ」> b r <

「でもさあ、登って時気分よくなかった？」> b r <

幹の方へ体を後退りさせながら尋ねると、腕の中でこくと頭が頷く。> b r <

うんうん、わかるよ、登り切った瞬間なんか、世界は我が物って感じ。> b r <

何故登るんだと聞かれたらそこに木があるからだと答えるくらい脳

内麻葉出まくってたな。>br<

「色んな事忘れちゃダメだよ、お坊ちゃん。あのねえ、君はもう怖くて登りたくないと思うかもしれないけど、そうしたらさ、君はひつくーいところでももう怖くて、どこにも登れないよ。あの鉄棒の上にもタイヤの上にも、それで皆と遊べなくなっちゃうよ」>br<
「…………やだ」>br<

そうだろうとも。>br<

「だからさ、今度はいきなり大きいのじゃなくて、少しずつ練習して高いのに登ろう。そうすればこんな木よりずっと大きいのに登れるよ。君は怖いのを覚えたから、大きい怪我をしないように気をつける事が出来るしね。そしたら君はヒーローだよ」>br<

「ほんと？」>br<

「勿論」>br<

歴戦の勇者と呼ばれた私が言うんだ、若干は信じなさい。>br<
結局私も同じだったんだと今になってわかる、怖さを知らずに何でも出来る気になっていたから自分の足元が見えていなかった。>br<

それが自分にどんな怪我を齎すかなんて、ちっともわかっていなかった。>br<

後悔した、齒どころじゃなくて頭も禿げるくらい。>br<
それでちよつとわかった、怖さに怯えて何も出来ずに後悔するくらい後悔の悪いものはないって。>br<

——あの時なんで逃げ出したんだろう、なんでもっと必死になつて探さなかったんだろう。>br<

後悔の悪い後悔はきつと一生どこかに付いて回る。>br<

そりゃ今だってあんまり考えてるとは言えないかもしれないけどさ、前みたいな後悔だけはしたくないんだよねホント。>br<
禿げるのもやだし。>br<

「お坊ちゃん、見てみ。夕焼けキレーだよ」>br<

恐る恐る顔を上げたお坊ちゃんは遠く向こうに見えるオレンジ色

の光にぽかんと見入る。> b r <

「諦めなければ今度はもっと高い所で見れるよ。今度は自分で下りて、ね」> b r <

「うん。やる」> b r <

何度も頷いたお坊ちゃんの頭を撫でて、こっそりと下を見て思わずぎよっとした。> b r <

お坊ちゃんやその友達のだろうお母さん達が青白い顔で声もなくこっちを見上げている、その中には心配そうにしている笹原君もいた。

> b r <

ヤバイヤバイ、これ以上の長居は無用だ。> b r <

「さて、下りますよお坊ちゃん。背中にしがみ付いて、下は見ないようにね」> b r <

高さよりある意味お母さん達の顔に度肝抜かされるかもしれないから。> b r <

あんな母親の顔見たら一種こっちよりトラウマになるよ。> b r <

少しずつ移動させておんぶすると、お坊ちゃんの腕が首にしっかりと回ったのを確認してスルスルとUターン。> b r <

昔取った杵柄はまだまだご健在、えっへん。> b r <

我ながら惚れ惚れする鮮やかな木登りでした。> b r <

「はい、ご到ちゃ」> b r <

「まーちゃん!!」> b r <

く、と言う前に背中から降りたお坊ちゃんにお母さんが突進して来る。> b r <

わんわんお母さんが泣くもんだからお坊ちゃんがポーカンド。> b r <

ははは、なんかハートフルな光景でいいですねえ。> b r <

うちのママ上様はすっかり記憶にないくらいだもんなあ。> b r <

もし生きていたら、こんな事もあったのかもしれない………私が登った木から下りられないなんて失態をかますとは思わないけど。

> b r <

「ありがとうございました！」> b r <

「いえいえ、無事で何より。ただ、練習は止めさせないで下さいね」> b r <

は？と首を傾げたお母さんに向かってお坊ちゃんがやる気に満ちた顔で「木登りの練習するんだ」とのたまったもんだからお母さんまたしても真っ白。> b r <

「でも」> b r <

「いきなり高い所に登らないように教えるだけでいいですよ。それこそこのちっちゃいタイヤからでも、少しずつ練習させるようにして。でないと怖がって鉄棒にも登らなくなりますよ」> b r <
大きなショックっていうのは最悪そういうものだ、人によってはちょっとした段差でさえ当時の高さに見えるらしい。> b r <

さっとお母さんは引き籠もりまっしぐらの息子を思い浮かべたのかどうか、神妙な顔で頷いた。> b r <

……よかったよこのお母さんがモンスターなんかじゃなくて。>

b r <

いい母親を持ったな、お坊ちゃん。> b r <

「お姉ちゃんバイバイ！今度は絶対自分で下りるからね！」> b r <
頭を下げ下げしているお母さんに連れられてお坊ちゃんが帰って行くと、周囲にいた人達もバラバラと散り始め、残ったのは笹原君。

> b r <

あ、そういえば笹原君の哀愁時間の邪魔しちゃった感じ！？> b r <

「ごごごごごめん笹原君！何か考え事してたんだよね？騒いじゃってごめんね！」> b r <

言っただばかりでこれだ、いや後悔はしていないけど。> b r <
両手を合わせて拝むように笹原君を見ると、呆れたような……それでいてなんか楽しそうに、少し笑ってる。> b r <

ぱっくんと胸を突き破って出て来そうなくらい大きく心臓が鳴った。> b r <

「お前、ホント変だ」>br<

あう……人がまたしても惚れ直してる時になんですかそれは。>br<

「でも、いい奴だな」>br<

思わずぽかんと笹原君を見上げた。>br<

それに笹原君はまた面白そうに笑う。>br<

「訂正する」>br<

はっきりとそう言った。>br<

「お前みたいなの、結構好きだ」>br<

「それはプロポーズと受け取ってもいい」>br<

「女じゃなく、人として」>br<

……そこで落とすのどうかと思います先生、KYですよ。>br<
ああでも、顔がニヤけちゃって止まりません、どうしたらいいで
すかセンサー。>br<

07. チャンスは見逃さず!

えへ、……えへへへえ。>br<

もうもうもうどうしたって顔が緩んじやってダメ、アキちゃんにウゼエとか針金入れるぞ（どこに？）とか言われてもダメ。>br<だってなんだかだってだってなんだもん。>br<

ヤバイー、このままじゃ変わるわよ（何かが）。>br<

あれから笹原君は心を開いてくれたのか、実に私を友人として扱ってくれるようになったんですよ。>br<

くあー！生きててよかったなあ私！>br<

なんでそんな事になったんだかイマイチわかんないけど、結果がこれなら全てよし。>br<

そしてこれをファーストステップとしてセカンドステップはやっぱり男女交際ですよねっ。>br<

「お疲れ様笹原君っ」>br<

「……部活まで追っ掛けて来ていいとは言っていないぞ」>br<

ああんもうそんな固い事仰らず、笹原君の胴着姿は目の保養且つ共有財産なんですから。>br<

ほら遠巻きに体育館には鈴なりの女子が。>br<

今日は一緒にバスケット部もいるから、そこのイケメン狙いと一緒になって特に多いわ。>br<

まあ私の一番というかオンリーワンは笹原君だけなんだけど。>br<

「顧問には許可取ってるもん」>br<

「なんでだよ！」>br<

いっちゃん（剣道部顧問）に笑顔で手を振って見せると微妙な愛想笑いで手を振り返される。>br<

それを胡散臭げに睨んだ笹原君の目からは物凄い勢いで顔を逸らした。>br<

「かなりきな臭いんだが」>br<

「笹原君、シャワー浴びて着替えて来たら？」>br<

「話を逸ら——」>br<

「ああああ相庭悠っ!!」>br<

隅で奇声を上げながらこっちを指差してるのは女剣と女バスの部長。>br<

……おおっと、なんかマズイ。>br<

どうしようかと思っている間にレポートかってダッシュで近寄られて両腕を取られる。>br<

目が血走ってますよ先輩方、こいつはやベエ。>br<

「いい加減剣道部に入りなさい! あんたは我が剣道部の星となるのよ!」>br<

「何言ってるんの相庭悠はうちが最初に目を付けたんですからね! さあ今日こそバスケット部に入って貰うわよ!」>br<

あ……わたしのためにあらそわないで……。>br<

「ちょっと邪魔すんじゃないよ!」>br<

「そっちこそ! 毎年毎年こっちの入部を邪魔してるのはそっちじゃない!」>br<

「なんですってえ!？」>br<

………おーおー、体育館で取っ組み合いの喧嘩始めちゃったよ……女は怖いね。>br<

「笹原君、私外で待ってるから。一緒に帰ろうね」>br<

「……」>br<

それぞれの顧問に取り押さえられている先輩達に引きながら笹原君は勢いに負けたまま頷く。>br<

よし、約束ゲットしたからにはとっとと退散退散。>br<

後にする体育館から聞こえて来る阿鼻叫喚が恐ろしい。>br<

二十分もしない内に部室から出て来た笹原君は相変わらず訝しげに私を見る。>br<

「べ、別に不正した訳じゃないんだから! ちょっと昔の知り合いだ

ったからあの事をバラされたくなければ中に入れろって穏便に頼んだだけなんだから勘違いしないでよね！」>br<

「立派に脅迫だろそれ」>br<

チッ、ツンデレ風は通じないか。>br<

「大体、お前一体どんな記録出したんだ。あらゆる運動部の部長が俺まで引き込もうとして鬱陶しいんだけど」>br<

おお、流石引退控えた三年だけあるわ、私が何に弱いかもすでに洗い出してるな。>br<

でもそこで私を売ったりしない笹原君が好きっ！>br<

「あーうん、笹原君に迷惑かかってるなら、各顧問に言って止めさせるよ」>br<

「……お前は一体何人の弱みを握ってるんだよ」>br<
ちよっとした昔の人脈ですよ、ここの高校地元の間が多いし。

>br<

並んで帰宅しながらすぐ間近に迫っている期末試験の事をあれこれ話す。>br<

——……今自然にさらっと言ったけど「並んで」ここ重要、自然に言ってるってところがミソ、私的テストに出るので必要な人はメモって下さい、と。>br<

ああー、もう付いて来るなどか追っ掛けて来るなどか言われないんですよ私、えへっ。>br<

しかしどうやってセカンドステージにアタックするかが次なる問題よね。>br<

いきなり押し倒す……のはフラグが折れる以上のカウンター食らいそうだし、いきなりキス……は少女漫画のイケメンしか許されないし……どうしたもんかな。>br<

「そういえば笹原君は模擬試験で23位だったね。どんな勉強法してるの？」>br<

「別に普通。お前は模試幾つだった？」>br<
キヤーッ、質問されちゃったよ！もうこりゃ最近の笑いが止まら

んですね!>br<

「2位」>br<

「…………嘘だろ」>br<

「いえ本当です」>br<

「頭良さそうには思えないんだけどな……」>br<

「ギャップがあっていいって事だよな!」>br<

「2位の頭持つてる奴の発言とは思えないな」>br<

「T大生が将来皆エリートコースを歩まないようなもんだよね」>br<

「なんか違うだろ」>br<

そうかなあ、まあアキちゃんにも成績が詐欺とはよく褒められるけど。>br<

んもう笹原君てば、ギャップ萌えならそう言ってくればいいのに。>br<

こんな何でもないような会話が幸せだったりして、足が思わずツーステップを刻むよ。>br<

でも楽しい時間はそう長く続かない、段々と近くに見えて来る笹原君のお家と道場。>br<

好きな人の家を見るのが切なくなるなんて……恋ってやつは。>br<

「ご家族はお元気?」>br<

「まあ。いや……微妙」>br<

「え、風邪とか!?」>br<

「トミさんが……ギックリ腰で、今朝から自宅療養してる」>br<

「えええ!?!大丈夫なの?」>br<

優しいトミさんが痛い思いしてるのかと思うとこっちも居た堪れない。>br<

ギックリ腰ってくせになるとか聞いた事あるし、心配だな。>br<

「軽いものだから一週間も休んでりゃよくなるみたいだけど。……そのお蔭で家の食事情がなあ」>br<

はあと盛大な溜息をついた笹原君に思わず首を傾げる。>br<
そういえば笹原君の家の食事やはトミさんが全部やってるんだっ
け。>br<

でも一週間くらいなら自分達で用意出来るんじゃない？>br<
という私の気持ちが顔に出ていたのか、笹原君が力なく首を横に振
る。>br<

「うちじゃ誰も料理作れないんだよ。特にお袋が最あ——」>br<
笹原君が言い終わる前に丁度着いた目の前の家からボンッだかド
ンッだかいような大きな破裂音みたいなのが聞こえる。>br<

あまりの事に思わず荒ぶる鷹のポーズを取ってしまうとこだったよ。
>br<

一瞬目を合わせた私達は急いで笹原家の中にダッシュした。>br<
ままままさがばばば爆発！？警察！いや救急車！？消防車！？ど
れ呼ぶべき！？>br<

「あらあ勝利、おつかえり」>br<

慌てて家の中に入った私達を笑顔で出迎えてくれたのは、スラッ
したスタイルでキャリアウーマン！て感じの女の人だ。>br<

お、お姉さんはいなかったはずだよね？え、でもかなり若いし……
誰？>br<

「お袋、さっきの音は何だよ」>br<

「お母さんんんん！？若っ！！」>br<

恐ろしく若い！いや後妻という事もあるし！？>br<

「ただの若作——いつてえ！！」>br<

「オホホ。笹原政子、46歳です。貴女のお名前は？」>br<

全然見えない……うちの親父様以上がここに存在していたとは……
世間は狭いな。>br<

「は、はい。相庭悠、16歳です！笹原君にはいつもお世話になっ
ております！」>br<

その笹原君はかなりイイ音立てて殴られた頭を抱えて悲痛な表情
をしていらっしやる訳ですが。>br<

しかしここは母の教育方針と見て、敢えてスルー、笹原君ごめん！
> b r <

（超確定的近未来の）お義母様との初対面、ビシッと背筋を伸ばしまして礼は90度。> b r <

「あらあら、行儀のいいお嬢さんだこと。ちょっと勝利い、アンタもカノジヨなんか連れて来る年になったのねえ。お母さんアンタが女嫌いだと思ってちよびつと心配してたのよお？」> b r <

ちよびつとですか。> b r <

「あの、さつき家の中から凄い音聞こえたんですけど、大丈夫だったんですか？」> b r <

忘れちゃいけない本題を聞いてみる。> b r <
寝ててわからなかったとかいうオチがない訳じゃないからなあ。> b r <

しかし政子さんはころと笑って手をヒラヒラと振る。> b r <
「ああ、あれねえ、食べる物ないからゆで卵くらいなら作れるだろうと思って、レンジにかけたら凄い音しちゃって」> b r <

「……………」> b r <

思わず笹原君と一緒に重い沈黙。> b r <

えっと、なんと言うか……それは「ゆで」卵ではないのでは？という素朴な疑問。> b r <

な、なんだこの、濡れた猫を乾かそうとしてレンジに入れましたの都市伝説的な会話は！> b r <

ある意味レベルが高過ぎて付いて行けない、流石笹原君のお母さん！> b r <

「わかっただろ？こういう人間が揃ってんだよ。お袋なんてこれでプログラマーなんだぜ？」> b r <

マジか……レベル高え。> b r <

「あ、でも外食とか、冷凍食品とか」> b r <

「爺さんと弟がアレルギーよろしく嫌がる。そのくせ同じ物食わせないと暴れる」> b r <

うわあ、言っちゃ悪いけど面倒臭。>br<

「こんな所で立ち話しないで、こっちいらっしやい悠ちゃん。今お茶淹れるから」>br<

「今度はガス爆発起こす気か!!」>br<

「私が淹れます淹れさせて頂きますハイ!」>br<

ビシッと手を上げた私に「あらそう?じゃあ貰い物のお菓子持ってきて来るわね」と笑顔で奥に引っ込んで行く政子さんを見送って、思わず笹原君と同時に溜息をついてしまった。>br<

これじゃ忙しい以前に家政婦さん雇うはずだわ、ほっといたら家が崩壊しかねない。>br<

肩を落とした笹原君に案内されるままキッチンの方へ行く、と。

>br<

「……せ、戦場跡地……」>br<

「……………モップ持って来る。足元気をつけろよ」>br<

「はい……」>br<

開けっ放しのレンジは見るも無残な姿の上、落としたのか何なのか床に卵が散乱している。>br<

そこを回り込んで丁度コンロに置いてあったヤカンに水を入れて火にかけて。>br<

その間に戻って来た笹原君が酷く疲れたご様子で床を掃除して行く。

>br<

ううん、しかし慣れてるっぽい感じも……。>br<

当の戦人は向こうの方で「お菓子用意出来たからねー」と笑顔を想像せざるを得ないご機嫌声だ。>br<

急須とお茶の葉やらの場所を教えて貰って、もそもそとお茶の準備。>br<

場所は覚えましたが、これからお茶が必要な時はいつでもこの相庭悠をご指名頂きたい。>br<

蒸らしながら湯飲みと一緒にトレイに置く頃には非常に疲れ切ったご様子の笹原君も掃除を終えて、二人で奥の部屋へと廊下を歩く。

> b r <

それにしてもトレイも持ってくるとか、笹原君てばなんてよく出来た人なんだろ！> b r <

これはもう嫁になるしか！！> b r <

「ありがとねー。さあさあ、食べて。悠ちゃん、勝利の学校での様子とか聞かせてよ」> b r <

「そんな事より今日の夕飯どうすんだよ」> b r <

「あー……えー……」> b r <

ええー……。> b r <

「あの、よかったら私が作りましょうか？」> b r <

「え、いいの！？お願い！」> b r <

「ちよつとは遠慮しろお袋！……お前も氣い遣わなくていいから、うち人数多いし。爺さんと弟には口に突っ込んでやればいいだけだ」> b r <

「大丈夫大丈夫、人数多い食事の用意慣れてるから」> b r <

「え、でもお前んち父子家庭なんだろ？」> b r <

「お客が多いんだよね」> b r <

アレをお客と呼ぶなら。> b r <

いやでもこれってかなりチャンスなんじゃないですか？> b r <
将を射んと欲すれば先ず馬を射よ！これですな！いまこそ無駄に国際料理の数をこなして来た成果が試される時！> b r <

神よ、私はこの試練に打ち勝ってみせますとも！> b r <

「お願いしたいわあ、私は殆ど外食だから。今日だってトミさんのご飯を楽しみに帰って来たのに」> b r <

「是非お任せ下さい」> b r <

「ありがと悠ちゃん！」> b r <

「はいお義母様！」> b r <

「ノるな！あとどさくさにお義母様とか呼ぶな！」> b r <
がしつと両手を握り合う私達にお茶を噴き出す勢いで笹原君が叫ぶけど、私から反対側の笹原君を政子さんが見た瞬間ピタリと口を

閉じる。>br<

一体どんな顔が展開されてるんだろ……知らぬが何とかってやつよねこれは。>br<

「作って貰うわよね、勝利？」>br<

「……相庭、頼む」>br<

「任せて！大抵作れるけど何食べる？あ——つきまして、材料などは？」>br<

二人揃って首を振られてしまった、トミさん何も買い置きしてないのかな。>br<

「勝利、ちょっとひとつ走りして買って来なさい」>br<

「わかった」>br<

「私も行くよ！」>br<

「そうね、お願いするわ。何から何まで申し訳ないけど。あ、これお金。何か欲しいお菓子でもあったら好きなだけ買っていいからね」>br<

「は、はい」>br<

財布を受け取ると政子さんの「ちょっと待った」。>br<

「悠ちゃん、さっき勝利が父子家庭って言ってたけど、お父様にご連絡は？」>br<

「いえ結構です」>br<

「そう？」>br<

「はい。まあメールでも打っておきます」>br<

「そうしてね。じゃあ、行ってらっしゃい」>br<

手を振られて部屋を出ると着替えるという笹原君を見送り五分、

スーパーに買い物に出かける。>br<

あああああ私服の笹原君とスーパーヘデート！私が制服っていうのがちよつと締まらないけど。>br<

政子さんありがとう！レンジを容赦なく破壊してくれて！>br<
またしても足がツーステップを刻むよ刻んじやうよ刻まねば。>br<

「折角だから笹原君の好きな物も作るね。ご家族は何が好き？」>br<

「悪い。適当なんでいいから。お前、家には？」>br<

「だいじょーぶ。さっきメールしたから」>br<

『友達の家に行くから多分遅くなる。飯は適当に食われたし』と出したら『いやあああああああああ！！パパが餓死しちゃっても知らないんだからね！><』と帰って来たので『確定的に遅くなる』と返したら完全沈黙した。>br<

あの人も料理出来ないけど、カップ麺くらいは作れるから餓死はナシ。>br<

お客？もなんかまだ到着に時間かかるとか言ってたからまあ大丈夫でしょ。>br<

「えーっと、具体的に何人だっけ？」>br<

「爺さん、両親、三兄弟、お前」>br<

「え、私も！？」>br<

「そりゃそうだろ、飯だけ作らせて帰らせるとかないだろ」>br<
うわああああああんぶっちゃけアリだと思ってましたー。>br<

クッ、なんか感激し過ぎて涙出そう、だって女の子だもんっ。>br<

「相庭悠、頑張って夕食を作らせて頂きます！」>br<
敬礼っ。>br<

「マジでんな気張んなくていいから」>br<
「そういう訳には参りませんのことよ。あ、ご家族の好き嫌いはい？」>br<

「外食、出来合い、冷凍モノ。主にジジイと弟が」>br<
「……承知」>br<
ていうか直刃さんはともかく、弟君のそれは結構困らないかなあ。>br<

こういう事になったらお昼とかどうしてるんだろ。>br<

という私の心がまたしても読めたのか（以心伝心！……と言ったら普通にスルーされたよ）笹原君はひらひらと手を振る。>br<

「意地でも食わない。前に同じ事あった時にはクラスの女子に弁当貰ったらしいけど、冷凍食品ばっかで吐いたらしい」>br<

その時の女子の気持ちがちも吐きたいほどよくわかるような。

>br<

恐らく好意があって渡したんだろうに吐かれた日にやマジでこっちも吐くって。>br<

「徹底してるねえ。自分で料理覚えたらいいのに」>br<

「爺さんが男子厨房に入るべからず、の人間なんだよ」>br<

「そりゃまた今時古風な」>br<

喋りは全くの真逆という印象だったけど、そういえば直刃さんて昔高校教師だったとか何とか聞いたから、その辺厳格だったのかなあ。>br<

人の尻を触るとか、他がフリーダム過ぎるけど。>br<

などと会話をしながら滞りなく買い物を終えて、いざ戦場……いや笹原君宅へ帰還。>br<

道場から出て来た直刃さんがニヤニヤしていたのに心底嫌な顔をする笹原君。>br<

挨拶も済ませて早速戦闘……いや調理開始。>br<

もう少しで笹原君のお父さんもお兄さんも弟君も帰って来るとかで結構急いでやらなきゃならないけどこの流れるような手付きを見よ！自分の後ろに千手観音が見えるようだわ！>br<

所々笹原君に皿出しか手伝って貰いながら（いつもはダメと言うらしいけどこの時直刃さんはニヤニヤしながらスルーした）快調に調理は進んで行く。>br<

「ねえ、なんかこれって新婚さんみた」>br<

「焦げるぞ」>br<

「うわっ」>br<

ちよっとくらいピンクな夢を見させてくれてもいいというのにこ

の現実主義ときたら……そこも好き。>br<

しかしまたナイスタイミングに笹原君のご家族が揃う時に居合わせる事が出来るとは、グッジョブ神。>br<

政子さんはあんまり笹原君と似てないけど、キリッとした感じが如何にも笹原君のお母さん！て感じ。>br<

お父さんとかに似てるのかな、兄弟も似てたりするのかな。>br<うわー、なんかドリームが果てしなく広がりますねえ！>br<

「出来ましたー！」>br<

チャンスをぐっと掴むように、一通り作り終えた料理の前で私は拳を握ってガッツポーズだ。>br<

必ず！美味しいと言わせてみせる！>br<

そして、笹原君の嫁候補に名乗りを上げて！みせる！！>br<魂を込めたこの料理、とくと味わって頂きます。>br<

>br<>br<

08. 使える物は何でも使え

神よ、つまりこれは、遺伝子の神秘ってやつなんですよ？>br<

という現場を目の当たりにしております相庭悠です、スタジオにお返します。>br<

「うっめー！マジで美味い！悠さんすげー！」>br<

と叫びながらがついているのは笹原君の弟である剣矢君、ぶっちゃけ超チャライ。>br<

顔はどちらか言えばお母さん似かなあという感じ。>br<

「ああ、本当に。高校生でこれだけ作れるって凄いな。将来はそっち系に進むの？」>br<

と綺麗な箸捌きなのは長兄の広大さん、物っ凄動作がビシィツとして正座する背筋の角度とか超完璧。>br<

こちらはお父さん似というより瓜二つの顔だ。>br<

兄弟を揃えて見ると笹原君は直刃さん似なんだなあっていうのはつきりわかる。>br<

……それにしてもこの両極端の兄弟の間を取りましたって感じだよね笹原君の性格……。>br<

「本当にこれだけ急に作らせてしまって申し訳ない。勝利、後でちゃんと送って行くんだぞ」>br<

「わかってる」>br<

広大さんそっくりのお顔でこちらもしッと言ったのはお父さんの雄大さん。>br<

しかしなんだ、その、上から下までタイプは違うんだけど全員美形なんですよ。>br<

なんか薔薇園の中に雑草紛れ込んで申し訳ないって感じが。>br
でも料理は大好評のようでよかった、しかも恐ろしいスピードで消化されて行ってるよ。>br<

男性陣はわかるんだけど、政子さんもよく食べるなあ。>br<
なんかすっかりトミさんのような気持ちで自分の食べる暇もなくご
飯や味噌汁をよそい分ける私。>br<

……これですっかり私も笹原家の一員に!?!>br<

「悠さん、おっかわりー!」>br<

「いい加減食い過ぎだろ剣矢。相庭、お前も自分の食えって」>br<
r<

「だって今日は爺ちゃんめっちゃめっちゃしごくんだぜー? マジで疲れ
た」>br<

「剣矢君も剣道やってるんだ?」>br<

まあ名前からして強制が入っていると見えるけど。>br<

受け取った茶碗にこんもりとご飯を乗せながら言うと、剣矢君は大
きく首を縦に振る。>br<

「勝利兄ちゃんみたいに上手くはないけど。家じゃ全員やってるよ、
母ちゃんも」>br<

ほー、なかなかの剣道一家なんだ。>br<

「お前は何かやってなかったのか? あれだけ運動部から勧誘される
くらいなんだし」>br<

「え!?! あ、いや、えー、まあ、ちょこっと、一通り?」>br<
言葉を濁してみる。>br<

「一通りと言うと?」>br<

濁してんのに突っ込まないで下さいよ(近い将来の)お義父さん
!>br<

「剣道は?」>br<

「え、あ、はい、昔」>br<

「ほう、柔道とかは?」>br<

「え、あ、はい、昔」>br<

「じゃあ空手なんかもしかして?」>br<

「え、あ、はい、昔」>br<

「あら、それじゃ拳法なんか?」>br<

「え、あ、はい、昔」>br<

「まさか合気道とかは？」>br<

「え、あ、はい、昔」>br<

「……お前やってないの探した方早くないか？」>br<

「え、あ、はい、そんな感じかも」>br<

笹原一家の質問責めに行きも絶え絶えの相庭悠選手、ロープ！ロープ！アンドタオル！>br<

「凄いな、それだけ経験してるなんて」>br<

「昔なんて言ってる今もやってるんでしょ？そのスタイル見たらわかっちゃうんだから」>br<

うおっ、流石お義母様、目敏い！>br<

「い、いえ、今はそこそこ嗜む程度に」>br<

何故！私は！ここで！「いやーん、格闘技なんてやった事もありませーん。人と争うなんてコワイ！」とか！言えない！のか！>br<

あああああなんでわざわざ自ら色物女認定を………あれ、なんか一家（笹原君を除き。そして特に雄大さん）の目の輝きが違………>br<

「そうだ、それだけやっているならTENCHIの名を聞いた事はないか？」>br<

うわ、久しぶりにその名前聞いた。>br<

「彼の著書には色々と実践に役立つ事も書いてあるし、何より志が――」>br<

「ほー、あの若造、本なんか出しとんのか。随分偉くなったもんじやの、昔からやんちゃばっかりしとったのに」>br<

「え、直刃さん、知ってるんですか？」>br<

雄大さんの脇から直刃さんが首を振るのに思わず目を丸くしてしまった。>br<

すると直刃さんはうむと頷く。>br<

「昔教え子じゃったからの」>br<

まあある意味謎に包まれている件に関しては異論もないですが。

>br<

家にいる時は恋愛少女漫画片手にビール飲みながら涙してると知ったら一体どんな顔する事やら。>br<

「なーにを言うておる、わしに言わせりゃあいつなぞまだまだひよっ子じゃて。あいつは力任せに技を使い過ぎる」>br<

「全く同意見です直刃さん」>br<

「うむ。悠ちゃんはわかつとるようじゃな、あやつよりずっと見込みがありそうじゃ」>br<

おお、（近未来の）義祖父様に見込みを許された。>br<

これは笹原君の嫁になる確定的フラグと受け取りますがよろしいですか。>br<

「頼む、相庭君！是非TENCHIと、いや君のお父さんに会わせてくれ！！この通りだ！！」>br<

「あああああああ頭上げて下さい！！」>br<

ちよっ、笹原君に言われる前に笹原君のお父さんにその科白言われるとか斜め上過ぎる！>br<

ていうかただ崇拝されてんだあの親父様は。>br<

……ああそういえばあれが連れて来るお客？も親父様の事「マスタ―」とか呼びくさってちよっと宗教じみてるしな。>br<

ちらりと笹原君を見ると額を手で覆ってすでに言う事はないといった感じだ。>br<

お互い、父親には多少苦労しているみたい、共通点だわ、愛のファーストコンタクトね。>br<

「あ、あの、わかりました。あれでよければ、今家にいますから呼びます」>br<

「ありがとう相庭君！！このご恩は一生忘れない！よかったら是非その勝利を貰ってやってくれ！」>br<

「わかりましたお義父様！ありがとうございます息子さんは私が必ず幸せにします！！」>br<

「勝手に話を進めるなそこ!!」>b r<

チッ、この流れならスルーされるかと思ったが流石に甘くないわ
マイビターチョコレートめ。>b r<

「あー、じゃあちよつと電話かけて来ますね」>b r<

内心不満を残しつつ、廊下に出てポケットから取り出したケータイの短縮ダイヤルを押す。>b r<

しかし妙な展開になったもんだなあ、まあ笹原君が貰えるならあの
ニートもたまには役に立つってもんだ。>b r<

『ハイハイ、マイドーター、どーったの？プッ、今のシャレわかった?』>b r<

家でこれ言ったら確実に四の字固めなんだけど。>b r<

「×丁目×番地の笹原家に今すぐ出て来いや」>b r<

『…………ヤダ!』>b r<

「何故」>b r<

『だってそこ高校ん時の担任の家だもん!やだもん!怒られるから
やだもん!』>b r<

卒業して云十年経ってるだろうにまだ怒られるって一体どんな高
校生活を送りやがったのかこいつは。>b r<

「今すぐ来ないと今後の飯はないと思えよ」>b r<

『イヤーン!超パワハラ!訴えてやる!』>b r<

「そういえば先日神崎法律事務所から――」>b r<

『今すぐ行くから待ってて、ネ!』>b r<

チュッとかいうおぞましい音と共に切れた。>b r<

親父様の旧友らしい神崎さんがお中元持って来てくれたって言おう
としただけなんですがね。>b r<

まあ神崎さんと昔何があったかは追求しないでおこう。>b r<
何かあったら真っ先に相談してくれてってプライベート名刺貰ってる
し。>b r<

再びリビングに戻ると何故か笹原君と直刃さん以外全員正座でワ
クワク顔だよ……親父様ホント一体何やってんだ?>b r<

「すぐ来ます——って、オイ」>br<

言ったとたんの「ピーンポーン」のチャイム音。>br<
一体さっきどこにいたあの神出鬼没不審人物は！？>br<

「俺が出る！」>br<

「いや私だ！」>br<

「私が出るわよ！」>br<

「ダメだ俺が出る！」>br<

わきやわきやと父母兄弟の攻防戦の中、よっころしょと立ち上がって部屋を出る直刃さんに続き、私と笹原君も立ち上がって玄関に向かう。>br<

直刃さんの顔を見たたん回れ右した親父様は即行直刃さんと私に首根っこを掴まれて捕獲だ。>br<

ここまで来て逃げようってのは流石に甘いですぜ親父様。>br<

「キヤー！本当にTENCHIだわ！」>br<

「初めまして、私、笹原雄大と申します！いつも貴方の著書を——」>br<

「TENCHI、サインくれ！」>br<

「ほ、本物……っ！」>br<

そう、格闘家のTENCHIこと、相庭天地は私の遺伝子上の父親でございます。>br<

>br<>br<>br<>br<>br<>br<>br<

「それにしてもお前も人の親だったとはのう。お前だけは親になつてはならん人間だと思っておったが。貰ってくれる嫁なんぞがいた事に驚きを隠せんわい」>br<

いや全くです直刃さん、実際娘である私の立場がないけど。>br<

何故か高校時代のお説教を一時間に渡って受けた親父様は現在正座した足が痺れてノックダウン中。>br<

「すでに他界したのは残念じゃったが、まさかお前の娘を目にする事になるとは……長生きはするもんじゃの」>br<

「TENCHIと悠さん全然似てないよなあ。まあTENCHIも
渋くてカッコイイけどさ、悠さんは美人で可愛いって感じだし」>
br<

「剣矢君、作ったデザート冷蔵庫に入れてあるから全部食べていい
よっ」>br<

「ヤッター!」>br<

超可愛いわ剣矢君、あれが未来の私の義弟になるのね……。>br<

「TENCHIの娘ならなんか納得した。そりゃ身体能力が桁外れ
でも違和感ねえわ」>br<

「いやそこで納得されてもですね」>br<

でもそれは私のあるがままを受け入れたって事でよろしいんです
かね笹原君。>br<

説教やらサインやら質問責めやらで、漸く落ち着いた私達はお菓子
を摘みながらお茶を啜る。>br<

雄大さん達はまだ興奮冷めやらぬって感じだけど。>br<

そんなご大層なもんとは思えないんだけどね、この親父様が。>br<

面白いから足突付いてやったら「らめえええええええええええ」と
か言ってるし、キモイ通り越してキメエ。>br<

「悠たんヒドイ、パパをこんな鬼教師に売るなんて……しくしくめ
そめそ」>br<

「こっちは親父様がちゃんと高校を卒業してたつてのに驚きだよ」
>br<

「そんな事ないもんパパ成績悪くなかったもん全国模試で一番取っ
た事あるもん」>br<

……笹原君なんですかその「血だな」みたいな顔は。>br<

そんな顔を以前どこかで見たような気がします、はて。>br<

「しかし世間は狭いな、悠のロマンスの相手がまさか先生の孫とは
なあ」>br<

そして笹原君からの突き刺さる熱い視線、……もつと!>br<
「お前親父にまでそういう事言ってるのか?」>br<

「言う訳ないでしょ。なんで知ってんだこの現ニート」>br<
「あああああ足ツンツンは今らめえええええええええっ!!……
くすくすん、だってパパは悠たんのパパだからパパなのだ。顔見
たらわかるもんくすくすん」>br<

まあ隠してる訳じゃないんだけど、これに悟られている事もちと
微妙と言うか。>br<

「悠ちゃん、こいつはちゃんと父親やってるんかのう」>br<
「遺伝子上は辛うじて」>br<

そう言う直刃さんはぎりっと親父様を睨んで、親父様はぴゃっ
と飛び上がって丸くなる。>br<

崇拜しているこんな格闘家の姿を見ても笹原一家の面子は特に何を
思うでもないらしい、大物だ、ある意味真の信者だ。>br<

「……何となくその言葉の意味がわかった」>br<
「わかってくれて嬉しいよ」>br<

恋人になるには相互理解とかいうやつが必要ですもんね。>br<
「こいつが将来義理の息子になるかと思うと頭が痛いわい」>br<

「なんでTENCHIがジジイの義理の息子になる体で言ってるんだ
よ」>br<

はて、孫の嫁の父親は義理の息子になるのかな?>br<

「大丈夫です直刃さん、私が責任持って直刃さんの義理の息子とし
て教育しますから!」>br<

「頼もしいのう、悠ちゃん」>br<

「だからなんでその体で言ってるんだって!」>br<

「あら、TENCHIが親戚になるなんて素敵いっ」>br<

「TENCHIさん、不肖の息子ですがどうかお嬢さんの夫として、
そして私達を親戚として末永くよろしくお願い致します」>br<

「お前らなあ……」>br<

うわーい、なんか外堀埋まってるー、棚ぼた!>br<

とはいえ笹原君の意思を無視してのスキップなど有り得ないので、ちゃんと順序は踏まねば。>br<

手始めにはまず、デートだよね、うん。>br<

「それで笹原君、再来週からの夏休みですけど、プールになど行ってみませんか」>br<

「なんで俺が………わかった行く、行けばいいんだろ……」>br<

一瞬で全員の刺さるような視線が笹原君に集まった上での事は否めませんが、えーっと、それについては私も華麗なるスルーをさせて頂きたく。>br<

こんなチャンス早々逃がして堪るかっての、こうなったら他力だろうが何だろうが何でも使う。>br<

キヤーと歓声を上げて私が両手を上げれば笹原家ご家族一同も笑顔で拍手、ありがとうありがとう！>br<

相庭悠、やりました！ありがとう！>br<

「但し、明石達も一緒だ」>br<

「エー」>br<

そりゃあねえだろふーぢこちゃん。>br<

「勝利兄ちゃん、KYにも程があんだろそれ」>br<

「ごめんなさいねえ、悠ちゃん。空気の読めない子で」>br<

「勝利、私はそんな子に育てた覚えはないぞ」>br<

「兄として俺は情けないぞ勝利」>br<

「呆れて物も言えんわい」>br<

「だから何なんだよ！！」>br<

まあいいけどね、笹原君が照れ屋なのはこっちも充分承知だし。

>br<

約束さえ取り付ければこっちのものだよ、うふふ。>br<

これはまた対笹原君用に勝負水着を新たに買いに行くしかないな、フツ、腕が鳴るわ。>br<

「よかったなあ悠、プールでのロマンスはポロリもあるから、気合

入れて行けよ!」>br<

「ちと引っ掛かるが、おうよ!」>br<

がっとなを合わせた私達親子を笹原君は「やっぱり血だな」みたいな目で見える。>br<

うーん、電子レンジにかけたら遺伝子変わるかな。>br<

などとやってたら再度直刃さんの逆鱗に触れて親父様はお説教スパイラル。>br<

私は笹原君に送られて一足早く帰宅と相成りました……ああん今夜は帰りたくないっ。>br<
とか言ったらプールのお約束はなかったものとされそうなので沈黙の悠。>br<

「あー、楽しいご家族だねえ。会えてよかった」>br<

「お前の親父も相当賑やかだな」>br<

「あれ一人で一万と二千分はあるよ」>br<

「だろうな。……で、いつにする?」>br<
思わず聞き返しそうになってから、勢いよく隣の笹原君を見上げてしまった。>br<

わ、マジで!? んもう、このままスルーも出来たのにホント律儀なんだから笹原君愛してる!>br<

「夏休み入ってから土曜は? 市民プールで!」>br<

「あー、まあそこが無難だな。明石達にも言っとく」>br<

そこはスルーして欲しかったな、まあいい明石君はこちらの味方だ。>br<

ああもう家が見えて来ちゃったよ……名残惜しい。>br<

「詳しい日時はまた後日って事で。今日はありがとな」>br<

「ううん! 凄く楽しかった! 新しい水着買うから超期待しててね!」>br<

「何にだよ……」>br<

米神を押さえた笹原君に大きく手を振ると、苦笑しながら軽く手を上げてくれる。>br<

暗い中に消えて行く背中をずっと見送った。> b r <

それからじっと目を瞑って、笹原君が手を上げてくれた姿を思い浮かべる。> b r <

ぼんやりと全身があったかくなって、隅々までやる気が満ちた。> b r <

よし、とりあえずは、新しい水着どんなのにしようかな?> b r <
やっぱポロリは大事?> b r <

> b r <> b r <

09. 魚心あれば水心！ポロリもある……はず？

決戦の土曜日、これで舞台は整った……訳なんですけども。>br<

なんでしょね、この男子三人の顔ときたら。>br<

「おー、相庭すげー。後で写真撮らして、売るから」>br<

「鈴木君、夏休みを延期したいって言うんならー」>br<

「嘘です冗談です」>br<

まあでもこれがフツの反応でしょ、女子の水着に喜んでこそ夏の男の生き様ってもんだろ。>br<

それに比べてまー明石君と笹原君のビッミョーなこと。>br<いや笹原君はいいんだけどね、鼻の下伸ばすようなキャラじゃないし、例えそうだとしても好きだし。>br<

問題は隣の男ですよ、なんだその顔。>br<

「明石君、喧嘩売ってんならー」>br<

「いやいやいや！そうじゃなくて……相庭、それヤバイっしょ」>br<

「何が？」>br<

この日の為に吟味に吟味を重ねた勝負水着だ、これに文句をつけるなんて夏の男として（以下略）。>br<

……そんなにマズかった？>br<

ビキニだけどそんな生地がうっすうすでもスッケスケでもピッチピチでもないんだけど、ある意味至って普通。>br<

ワイヤーブラで胸の谷間は綺麗に整えた上で自己主張させても、水色生地にブラウンで花の刺繍がしてあってブラのフロントとショーツの両脇にリボンが付いてる、だけ。>br<

笹原君のやったねバッチリ好印象！的な反応を期待した訳じゃないけど、とりあえず好みに合いそうなのはこの辺のシンプル系かなあと思って勝負かけてみた。>br<

せめてダーまで言わせてダーリン。>br<

「お前ってさ、なんか苦手な事ねえの?」>br<

「うん?」>br<

「や、泳ぎも出来るみたいだし」>br<

だから泳げると言ったのにな、さては信じてなかったな。>br<

しかし苦手と言われても……苦手ねえ、爬虫類も昆虫類も両生類も触れるし、雷も地震も平気だなあ。>br<

うーん? 勉強もそんな苦手でもないし……何かあったっけかな?>br<

「そんな首捻るような事かよ。なんもねえの?」>br<

「あ、あった! 裁縫苦手!」>br<

あれ、がくつと笹原君の素晴らしいフォームが乱れた。>br<

「なんだそりゃ」>br<

「苦手って言うから答えたのに。昔からどうもあれは苦手なんだよね」>br<

「お前あれだけ料理出来るんだから不器用ではないだろ」>br<

ところがどっこい、ですよ。>br<

料理と裁縫じゃ器用の方向性がこれでもかと違うらしい、中学の時代までの裁縫の授業には全く苦労させられた。>br<

何せミシン使えば真っ直ぐ行かないどころか指を縫う始末だし、針を使えば最終的には布が赤く染まる羽目になるし、もう全然いいとこなしで挙句先生には「そこで絡まった糸を解してて」とか言われたっけな。>br<

それを言うと笹原君にとてつもなく怪訝そうな目で見られる。>br<

「お前、やっぱどっかズレてんな」>br<

「あ、でも笹原君の嫁になった暁には裁縫学校に通ってでも習得する所存!」>br<

「……嫁は置いとけ」>br<

「ほっとけない!」>br<

「あーもう行くぞ!」> b r <

「待ってえー」> b r <

こんなやり取りも楽しい今日この頃です、えへっ。> b r <
後ろを見れば明石君と鈴木君が向こうの方で泳ぎながらこちらに
気付いてひらひらと手を振ってくれる。> b r <

うん、それは「ガンバレよ」の意と受け取った、その厚意無駄には
すまい。> b r <

手を振り返して先を泳ぐ笹原君の後を追おうとしたけど、妙に込
み合って来た所為でなかなか思うように泳げない。> b r <
というより人にぶつかりまくって泳ぐんじゃなくてすでに歩いて
るよ。> b r <

うーわあ、笹原君を見失うー、アンテナ発動!> b r <

「わっ」> b r <

「あ、悪い。大丈夫?」> b r <

「いえ、こちらこそ」> b r <

またしても人にぶつかって、一刻も早く笹原君を追わねばという
状況で、水を掻こうとした右手が掴まれた。> b r <
なんじゃこいつ。> b r <

「ごめんね、お詫びにジュースでも奢る」> b r <

「結構です」> b r <

「遠慮しなくていいよ」> b r <

「遠慮じゃなくて、不要」> b r <

「ははっ、まあそう言わず」> b r <

はは、話通じてない。> b r <

ていうかそれどころじゃないんだって、早く追いかけないと笹原君
が行ってしまうー。> b r <
で、手を離せやこのポケが。> b r <

人の手を掴んだこの物体を水の中でどうにかしてやろうかと一瞬
思案した後、見上げたそいつの顔が奇妙に歪んだ。> b r <
あれ、こうして見るとこの間親父様が見てたバラエティーに出てる

芸人に似てるな。>br<

……そうじゃなくて、何？>br<

「いっ」>br<

「俺の連れだ、失せろよ」>br<

背後から芸人もどきの腕を掴んだらしい笹原君のひくい一声に後ろを振り返ったそいつはぎょっとして逃げて行った。>br<

「ありがとう笹原君、感謝の気持ちをここは一つ抱き付くという行為で表したく思」>br<

「ケツコウデス」>br<

うーん、一体どこからさっきの会話を聞いていたのか、スナップが効いてるわ。>br<

「じゃあお礼にジュース奢る」>br<

「さっきの野郎と同じ手口じゃねえか」>br<

「あれと一緒にされちゃ困りますぞ旦那。ジュースがダメならコーヒーでも」>br<

「わかったわかった。一旦上がるぞ」>br<

「イエッサー」>br<

よし、これでいっぞや奢って貰った借りは返せる。>br<

惚れた男にも基本ワリカン主義、それが私。>br<

どうも昔から家計簿つけてたもんだから、ちよっと金銭観念は強く嫌なんだけどね。>br<

プールから上がってみると益々人が増えて来たなって印象だ、まあ夏休み入ってすぐの週末だしねえ。>br<

それに日差しも強くなってきた、上がってみると結構すぐに喉が乾いている事に気付く。>br<

ちよっというタイミングだったかも、これからまだまだ泳ぐんだし。>br<

「笹原君、何がいい？」>br<

「コーヒー」>br<

「承知！じゃこの辺で待ってて、買って来るから」>br<

腕に巻いた小銭入れを取り外しながら売店の列に並んで、そういえば明石君達には何を買おうかと吟味する。> b r <

二人共コーヒーでいいかな、前に同じ物飲んでたから。> b r <
自分のはどれにしようかと店の上にあるメニューを眺めていると、脇のワゴンでラムネを発見。> b r <

おお！夏と言えぱやっぱあれですよ！よし、早速購入。> b r <
三つのコーヒーと自分の分のラムネを抱えると妙にウキウキして足取りが弾むわ。> b r <

ラムネの瓶がレトロなのがまた嬉しい、これ一番中のガラス玉が綺麗に見えると思うんだよね。> b r <

「おっ待たせー、これ明石君達に分、同じの買って来ちゃったけど」> b r <

「ああ、サンキュ。……あ、それ」> b r <

「ラムネ？あ、こっちのがいい？」> b r <

どこか懐かしそうに目を細めたて領いた笹原君にラムネを渡して、それからプールの方に戻って明石君達にコーヒーを手渡してから、脇のベンチで並んでコーヒーとラムネを口に傾ける。> b r <

「お前コーヒーでよかったのか？」> b r <

「うん。何でも飲めるよ。笹原君、ラムネ好きなの？」> b r <

「特別好きて訳でもないけどな。……夏になると、思い出すって言うか」> b r <

「あー、わかるわかる」> b r <

プールを挟んで向こう側のベンチで明石君達がコーヒーを飲むのを眺めながら私も領いた。> b r <

夏は本当に定番だったなあ、昔は近所のスーパーでさっきみたいに店頭でワゴン売りしてて、友達と夏場遊ぶ時は片手に必ずラムネがあったつけ。> b r <
誰が一番泡を噴き零さずに飲めるかとか、よく競争したなあ。> b r <

「私開け方上手いよ、貸して」> b r <

笹原君の手から受け取ったラムネ瓶の口に蓋を装着して、ベンチに瓶を置くなり上から蝶のように舞い蜂のように刺す！……じゃなくて力任せに押し続ける。> b r <

ぷしつと音を立てて瓶の口に湧き上がって来た泡はそのまま噴き出す事無く下の方へ戻っていった。> b r <

「はいどーぞ」> b r <

「上手いもんだな」> b r <

「昔友達と競争したり選手権を開催してたからね」> b r <

「お前もよく飲んだのか」> b r <

「夏休みとかはもう友達とラムネ片手に公園が定番だったよ」> b r <

本当に懐かしいなあと感慨深くなっていると、ふと視線を感じて横を見れば笹原君の目とぶつかる。> b r <

ちよ、やっぱりいい体してらっしゃいますねとか色々考えないようにしてるんだからっ、……って何？どうしたの？> b r <

「笹原君はしなかったの？」> b r <

「……ああ、俺は、しなかったな」> b r <

「やっぱり道場ばかりだった？」> b r <

嫌で逃げ出しても押入れに閉じ込められる反撃受けるくらいだもんなあ、なんか道場漬けの日々を送っていたっぽい。> b r <

「ジジイに聞いたんだろ。俺はまだずっとガキの頃は嫌で逃げ回ってばっかだった」> b r <

「へえ、そうだったんだ」> b r <

それはまたちょっと意外だ、今じゃ笹原君は剣道が好きなんだなって凄く伝わって来るくらいなのに。> b r <

それがわかったのか笹原君はプールを眺めながら苦笑した。> b r <

「嫌だっつーのに無理矢理やらされて、あの頃楽しいもんなかなんもなかったな」> b r <

勝利は泣いてばかりじゃった、そんな直刃さんの言葉が脳裏に浮かんだ。> b r <

思わずがっとなんちから立ち上がる。> b r <

「これからはさ！楽しい事一杯出来るよ！えーと、ほら、ラブラブ
ウォータースライ」> b r <

「それはナシ」> b r <

くっ、だからダーまで言わせてマイクルビュティー！> b r <
「なんかお前は想像出来るな。今と同じでめっちゃくちゃなガキだっ
たんだろ」> b r <

同じってのが引っ掛かるけど、ベンチに座り直しながら頷く。>
b r <

まあ否定は出来ない、親父様は当時からアレだし私は特に疑う事も
なくやりたい放題毎日を謳歌していた。> b r <

それが世界の全てだと思っていた頃、友達に囲まれて母親はいない
し親父様は面倒でも楽しい思い出しか蘇っては来ない。> b r <
あの初恋の、たった一つの後悔を除いては、だけど。> b r <

だからこそ、楽しい事が何もなかったなんて言う、そんな言葉が
なんか胸にずんと来た。> b r <

いや、むむっと来た、かな。> b r <

「めっちゃくちゃだったよ。もうさ、休みともなれば毎日友達と遅く
まであっちこっち走り回って泥だらけで。で、帰って自分で洗濯す
るの」> b r <

笹原君ははははと声を上げて笑った、その大きな手の中にすっ
ぽり入った瓶の残り少なくなったラムネがゆらゆら揺れてる。> b
r <

「遅くないよ、全然。もう高校生だけども、これから楽しい事幾ら
だって出来るよ。海とか山とかさ、色々行こうよ」> b r <

私は再び立ち上がって鈴木君と明石君に向かってこっちに来いと
大きく手招きした。> b r <

訝しげにしながら飲み終わったらしいコーヒーをゴミ箱に捨てて二
人がやって来ると、目の前に立つ二人に向けて両手を胸の前に開い
てみせる。> b r <

「何？」> b r <

「こうなったらさあ、目一杯楽しもうと思って」> b r <

「は？ いやだから、二人きりにしてやって――うわっ！」> b r <

「ぎゃあ！！」> b r <

にここにこと笑いながら、首を傾げる二人の肩をどーんと押してみ
る。> b r <

突然の事に二人は抵抗もなくそのまま後ろのプールへ背中からダイ
ブ、いやコントみたいにお見事な。> b r <

「コラー！ 飛び込み禁止ですよー！」> b r <

監視員さんが怒鳴りながら歩み寄って来るのに、私は残りのコー
ヒーを飲み干し笹原君にも促して空になったカップと瓶をゴミ箱に
放り投げると、続いてプールヘダイブ。> b r <

「うわ、追っ掛けて来る！ 逃げろ！」> b r <

「相庭あっお前の所為だぞ！？」> b r <

「あははははっコワー！ 捕まった人が帰りアイス奢りね！」> b r <

「何がしたいんだよお前は……ってヤベ、早く逃げろ！」> b r <

日に焼けた監視員さんがプールに入って追いかけて来るのに、私
達は長い事笑いながらあっちこっち逃げ回って泳ぎまくった。> b
r <

> b r <> b r <> b r <> b r <> b r <> b r <

「つかれた……マジ吐きそう俺」> b r <

だらしないなあ、鈴木君は。> b r <

運動部じゃない明石君だってけろっとした顔してんのに。> b r <

「オイ鈴木、俺がち割りで」> b r <

「俺ボーリボーリー君」> b r <

「私バナラソフトー」> b r <

市民プールを出て近くのスーパーの前で一斉に鈴木君に向かって

三つの手が差し出される。> b r <

「俺かよ！ ていうか捕まってねえしっ」> b r <

「お前がケツだったろ」> b r <

「ほらペナルティ付けられなくなかったら早く行けって」> b r <
「いーちにーいさーん」> b r <

「イジメカッコワルイ！」> b r <
言いながらスーパ―の中へダッシュして行く鈴木君を微笑ましく
見送る私達。> b r <

私の分くらいのお金は出してやるかな。> b r <

「しかし授業でもやらねえくらい泳いだなあ」> b r <

「俺明日筋肉痛になりそ」> b r <

「余すところなく堪能したよね、市民プール制覇ー」> b r <

二人用のスライダーが出来なかったのは残念無念ではありますが。

> b r <

でもまあ、笹原君が笑ってたから、いっかなあなんて。> b r <

「あの時の鈴木君の顔思い出すと夏休み中はウケそうだ」> b r <

「あれは酷かったな、アイスの袋に転びかけた後お姉さんの胸に顔
から突っ込んだ時がもう最高潮」> b r <

「所謂ラッキースケベってやつですね、わかります」> b r <

頼子曰くフツ―のいい人であればあるほどそういう機会に恵まれ
るものらしい、無欲の勝利？> b r <

あああああああああああああそんな事やってポロリ忘れた
よ！！なんて事だ！！> b r <

くっ、これが無欲と強欲の差か……っ！羨ましいぞ鈴木君！> b r <
今からポロリしても通報から逮捕コースにしかない！> b r <

「お、戻って来たな、ラッキースケベ」> b r <

「おかえり、ラッキースケベ」> b r <

「あ、私の分は払うよ、ラッキースケベ」> b r <

「なんなんだよおおおお！変な称号付けんなよおおおおお！」
> b r <

半泣きでアイスを手渡して来る鈴木君に明石君が笑う、笹原君も
笑う。> b r <

笹原君が笑って、私は嬉しくて、笑う。> b r <

相手に合わせるんじゃないくて、引き込まれて、そうやってしまうんだなあ。>br<

「で、次はどこ行く?」>br<

「ん?」>br<

「海とか山とか、行くんだろ」>br<

かち割を食べながら、そっぽを向いてそう言った笹原君に、思わず私は鈴木君と明石君に目を向けた。>br<

すると二人はにやりと笑って頷いている。>br<

なんだろ、胸が痒いって言うか……むずむずする。>br<

でも全然悪い感じじゃない、むしろ何か叫び出したいほどハイになって来る感じ。>br<

「うん!えっと、海!」>br<

「また水着系かよ!お前は自覚がなさ過ぎる!」>br<

怒られた……でも露出なる武器は使わねばなるまい、戦う乙女としては。>br<

「相庭、一秒でも目え離すと声かけられてるし、面倒だから山とかにすれば?」>br<

その言い方はどうかと思うぞ鈴木君、お前が助けてくれた訳じゃあるまいし。>br<

まあ面倒は面倒なんだけど。>br<

「えー、じゃあキャンプとか?」>br<

「泊まりか」>br<

「あ、俺兄貴が車持ってっから、遠出出来るぞ」>br<

「うちにテントとかキャンプ用品ある」>br<

「……んじゃ、それで」>br<

そう言って背を向けてしまった笹原君を見て、私はなんだかわかんないけど顔からぼっと火が出るくらい熱くなった。>br<
な、なんでだ?恋心ってやつは本当に理屈がわかんないな。>br<

しかも目頭まで熱いぞ、なんで!?>br<

「よかったなあ、相庭」>br<

ニヤニヤして言った明石君と鈴木君に、私はなんでか泣きそうになったまま、笹原君の背中を見て頷いた。>br<

>br<>br<>br<>br<>br<>br<

夕方になっても日差しが強い、でろんと融けそうなのはでも日差しの所為ばかりじゃない気がする。>br<

笹原君とキャンプでお泊りがこうもホイホイお約束出来てしまうなんて……どこでフラグ立ったんだ？夏の魔力？夏、恐ろしい子！>br<

「ただーいまー」>br<

ああ今日ばかりは暑苦しい親父様の顔を見てもアイアンクローくらいで許せる気がする。>br<

「ユー！」>br<

家に入ってすぐそんな声がして、YOU？という発音に首を傾げた瞬間、どすんと体に衝撃を受けた。>br<

圧迫される中見上げれば金色。>br<

「ユー、アイたかった！」>br<

そう言って私に抱き付いて来たらしい人物は顔を上げにこりと笑う。>br<

薄い色の金髪、今日の真っ青な空のような青い目、やたらと整った顔立ち、私より頭一つ半は高い身長。>br<

……外人だ。>br<

「ユー、I Love——」>br<

——……。>br<

「悠、帰ったのか？今客が……何床で寝てんだ、テッド。日本じゃ布団で寝るもんだぞ」>br<

「こらそのニート、これ何だ？」>br<

「あばばばばばアイアンクローあばばヤメテあばばば俺のあばば連れのあばばば息子ばばばば」>br<

ぎりぎりと頭を締め付けた手を外すと、床に転がった物体を改め

て見下ろす。>br<

私にキスしようなんざ百万光年早いわ、雑魚が。>br<

「こいつの親父達も来る予定だったんだけど、これから裁判になるらしくてなあ。息子だけ送って寄越した。テッドⅡバーロウ、お前と同じ16だっけかな」>br<

「……て事はこれはこれから……」>br<

「そう、休みの間は一緒に住むから。よろしくメカドツあばばばばばばばばば」>br<

こんな不審人物と一緒に住め……だと？>br<

>br<>br<

10. 雑魚に餌は与えるべからず

「大変申し訳っ!!!」 > b r <

謝罪の礼も九十度、背中が重いけど。 > b r <

「相庭、ナイが抜けてる。つかそれは……守護霊？」 > b r <

「いや背後霊じゃね？」 > b r <

鈴木君と明石君のそんな言葉が最もマッチする、頭を下げた私の背中に未だ貼り付いているのはテッドⅡバーロウと言う名の背後霊だ。 > b r <

いやむしろ背後霊なるものの方がどれだけ奥ゆかしい事かと。 > b r <

キャンプ実行当日までのこの一週間たるや、トイレと風呂場とベツドしか一人で休まる時がなかった。 > b r <

しかもその三箇所も大抵ドアの前で待ち伏せているときてる、ストーカーのレベル超えてるって。 > b r <

私なんて可愛いもんだって、……いや私はストーカーなんかじゃないんだから勘違いしないでよね! > b r <

「しかしえらいイケメン連れて来たなあ」 > b r <

「相庭、外人に趣旨変えか？」 > b r <

「聞き捨てならん事を! このゴキブリとは縁も所縁もありゃしないわよっ!」 > b r <

振り払っても振り払ってもくっ付いて来るところはまさにゴキブリ。 > b r <

どうやら親父様を「マスター」と崇めてる宗教一味の一人らしいけど、親父様曰く、旅先で私の話してたらこのゴキが会いたいかぬかすようになったらしい。 > b r <

勝手に私の話するとか、ナントカ権の侵害じゃないの? ……神崎法律事務所相談してやる訴えてやる。 > b r <

勿論諸悪の根源である親父様はバックドロップで沈めておいた、

しかしそれを目撃されて以来益々このゴキが鬱陶しい事に。>br<
「ユー、つれナイ。ユーとボクは、ウンメイで結ばれてル」>br<
……しかも親父様のロマンスコレクションブック（和洋折衷だ）
に悪影響受けてやがる。>br<

親父様の本全部ブックオンとかで売り払うかな、親父様の涙でゴワ
ゴワだけど。>br<

「とにかく、テントに荷物入れるぞ」>br<

うー、こんな中でもコールドオブマスター笹原君、だがやっぱ
りそこも惚れるっ。>br<

しかし荷物をこのままにしてもおけないので、明石君のお兄さんが
送って来てくれたキャンプ地で、さっき張ったテントにそれぞれの
荷物を収納する。>br<

青い空、白い雲、瑞々しい木々と来て、ロケーションは最高なのに、
なんだこの遣る瀬無さ。>br<

割り切れない、私の中の何かが割り切れない。>br<
そして背中が重い、いい加減に退け。>br<

「ココでユーと寝ルの？」>br<

「……明石君、お兄さんはここに来る時誰かに見られていたかな？
もしくは君達、ここに来る事を誰かに喋った？」>br<

「相庭、モロに殺人予告をするな」>br<

ダメか、場所が離れているこの人気のない森の中でなら或いはと
思ったが。>br<

しかしこのゴキ、殺しても死にそうにはないんですけど。>br<
埋めようものなら這い出して来そうだよ一種のゾンビだよ、誰かシ
ョットガン（ベネリM3S）持って来て。>br<

「下に川あって、そこで釣り出来るようになってるから、ここに残
って夕飯作り班と二手に分かれるぞ」>br<

「じゃあ私笹原君と——」>br<

「ビョードーにジャンケンで決めよう！」>br<

クソ、独断と偏見で申し訳ないが今は敢えて言う、アメリカ人が

平等にジャンケンしようとか言うな！しかもこのタイミングこの空気で！> b r <

しかもなんだこの男三人ときたら「平等」にNOと言えない日本人ですかコノヤロー！> b r <

普通に拳振り上げてんじゃないわっ。> b r <

「じゃんけんつーかグーパーで。バーロウも、OK？はい、じゃーんけーん」> b r <

「PON」> b r <

妙に発音のいいポンが混じってたなとテッド以外の誰もがそう思った事だろう。> b r <

そしてなんでよりによってこの面子になりましたか、神様ったらもうツンデレッとか言いたくなる采配。> b r <

まあテッドと一時でも離れられてラッキーっちゃラッキーだけど。

> b r <

……なんでお前が笹原君と釣り班になっとなんじゃコラ、マジで空気読め、日本に來たなら郷に従って今だけでいいから。> b r <

「んじゃ笹原とバーローだっけ？お前ら釣りなー」> b r <

鈴木君、なんかそれも微妙に発音違うような気がする、しかしどこかで聞いたような……？> b r <

おっと、なんか蝶ネクタイの頭脳は大人な少年というキーワードが浮かんで来てしまった、あまりの嫉妬に我を忘れ始めているのか私。> b r <

そんな私の心情を物ともせず、笹原君は明石君から手渡された釣り道具を持って振り返りもせず行ってしまう。> b r <

あーうー、声をかける暇もない。> b r <

「ユーと離れてサミシイけど、フィッシング、トクイだから、待っててネ」> b r <

一方にこにこと言いながら頬にキスして来ようとするテッドを回し蹴りして追い払う。> b r <

しかし敵もさるもの、こうした軽い技ならかわせるようになってい

る。>b r<

まあ無駄に親父様の信者を名乗る一味じゃないって事か、そこそこ身体能力は良さそうだ、私ほどじゃないけど。>b r<

代わりに投げキッスをして来るのでそれを叩き落しながら、やつと笹原君の後を追って行った背中が消えるのを溜息と共に見送る羽目になってしまった。>b r<

毎日このやり取りだよ、流石の私も疲労とストレスが限界だ。>b r<

笹原君に今日会ったら疲れも吹っ飛ぶと思ってたのに……なんか微妙に冷たいし。>b r<

いやクールなのはいつもの事なんだけど、なんて言うかフツーに冷たいし。>b r<

設置されてある小さいかまどの前で拾った小枝での字を書いていると、荷物から飯盒とかを引っ張り出して来た鈴木君が言った。>b r<

「超怒ってんな、笹原。珍しー」>b r<

「……あれ怒ってんの？」>b r<

驚いて鈴木君を見るときょとんとした顔で頷かれる。>b r<

わ、私に分析出来なかった表情が鈴木君に読める……だと？>b r<

「ああ、鈴木な、笹原と小学くらいからつるんだと」>b r<

ネタ明かした明石君に鈴木君も頷く、て事は幼馴染みって事？

初耳！>b r<

「保育園も一緒だったんだぜ？付き合いは小学の低学年くらいからだけど、クラスもずっと一緒」>b r<

「そーなんだっ」>b r<

ていうか超怒ってる笹原君なんて見た事なかったから、分析データで照合して解読出来ない訳だよ。>b r<

しかしそんな長い間クラス一緒とか、……鈴木君……嫉妬っ！>b r<

「あいつ怒ってる時こう、さあーっと空気冷たくなるから、辛うじ

て俺はそれだけわかる」>br<

胸張って言う事でもない気がするけど、まあ確かに明石君の家に集合してからもうそんな感じだった。>br<
なんで怒ってんだろ？ キャンプに来る事になったから？ それとも何か腹の立つ事でもあった？>br<

幾ら考えてもわかんなくて、その辺の小枝を拾い集めながら首を傾げる。>br<

うう、笹原勝利マスターへの道のりはまだ遠かったらしい。>br<

ぶつぶつと反省していると近くの水道から水を汲んでご飯の準備を始める明石君と目が合ってにやりと笑われる。>br<

お兄さんは超明るくて全然タイプ違かったつけ、明石君曰く「でもあいつ腹黒いよ」らしいけど。>br<

「何？」>br<

「んー？ いや面白くなって来たなと思ってさ」>br<

「人の不幸で楽しむとは太え野郎だな」>br<

「いやいや、相庭もその内楽しくなるって」>br<

どうやってなると言うのか、ゴキはともかく笹原君は冷たいし笹原君が冷たいし笹原君で冷たいし。>br<

あーあ、これが贅沢を覚えた後ってやつなのか、普通に話して貰えないだけで物凄いダメージだ。>br<

でも今までと何か違う感じするし、超怒ってるみたいだし、いいじ。>br<

「でも最近笹原すげー変わった気がするよ。昔なんか表情以前に空気がすら出さないっつか」>br<

鈴木君がそう言うのにふとプールでの笹原君の言葉が蘇る。>br<

楽しい事何もなかったって言ってたつけ、そんなに道場嫌だったのかな。>br<

でも今はむしろ気合入れまくってやってるように思えるんだけど。

>br<

「笹原君、昔から剣道やってた？」>br<

「ああ、あそこの爺さんが師範だろ？保育園からやってたと思う。毎回授業参観に来るのがその爺さんで、もうオーラが怖い何の」>br<

んー、男子には厳しいようだ。>br<

「笹原も昔からあだから、女子からは割と騒がれてたけど、こっちはおっかなくてさあ」>br<

「なんでそれで仲良くなっちゃったのよ」>br<

「や……なんでだっけな？あ、そうだ、俺小二だかん時くらいに家出した事あんだよね。そんで行った先の公園に笹原もいて、んでなか一緒にいるようになった」>br<

うん、他豪華ゲストみたいな端折りぶりですな鈴木君、全然わかんねえよ。>br<

でも……もしかしたら笹原君もそんな感じだったのかな、逃げ回ってたって言ってたけど、その上捕まって閉じ込められたらしいけど。

>br<

鈴木君はともかく、笹原君がそんなちっちゃい時に一人で公園にして何をしていたんだろうかと気になる。>br<

「なんで剣道好きになったんだろ……」>br<

普通に考えて子供の時そんなに嫌がってたものなら大きくなってもそこそこ嫌だよなえ。>br<

少しは大人になって折り合いつけるって事も可能だけど、でも笹原君はそんな感じで剣道やってない。>br<

上を目指すって、そんな気迫にも惚れたんだから。>br<

「ガキの頃、笹原虐められてたって聞いたけど、俺」>br<

「はあ？」>br<

思わず鈴木君と私の声が被った、そりゃあねえよとお互い明石君に向かって手を振る。>br<
慣れているのか明石君は手際よくかまどの準備をして、野菜を切れと鈴木君の背中を蹴った。>br<

因みに今晚は定番のカレー、むしろ鉄板。>br<

「明石、それ何の冗談？笑えねえ、むしろ怖え。怪談話にやまだ日が高いぞ」>br<

「いやマジで。中学ん時通ってた塾で聞いたんだ、まあそいつら高学年に上がる頃にはもう笹原にのされたらしくて、大人しくなっちまってたけど」>br<

ぱちぱちと目を大きく瞬いて今の言葉を検討するも、どうもにわかには信じ難い。>br<

その後のエピソードは頷ける、でもその前がねえ。>br<
いっそやられたらその場でやり返すって感じでしょ、……あれ、でも直刃さんの話じゃ笹原君てば今と全然違ってたって……え、マジで？>br<

ぼかんとしたまま鈴木君と並んで野菜を切りながら、でもやつぱり首を傾げてしまう。>br<

まあ幼少期はそんなだったとして、また随分変貌を遂げたものだなあ。>br<

虐められてたからいきなり剣道に目覚めたのかな？>br<
ううん、笹原君が虐めに遭ってたなんて、その時いたら私がそいつらをとっちめてやったのに……内密に。>br<

「んー」>br<

「まあそんな事より、相庭は今日これからの事でも考えたら？なんか厄介なのがもう一人いるだろ」>br<

もう一人？>br<

「つかどんな関係なんだよ、あれとは」>br<

「どんなも何も、ハンパねえ生命力のゴキと殺虫剤を振り撒きつつ発狂寸前の人間の関係だよ」>br<

「でも超好かれてんじゃん、あいつイケメンだし」>br<

「鈴木君、人間の顔じゃないよ」>br<

「ちょ！」>br<

「ごめえん間違えた、人間は顔じゃないよ？」>br<

「絶対わざとだろっ」>br<

そんな事ないですよ、わざととかってえ私わかんないしいー。

>br<

ていうか真面目に論外だから、私はそんなケツの軽い女じゃないのよ！>br<

どれだけ顔が良からうが笹原君と比べたら月とスッポン、ヘラクレ
スオオカブトとアブラムシ！>br<

「相庭にその気がなかうとも……なあ」>br<

「わかった。この辺で人気のないところ教えてくれる？」>br<

「だから殺人予告禁止な」>br<

そんな、ちょっと害虫を埋めに行こうかなと思っただけじゃない。

>br<

ゴキを埋める事も許されないこんな世の中じゃ。>br<

「……あ、帰って来たんじゃない？つかあっちも相庭も早くね？」>

br<

鈴木君、ジャガイモの皮剥くのに一体何分かってんの、こっち
一通り終わったしって言うかももう炒め始めてんだけど。>br<

明石君が火を焚いたかまどで鍋をじゃかじゃかやっていると、私の
耳にもダダダッという音が大きくなって聞こえて来る。>br<

な、なんだ熊か！？まさかおフランスにも行かずキャンプ場で熊退
治を私もする事になるうとは——……だがかかって来なさいこの相
庭悠がお相手申す！>br<

と、ファイティングポーズをとろうとしたのも束の間。>br<

ダッシュで戻って来た二人は息を切らしながらズイと持っていた
バケツを突き付けて来る。>br<

「笹原君、それはもしかしくなくても結納の——」>br<

「どっちが多い？」>br<

「はい？」>br<

「ユー、サーハラとボクの、どっちが多い？」>br<

「はあ？」>br<

二人が突き出すバケツの中を覗き見ればまたみっちり詰まった魚。>br<

――…み。>br<

「水ううううううううっ!!」>br<

「うわ、なんかキモ!」>br<

「水道の方にタライあったからお前らそちに魚放せ!」>br<
水と魚の割合が一对九のバケツなんてオラ初めて見ただよ。>br<

明石君に言われるなり二人はギリツと音がしそうな視線を交わして水道の方へと走って行く。>br<

な、なんなんだ一体? なんなんだと聞かれたら答えてくれるのが世の情けだと思うんだけど口挟む暇もありやしない。>br<
それにしても笹原君たら釣りの才能もあったのね、二時間弱であれだけ釣って来るなんて惚れ直すう!>br<

「予想以上に面白い事になり始めた。俺来てよかった、サンキュ相庭」>br<

「あれ面白いかなあ?」>br<

「むしろキモかったぞ」>br<

私と鈴木君を横目にけらけらと笑う明石君、……うぬう、常々侮れぬ奴だと思っではいたが、ひしひしと嫌な予感を感じる。>br<
「しかし、あれって仲悪いのかな。笹原君て結構嫌いとかなくて、どうでもいい感じのタイプに見えたけど」>br<

「そりゃ笹原だって人間に戻りつつある訳だから? 嫌いな奴だっているだろうさ」>br<

肩を竦めてにやにや笑った明石君に「ああ、あいつが嫌いだから笹原怒ってたのか」と鈴木君が納得してる、なんて単純な子。>br<

こっちはそのにやにや笑いに寒気すら覚えるというのに。>br<
でも笹原君とテッドって初対面でしょ、どうやったらそんな超怒れるまで嫌いになれるのか。>br<

あれかな、笹原君でもしかしてゴキ嫌い？まあ生理的嫌悪という事もあり得るし？>br<

ああでも大丈夫！私オオゴキブリだろうとモリチャバネゴキブリだろうと素手でやつつけられるから安心してね！>br<

笹原君は私が守るもの……！>br<

タライを手に戻って来た二人はどうやら数が同じだったらしく、今度はどっちの魚が大きいかという事に議題が移っている。>br<カレーをあとは煮込むだけに仕上げて、横で飯盒の火加減を見始める明石君の脇を抜け、こそりと下に置かれたタライを二つ引き摺る。

>br<

うーん、一体何匹いるのか、タライに放してもみっちみちのぴちぴちだ。>br<

隣の区画には他にもキャンプに来ている人がいるって聞いたし、少々お裾分けして残りはリリースだな。>br<

それにしても笹原君、確かに怒ってるのかいつにないくらい熱くなってるわ、口調変わんないけど口数が多い。>br<

そんな一面を引き出せるなんて、……テッド……嫉妬っ！>br<

明石君に目で合図すると、僅かに頷いてバケツを差し出して来る。

>br<

それにガバツとおもむろにタライの中の魚を掬い上げ、残ったタライを持ってお隣さんへと出発。>br<

何故か明石君に蹴られて鈴木君も付いて来たけど、正直もう一つのタライ持っしか役に立たないと思う。>br<

振り返れば「いいから行け」と顎をしゃくられて腑に落ちないながらもタライ両手に山道を歩く事にした。>br<

背中にはまだ笹原君とテッドの声が聞こえて来る。>br<

……一体何をそんなに熱くなっている事やら……やはり夏、恐ろしい子！>br<

>br<>br<>br<>br<>br<>br<>br<

お隣の区画にいたファミリーはみっちみちの魚に度肝を抜いて、

それでも数匹を置いてから川へ行って残った分をリリース。>br<
戻る頃には出来たてのカレーとほかほかご飯も凍り付くブリザード
が吹き荒れる我がキャンプ地でしたとさ。>br<

——何故熱くなったと思ったら冷める？難しい思春期にも程がある
だろお二人さん。>br<

で、でもまあ串焼きした魚とかも出来たし、キャンプっぽく楽しく
……楽しく………楽し……。>br<

「くない！この空気、異議あり！」>br<

「よく言った相庭！」>br<

「串で焼くのはマシュマロもってキャンプ地では決まっているのだ
から！」>br<

「やっぱお前アホだろ！」>br<

「心配しなくてもちゃんと持ってきて来たって、焼くやつ色々」>br<

明石君にマシュマロの袋を見せるとがっくりと肩を落とされてし
まった。>br<

あれ、マシュマロって焼くと超美味しいんだよ？知らないの？甘い
物苦手？>br<

「はい、笹原君っ」>br<

串にぶっ刺したマシュマロを手渡すなんて、ちょっと脳内で妻気
取りっぽくしてみたりなんかして。>br<

「……ああ、サンキュ。つかお前、これ刺し過ぎだろ」>br<

受け取った串に団子状になってるマシュマロを見て笹原君が肩を
揺らす。>br<

あ、笑った、よかった。>br<

なんて微笑んでいると、反対側の隣からのしつと何かが被さって来
る。>br<

「ユー、ボクにも」>br<

「お前はそこの炭でも食ってろ」>br<

正確にはさっき鈴木君が焼き過ぎて哀れ炭と化したお魚ですが。

>br<

背後霊と言うか子泣きゴキ妖怪を押し退けようとした瞬間、振り上げた腕が前にぐんと引かれて前のめりになったと思ったら背中がすっかり軽くなった。> b r <

何事かと私の腕を掴んだままの笹原君を見上げれば、流石に私でもわかるくらい超怒ってる顔で何かを睨んでる。> b r <

思わずその視線を追うと、後ろに何故か尻餅をついたテッド。> b r <

ええと、これは助けてくれたんだよね？……そうか！ そうなのか

！> b r <

「ありがとう笹原君！ 私が困ってると思って怒ってくれてたんだね！」> b r <

笹原君に握手を求めて言うと、私達の正面に座っていた明石君が椅子代わりの丸太から何故かずっこけていた。> b r <

なんだ明石君、ツッコミかと思ったらボケに転向か？> b r <

> b r <> b r <

11. 夏だ！怪談だ！大接近だ！（前書き）

※序盤少々ホラー的表現のような気がしなくもないような気がするものがありますのでご注意下さい。飛ばすと吉。

11. 夏だ！怪談だ！大接近だ！

彼はその時当然思った、「なんで俺がこんな目に」と。>br<
顧みれば己の悪戯心が原因なのだが、しかし彼はすでにそれをするだけの余裕すらもなくなっている。>br<

降り出した雨は鬱陶しく纏わりついて濡れた服が足取りを重くさせ、彼はただひたすらに忌々しく思いながらも足を止める事はしなかった。>br<

本来なら今頃彼は笑っているはずだった——悪戯を仕掛けた友人達を目の前にして。>br<

ところが彼は今たった一人で己の誕生日に雨の中を歩いている。>br<

土砂降りと言う言葉が似合う雨は温度も臭いも掻き消してよさそうなものを、蒸し暑さはそのままに彼の鼻はどんどん強くなる埃の匂いを嗅ぎ取る。>br<

そして漸く足を止めた先で、ぽっかりと口を開いたような真っ暗な闇を見詰めた。>br<

雲がカーテンになっているかのように空はまだ明るい、だと言うのに目の前の森の先はただ暗闇だった。>br<

足元に跳ねて来た蛙に驚き、彼はそんな己を忌々しく思っ舌打ちすると、ぐっと眉を寄せて森へと足を踏み入れる。>br<

先を照らそうと持って来た防水の携帯は、一步先を照らすだけで他の役には立ちそうもない。>br<

知っていながら確認した電波は勿論途絶えていた。>br<

じりじりと足を引き摺るように進みながら、木々に覆われた空からはぽつりぽつりと大粒の雨が落ちて彼の頭や肩を濡らす。>br<
時折踏み締めた小枝がパキリと音を立てる度に彼の心臓は奇妙に歪む錯覚を覚えた。>br<

すでに彼は暑さも忘れどくどくと脈打つ鼓動を感じながら足を一歩

ずつ前に出す機械にでもなったかのようだ。> b r <

しかしそうしていいいととても前に進めそうになかったのだ、そして正気に返ってここから逃げ出す事は彼のプライドが許さなかった。

> b r <

どうしてもあの友人達に一矢報いてやりたい、その気持ちだけが彼を森の奥へと進ませる。> b r <

こんなはずじゃなかった――彼は何度も口の中で呟いた。> b r <
地元の人間さえ近付かないこの場所に友人達を向かわせようと思ったのは、彼らが今日という日を忘れ去っていた所為だ。> b r <
打ち捨てられた病院が奥に潜むこの場所には様々な噂がある。> b r <

幽霊が出ると言うありきたりのものから、この周辺を全て把握して人を襲いに来る化け物がいると言う突拍子もないものまで。> b r <
後者は近くの村や町で数人の人間が行方不明になった時に出来たものだと言われている。> b r <

つまり大半の人間は信じてはいないのだ。> b r <

しかし自ら進んでこの森に奥へ足を踏み入れる者はいない、度胸試しに行くような若者達でさえ途中で引き返す。> b r <

そこへ彼らの欲しい物を置いて探させたのは彼だ。> b r <
だが彼らが欲しがっていたライブのチケットを実際に彼はこの森の中に置いた訳ではない。> b r <

ありもしない物を探して己の誕生日に彼らが森を彷徨う事にでもなれば面白いと思った、泣いて帰って来でもすれば胸がすくだろうと考えたのだ。> b r <

言ってみればそれだけだ、彼らに少しでも惨めな思いをさせたい、己の誕生日を思い出さない彼らにただ何かの仕返しをしたかった。

> b r <

どれくらい獣道を歩いたのかわからなくなったが、彼は不思議と迷っていると感じはしないでいる。> b r <

蛇でも這ったかの如く茂みがすっかり横倒しになっていてそれが先

へと真っ直ぐに伸びていた、彼らの言った通りに。> b r <

友人達は昨夜森へと乗り込んで行った後、何事もないような顔で数時間後帰って来たばかりか、森の中の病院で見付けたのだと自慢げに古びた金貨のような物を彼の前にちらつかせて見せた。> b r <そして目的であったチケットの事などすっかり忘れて、今日はそれを鑑定しに行っている。> b r <

ぐっと彼は濡れた唇を噛み締め、ほんのわずかだが足の速度を上げた。> b r <

光が消えないように何度も指で携帯のボタンを押しながら、彼はむしろ肌寒ささえ覚えつつある森の中を進む。> b r <

そして、やがてその時はやって来た。> b r <

思った以上に大きな廃屋を前に流石の彼の足も止まり震えが走る。

> b r <

その元病院をも覆い尽くすように茂った木々は時折雨に叩かれながら風に揺れ、オオ、オオ、とまるで人の呻き声のような音を立てていた。> b r <

廃屋そのものが生きて声を上げるかの様子に彼は大いに怯んだが、後ろの茂みでがさりと大きな音が上がったと同時に前に足を踏み出してしまい、後ろを何度も振り返りながら最早彼は進むしかなかった。> b r <

廃屋を取り囲むような大きな柵はすでに錆び付き横に倒れていて意味をなしてはいない、それを跨いで彼はゆっくりだが一歩ずつ先へと進んだ。> b r <

暗い中にぼんやりと浮かび上がる病院の白い姿が彼の眼球に苦痛さえもたらした。> b r <

しかし幸か不幸か、ここでも彼のプライドが勝つ。> b r <

彼らにだけいい思いをさせてなるものかと、一瞬強く閉じた瞼の裏に彼らの笑顔と茶色が混じった金貨を思い浮かべ、彼は大きく足を踏み出し急ぎ足で病院の中へと入る。> b r <

正面の大きなドアはすっかりガラスが粉々に砕け、森の入り口のよ

うに大きく口を開けているように見えた。> b r <

ガラスをじゃりじゃりと音を立てて踏みながら入り口を通り過ぎ、真っ直ぐ伸びた廊下を前にしたところで彼ははたと気付く。> b r < 先程までは携帯の明かりで周囲を照らすのがやっとだったのに今ではぼんやりとでも先が何となく見える。> b r <

病院を前にした時にもすでにそうだったのを思い出し、雨が止み掛けていて空が明るくなったのだと彼は悟った。> b r < だがもう今の彼にとってはどちらだとして同じだ、見えなくとも見えていてももう彼の全身を支配している恐怖は止まる事がない。> b r <

廃屋となつてすでに何十年が過ぎているだろうに未だにどこからか消毒液のような匂いがする、そしてそれに混じって鼻を突き抜け嘔吐を促すような腐臭、時折カリ、カリ、と何かを削るような音もした。> b r <

咄嗟に彼は前屈みになって口を片手で覆った。> b r < それでも不思議と目を閉じていられないのは、これから襲い来るかもしれない「何か」に対しての恐怖だろうか。> b r <

彼の額にはおびただしい量の汗が玉となって浮かび、つつと頬を流れ落ちるのにさえ酷い不快感を覚える。> b r <

臭い、腐ってる、臭い、彼はただその言葉を頭の中で何度も繰り返した。> b r <

そして恐る恐ると振り返り後ろへ足を踏み出そうとしたところで、耳を劈くような大きな物音に己の意識も体の力もが奪われ瓦礫だらけの床に転がる。> b r <

投げ出された携帯の光がぼんやりと照らす天井を暫く見上げ、彼は少しずつ視線だけを入り口の方へと動かした。> b r <

止めると頭の中で何かが警告している、警笛の如く鼓動も胸を突き破らんばかりに鳴っている。> b r <

しかし彼は転がって衝撃で痺れた手足を投げ出しながら、それを捉えた。> b r <

「あ、あ、あ、ああ、あ」>br<

痛いほど見開かれた彼の目尻から汗と共に冷たい何かが流れて行く。>br<

ガチガチと歯が鳴り続ける口からは最早言葉が発せない。>br<彼の視線の先で、閉じる物はすでに何もなくて口を開けていたはずの入り口が、錆び付いた鉄の柵によって塞がれていた。>br<

赤、黒、緑、茶、赤、赤、何故か彼の目に不自然なほどはっきりと鉄の柵にこびり付いた色が飛び込んで来る。>br<

入る前に見た入り口の姿を纏まらない思考で何とか思い出そうとするが、彼が脳裏に描けたのは鉄の柵などどこにもなかった入り口だけだ。>br<

ひっひっと音を立てて呼吸をする度に痛む喉を震える手で押さえ、もうどうしていいかもわからず彼の目があちこちに忙しく動く。

>br<

逃げなければ、もう金貨などどうでもいい、でも一体どこに。>br<

掴もうとする思考はするすると零れ落ちて行って彼に正解を与えてはくれない。>br<

訳もわからず彼は声も出せないまま泣いた、ぼろぼろと涙が零れるまま泣く。>br<

そして彼は再び思った、「何で俺がこんな目に」と。>br<

ただ友人達に今日を祝われたかっただけだった、ただ一言「ハッピーバースデー」とでも言って欲しかった。>br<

それが当たり前だと思って裏切られた時に腹を立てただけだ、友人達はある物を拾っておきながらどうして自分だけがこんな目に遭うのか――思い出した悔しさが彼の体をかっとなぐり巡った。>br<彼は鳴り続ける奥歯を噛み締めて勢いよく立ち上がると、纏れそうになる足を叱咤しながら入り口に駆け寄り柵に手を掛ける。>br<力任せに揺さ振ってもびくともしない鉄の柵に両手を掛けた彼は、己の姿を垣間見てはっと手を突き放した。>br<

まるで鉄格子のようだ、そして己はそこに収められた囚人か……は
たまた獲物か。> b r <

「ひ、い」> b r <

焼け付くような痛みを覚える喉が奇妙な音を立てる。> b r <
彼は泣きながら何度も何度も再び手を掛けた柵を揺さ振った、唸り
声を上げ捕らえられた動物のように理性もなく。> b r <

理性が僅かにでも残っていたのなら助けてと彼は叫びたかったはず
だった、しかし喉は痛むばかりでただの音しか出ては来ない。> b
r <

手に錆が纏わり付きじんと痛むのも構わず柵を揺さ振り続けた
彼は、いつしかガシャンガシャンと音を立て始めた柵を更に必死に
なって揺する。> b r <

涙で視界は覆われぼんやりとしても何物も見えない、奥歯と唇を
強く噛んで彼は柵に爪を食い込ませる。> b r <

早く、早く、もっと、早く、もっともっと！早く早く早く早くはや
くはやくはやく！！——必死にそう繰り返す。> b r <

「え……」> b r <

そのまま揺さ振っていれば彼の頭の中ではいつしかこの錆びた柵
は外れるはずだった。> b r <

——俺は、あいつらに騙されたんだ。> b r <

ふと彼はそう思った。> b r <

今になって酷く頭の一部が冷静になり、こんな廃墟と化した病院に
金貨などあるはずがないと悟る。> b r <

そして、思い出した。> b r <

この森にある噂の一つ、それは霞を食べて生きる仙人がいて出会っ
た人の願いを叶えてくれるというもの。> b r <

もう一つ、いつも村や町を監視しているという化け物は、攫った人
間を……食べてしまうというもの。> b r <

噂のどれもが、この森には「何か」がいるという事。> b r <
馬鹿馬鹿しいとそれを笑った自分、そうだったはずなのに何故こん

指定袋に入れて出すよ。>br<
不燃物か可燃物か悩むところだけど……不燃……いや可燃か？>br<

私が目の前のろうそくの日をふっと吹き消すと、同時に鈴木君がひっと喉を鳴らす。>br<

そして潜伏中の逃亡者の如くきよろきよると忙しく辺りを見回している。>br<

あららら……。>br<

「相庭……」>br<

「ごめんごめん、この程度でそんな怖がるとは思わなかった。でもほら、やっぱり日本人としての夏の怪談とくれば、友達同士で話を聞いている内にはいいけど家に帰ってふと一人になった時の背後とか、電気の点いてない部屋の先とか、真っ暗な角から何か出て来るんじゃないかとか、そういう持続性的なドキドキヒヤヒヤ感と言うの？そういうのが醍醐味だと思うんだよね。因みにこういう話ただと怪物の姿も自分で特に怖い勝手に想像しちゃうから納涼感も更に倍！……あららら」>br<

まさに音もなくすうつと後ろに倒れちゃったよ鈴木君、想像力が豊かなのねきつと。>br<

明石君と笹原君が鈴木君とテッドの二人をそれぞれに引き摺ってテントの中に行くのを見送って、まさに満天の星空を見上げる。>br<

星座とかはわかんないけど、綺麗だなあと純粹に思うねこういうのは。>br<

あれだよ、昔の人は星の形にも色んな物語を想像したとかで、ロマンチックウというやつだよ。>br<

こんな時には好きな人と一緒にこの星空を見上げて二人きりで……ああでも明石君は無事だったな……。>br<

あの人の怖がりそうな話なんて、株が暴落したとかじゃないの？>br<

高校生にしてなんて夢も希望もない奴だ、実際それらしい事言った事があるのがまた。>br<

「あれ、明石君は？」>br<

「もう寝るってよ」>br<

前言撤回、明石君、私は君のその機転の良さがコ・ワ・イ。>br<

「さっきの話、別に怖くなかったでしょ？」>br<

相変わらずビークールな表情で私の正面の丸太に腰を下ろす笹原君を見ながら言うとし笑って肩を竦める。>br<

笹原君もこういう話には動じそうにないイメージだ。>br<

もし笹原君が怖がっていたら思わずギャグオチとして修正するところだったよ。>br<

「さっきお前が言った用の話って感じだな」>br<

「持続性？」>br<

「こういうその時大して怖くねえだろうって思った話に限って、余計な時に思い出したりするもんだしな」>br<

「笹原君も何か怖い話知ってる？」>br<

「いや……」>br<

首を振って空を見上げた笹原君に倣って私もまた見上げてみる。

>br<

知識があるなら星座うんちく披露もアリだと思うけど、言わぬが華みたいな時もあるよね。>br<

それになんか言葉を発さなくてもいいって感じた。>br<

目の前に笹原君がいて、同じ星空見上げて、多分同じように綺麗だなあとか思っちゃってて、……心のメモリアルアルバムをいつでもすぐ開けるようにこの一瞬を焼き付けておかねば！>br<

ああでもなんだかりラックスしちゃって、頭が回らなくなって来た。

>br<

笹原君がいて、星が綺麗で、嬉しくてちょっと泣きそう。>br<

「結局、あいつ、お前の何なんだ？」>br<

あいつ私の何なのさ？——何と聞かれたら答えてあげるが世の情けだけど。>br<

あいつつてのは、やっぱアイツだよねえ。>br<

「単なる居候だってば。……そうだ、ごめんね？笹原君で、あいつ苦手なんだよね？鎖で柱に繋いででも置いてくるべきだった。本当にごめん」>br<

「苦手って言うか……」>br<

「だってなんか凄い怒ってたでしょ」>br<

鈴木君情報だと言うのが妬ましくも悔しいところだけど、鈴木君、いつか私は君を越えてみせる！笹原勝利マスターに、私はなる！別に幼馴染みとか小さい頃の笹原君を網膜が記憶してるとかもしかしたら一緒に風呂なんか入った事あるんじゃないやねだろうなとか羨ましくなんかないんだから勘違いしないでよね！>br<

……あら、テントの方から鈴木君らしきでっかいクシャミが。>br<

あらあら風邪かしらいやあね、夏風邪は酷いから気をつけないと鈴木君たら。>br<

「私が困ってたから助けてくれたんだとは思うけど、でも生理的に苦手なんじゃない？あいつ見た時から笹原君なんかおかしかったし」>br<

正確には態度がブリザードの如く豪雪だったんですが私にとっては、鈴木君曰くでは最初から怒ってたって事になるんだけど。>br<

でも生理的に受け付けない人もまあいる人はいるよねとも思うし、間違っても仲良くしろとも言わないし、タイミングが悪かったなと思うけどやっぱりあいつを連れて来てしまった私の所為だ。>br
今度DIY専門店にでも行って頑丈な鎖買って来よう。>br
……あら、テントの方からなんかアメリカなクシャミが。>br
あらあら風邪かしらいやあね、笹原君にうつしたら強制送還しちゃうんだから……強制送還には多少期待せざるを得ない。>br<

未だ嘗てないくらいウキウキワクワク夢一杯胸一杯妄想一杯で待ち焦がれた楽しいキャンプだというのに失態を犯してしまった……
笹原君に嫌な思いさせたし、明石君も鈴木君も戸惑ったところもあっただろうし……うう、失敗だ。> b r <

もう一度ちゃんと謝ろうとどっしり沈んだ顔を上げると、残った小さなろうそくに照らされた笹原君の顔が赤かった。> b r <
かかかかかかかかか。> b r <

「風邪!?」> b r <

「はあ!?」> b r <

「だって笹原君、顔が赤いよ!」> b r <

ギャー!言ってる傍からなんかもっと赤くなってるよ!> b r <
「ねねね寝なきゃ!そうだ、私のテント使って!今冷却材持ってくる風邪薬もあるよねあでも食後じゃないとダメなんだっけどうしようどうしたらいいと思う!」> b r <

「落ち着け!むしろ俺が聞きたい!」> b r <

「何を!?」> b r <

「っ……あー、……クソ、わかんねえよ」> b r <

笹原君自身にわからない事を正しく私が理解出来るかって。> b r <

しかもわからないところがわからない、とか天才が見下したようなセリフしか出て来ないよっ。> b r <

いやでも風邪はやっぱり栄養とって水分とって安静にして寝るのが一番でしょ?> b r <

え、いや、でも風邪じゃない可能性とかなない訳じゃなくもないし。

> b r <

……。> b r <

「医者ー!病院ー!そして病因んんんんっ!」> b r <

「いいから落ち着け!風邪じゃないからっ」> b r <

「素人判断はダメだよ」> b r <

「お前だって素人だろ」> b r <

「こいつぁ一本取られた!……本当に大丈夫?一瞬で顔が赤くなるとか、超高熱じゃない?」>br<

しかも笹原君がだよ、今日のこの炎天下でも顔色一つ変えずむしろブリザードだった笹原君がだよ。>br<

ちよつと落ち着いたかもだけど、まだ少し顔赤いし。>br<

ああでも笹原君では気を遣って言い出せないだけかも。>br<

「失礼!額確かめさせて」>br<

緊急時と判断しまして、相庭悠、笹原君のお額に手を触れさせて頂きたく候。>br<

だって笹原君が倒れたりなんかしたら余計ダメだよ、怪談話の一つや二つでぶっ倒れたとは訳が違うんだよ。>br<

そういう気の遣い方とかは、絶対ダメだ。>br<

「いい」>br<

「え、わっ」>br<

額に延ばした手は触れる事無く笹原君によって掴まれる。>br<
き、緊急時でもお触り禁止とか超厳しくないっすかこの踊り子さん。

>br<

「だ、大丈夫?……あの、……」>br<

手首を強く掴まれたまま、じつと笹原君が私を見ている。>br<
彼を初めて見た時の目によく似ているなと思った、真っ直ぐで強く

て綺麗な目だなんて。>br<

あの時は私を端に捉えもしなかったその目が、今は凄く近くにある。
>br<

——……って、近い近い近い誓い違う近いっ!>br<

「ああああああの、あの!えっと!……手!手、痛い……んだけ、
ど」>br<

心臓はバクバクいってるし、むしろ違う意味でこっちの顔が赤くなりそうなのに、この目の引力には勝てないニュートンも度肝を抜かす唯一引力の法則っ。>br<

だ、ダメだ……この星より君の瞳の方が綺麗だよとかいつの時代の

セリフだよみたいなのしか出て来ない。>br<

しかもマジで星など比べ物になりませんこの引力、むしろブラックホール。>br<

こんな大接近でスキンシップとか私には無理です越えられない壁ですラスボスにひのきの棒で挑むようなものですこっちがぐるぐるでギャー!>br<

もう訳がわかんない、顔が熱い、暑いじゃなくて熱い。>br<

「ささ、はら、くん?」>br<

「……相庭、さ……」>br<

笹原君がそう言いかけた時、どこかで打ち上げ花火の音が聞こえた。>br<

混乱したまま、ああ今夏なんだっけなと思う。>br<

お互いの目を見ていた視線を、そして同時に空へと上げた。>br<

>br<>br<

12. まずは友達から！

思わずそんな場合でもないだろうに「綺麗だね」と言ってしまう。
> b r <

花火大会とかで見ると全然小さいやつだったから、近くでキャン
プやってる人達が上げたんだろうと思うけど。> b r <

パツとあつという間に散ってしまった花火の二発目が上がって視線
を笹原君に流すと、相変わらずの凜々しい顔が少し照らされていた。
> b r <

ああもう本当に、言葉の引き出してやつがないから困る。> b r <
「笹原君」> b r <

「何だよ……」> b r <

「花火も綺麗だけど君の方がもっとキレイ」> b r <

「言わせねえぞ!？」> b r <

——キレイられた。> b r <

「そういえば、さっき、何言いかけたの?」> b r <

「え、あ……いや、……」> b r <

笹原君が口籠るとかやっぱ珍しい、……やっぱり熱が?> b r <
あれ、でもさっきより随分顔の赤みも引いてるしなあ、何だったん
だろ、悪い病気じゃなきゃいいんだけど。> b r <

もう一度額に手を伸ばそうとトライしかけて、片手がまだ掴まれた
ままだったと気付いた。> b r <

「あ、笹原君、手……」> b r <

「……悪い」> b r <

放された。> b r <

あああああああああああああああはあああなああああえええ
えたあああああああああああああ!!> b r <

言わなきゃよかったあああああああああああああ!!>
b r <

放された手が重力に従ってだらんと垂れる、笹原君のぬくもりが消えて行く……。>br<

こ、これが敗北か……っ！>br<

「何やってんだお前、ノックアウトされたボクサーの真似か」>br<

「だから何言いかけたのって聞いてんだってばよ！」>br<

「どっかで聞いたようなキレ方すんな！」>br<

そりゃこっちのセリフだってばよ！>br<

ああああもうううう、自分からフラグをバッキバキに折った気がしてならない。>br<

何のフラグかよくわかんないけど、それを捨てるなんてとんでもない！って物を捨てた気がする。>br<

あー……ロードデータかりセットどこ？もしくは七つの玉どこ？ギヤルのパンティは欲しくないけど。>br<

きよろきよろ探していると笹原君がゲホンと咳払いしながら私を見下ろした。>br<

どこかでバッチンバッチン爆発みたいな音がする………今度は爆竹ですか、何祭り開催中だよ。>br<

「あー……と、お前さ、米神辺りにちっちゃい傷あるな、と思って」>br<

そんなもんあったかと思って思い出した、まあそんなくらいにちっちゃくてもう薄い傷だ。>br<

さっき顔近付けたのってその傷見てたのか………なんか物凄いがっかり感を覚える。>br<

「ああ、これ、昔ちよつとやんちゃしてた時にね」>br<

「昔？ちよつと？」>br<

「何が言いたいんですか」>br<

思わず拗ねながらも、傷の辺りに手をやりながら苦笑する。>br<

これってあれだ、初恋芽生えて瞬時に散った時に付けた傷。>br<

私が飛び掛って行った子が腕時計しててすったもんだやってる最中にそれで傷が付いたんだよね。>br<
そういえば家に帰ってから気付いたんだけど結構だらっと出血したんだっけ。>br<

いじめっ子に鬼の如く飛び掛って行っただけでなく顔面から血い垂れ流した女じゃそりゃ華々しく初恋も散る訳だよなあ。>br<
ついでにあの頃唯一持ってたお気に入りだった可愛い髪飾りもなくしちゃったし……あれ超可愛かったんだよ、水色のガラスとトンボ玉で出来てて。>br<

はあ、つくづくあの思い出には苦いものしかない。>br<

「今のお前からするに、体中そんな傷ありそうだ」>br<

「何なら確かめてみ——」>br<

「ない」>br<

「最近私達更に息が合って来たね！シンクロ率の上昇で使徒が倒せるよ！」>br<

「何の世界に迷い込んでるんだお前は……」>br<

「恋の樹海に！」>br<

「戻って来れない訳だな」>br<

リアルではそんな事もないらしいけどね、恋の樹海となるとそりゃあもう。>br<

……。>br<

「ていうかさっきから爆竹うるさくね!？」>br<

折角の二人っきりの時間が台無しなんですけどどこのはしゃいだ若者だバッチンバッチン爆竹祭り絶賛開催中過ぎ!>br<

「なんでよりによってキャンプ地で爆竹を選択するんだかな」>br<

「家族連れに迷惑だよねえ。まあまだ十時くらいだけど、お子様は寝てるだろうし」>br<

そういえば魚持って行ってドン引きしてたご家族はもう寝たかな。>br<

こういう時ってちょっと夜更かしも許されたりするもんだけど、こっちも笹原君となら夜更かしも夜明かしもバッチコイだけど、……爆竹超うるせー！>br<

でも笹原君と一緒にならそれも心ときめくBGMに聴こえて来るから不思議だ、なんか先の方に恋の願いを叶えてくれそうな泉の幻影さえ見える……そしてこう言う訳ですね、ラブラブフラァー>br<

「お前って好きになった奴いないのか？」>br<
ツシュ、……はい？>br<

「初対面のヒトの話聞いてたんすかお望みならここで百万回繰り返してやんよ好き好き大好き愛」>br<

「キレんなっつーの！大体そんな事言ってねえだろお前！そうじゃなくて、……俺以外でいなかったのか？」>br<

「それは私の過去も何でも知りたいという男ごこ」>br<

「今はその特定の過去に対してでいい」>br<

「視野は広く持とうよ」>br<

「お前がな！」>br<

えー、いや、狭くもないつもりなんだけどな、どうだろ。>br<
口に出そうとして変な風に唇が歪んだのを感じた、心ときめく初恋話じゃないだけに話し難い。>br<

「いた、よ」>br<

事実だけを言ってみる、一瞬で恋して一瞬で散ったけど、でも確かにあれは私の初恋だった。>br<

そうでなければ流石にここまで引き摺らなかった、思い返せば道場とかであの子のような目で見て来た人は沢山いたから。>br<
子供のくせに、女の子のくせに、――あの子は「バケモノ」。>br<

でもそんなのは気にしなかった、気にしたのは……あの子だけだった。>br<

「なんかもうある意味光の速さでフラレちゃってさあ。ショックで逃げ出して、それで二度と顔も見なくなっちゃって、だからすつこ

い後悔した。決定的にフラレるんだとしても、きっちり自分でやる事やってからあの子自身の言葉でフラれたかったって心底思った」
>br<

今でも思ってる、初めて魂抜かされたよう感覚は多分一生忘れないから。>br<

それと同じ感覚を持つ人に出会えるとは思わなかったけど、でも出会ったんだから今度は絶対に後悔だけはしない。>br<
そう、決めた。>br<

「もう心底好き好き好きーって笹原君が思うカノジョが出来るまで、私後悔のないようにぶつかりたいの。あの時こうしてれば仲良くなっ
て好きになって貰える可能性があったかもとか、ぐずぐず考えた
くない」>br<

大きく吐き出した息を、また大きく吸う。>br<

笹原君は真っ直ぐ私を見てくれている、それが嬉しかった。>br<
「私、笹原君が好きだよ。こうして話せて、遊んだり出来て、今まで知らなかった顔とか性格とか知れて、多分もっと好きになった。だから結果がどうあっても、これから笹原君の事を思い出す時は、笹原君と一緒にこうして遊んで楽しかったなって思い出したい。折角仲良くなれたから、そこに後悔を挟みたくない」>br<

初恋だってそうしたかった、思い出す度に苦い顔なんて本当はしたくない。>br<

でも私はあの時何もしなかった、出された結果にただ怯えて足を止めて――当然それだけで終わった。>br<

何度も何度も繰り返し思い出す、悔しくて情けなくてもどうしようもない。>br<

どんなに痛い言葉でもちゃんとあの子の言葉を聞いて終わらせるべきだった私の初恋は、後悔と言う意味ではまだ終わってないのかもしれない。>br<

今強く思う、笹原君と一緒にいてこんなに楽しい時間をそういう風に思い出したくない。>br<

笹原君の笑った顔も怒った顔も、声も会話も、手のぬくもりも強さも、全部宝物として大事にしたい。>br<

私の惨めったらしい後悔で傷を付けたくない。>br<

「今更だけど、でも笹原君に迷惑をかけたい訳じゃないんだ。あー、迷惑はかかってると思うんだけど。そうじゃなくて、もう相手するのも話すのもしんどいなら、そこはちゃんと距離を置く。努力する。でももし、そうでもないなら――改めて、まずは友達としてよろしくお願いします!」>br<

九十度の礼で勢いよく頭を下げる。>br<

笹原君と仲良くなって以来、ちゃんと言わなきゃと思っていた事だった。>br<

笹原君の優しさを感じる度に私が甘え過ぎているともわかっていたから。>br<

ちよつと勢いに乗じた感もあるし、ぶっちゃけ距離置くつつてもどう努力したもんか途方に暮れるけど。>br<

笹原君は私が思ってたよりずっとずっと素敵な人だった、優しい人だった。>br<

だから、私が本当に嫌ならそう言って欲しい、そう言ってくれたならきつと私はどうにかして努力出来る。>br<

友達でいいかどうか知って判断して貰えるくらいには努力して来たつもりだ、こんなんでもいつそう言われるか覚悟もしてた。>br<
なーんて言いながらももう涙も鼻水も下に垂れそうですけどね!>br<

「……激しく今更だな」>br<

そこはマジスンマセン。>br<

「ホント、だから今更だろそれ。俺がトモダチでもない奴とこんなとこまで来るかって」>br<

恐る恐る顔を上げると、笹原君は眉を上げて笑ってた。>br<

「そ、それじゃ……恋人前提にお友達として付き合っ」>br<

「前提云々はさっき言ってなかったな」>br<

クソ！時よ戻れ！タイムマシンを！今すぐ！私に！>br<

「相庭の事はちゃんとダチだと思ってるよ。正直俺女に偏見持ってたけど、無理な奴は無理だから」>br<

「へんけん？」>br<

「そう。剣道やってるとこ見てたとか、なんか勝手にイメージ作られて、それだけで告って来て挙句勝手に幻滅する生き物」>br<
う、ううん……確かに笹原君の剣道姿は強烈だからなあ、あのストイックな感じのイメージが全体像になるのもわからなくもない。

>br<

普段は近寄り難いから想像だけで笹原君像を補う人もいそうだし。

>br<

まあ笹原君が有刺鉄線張るならそれをチェーンソーでぶっ千切れればいいじゃない。>br<

「最初は面倒だなと思ったけど、見た目とかイメージで好きだとか言ってる訳じゃないとはわかったから。お前みたいな変わってる奴だから、よかったのかもなと思う」>br<

「……な、なんか結構アレな目に遭った？」>br<

「最近漸くなくなったけどな。中学ん時が一番酷かった。真面目で誠実みたいなイメージ作られて、フったら手の平返してサイテー男呼ばわりか公衆の面前で大泣きされてこっちがただの悪者。マジでそんな女ばっかで。だからなんつーか、段々とこっちの言い方もきつくなって」>br<

う、ううう……た、確かに平均的女子にとってあの断り文句はハドル高いんじゃない。>br<

あの時テンションMAXで行った私でも内心フラグどころか心折れかけたもんな。>br<

まあ笹原君が難攻要塞を築くならならそれをガトリング砲でぶっ飛ばせばいいじゃない。>br<

「お前何かさっきから物騒な事考えてないか？」>br<

「遂に私の心が読めるようになったのね笹原君！これで私の愛は疑

いようもな」>br<

「読めるかつ、ってやっぱ物騒な事考えてんじゃねえか!」>br<

「そんな事……ない、です、よ?」>br<

「言葉の逃げ道を探すな」>br<

「笹原君は傷つけないわ、だって私が守るもの! 未来は僕らの手の中!」>br<

「お前自分でも支離滅裂だってわかってて言ってるだろ」>br<

まあそうとも言う。>br<

やれやれ、自分で思った以上に緊張してたみたいだ、口がなんかもゆるんゆるんだよ。>br<

「とにかく、そういう事だ」>br<

「へえ、ボス。……笹原君はさあ、今の好きな人が初恋の人なの?」

>br<

おっと、ゆるんゆるんの口がぺろっとつるっと滑った!>br<

「だろうな」>br<

「んな他人事な」>br<

「正直俺もお前と似たようなもんだよ。……しかも現在進行形だ、我ながらヒデエ」>br<

地べたに胡坐をかいて座り直した笹原君の斜め前に私も座り込む。

>br<

結構蒸し暑いのに土はひんやりしてて気持ちがいい。>br<

緊張やら何やらで火照った肌を冷やすように両手も当ててみた。>

br<

笹原君もそれを見て私と同じように両手を地面に当てている。>br<

やっと静かになった辺りは時々風が木を揺らすだけで他の音はしない、だからか笹原君の声がいつもよりよく聞こえた。>br<

「自分自身に対しても……あいつに対しても、もっと胸張れるようになってからとか言い訳してる間に話も出来なくなった」>br<
「充分胸張れると思うけどな。前も言ったけど、話しかけてみれば

いいのに」>br<

そう言ったら笹原君が何か複雑そうな顔で苦笑する。>br<
何か話しかけられない事情でもあるのかな、その人に好きな人とか
恋人がいるとか?>br<

でも……話しかけるくらいもダメなのかなあ、そりゃ相手に恋人が
いたら告白でもすると却って負担になっちゃうだけだろうけど。>
br<

でもでも口に出して初めて区切り付けられる事もあるし伝えるくら
いは許容して貰えたらいいんだけど……うーん、んんんんーうぬ
ぬぬぬぬー。>br<

「なんでお前がそんな悩むんだよ」>br<

「だって他でもない大好きな笹原君の事なんだよ、そりゃ悩むさ」
>br<

「お前な……その思ってる事すぐ口に出すの止めろ」>br<

むむむと唸りながらその辺の小枝でぐるぐる円を描いていた私が
顔を上げると、低く呟いた笹原君が片手で顔を覆ってた。>br<
指の隙間から口元がむず痒いみたいに不思議な動きをしている。>
br<

「照れた?」>br<

「ウルサイ」>br<

「てか、それこそ今更なんですけど」>br<

「ウルサイ」>br<

「アナタがートウキだからー」>br<

「モノマネのモノマネすんな」>br<

「じゃあどうしろと!」>br<

「どうもすんな!」>br<

んもう、今から亭主関白な宣言とか……いつも綺麗でいます!黙
って貴方について行きます!ただ浮気をした場合覚悟するのはそっ
ちの方がな!>br<

「悪かった」>br<

「はあ？」>br<

「何キレてんだよっ」>br<

「キレてない」>br<

おっと、思わず修羅場の妄想を引き摺ってしまった。>br<
改めて、何が？と尋ねると、笹原君は一瞬躊躇ってから私に向かって軽く頭を下げる。>br<

悪いって………まままままままままままままかさかの
前言撤回………だど………！？>br<

「真面目に謝る。ごめん」>br<

ざわ……ざわ……とざわめく脳内。>br<

「俺の方こそ、お前の事勝手にいつものと同じだと思って見てた」>br<

「え？」>br<

「お前も俺に勝手なイメージ作ってんだろうなって」>br<

「そりゃ妄想でカバーしなきゃなんない部分もあるよ。親しくなっても全部なんてわかんないし」>br<

「少なくとも、わかんない部分を知ろうとしてくれたよ相庭は。キッパリと引き下らない宣言してくれた訳だしな」>br<

「そう言って貰えると……」>br<

な、なんかよっぽど本気で嫌だったんだろうなあ、笹原君てば。

>br<

ていうかどれだけ勝手な印象作られて崇拝された事やら……根は深そうだ。>br<

確か中学の時って大会では行列が出来る人気ぶりだったとか聞いたしなあ、最早アイドル状態だったのかも。>br<

「初恋の子はさあ、そういうのも全然出来なかったんだ。あの子の事を他にもちゃんと知れてたら、もっと好きになったかは疑問なんだけどね」>br<

それを知る術すらもない、こうやってもしもを考えて仮定を話す事が出来るだけ。>br<

「そういうもんかも、な。向こうの名前くらいしか知らないで実際付き合ってたって行けないし」>br<

もっと好きになったかもしれない、一目惚れ以上にはならなかったかもしれない、真相は闇の中。>br<

だからかな、なんか今が凄くラッキーに思える。>br<

ぶつかって行くしか脳のない私でも笹原君は知ろうとしてくれた、その上で友達だって受け止めてくれた。>br<

こういう優しい人だから本能的に好きになったのか、それはわかんないけど。>br<

でもちよっとは一目惚れも捨てたもんじゃないと思う、笹原君の行動を観察……いや見詰め続けた日々も。>br<

少なくとも友達だって認めて貰えたのは、粘り勝ちだ。>br<

「私もごめん。ホント最初は穏便に友達から始める予定だったんだけど、つるつと口が滑って」>br<

「お前は滑り過ぎだろ」>br<

「溢れんばかりのこの愛が口からうっかり飛び出たって言うか」>br<

「お前はうっかりし過ぎだろ」>br<

「じゃあどうしろと!」>br<

「どうもすんな!……あー、いや、もうお前はそのままでもいい。……っ流石に慣れて来た、から」>br<

「……うん」>br<

思わず人形みたいにくくと頷いたら、何か身構えていた様子だった笹原君は眉を上げてまた口元をむず痒そうに動かした。>br
そしたらなんでか今度は私にもそれが伝染したみたいに口がむずむずして来る。>br<

ああもう口どころじゃない、頬とか体中がむず痒い。>br<

「私も、笹原君はそのままでもいい、と思う。笹原君が好きになった人だもん、大丈夫だよ、きつと」>br<

根拠がないかもしれないけど、好きになった私の願望かもしれない

いけど、でもやっぱりそう思う。> b r <

だって笹原君が見たまま全部を好きになったとか言っちゃったくらいの人だから多分誠実に答えてくれる。> b r <

私みたいなのですらいちいち相手しちゃえるんだ、笹原君だってそれなりに粘れば何とか……。> b r <

……………ん？> b r <

「だからなんでお前は俺の恋愛相談みたいなのになってる訳だよ」> b r <

「いやー……なんででしょうねえ、今自分でツッコむとこだった。

ああほら、私がこんなだから。笹原君にも後悔して欲しくないんだ。何せアナタがートゥ」> b r <

「それはもういい」> b r <

二度同じボケは許さない、と。> b r <

「そう言っても……どうしたもんかな」> b r <

笹原君のぼんやりした呟きに合わせて、どうしたもんかねえと呟いてみる。> b r <

全くホントに、どうしたもんかねえ、だ。> b r <

でも私みたいに相手がどこいるかもわかんないとかじゃないなら、尚更話しかけてチャンスを作るべきだよ。> b r <

あれ、そういえば近くに住んでる人なんだっけ？> b r <

聞いてみようかどうかどうしようか悩んだ直後、私はすっと立ち上がる。> b r <

同時に笹原君も立ち上がって、お互いに視線を交わして頷いた。> b r <

> b r <> b r <

13. 恋はややこしい

リーチの差はあれど、即座に真っ直ぐ地面と垂直に伸ばされたお互いの足は目的のブツに当たる事はなかった。>br<

二つの足をギリギリのところまで体をくの字に折ってかわした本人はそのまま後退ってNO! NO! とか言ってる。>br<

うむ、実に惜しい、色々と。>br<

「ボウリョクハantai、ダメゼッタイ!」>br<

「上手い具合に避けたじゃねえか、覗き魔」>br<

「その身体能力を他に活かしたらどうかね、覗き魔」>br<

「ボクは悪いノゾキマじゃないヨ!」>br<

覗き魔の単語まで習得してるとは侮り難し、大体覗き魔にイイもワルイもない。>br<

ていうか本気で日本の何を学習してるんだコイツは。>br<

「なんか用?」>br<

「テキトー過ぎない!?!...ダッテ、ユーとサハラが二人つきり、ヨクナイ」>br<

笹原君は砂漠か。>br<

「ボクもユーと話したい」>br<

「じゃあ、いっしょー」>br<

「二人で。サハラはいらない」>br<

チッ、被せて来やがった。>br<

ちらりと横目で笹原君を確認すると、やっぱりこう怒ってる感じでテッドを見てる。>br<

うーん、どうすべきかなあ……。>br<

こいつを一緒に交ぜたところで笹原君がテッドを嫌ってるのはすでに事実だしぶっちゃけ私もコレは邪魔だ、でもテッドとは一度話をつけなきゃならないと思う。>br<

「よしわかった、話をつけよう。タイマン上等」>br<

「おい、相庭」>br<

「アリガト、ユー！」>br<

咎めるように言った笹原君に再度テッドが被せて来てしばし二人の睨み合い。>br<

一体何を考えている事やら……女にはわからない世界ってやつだろうか。>br<

「じゃあ、ホレ、ちょっと場所移動しよ」>br<

「ここでいいだろ、俺がテントに戻る」>br<

「エー、ボクはユーとサンプオしたいよ」>br<

また睨み合い、ああもう話が進まん。>br<

「共同の水場の方行こ、あそこなら近いし、座れるところもあるし」>br<

「相庭」>br<

「大丈夫だって。何かあったら悲鳴を上げるのは私じゃなくてコイツだから。テッド君、オーケー？」>br<

「……オー、ケー……」>br<

油差してないブリキみたいな表情でギチギチ笑ったテッドに笹原君が溜息をつく、いやこれは私に向かってだろうか。>br<

笹原君で結構心配性なんだなあ、やっぱり実は面倒見がいいし女子にも優しい性格してるのかもしれない。>br<

だからかな、逆にキツイ事言っちゃうのって。>br<

なかなか男心も複雑で難解だ、だからって女心も理解してるとは言い難いけどさ。>br<

「三十分以内にしておけよ。……もう遅いし」>br<

まだ納得いってないような笹原君に頷いて見せてから、さっさと済ませるべく私はテッドの首根っこ引っ掴んで水場の方に歩く。>br<

程なくして辿り着いたそこは小さいけど蛍光灯もあったし、食事出来るようなスペースもあって結構整っていた。>br<
そこにお互いテーブルを挟んで丸太を半分に切った椅子に腰を下ろ

す。>br<

小さな蛍光灯の下、それでもテッドの金髪は輝いているみたいに見えて、ちょっとだけいいなあと思った。>br<

ちよつとだけなんだから別に好きとかじゃないし勘違いしないでよねっ！>br<

「ほんじゃ、そろそろ腹割って話しつけようや」>br<

「ユー、ケッターするみたいだ」>br<

何が嬉しいのかにこにことそう言って私を眺めるテッドに溜息が零れてしまう。>br<

「あんた、もうその話し方止めれば？逆にしんどくない？」>br<
私の言葉にその微笑みはピタリと止み、今度は声を上げて笑われる。>br<

なんだこいつは、思春期による情緒不安定か、それとも分裂症か。

>br<

雑誌の表紙でも飾っていそうなスマイルから一転、大口を開けて笑うその様に漸くこの男の本当の顔を見た気がする。>br<

まさか硝子の仮面でも被っていたとか言うオチじゃないなあ。>br<

ハハ、まさか……………お、恐ろしい子……………っ！>br<

「バレてたのか、つまんないなあ。でも結構気に入ってたんだけど、カタコト。面白くなかった？」>br<

とたん日本人もビックリの流暢さだ、見た目すっかり外人だけどハーフとかクォーターってオチかも。>br<

その考えを察したのか、テッドは笑いながら首を振る。>br<

「日本語はちゃんと勉強して覚えてんだ。単語的な知識はこっちに來て天地にも色々と教わったしね」>br<

覗き魔な単語をいつどこでどうやって教えたのか、帰宅後はアレに詳しく聞かねばなるまい。>br<

「なんでわかった？」>br<

「なんとなく」>br<

「そういうの野生の勘って言うんだよね？」> b r <

「喧嘩売ってんのかオマエ」> b r <

「NONO」> b r <

とたん両手広げて肩とか竦めちゃってるよ、ある意味似非外人め。

> b r <

「スルメ食べる？」> b r <

ポケットに忍ばせていたスルメを取り出して噛みながら言うと、
テッドの頷いて差し出されたスルメを噛み始める。> b r <

しかし我ながらなんて緊張感のない図だよ。> b r <

飯にも自分を好きだと言ってる奴から腹割って話しつけようとして
るってのに、お互いスルメくちゃくちゃやりながらって一体どうな
ってんだ。> b r <

いや、ちよつと小腹が空いただけなのよ、腹が減っては戦が出来ぬ
って言うしね。> b r <

「でさあ、本題らしきものに入るけど、あんた一体何なのさ」> b
r <

「んん、くちゃ……ボクは、くちゃくちゃ、悠が、もぐもぐ……ホ
ントに、くつちゃくつちゃ、す……」> b r <

「くちゃくちゃしながら話すな！何言ってるかわからん！食うか話
すかどっちかにしなさい！」> b r <

「……くちゃくちゃ」> b r <

「食うんかい！」> b r <

近所のおばあちゃんの実家で作ってるって言うこのスルメ美味し
いけどね！？> b r <

オイ、そこ、やる気大事に！> b r <

「んー、日本のジャンクフード凄く美味しい。顎痛くなるけど」>
b r <

そらよかったな。> b r <

「で、何だっけ？」> b r <

「巴投げされたいのかね君は」> b r <

スルメを噛んでにつこり笑って言ったテッドに苦笑した。> b r <
「それが出来りゃ苦労しないっつーの」> b r <

人を好きになるっていい子でいるばかりじゃ何事も待つしかない。> b r <

本当にいい子になれたならそもそも告白しないし、笹原君に彼女が出来ちゃっても嫉妬もしないしおめでとうとか心から言えちゃうんだろう。> b r <

——うん、今考えて軽く鳥肌立ったよ、私そういうの向いてない。

> b r <

顔で笑って心で泣くとか無理です、私女優じゃありませんから。> b r <

しんどいなあと思う、多分好きな方も好きになられる方も。> b r <

感情ってエネルギーは結構大きくて、そのぶつけ合いはかなり色々消耗する。> b r <

でもどこからか話す度に顔を見る度にまた向かって行きたくなるエネルギーが生まれて来てしまう。> b r <

止められない、だからせめて笹原君が迷惑だって言う前には気付いてストップしたいと思うけど。> b r <

でもどこまでも走っていったらと願ってしまう。> b r <

笹原君が受け止めてくれたらと、そう願ってしまうんだ。> b r <
多分きつと笹原君だって好きな人に対してそう思ってる、恋をしている皆がきつとそう思ってる。> b r <

「ボクの事邪魔？」> b r <

「イエス、邪魔」> b r <

「はつきり言うなあ。ボクこれでも落ちない女なんていなかったんだけど」> b r <

「初体験おめ」> b r <

「ワォ」> b r <

まあそうだろうなあ、このダークサイドな性格はともかく顔はい

いしスタイルもいいし愛想もいいし、そりゃモテるだろう。>br<
いっそなんで私なのが相庭悠の七不思議（大抵三つぐらいまでしかない）の一つに今入りました。>br<

「でもいいよ、アンタが本気で私の事好きだって言うなら、こっちも全力で受けて立つ」>br<

「だから、決闘するんじゃないんだけど」>br<

「恋愛も精神的格闘技、土俵とルールは守って正々堂々戦いましょう。自信があるなら、あんたの事好きにさせてみなよ」>br<

「……凄い挑発」>br<

その言葉に思わず噴き出して笑った、挑発なんて言われるとふぐぢちゃんを想像してしまったじゃないか。>br<

ああ、いっそあんなハンターになりたい、ハンターになれる試験はどこでやってますか。>br<

「律儀なんだかよくわかんないねえ、悠は。カノジョがいても奪っちゃおうとか思わないの」>br<

「個人的に自分がされてそれは嫌だからしない。そういう事が出来る人から見れば諦めてるとか本気で好きじゃないとかって事になるのかね」>br<

「そうかもね。ボクは悠にカレシがいても別に止めようとか思わないしなあ」>br<

「そうかあ。一人ずつに一人相手が決まっていれば楽だけどね。なかなかそうはいかないし、決まっていなくて悩むし楽しい事もあるよね」>br<

スルメを噛みながら頷いたテッドはにっと笑った。>br<

「日本に来てよかったな。悠の事、本気で好きになった」>br<
「自分で言うのもアレだけど、エライ趣味してるね君も」>br<

そんな事ないよとテッドは笑って頬杖をつく。>br<

「ボクさっきも言ったけど、好きにならせようとしてならなかった奴っていないんだ。興味なさそうな子でも、何度か声をかけてアピール？してれば好きになって貰えてた。最初からキスしたって怒ん

ないし、責められた事だってない、よくわかんないけど上手いのかもボク。まあ後から浮気すんなって責められた事はあるけどね」>br<

ワオ。>br<

「抱き付いただけで投げ飛ばされた事だって一度もないよ、悠の他は」>br<

まあ、そりゃあそうだろ……自分で言うのもアレだけど。>br<
テッドは大きくはあと息をついて、脇の水道の蛇口を捻るとそのままそこへ顔を突っ込んで水を飲む。>br<
私も飲もうかな、スルメは喉が渴くわ。>br<

「好きな奴がいるとか言っても優しくしたりちよっと構うと皆すぐ心変わりする、相手の男が靡いてない場合は特に。それなのにボクが他の子を好きになったって言うとな怒るんだよね。大体ちよっと他の子に声かけて仲良く喋ってただけで浮気だ何だって泣いたりするし。そのくせ自分達は他の男と喋っても何でもありませんみたいな顔して、こっちがただの悪者」>br<

そこは笑うとこなのかね、ジョークか、アメリカンジョークなのか。>br<

おかしいな、夏だっていうのになんか寒くなって来たんですけど。

>br<

く、空調っ、空調のリモートコントローラーはどこっ。>br<

今は寝ちゃダメだ、寝たら死ぬぞ相庭悠！>br<

「全部つまんなかったんだ。勉強だってそこそこやればトップだし、運動もちよっとトレーニングすれば記録出せたし」>br<

い、いるよなあ、そういう奴……。>br<

その上どれだけ食べても太らないとか言った拳句にはもれなく頼子に殴られるよ、超笑顔で。>br<

不意について拳切り出して来るから結構痛いんだアレ。>br<
「オヤジに言われて空手習い始めて、それもすぐそんなんでも皆弱くて飽きちゃって。辞めようかなと思ってたところに、天地と会った。

相手してやるーとか言われてこっちが了承もしない内に、マジでボコボコにされた」>br<

「あいつ手加減とか知らんから……」>br<

そこが欠点なんだよなあ、心技体の技がイスカンダロの彼方まで吹っ飛んで消失してるって言うか。>br<

テッドはそこで楽しそうに声を上げて笑った。>br<

なんとなくその気持ちはわかる、強い奴に会うとオラワクワクして来たぞって感じだ。>br<

出来る事が当たり前になるとなんか楽しさが見出し辛くなるのって何なんだろう。>br<

どんどん強い奴が投入される格闘漫画じゃないんだから、現実はなかなかそんな楽しい事がすぐ転がって来ない。>br<

だから覚えたての頃の楽しさを味わえるかと思うとワクワクする。

>br<

私も、昔は楽しかった、な。>br<

そうだ、いつの間にかつまなくなった、だから次々新しいものに挑戦して行った。>br<

「そしたらさ、天地が言うんだ。俺の娘はもっと強いって。俺にのされてるようじゃ全然まだまだだって」>br<

「OH……」>br<

「それで色々聞いた、どんな子なんだって。ケータイの写真見せて貰った時もビックリしたなあ、正直ゴリラみたいな子だと思ってたから」>br<

「よし、その挑戦状受け取った、表出ろ」>br<

「いやここ表だから。悠、可愛かった。中学生頃の写真だったかな。明らかに盗撮だったけど。しかも送ってって言ったら即行で断られたけど」>br<

また親父様の罪状が増えた訳ですね、家に帰るまで久しぶりにウームアップでもしておくかうフフ。>br<

いつだったかケータイ眺めてニヤニヤしてたかと思えばそれか。>

b r<

肖像権の侵害を最小限に食い止めたのはグッジョブ、だが許さない。
> b r<

「嘘だろと思ってたんだよね、実は。写真の悠はちっちゃかったし
華奢だったし、天地の親ばか？の所為だろうって」> b r<

あれ、もしかして立たなかったはずのフラグをわざわざ立てたの
は私か！？> b r<

OH……。> b r<

「でも俺が受身も取れないで投げ飛ばされたのなんか初めてだった」
> b r<

「あんた投げ飛ばせる女ならこの世にゴロゴロいるって」> b r<
「ボクこれでも相手の外見の好みも煩いんだ。今までそれなりにレ
ベル高い子と付き合った所為かもしれないけど」> b r<

「誰かが聞いたら爆発しろとでも言われそうなセリフですね」> b
r<

「強さも外見もときて、料理も出来るし、それに優しい」> b r<
「優しくした覚えはない。捏造禁止」> b r<

「優しいよ、少なくともボクはそう思ったからそれでいい。フツー
幾ら生活費入れてるからって年がら年中好きに出歩いてる父親にさ、
愚痴も言わず当たり前料理作ってビール出してって、なかなか出
来ないでしょ。それになんだかんだ言ってボクもちゃんと客として
扱ってくれるし。居候なんだから何でも言い付けたらいいのにさ」

> b r<

「物は言い様ですな」> b r<

「感じたままを正直に話してるだけ」> b r<

そうかい、まあ好きな人のあれこれが良く見えちゃうのはわかる
気がするけどね。> b r<

でも私はともかく笹原君は実際優しい人なんだよ、そこが大きな差
だな。> b r<

「だからボク家でも今までじゃあり得ないくらい頑張ったのに、悠

は笹原笹原って」>br<

そ、そんなに家で連呼してた憶えはないぞ！……多分ね！脳内以外ではね！>br<

「んで、ムカついた。笹原の事気にしてる悠にも、笹原にも。こんなムカついたの生まれて初めてってくらい」>br<

「初体験おめ」>br<

「ワーオ。でもちょっとほっとした、悠に許可貰ったし、ボクあいつなんか敵じゃないと思ってるから。えーと、何だっけ？ああ、ニト追う者はイットも得ず？」>br<

「笹原君は私を追っかけてる訳じゃないけどねえ」>br<

オイ、今自分で言って落ち込んだ、自虐ダメゼッタイ。>br
テッドはもう一度水道に顔を突っ込んで水と飲むと、私を振り返ってまたにやりと笑う。>br<

薄暗い中私に長い指が伸びて来る、少しずつ近付いて私の頬を通り過ぎたかと思うと後頭部が後ろからテッドの方に向かって何かに押された……いや引き寄せられた？>br<

「――いつてー……！」>br<

お前そこは「アーウチ！」とか言うところだろ、日本人の偏見としてのアメリカ人ならっ。>br<

「そういうところがムカつくんだよなあ。何、ジェントルマン気取りなの、笹原？」>br<

テッドの腹に収めた拳を引っ込めながら、その言葉に振り向くとすぐ後ろに同じように拳を引っ込めようとしてる笹原君がいた。>br<

気配を断って近付くとは……笹原君、出来る！>br
ん？ああ、三十分経ったのか、迎えに来てくれるなんて超優しいなあ。>br<

「お前に言われる筋合いねえけど」>br<

テッドの流暢な言葉に笹原君は僅かに片眉を動かしたけど追及はしなかった、こりゃ明石君にもバレてそうだ。>br<

「笹原は好きな子いるんだって？浮気はダメだよ？」> b r <
どの口が言うか。> b r <

「んな事誰に聞いた」> b r <
あ、そういえばなんで笹原君に好きな子がいるって知ってた？> b r <

テッドは私達の疑問も物ともせず自分の腹を撫でてからにこりと微笑んだ。> b r <
これが天使っぽい悪魔の笑顔ってやつか、なんて恐ろしい子！> b r <

「鈴木」> b r <
えええ……まさかの鈴木……、ていうか知ってたのか、なんで知ってた。> b r <

笹原君を見ると訝しげにしているから、笹原君が鈴木君に喋ったんじゃないんだろうけど。> b r <

「前に笹原があちこちうろろして溜息ついてばかりいたから、好きな子でもいるんだろうと思ってたって」> b r <

なんだその明後日の方向に投げたら偶然的ど真ん中に当たりました感、流石過ぎるぞ鈴木君。> b r <

「後はボク自身が見てそう思った。笹原、迷っちゃってるよね？」> b r <

茶化すようなテッドの言葉に恐ろしいほど笹原君の視線が鋭くなる。> b r <

この視線を受けて身じろぎもしないテッドもなかなか出来るけど、迷うって何の事？また女子はすっこんでろ的な世界？> b r <

どうすんべと一人オタオタしてたら突然腕が強く引かれて気付いた時には自分の足が歩き出していた。> b r <

「さ、笹原君？」> b r <
返事がない、ただの——いやそんな事を言ってる場合じゃない。> b r <

何だかよくわからんけど、テッドの奴絶対何か挑発した。> b r <

かなり怒ってるのか、私の腕を掴む手は強いし歩き出す足は速いし……やっぱ怒ってる。> b r<

「笹原君、待った待った!」> b r<

「お前さ、あいつに——……いや、いい、何でもない。もう寝ろよ」> b r<

私用のテントの前まで引っ張って来た笹原君は中に放り込むようにして漸く手を放す。> b r<

慌ててテントから顔を出すと、笹原君が男子用のテントに入り込むところだった。> b r<

くっ、私が入れない領域に卑怯なり! って何が卑怯なんだかもわからないけども。> b r<

仕方なくテントのど真ん中に座って胡坐などをかいてみる。> b r<

さっきテッドが言ってた「迷ってる」に反応したように思うんだけど、……何に?> b r<

話の前後からすると笹原君の好きな人に対して迷ってるって事? だよな?> b r<

でも笹原君はあんなに好きな人の事が好きなのに、ってややこしいな。> b r<

あーホントややこしいなあ、そりゃ恋すると溜息ばかり出る訳だよ。> b r<

でもまた明日も笹原君の顔を見て嬉しくなっちゃったりするんだ、そんで好きだなーとか思っちゃったりするんだ。> b r<

私の願いが叶えばいいと思う、でも笹原君の願いも叶えばいいと思う、どうせなら皆の片思いが叶っちゃえばいいと思う。> b r<

ややこしいなあ。> b r<

> b r<> b r<

「今背中に不穏な気配を感じた」>br<
流石、出来る……!>br<

「いやちよっと笹原君の背中に萌えてただけだよ。さ、もう一度」>br<

「キリキリ歩け」>br<

自分のバッグを持ってさくさく行ってしまう背中も好きだが、今はつれないお方。>br<

この宙に浮いた両手をどうしてくれよう。>br<

「じゃあボクがダッコしてあげる」>br<

「だが断る」>br<

まあサマーなコントはこの辺にして、本気で真剣にマジで心底嫌だけど帰らなければ。>br<

あああああの方にコイツと帰るとかまさに天国から地獄。>br<

「サーハラは別、ボクはユーと家にカエル」>br<

ニヤニヤしやがってコノヤロウ。>br<

「あ、言い忘れてたけど親父様今日から二三日いないんだった」>br<

「マジで!?!」>br<

「嘘だバカ」>br<

「……ユー、ヒステリック、イクナイ」>br<

ある意味ネイティブアメリカンみたいに喋るな。>br<

イライラしながら顔を上げるといつの間にか振り返っていた笹原君がぱつとまた前を向いて行ってしまう。>br<

ああん、悔しいけれどお前に夢中………キャランドウ。>br<

すっかりなんだ、まるでドラマで「一週間後」みたいなテロップ出て来る勢いで時間が流れているとしか思えない。>br<

笹原君と二人きりになろうとしてはテッドに邪魔されテッドに割り込まれテッドに……。>br<

……。>br<

「あ、違う、親父様一週間いないんだった」>br<

「マジで!？」>br<

「嘘だバカ」>br<

「……ユー、怒るの、ハダに、イクナイ」>br<

「相庭、笹原の足もいちいち止まるから止めてやれ」>br<

明石君の言葉に前を見ると笹原君はさくさく歩いている、が、距離は開いてない。>br<

行かないでくれおまいさん!とか言ったらぐんと距離が開きそうなので止めておこう。>br<

あーあもう、あれから全然二人きりとかになれないんだもんなあ。
>br<

まあ楽しかったんですけど、思い出もちゃっかり作れちゃったんですけど。>br<

笹原君との心のメモリアルアルバムはまた一冊追加だ。>br<

いつかこれを二人で開きながら「正直に言えば今でも時々不安になる、今お前は幸せなのかって。だから何でも言えよ、傍にいるから……」とか言われちゃう訳ですね!ギャー言われてえなオイ!>br<

「オイ、今また背中に不穏且つおぞましい気配を感じたぞ!」>br<

「誤解です」>br<

「真っ直ぐに目を逸らしながら言う事かそれが」>br<

んもう、振り返ってもつれない事ばかり言うお方だ。>br<
妄想くらい好きにさせてくれって、別に強面なのにロマンチックに花育てたりする兄さんみたいな事言ってくれとは言わんから。>br<

「そうだ、帰りさあ、兄貴と親戚んち行かなきゃなんないから、送るの鈴木んちまでになる」>br<

ほう、してその明石君の言葉を要約致しますと、笹原君ちまでは歩いて行かなきゃならないイコールその間トークタイムが可能と。
>br<

「でかした明石君！とその親戚の人！」>b r<

「でかしてねえよ！明石、マジか？」>b r<

「マジ。キャンプ用品は兄貴のだから別にあの距離歩くくらいいいだろ」>b r<

「でかした明石君！褒美としてこのスルメをやろう」>b r<

「お、サンキュ。これハマったわ」>b r<

うむ、今度は明石君の分を注文しておこう。>b r<

「いやいやいや、相庭だって荷物持ってあの距離歩くの……」>b r<

持っていたバッグを楽々上下にしてみせる。>b r<

女子のバッグは五次元ポケットにも匹敵しながらにしてこの数キロの重さを感じさせないコンパクトさがポ・イ・ン・ト。>b r<

「平気そうだな。そうだな、お前はそういう奴だった」>b r<

「わかってくれて嬉しいわ！さあ行こう、トークタイムへ！」>b r<

「訳のわからん目的地に変更するな！」>b r<

帰りのトークタイムと言えば千の手を持つ観音様も驚きのハイパースキップタイムと相場は決まっているのです。>b r<

ふっ、遂に私のこのブラックホワイต์なタッチテクニックを見せる時が来たか……。>b r<

「ユー、ボクもいるから」>b r<

「よう、空気」>b r<

「なくしたらダメなもの！」>b r<

「じゃあ、小石」>b r<

「ユー、目先のものしか見ないのはヨクナイよ」>b r<

「その前にポケットでチカチカしてるケータイ見れば？」>b r<

テッドがポケットから引き抜いたそれを開いて見ると、徐々に顔が険しくなっていく。>b r<

そして短く悪態をつく、がっとな私の方に両手を伸ばして来たので、がっとなカウンタパンチを腹に食らわしました。>b r<

「うう……ボク、行かなきゃならない」> b r <

「バーロウ、あの世に行くにはまだ若過ぎるぞ!」> b r <

鈴木君は本当にいつもマジなのかシャレなのかジャッジしかねる。

> b r <

「クソッ、なんだって今日なんだよ!悠、笹原に襲われそうになったらトモエ投げでボコボコにして。悠の初めてはボクって決めてるから」> b r <

勝手に決めんな。> b r <

「とにかく!すぐ戻るから!家に帰ったら三つ指ついてお帰りなさいあなたって出迎え——ぐはっ」> b r <

「よくわからんがさっさと行け!」> b r <

「うう……本当にすぐ戻るから!」> b r <

私の拳がめり込んだ腹を抱えながらテッドは笹原君を一睨みしてダッシュでキャンプ地を抜けて行く。> b r <

遠くに見えている公道に停まっていた車に乗り込んだところを見ると誰かの迎えが来たらしい。> b r <

誰だか知らんけど、ありがとうございます本当にありがとうございます。> b r <

さあ、これでレッツハイパースキンシップタイム!> b r <

「あいつって……三つ指って言葉も知ってんだなあ」> b r <

突っ込むとそこかよ鈴木君。> b r <

「かなり流暢な日本語喋ってたけど、元々喋れた?」> b r <

「本人曰く、勉強の賜物らしい」> b r <

「愛されてんなあ、相庭」> b r <

ビミョー、わかってて言ってんな明石君は。> b r <

「よかったなあ笹原。また数十分は二人きりだぞ」と言った明石君は笹原君に殴られた。> b r <

実に痛そうだ。> b r <

> b r <> b r <> b r <> b r <> b r <> b r <

「それじゃあ悠ちゃん、また十年後くらいに会おうね」> b r <

ぎゅっと手を握り人懐こそうなアイドルの如き笑顔で去って行く
明石君兄を見送り（その間弟は何かを諦めた顔をしていた）、家に入
って行く鈴木君を見送り、やって来ましたハイパー以下略。>b
r<

「その無駄に突き刺さるオーラをどうにかしろ」>b r<

「今やる気ゲージ満タンなので」>b r<

「何をやる気だ」>b r<

「具体的に言っても？」>b r<

「ああいい、言うな」>b r<

そうね、軽く半日はかかるしね、そんな事しててこのスペシャル
タイムを削るのは実に惜しい。>b r<

「まあ色々あったけど、楽しかったねえ」>b r<

「まあ、な」>b r<

「笹原君があんな釣り上手とか知らなかったよ」>b r<

「いやあれは勢いつーか……」>b r<

何の勢いで釣りが上手くなるのかそこんとこ詳しく……聞きたい
がやっぱり止めておこうかしら。>b r<

「あのさ、お前の……あー」>b r<

私の、あー？>b r<

何事か聞き返そうとする前に笹原君が自分のバッグを担ぎ直したか
と思うと私の肩に下げていたバッグも引っ手繰る。>b r<

「え、いいよ持ってくれなくて！」>b r<

「落ち着かないんだよ。つーか重！何入ってんだよこれっ」>b r<

「それは乙女のヒ・ミ・ツ」>b r<

「聞いた俺が心底バカだったと思う回答だな」>b r<

答えたら答えたで色々困るだろうに、中にブラジャーもショーツ
も入ってんだから。>b r<

何色かとかどんな形とか言っちゃったら絶対照れるんだよこの人は、
うん、想像して萌えるやら燃えるやら。>b r<

「お前の、親父、マジで家にいるんだろうな？」>b r<

「今自称自宅警備員だからね。嫌と言うほどいるよ」> b r <
リアルに。> b r <

「ならいいけど」> b r <

「大丈夫だよ、あれでどこから稼いで来てはいるから」> b r <

「いやそうじゃなくて」> b r <

「うん？」> b r <

「……や、いい」> b r <

え、そういう話じゃなかった？> b r <

大きく息を吐いた笹原君の隣を歩いていると、幾分か歩調を緩めてくれているのがわかる。> b r <

それが感動系の映画でも見ちゃった後みたいに胸がじわあっと来て堪らない。> b r <

しかし言うのは容易いけど、実際歩きながらどうスキップするんだって話ですよね。> b r <

ちよっと腕でも突付いてみようかと思ったけど笹原君が持ってくれた私のバッグで埋まってるし……ってこれが目的か！？> b r <

な、なんというエグイ程のテクニク！流石私が惚れた男！> b r <

「やっぱ重くない？自分で持つから、大丈夫だよ」> b r <

「いいんだって、気になるし」> b r <

「なんでそんな優しいのかね君は」> b r <

笹原君の半分以上は優しさで出来てるだろこれ。> b r <

「別に優しくはないだろ。お前、俺の嫌なことかない訳？」> b r <

「愛しいけれど憎いお方的な意味で？」> b r <

「その意味じゃなく」> b r <

急に難しい事言われ始めたんですけど、何この急なクイズタイム。> b r <

帰りの時間には魔物が住んでやがる。> b r <

「えー、どうかな。今のところ特にないけど。笹原君を見ると私もっと真面目に生きなきゃなあとか親父様に逆エビ固め決めなきゃ

なあとか思うよ」>br<

「前半も特に後半もわかんねえよ」>br<

「いやいや、本当によく出来た子だなあとします。笹原君みたいに落し物拾って書いてあった住所にわざわざ届けに行くなんて事なかなか出来ないよ?」>br<

「つどこで見てたお前!つか、ストーカーか!」>br<

「各種ポイントに居合わせただけですー」>br<

駅で拾ったところと、スーパーからの帰り道に見たんですー。>br<

まあ恐ろしいほどの確立だったな、私は単に駅からスーパー経由で家に帰っただけだけど、逆に考えれば要所要所で笹原君を見かけちゃうんだもん。>br<

笹原君のそういうところばかり見ちゃうとも言えるだろうけど、でもそれって笹原君を見るとそういうところばかりって言える気もする。>br<

自分でも言ってるけど、自分で気になっちゃって放っておけないんだろうな。>br<

ああ、スキシップもされてないのにこっちのラブ度が上がりまくっております。>br<

まだまだ上へ参ります。>br<

「正直、楽しめるのかどうかと思ってたんだ」>br<

そう話し始めた笹原君を見上げると、少し目を細めて先を見る。

>br<

「俺キャンプとかやった事なかったし」>br<

「え、小さい頃とかしない?学校行事とか、小学の時なかった?」

>br<

「俺んとこじゃなかった。あっても園児の時。しかも熱出して行けなかった」>br<

わあ、本当に体弱い子だったんだ。>br<

「お前が言い出してきてよかった。なんか、まあ色々あったけど、

楽しかったし。……ありがとな」>br<

「笹原君がそう思ってくれたならそれでいいんだよ！じゃあ次は海！？」>br<

「俺部活」>br<

部活コンチクショウ。>br<

「でもまあ、また遊びに行こうぜ、あいつらと」>br<

「わかってて言ってるね？」>br<

悔しいけど、悔しいんだけど、声上げて笑ってる笹原君見ると、それもいいかと思ってしまうよ。>br<

笹原君が笑っていると、やっぱりどうしても私も嬉しくなる。>br<もっともっと笹原君に楽しい事が増えればいいと思う。>br<でも部活かあ……渡る恋路は敵ばかり。>br<

「あ、そうだ、じゃあ今度——」>br<

言いかけた私の言葉が止まった、笹原君の足が止まったから私の足も止まった。>br<

再び横を見ると笹原君は一点の先を見てる。>br<

それを追いかけて……私の視界は一人佇んでこちらを見ている女の子の姿を捉えた。>br<

「友達？」>br<

そう聞いても笹原君は答えない。>br<

あれ、なんだろう、さっきまでの天国状態は一気に降下した。>br<

女の子が一步一步こちらに近付いて来る、真っ直ぐ、笹原君のところに。>br<

「笹原君、だよな？私の事、憶えてるかな？」>br<

歩み寄って来た同じ歳くらいの女の子は笹原君の斜め前に立って、私の視界からは笹原君の陰に隠れてしまった。>br<

カチンて何かの音がする、……ガラス？>br<

「お前……」>br<

「あ、やっぱりこれ憶えてくれてたんだ？私、前とはだいぶ変わったと思うから、わからなかったらどうしようかと思ってたんだ」>

b r<

笹原君の戸惑ったような声と、女の子の控えめな笑い声。> b r<
——ねえ、誰？> b r<

そう聞きたいのに、なんでか私は突っ立ったままだ。> b r<
「私、笹原君に会いたくて、探してたの。今、ちょっとだけでいいから話せない？」> b r<

どれくらいの沈黙だったのかわからない、けれどどれくらいかして笹原君は私を振り返った。> b r<

手に持っていた私のバッグを肩から下ろし差し出して。> b r<

「悪い、相庭。俺——」> b r<

「あ、うん。わかった、一人で帰るよ。えっと、荷物持ってくれてありがとう」> b r<

うん、きつと会うのが久しぶりな子なんだろう、憶えてるかなんて言ってたし。> b r<

旧友に会ったのに私がお邪魔無視してる訳にはいかないよね、……うん。> b r<

「悪い」> b r<

悪い事なんて何もないのに笹原君はそう繰り返して、ちょっとこっちを見て頭を下げた女の子と連れ立って横の道に歩いて行く。> b r<

私は真っ直ぐ家への道を歩いた。> b r<

何か考えなきゃいけないはずなんだけど、なんでか、頭に何も浮かばない。> b r<

なんでだ？> b r<

なんで、こんな嫌な感じに胸がドキドキしてるんだろ。> b r<
> b r<> b r<

15. 女の友情も大事に！

一つ特大の溜息を吐き出した後、ゴンと音がするくらいのチョップを額にお見舞いされた。>br<

「で、さあ。どういう事な訳？」>br<

アキちゃんが親指で指した窓の向こうには、校庭を真っ直ぐ歩いて行く笹原君——と、校門に佇んでいる、あの女の子。>br< 無駄に視力がいいのが仇になってる、くつきりはつきりばっちり見えますよ。>br<

私の視力はどうの昔からデジタル化してますからね。>br<

「どういう事かと聞かれても、答えられない世知辛さ」>br<

「あのねえ、夏休みに浮かれポンチなメール送って来たと思えば、新学期になってこのザマたあどういいう見だっつってんだよ、ああ？」>br<

「すみません姐さん。この相庭悠にも実のところ何がなにやらさっぱりっす」>br<

キャンプ帰りのあれ以来、笹原君への誘いの返答はすべてNO。

>br<

待ちに待ちまくった新学期、笹原君は部活がない日はあの子とああして一緒に帰ってる。>br<

鈴木君も明石君も話は聞かせてもらってないらしくて、私を見る度になんか申し訳なさそうな顔をするのがまた申し訳ない。>br<

「皆はカノジョじゃないかって言ってるけど。今更笹原君に直接確かめる勇者もいないみたい。ねえ悠、笹原君に聞いてみたら？」>br<

「頼子さん、それが実はなんでか取り付く島もなく」>br<

この数日間聞こう聞こうとは試みたものの、笹原君自身が話したがついていないのが丸わかりで正直それ以上踏み込めない。>br< と言うより力技で話を全力で逸らされ捻じ曲げられ抱え上げられた

上の投げっ放しジャーマン。>br<

だからもう聞けなくなってしまうた、そこまでされたら流石に黙るしかないって。>br<

「いやでも、カノジョが出来たんならそれこそあいつが隠すかって話だけど。んな可愛げのある奴に見えないしねえ。絶対むっつりよ、あれは」>br<

「笹原君は可愛いよ……むっつりでも可愛いよ……」>br<

「悠、言葉に覇気がないよ。ああ、こんなのいつもの悠じゃないっ。元気出してよ、クラスの皆だって心配してるよ」>br<

ありがとう、頼子。>br<

「そうよ、あんたが何かのウィルスに感染したんじゃないかって戦々恐々よ」>br<

……アリガトウ、女王様。>br<

「うん、でも明菜の言う事一理あるよ。悠は笹原君と凄く仲良くなってるんじゃない、だからこそカノジョが出来たなら言ってくれると思うし」>br<

あー、そのカノジョって連呼すんのヤメテ、地味に確実にダメーシ受ける。>br<

しかしカノジョじゃなければ尚更なんで話逸らそうとするのか全然わからん。>br<

携帯新しく買ったって聞いて以来時々送るメールとかは今も律儀に返してくれるんだけど、やっぱりそこでも何か話が逸らされてる気がしてならない。>br<

いやカノジョなら、笹原君は照れ屋だし言えずにいるのもわかる気がする。>br<

笹原君を好きだと言ってる私を傷つけまいと言えずにいてくれるのかもしれないと思う。>br<

でも、なんか、違和感。>br<

そう、何かわからんけど、猛烈に違和感がある。>br<
それが何かと聞かれても、やっぱり答えは出て来ない訳なんだけど。

> b r <

「あいはゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆう
!!!!」> b r <

「ぎゃ」> b r <

教室のドアをスパーンと勢いよく開けて怒号と共に飛び込んで来た拳句私の胸倉掴んで揺すり続けているのは、笹原君のファンの一人である中川ちゃんだ。> b r <

「な、中川ちゃ……」> b r <

「説明しろ！今すぐこの状況を説明しやがれ！」> b r <

「お、ぐ、ごふあつ」> b r <

「中川あ、いい加減放さないと流石のコイツも意識落ちるって」> b r <

アキちゃんの言葉と同時に胸倉を解放され、違う意味で机の上に落ちたがな。> b r <

しかも物凄い形相でその机もズバンと拳で叩かれたよ。> b r <
笹原君を見守り隊は割りと大人しい子が多い中、中川ちゃんは相変わらずバイタリティに溢れまくっている。> b r <

まあ説明を求められているのは今校舎から二人並んで出て行こうとしているあの二人についての事だろうな。> b r <

……ふう、見ると胸が超痛いんですけど、つい見てしまうのはどうしてか。> b r <

「人が風邪ひいて休んでる間どないなっとなじゃ！なんじゃあの女あ！」> b r <

「落ち着いて。私もよくわからん」> b r <

「ああん!?」> b r <

ちょ、ヤンキーみたいなキレ方になって来てるって。> b r <

「いや本気でわからんのよ。力技で話捻じ曲げられて逸らされるし」> b r <

「……意味ワカンネ」> b r <

中川ちゃんは大きく息をついてどさっと私の席の前に腰を下ろす。

> b r <

「なんか、昔馴染みっぽい感じらしい。あの女の子の方にちらっと会ったんだけど、自分の事憶えてるかって笹原君に聞いてたし」> b r <

「はあ？まさか元カノとか言うんじゃないでしょうね」> b r <
それよりもっとアレだったたりしてな……。> b r <

うん、暫く会ってないんだったら笹原君が言ってた事もわかるような気がするし、あの子が笹原君の好きな人だって可能性がある。> b r <

はは、力抜けて来てんの自分、情けなっ。> b r <
でも違和感なんだよなあ、いっそそれがわからん。> b r <

「あんた、黙って見てるつもり？こんな時こそアホみたいに突撃しなさいよ」> b r <

「アホて」> b r <

「実際アホみたいじゃん。こっちが笹原の顔色窺って話しかけたらマズイかなあとかやってたのに。あんたアホみたいに突進すんだもん」> b r <

「アホて」> b r <

中川ちゃんはまたはあと大きく息をついて、ついでに頬杖もついて私を眺める。> b r <

実は面と向かってあんまり話した事はない、でもファンの中でもあれこれ率先してやってた中川ちゃんの事は知っててちよっといいなと思ってた。> b r <

ファンなんて大層な感じだけど、実際部活やる側は試合中すら騒がれて迷惑って事も多いらしいし、だからその辺ちゃんと線引きしてる中川ちゃんは真面目なんだと思う。> b r <

「私さあ、相庭の事嫌いだったんだよね」> b r <

「そらまた唐突な」> b r <

「言う機会もなかったし、わざわざ言う事でもないでしょ。なんつか、まあぶっちゃけると妬みなんだけど」> b r <

「そらまたぶっちゃけたな。いや待て、妬まれる要素ZERO」
> b r <

こちらら現在避けられ組。> b r <

「や、アリでしょ。あの笹原とフツツに喋ってるし」> b r <
いやいやいや、笹原君だってフツツに喋りくらいするだろ、と突っ込む前に中川ちゃんは苦笑する。> b r <

あれ、そういえば夏休み前と何か感じ変わったな。> b r <
前はもつとこうアキちゃんとはまた違う意味で姐さん！みたいな感じだったけど、今はちよつと記憶にあるよりも柔らかいような気がする。> b r <

「そうなんだよね。笹原の迷惑になってるんじゃないかと思ってあなたの事嫌ってたんだけど、実際笹原がそう思ってるかなんてぶっちゃけ考えもしなかったし、私らみたいに『あの笹原』とか考えてる事自体笹原がどう思うかも考えなかった。確かめようとしたかった」> b r <

「そりや言われなきゃ聞かないとわからんわな」> b r <

「はは、だよ。夏休みのちよつと前にさ、あなたの事大っ嫌いだって公言してた女がいた訳」> b r <

OH……公言までしたか、胸にそつと秘めずにはおれなかったか。
> b r <

「そいつの話聞いてたらさあ、なんかこっちイライラしちゃって。傍から聞くとよくわかんね、こういうの。自分はさ、笹原の迷惑になるのが嫌だからとか口実付けて安全な位置保ったまま、そのくせ不満ばっか撒き散らしてんのよ。あんただって話しかけるのに勇氣要ったかもしれないじゃない？嫌われないかとか考えたかもしれないじゃない？」> b r <

「そりゃあ、ねえ」> b r <

告白した時も友達になりたいと申告した時も、実は膝笑ってたよ。> b r <

いやあれは武者震いってやつだぜ、……変わらんか。> b r <

「迷惑かもしれないとか嫌われるかもしれないとか、好意ぶつけるのにだってリスク背負わなきゃなんない。ましてやあんた、フラレてすら引き下がってないし」>br<

諦め悪くて申し訳ねえですだおでえかん様、年貢はもう少し待ってくんろ。>br<

「それで、そう思ったら、あんたのやってる事って、真似出来ないなど思ったのよ。ついでに、私はリスク覚悟で踏み込んで行くほど笹原の事本気じゃないんだなって事もわかった。友達とか、そういう関係すら築こうとしてなかったんだって」>br<

「え、ちよっと待て、それは早計じゃ？別にホラ、私みたいに猛進するばかりのが恋って訳じゃないよ！？」>br<

中川ちゃんはわかってると心底呆れた目をしましたとき。>br<とつぴんぽらりのぷう。>br<

「や、違う……そうじゃなくて」>br<

「中川、あんた本気を知ったわね？」>br<

にやりとバーのマダムの微笑みで言ったアキちゃんに中川ちゃんが一瞬で真っ赤になった。>br<

な、なんだと！？乙女を大人の女に変貌させたサマーなアヴァンチュールが中川ちゃんの身に！？>br<

そりゃあ雰囲気も変わる訳だなチクショー！>br<

「めでてえな、頼子、酒持って来い！」>br<

「ないよ」>br<

「……ジュースでいいから……」>br<

「あーもう祝わんでいい！」>br<

んもう恥しがっちゃって、可愛いの中川ちゃんは、ニヤニヤ。>br<

「ニヤニヤすんな！……ともかく！私も色々口実つけて踏み込んで行けない自分を正当化してただけなんだと思ったのよ！悪い！？別にだからってあんたを好きになったとかじゃないんだから勘違いしないでよね！」>br<

ワオ、リアルツンデレ、拝んでおくか。>br<

「まあこれも勝手なんだけど。そしたら自分から話しかけもしないであんたの事ぐずぐず言ってる奴らが嫌になっちゃってさ。丁度夏休み前に大喧嘩」>br<

「マジで？」>br<

「マジで。でも言いたい事は言っちゃってスツキリした。相庭が笹原と仲良くしてんのが嫌ならあんた達もぶつかってって話すればいいじゃんって。自分に言い聞かせたところもあったんだけどってそれも言ったけど」>br<

強え、オラワクワクして……来たような来ないような。>br<

「んでそれが効いたかどうかだか、結局笹原追っかけてた奴ら解散て訳」>br<

「ええー」>br<

それもどうなんだよオイ、それ知ったらまた笹原君が不信に陥るって。>br<

いや安心するかもしれないけども、うーん。>br<

「バツカみたいだね。さっき言ったあんたの事嫌いだ嫌いだって言ってた奴なんか、夏休み中にカレシ出来て超浮かれて笹原のさの字も出て来ないの」>br<

ワオ、強過ぎる、むしろある意味勝てる気がしない。>br<

「で、中川ちゃんもD組の大崎君とピンクな世界真っ最中な訳か」>br<

「勝手に捏造すんな！まだあいつとはそういう関係じゃ……っ私の事はどうでもいいのよ！ていうかなんであいつの事知ってる！？」>br<

照れておる照れておる、愛いのう。>br<

中川ちゃんてキチツとしたイメージだったけど、やっぱり恋は女を可愛く見せるわ。>br<

「時々一緒のとこ見かけた。して、彼の方は元々中川ちゃんに好意があると見た。んで、大崎君の恋愛成就の願をかけましてカマもか

けてみました」>br<

「……あんたが教師の弱み握ってるらしい訳がわかった気がするわ……」>br<

別に弱みを握ってるんじゃないくて、昔からどうもそういう現場に居合わせるだけなんだよねこれが。>br<

それでほら、大抵の人は言う訳ですよ、何でもする頼むから黙っててくれってね。>br<

勿論これでも秘密は厳守してます、先生方の奥様にもなーんも喋っちゃいません。>br<

精々そういう情報をただ集めるのが趣味な例の明石君にちよこつと教えただけで実害はなしですよ。>br<

それもどこの誰がキャバクラ常連だとか、妙な性癖持ちの店に出入りしてるだとか、そんな程度。>br<

まー、世の中恐妻家の多いこと多いこと……それに加えて教師は聖職者ってイメージですからね、一応。>br<

しかしそんな現場に出くわすのが教師相手だけじゃないとなると、これはもう女子高生は見た！みたいな遭遇レベルだ。>br<

別に見たくもないんだけど、なんだってこう……。>br<

「そういう訳だから、なんて言うか、今はあんたの事嫌いでもないって言うか、応援してもいいかなって」>br<

「ここで抱き締めたら怒られるかな、アキちゃんどう思う？」>br<

「そりゃツンデレだからツンツンするわよ」>br<

「本人の前で堂々と相談すんな！」>br<

ぜえぜえと肩で息した中川ちゃんは頼子から受け取ったジュースを真っ赤な顔で一気飲みしている。>br<

あー、大崎君はこういうところにも惚れたんだろうな、ニヤニヤ。

>br<

「それが何なのよ、あの女は。あんた、あんなフツーそうな女に取られて悔しくないの？」>br<

取られるったって、笹原君は私のものじゃあないしなあ。>br<
悔しいかと聞かれれば悔しいです！と答えざるを得ないんだけど。

>br<
違うんだよなあ、なんかその前にこう魚の骨が喉に引っ掛かって取れないみたいな違和感が。>br<

そっちも気になっちゃってこの数日は実にごちゃごちゃしてる。>br<

大体普通かどうかはこの際関係ない上、その言い方だと私が普通じゃないみたいじゃないか………普通ですよ平凡な恋する女ですよ何か問題でも！？>br<

「そりゃ私が口挟む事もないと思うけど、でも、なんか頑張っ欲しいんだよね、相庭に。あんたマジでアホみたいだけどさ」>br<
まだアホ連呼しやがるか。>br<

「私らまだガキだし、あんまり余計な事考えないで恋愛出来んのも今しかないのかもって思うと、私も、無謀でもいいからぶつかってみようと思ったんだよね。やっぱさ、このまんま終わりたいくないって言うか」>br<

「アキちゃん……」>br<

「我慢しろ、抱き付いたら照れ隠しに平手が飛ぶぞ」>br<

「だから堂々と相談すんな！」>br<

「いや、嬉しいよ、そういう風に言って貰えるの」>br<

敵視っぽいのがされてるのはわかってたから、尚更そう思う。>br<

でもなあ。>br<

「あの子もそうした結果じゃないとは言え切れないしな。こればかりは笹原君の気持ち次第だね」>br<

「何弱気になってんのよ、今更！」>br<

怒鳴った中川ちゃんを見て、思わず嘖き出して笑ってしまった。

>br<

また怒る中川ちゃんを今度こそ抱き締めてみる、平手は飛んで来な

くてセーフ。>br<

あーもう可愛い、大崎君の幸せ者め。>br<

「私さ、偽善的に聞こえるかもだけど、笹原君に幸せでいて欲しいんだよね。好きな相手がカノジョになって幸せ一杯なら、それが一番いいと思う」>br<

「あんだ、あれだけやってて身とか引けんの？」>br<

「そりゃ精神的にはなかなか無理でしょうけども。そうなんだよね、やっぱ結局そう考えちゃうんだわ。私と付き合ってくれたとして、笹原君が楽しいとか嬉しいとか思う事少しもないんじゃない、なんも意味ない」>br<

実際笹原君にカノジョが出来ちゃったら辛く厳しい現実になるのは確かだ、なんで隣にいるのが私じゃないのかって勝手に今もそう思う。>br<

食い下がって食い下がってやっと友達として認められたけど、笹原君の好きな子には一瞬でその時間を越えて行かれちゃうんだって考えると理不尽だと思う気もする。>br<

でもそんなの私だって同じだ、他の誰かが幾ら好きだと言っても、今笹原君が好きな私の気持ちは越えられない。>br<

他の人がこんな好きな状態で誰かと付き合う気にもならない、付き合えたとしてもきつと申し訳なくてその人の良さを知る度ただそう思ってるだけだ。>br<

笹原君の大事な人になれたらと思うけど、人の心ってやっぱり自分ですらどうにもならない時がある。>br<

なんでも、自分の思い通りに行く訳じゃない。>br<

泣きたくもないのに涙が出そうになるのすら。>br<

「悠」>br<

頼子が私の頭を抱き寄せてくれる、……Aカップのその胸に……。

>br<

「相庭さ、あんだ、ちょっと違うんだね」>br<

「にゃにが」>br<

頼子の胸に顔を押し付けたまま問う。>br<

うん、こうしてみると胸がデカけりゃいいってもんじゃないな、これはこれで大変よろしい。>br<

「笹原が本気で嫌がらない限りは気にしてないもんかと思ってた、だからあんなぶつかって行けんのかなって。実際あいつに告白した連中なんかもフラレて勝手に逆ギレしてるような奴ばかりだったし。でも相庭、割りとちゃんと見てるんだね、笹原の事」>br
そりゃ短期間で表情分析に勤しみましたからね。>br<

「なんかやつとわかったわ、笹原があんたの前なら顔の筋肉使っちゃんと笑うの。多分だけど、笑うとあんたも笑うからなんじゃない？」>br<

「ええ？」>br<

「私だってそれなりに笹原の事は見てたから、そんな気がするわ。なんつーか、あいつ無表情だからさあ、ついいつも怒ってんのかとか何考えてんのかとかこっちはそういう思考に行きがちなんだよね。あーあ、なるほどねえ。あんたのアホさ加減があいつの不器用に上手い具合にハマった訳だ」>br<

なんか何かを納得されてしまったようだが。>br<

「忘れてるようだけでも、私は笹原君の友達ではあるけど、好きな人じゃあないんだよ」>br<

おう、自分で言っただけという自殺点。>br<

「や、でも友達の域は超えて見えただけだなあ。ほら笹原って付き合い長いらしい鈴木とかにも無愛想じゃん。なのにさ、相庭の前では私から見てもホント破格に表情違ったよ、笑うだけじゃなくて。だから嫉妬したかなって部分あるし」>br<

「表情違ったかなあ」>br<

言われて見れば遠くから見ただけの頃より今ではずっと多くの笹原君の表情を知ってる。>br<

いつの間にか、笹原君を特に真の意味で無表情だと思ふ事はなくなつた。>br<

うん、笑ってくれてたよね。>br<

笑って……笑う……。>br<

「それだあああああああっ!!」>br<

「何がそれ!？」>br<

「そうだ、笹原君、笑ったところ見てないんだ!」>br<

「は?」>br<

「だってカノジョじゃなくても所謂昔馴染みなんでしょ? 再会したら笑うよ、嬉しかったら笹原君でも笑うよ」>br<

「何気に失礼な事言ってる気がしなくてもないけど、……そういえば確かに」>br<

中川ちゃんが頷くと、アキちゃんと頼子もう殆ど人がいない校庭に目をやってから頷く。>br<

「そうだそうだ、それだ。なんかどうも違和感あるなあと思ってたんだよね」>br<

「まあ、言われて見れば、そらカノジョとか好きな相手だったら幾ら大魔神のあいづでも笑うわな」>br<

「うん、そうなんだよ。友達相手の私に出来るんなら好きな相手に笑顔にならずにはられないじゃない」>br<

しかも相手が目の前にいない時ですらあんなに優しい目でいた笹原君だ、笑顔にはなくなるとももっとこう優しい目で彼女を見たりとかするもんだろうに。>br<

しかしこの頃の笹原君は以前以上の無表情にピリピリした空気を醸し出してるかどこかぼんやりしてるだけ、彼女の隣にいてすらだ。

>br<

鈴木君と明石君でさえそれを感じ取ってるのか、最近は三人で会話を続けている様子を見た事もない。>br<

「……なんで?」>br<

「知るか!」>br<

ですよねー。>br<

「ええ? いや、そうじゃないとしても何か色々謎が残るな」>br<

「ま、大人しそうな感じ出しといて、彼女が強かな神経の持ち主には変わないね」>br<

アキちゃんはやはりバーのマダムの佇まいでそう言う。>br<
その手にワイングラスが握られていないのが嘘のようだよ。>br<
「して、そのココロは？」>br<

「他校生がわざわざ一人で出向きに来てんだよ、こっちで噂になるの必至だろうに。それわかってやってるでしょ」>br<

「何の為に？」>br<

そういえばあの子の制服って隣の隣の町の高校だったけな、友達が三人あそこ通ってるわ。>br<

……え、待て、あの距離をわざわざ迎えに来るのに移動してるって？結構かかるよ？>br<

「愛の為か！」>br<

「さっきの話の流れから考えろってバカ悠」>br<
しょぼーん。>br<

「真実はわからんけど、誰かに見せる目的があるには変わりが無いねえ」>br<

「あ、それ私も同意。別に学校前にいる事はないんだよね。余計目立つし、迎えに来るなら来るでちよつと離れたところでもいい訳じゃない」>br<

「ああ、なるほど……」>br<

うつ、その全員の「お前は実にバカだなあ」みたいな視線は止めて頂きたい！今相庭悠のハートはガラスの如くであります！>br<
「えーと、じゃあ、何の為に？」>br<

だからその「お前は本当にバカだなあ」みたいな視線はちよつと待てって！>br<

でもなんだろう、なーんかこれで全部違和感スツキリ！にはなっていない、ような……？>br<

>br<>br<

16. 今が大事、今も大事

おずおずと「ごめんな」と言われた言葉に私は思い切り頭を横に振ったけど、それすらも気を遣わせているようで逆に申し訳なくなる。>br<

「や、本当に。二人に謝って貰うような事ないでしょ」>br<
「そうなんだけどさ、でも流石に話くらいはしてやれよって言ってんだけど」>br<

「なんかあいつやたらピリピリしてんだわ、って相庭も感じてるか」>br<

昼休みに明石君と鈴木君の二人に呼ばれて屋上に行くなり一番に謝られてしまった。>br<

二人を見るとちよつと疲れたような顔をしてるから、多分最近笹原君の機嫌が斜め下な所為だろうと思う。>br<

なんだろう、イライラしてると言うよりは、変な緊張が続いている感じみたいに見えたんだけど。>br<

この頃は話しかけても上の空、でも時折じつと私の顔を見詰めるのが更に謎。>br<

「あ、そうだ、あの女子の身元割れた」>br<
そんな明石君、それじゃあの子がどこかの犯人のようですよ。>br<

「K高一年、田辺かすみ。元々はこっちの方に住んでたみたいだ、小学まで笹原と鈴木と一緒にだよ」>br<

「え、俺知らねえ」>br<
「クラス違ったんじゃないの？それに途中で引っ越したみたいだしな」>br<

そっか笹原君は憶えてるみたいだったし、じゃあやっぱり昔馴染みって事かあ。>br<
それぞれに昼食をとりながら、いつもならこの二人と一緒にいる笹

原君の場所が空いているのがなんか物凄く寂しい気持ちになる。>br<

笹原君、もしや私がいるのを察して回避したとかかな。>br<
あー……ダメだ、この手の想像は危険だ、落ち込むと言うよりめり込む。>br<

「なんかホント変だよなあ、笹原。あの子と帰るようになってから
ピリピリしてるかぼんやりしてるかのどっちかでさ。恋煩いってやつかと思ったけど、フツーやっぱ好きな女といたら浮かれるもんじゃね?」>br<

ううん、一般論はそうなんだけど、私もそう思うんだけど、だからと言って笹原君がそうだとも言い切れない訳で。>br<
まして浮かれる笹原君か……見たいようなこの状況下では見たくないような……。>br<

「相庭、あいつら付き合ってるとかじゃないから、その辺はまだ安心しとけ」>br<

「なんで言い切れんの?」>br<
「鈴木が今言った通りだよ、幾らあいつでもあれはない。最近はずっとお前とのやり取り見てるし、尚更確信してる」>br<

「だって、そんなの……」>br<
友達と好きな人相手じゃ態度が違って当然だ、そう言いかけた言葉は歪んだ唇の中に押し込んだ。>br<

こんなの八つ当たりだ、二人とも折角心配して来てくれたのに……
声を上げそうになる自分が嫌になる。>br<

私は笹原君の好きな人が実際目の前に現れた事を直視出来ないだ
けなんじゃないかって気がしてしまう。>br<
だから色々理由を探して、笹原君の好きな人はあの子じゃないんじゃないかって……。>br<

「ああああああもおおおおおお!」>br<
「お前もストレス溜まってんなあ。けど笹原もずっとそんな感じだよ。例えば好きな相手に告げないからってそんな嫌な方向にストレ

ス溜まるかね？」>br<

「だからあ、笹原君はそういうタイプかもしれないじゃないですかあ」>br<

「そりゃ恋愛事も感情的な事だからそういう反面があるのはわかるよ。だからこそ好きなのに負のオーラばっか振り撒いていられるかって話。俺は正直わかんないけど、相庭見てて思ったよ。多分お前笹原のどっか嫌だなんて思うところが出て来てもさ、そういう事で好きだって感情は消せないんだろうなって。そういうのが、好きって事かって……あーもう俺何こっぴどかしい事言ってるだ」>br<

「いや、感動した明石君」>br<

「余計恥しいんだけど」>br<

「いやいやいや、男の素晴らしい友情も見せて貰った。」>br<
「しかしまあ、私はともかく、鈴木君や明石君にもピリピリしてるのは解せないわ」>br<

あの子との再会に何があったんだろう、こんなにいい友達にも話せずに一人で悩んでるのかと思うとむずむずする。>br<

そりゃあ友達になんでもかんでも話せる訳じゃないけど、今の笹原君は多分誰が見たって落ち着かない感じだ。>br<

何せ剣道部顧問始め部員一同ですらも笹原君の空気が悪いって何故か私に泣き付いて来たくらいだし。>br<

動機はどうあれ、皆笹原君の事を心配してるっていうのに。>br<
「解せないと言えば、もう一つ」>br<

明石君はちよつと視線を落として言った。>br<

「その田辺かすみな、多分だけど虐められてる。いや、虐めつつーか、シカトの類？いやシカトでもねえのかな」>br<

それを聞いた鈴木君と一緒に思わずぎよつとなる。>br<
いや確かに大人しそうな子だなあとは思ってたけど、え、マジで？>br<

「あっちの高校にいる奴に聞いたんだよ、したらさ、同じクラスの奴でさえ名前も知らなかった有様」>br<

「な、なんだそれ」>br<

私なんぞこっちが知らない人まで名前知ってる始末なんですけど。
>br<

「控えめに言って、物凄く大人しい子だって訳だよ。名前を憶えられてもないような」>br<

大人しいってカテゴリだろうか、それ。>br<

「で、同じクラスの奴にちょっと動向見て貰ったんだけど、本当にいるのかいないのかわかんないようにあの子自身も過ごしてる感じ。これは聞いた話からの俺の推測だけど。休み時間でも誰と話すでもなくて、昼休みとかもいつの間にかいなくなっていていつの間にか戻って来てる、行事は大抵休むから最初から数打ちもされてないって」>br<

……なんだそれ……、なんか、それって……。>br<

「だから、俺も解せない。そういう子がさ、幾ら好きな奴相手だからって堂々他校の校門前で人待ちするかね？」>br<

「ど、どうなんでしょうね」>br<

「小学ん時までは流石に調べらんなかったけど、あの子が三年間通った中学の奴に聞いても似たような反応だった」>br<

な、なんか微妙な角度で胸抉られたようなダメージが。>br<
ああこれって前に笹原君の言葉聞いた時と一緒にだ。>br<

何も楽しい事なかったって、淡々と言うようなその姿に、却って胸が抉られた。>br<

「そうなんかあ。肝据わってる感じに見えたけどなあ」>br<

「あの子のどの辺見てそう思った、鈴木君？」>br<

まあ多分大半の人が大人しそうだなあとか内向的そうだなあとか思うんじゃないだろうか。>br<

いや勿論外見的イメージだけで言うならだけど。>br<

「だから、度胸なきや男でも他校に迎えに来るなんて出来ないだろう。少なくとも俺は出来ない」>br<

「わかってる」>br<

「わかってる」>br<

「わかられるのも微妙な感じなんですけど。ともかく、その上あの子笑ってたじゃん。遠目にも笹原があんなピリピリしてんのにさ、それすら気にしてないみたいっつーか」>br<

「あ」>br<

それだ、違和感のその2、それだよ。>br<

笹原君がピリピリしてんのに、隣のあの子だけが笑ってて、そうだ、その対比が違和感の原因だったんだ。>br<

中川ちゃんじゃないけど、あんなあからさまに仏頂面し続けられたら流石にどうしたのとか聞くよね?>br<

失礼ながら普段からあんな感じではあるけど、ぼうっとしてたら心配にもなるよね?>br<

「あー、いや、でも、私達の見てないところでは……」>br<

「この間駅前でも見たけど、ずっとあんな感じだったぞ」>br<

うわ、駅前に制服デートとか……う……ら……>br<

「相庭、後ろに人の顔した黒い怨念ぽいのが見える」>br<

「ひいひいっ」>br<

真に受けるなよ鈴木君、そんなの明石君のいつものブラックジョークだよ、多分……多分ね、だってほら私の後ろに人の顔なんて………今見たのはキノセイダヨ。>br<

うらやましいんであって、うらめしいではないから。>br<

「だからって笹原がそうそう脅されるとも思えないけどな」>br<

「脅して付き合ってどうすんの!？」>br<

流石にそりゃあ話が飛躍し過ぎてるって明石君。>br<

「目的の為に手段は選ばない人間もいるだろ。大きく言えば人間誰しもエゴイストだし、そこ開き直りゃ誰に何言っても何しても自分の正当性が通じると思ってる」>br<

「話が一気に壮大に!え、そういう話!？」>br<

「とりあえず、あれが惚れた腫れたの男女交際、もしくはその寸前だとは見れば見るほど誰も思わないな」>br<

うう、結局なんか話の進展がさっぱりないような。>br<

「ねえ、あの、笹原君の事、見てるよね？」>br<

抽象的とも言えそうな私の言葉に鈴木君が頷いて笑った。>br<
「大丈夫だって。俺も付き合いただけは長いし、あいつが話したそう
してれば見逃さないつもりだから」>br<

「相庭も、一応気をつけた方がいい」>br<

「何を？」>br<

少し視線を落とした明石君はすっと息を吸い込んで一気に言う。

>br<

「さっき言ったのでわかったと思うけど、なんか何考えてるかよく
わかんない感じだから。あの子の方から相庭に接触して来ないとも
限らない」>br<

「なんで？」>br<

「あの子が笹原と再会した時に相庭と一緒にいたんだろ？」>br<
「か、考え過ぎじゃない？私が笹原君と休日でも会ってるとか言う
ならともかく」>br<

ええ、夏休み以来二人きりなぞ夢のまた夢ですけどね。>br<

「俺もそう思うんだけど。なんつーか、思考が突飛な奴はいるから」
>br<

>br<>br<>br<>br<>br<>br<

ごちゃごちゃと纏まらない思考を抱えて放課後立ち寄った公園で
ギコギコとブランコを漕いでみる。>br<

何か考えなきゃなあと思うんだけど、色々あり過ぎてただぼけつと
軋むブランコの音を聞いているのみだ。>br<

さっきまで多かった子供達は殆ど家に帰ったのか、辺りはいつの間
にか誰もいなくて日が落ちかけてる。>br<

ほんと大きく地面を蹴って宙に足を伸ばすとまた大きくギコギコと
ブランコが鳴った。>br<

そのまま足を伸ばし続けて揺られると、少しずつ音は止んでブラン
コは小さく揺れながらやがて止まる。>br<

ああもう想像の斜め上の展開でどうしたもんかちっとも考え付かない。>br<

元々ああだのこうだの考えるのって苦手だしなあ。>br<
笹原君が笑ってさえてくれてたら、それでいいと思えたかもしれないのに。>br<

あの子が好きなんだなって実感出来たのなら、もしかしたらこの気持ちに整理をつけなきゃって何かする事も出来ただろうに。>br<
……出来ないかもしれないけど、多分また物凄い時間かかるんだろうけど。>br<

でも何も出来ない今よりはちょっとマシだったかも。>br<

「やっぱり聞いてみようかなあ」>br<

決意をつけるべく言葉にしてみてもなんかごちゃっとしたものが足を動かさない。>br<

笹原君が何か悩んでいるなら、本当にせめて鈴木君か明石君かにでも愚痴ってくれていたらいいのに。>br<

やっぱり笹原君が楽しそうじゃないのは嫌だな、もう他の子相手でもいいから笑ってくれたらいいな。>br<

こっそり見てた春の頃みたいに、たまに鈴木君や明石君と話して可笑しそうにしたり、他の事なんか何も考えていなさそうなくらい一生懸命剣道に打ち込んでたり、……そういう笹原君がまた見たい。>br<

「らしくない……いっそろしくないぞ相庭悠！今こそ立ち上がらなければ武士の名折れ！」>br<

「いつからお前は武士になったんだ」>br<

「日本人たるものは常にラストサムラー……い？」>br<

「時代錯誤も甚だしい」>br<

「笹原君!？」>br<

さ、笹原勝利、完璧に気配を断つ術をマスターしていやがる!>br<

本当にいつの間に隣のブランコに……全然気付かなかった、不覚。

>b r<

「あ、あああ、ああ、あ、あの、あの子、と、帰ったんじゃ、なかった、の?」>b r<

これは武者震いで候!>b r<

「駅に行きたいっつーから、行って、俺はその帰り」>b r<

おおおおお放課後駅デートしてました的爆弾発言をさらりと日常会話のように埋め込むとは流石過ぎる。>b r<

止めて、相庭悠のライフポイントはもうゼロに近いわよ!>b r<

「ああ、あ、あああああのさあ」>b r<

「言いたい事はわかってる。ただ、俺も上手く説明出来ないんだ。確信もないのに言っている事なのかどうか」>b r<

笹原君はブランコを少し漕いで先の方を見て言った。>b r<
そそそそそれはあの子を好きかどうかって確信ですかねもしかしくなくとも。>b r<

……止めて、相庭悠のライフポイントはもうゼロよ!>b r<
し、心臓異体違う痛い心臓遺体違う痛い、決れそうなくらい痛いっ。>b r<

「あの子の事、好き、なの?」>b r<

あんまりガクガク震えそうになるから、ブランコの鎖をぎゅっと握り締める。>b r<

聞いたよオラ聞いちゃっただよ、どうするどうなる続きはWEB……だからこれはリアルだって!悲しいくらいリアルなんだって!>b r<

ああもうドラマならここでまた来週とかいう場面じゃないんですかね、しかし沈黙長いな!>b r<

「わかんねえ」>b r<

「ええー……」>b r<

「そうだと思ってたんだよ、ずっとあいつが好きだと思ってた。そうだったはずなんだ。なのに数年ぶりに会ってわかんなくなってる……何言ってるんだ俺。こんな事言われたってお前もわかんねえよな」

> b r <

残念ながらさっぱり。> b r <

ええーと、つまり、やっぱりあの子は笹原君が好きだって言ってた子で、でもずっと会ってなくて、実際再会したらよくわかんなくなっちゃった、と?> b r <

「あー、あー……と、何年ぶりなの? 会うの」> b r <

「十年近いんじゃないかな」> b r <

「あー……十年は、長い、ね」> b r <

笹原君の言いたい事もなんとなくわからない訳じゃないか。> b r <

小さい頃好きになって、約十年ぶりに会って、好きだった頃のその子と今のあの子が重なるってのも珍しいと思うし。> b r <
そりゃ当然あの頃とは変わっちゃってて、それが笹原君が確信出来ない原因なのかもしれない。> b r <

「えっと、ええーっと、前の頃はともかく、その、今のあの子は、好き?」> b r <

「……わかんねえ。変わり過ぎてて。根本的にあいつが変わった所為なのか、俺が変わった所為なのか、それとも――」> b r <

言葉を切った笹原君がおもむろに私に視線を向けて見つめて来る。

> b r <

勿論それは前に好きな子がいるって言ってたあの優しい目じゃない。

> b r <

どうしてか何か訝しげで、どこか不安そうに心許なさそうに揺れる。> b r <

なんで、そんな目で、見るの。> b r <

「前にお前言ってたよな、好きな奴いたって。そいつと今会えたとしたら、また好きになれると思うか?」> b r <

「どうだろうね」> b r <

実際そんな事になってみないとわからない気もする。> b r <
大体私は今笹原君が好きなんだから、そこんどこわかってて言って

るんですかねこの人は。>br<

あーもう、しょうがないなあ。>br<

放っておけない、元氣にしてあげたい。>br<

辛くたって苦しくたって寂しくたって、私はやっぱりこの人が好きだから。>br<

「過去は過去だよ、笹原君。過去はさ、きっかけになるけど、今笹原君が誰を好きか、それが大事だと思うよ」>br<

だから早く、元氣になってよ。>br<

「相庭」>br<

「勝利君」>br<

笹原君の声と、その声が重なる。>br<

同時に前を向くと、やっぱりあの子が笑顔で立っていた。>br<

「私、勝利君に渡し損ねた物あって。それで、追いかけて来ちゃった」>br<

少し息を切らしたその子は私の方を少し見て気まずげな顔をする。

>br<

「貴女、前にも会ったよね？勝利君のお友達？」>br<

「え、えーと、はい、相庭悠、ですっ」>br<

「俺に渡す物って何？田辺、もう遅いし今度でもよかったのに」>br<

「だって……勝利君に会いたかったから」>br<

しゅんとしたその子は何故かやっぱり私の方をちらりと見て怪訝そうな顔をする。>br<

あ、これって、もしかしくなくても、お邪魔？ですよね？>br<

「送ってく。相庭も」>br<

「あ、あー、いいよ！私近いし！そこいらの変態が来ても全然大丈夫！」>br<

「そういう問題じゃないだろ」>br<

「いい！いいって！えっと、まあそういう事だから、笹原君また明日！頑張って！」>br<

自分でも訳もわからずまくし立てて、勢いよくブランコから立ち上がるとガシャンと音がする。> b r <

そのままダッシュで公園で入口まで行くと笹原君の声が聞こえて、私は振り返らず大きく手を振って再びダッシュした。> b r <

よくわからんけど走らなきゃ、今は走らなければならない時のような気がする。> b r <

人生三度は全力で走らなきゃならない時がある、今はその時のようです。> b r <

なのでとにかく走る、走る走る走る。> b r <

本当にもう未だ嘗てないくらい全力で走る、今私は風になってる……！> b r <

「わぎゃっ！」> b r <

「うわ！」> b r <

あの角を曲がれば我が家まで後もう少しという所で丁度曲がって来た誰かと出会い頭にまさかの衝突イベント。> b r <

……なんか最近ツイてないな……。> b r <

「すみません！大丈夫です——か、って……神崎さん！」> b r <

「いて……あれ、悠ちゃん」> b r <

尻餅をついている神崎さんに慌てて手を貸して起こすと、彼は苦笑いしながら吹っ飛ばされた銀フレームの眼鏡を拾ってかけ直す。

> b r <

親父様の旧友とは思えないほどその姿は良識的で知的なイケメンだ、おまけに高そうなスーツががつり似合う弁護士ときてる。> b r <

「本当にごめんなさい。痛いところないですか？うわあ、スーツ汚れてる！弁償します！」> b r <

「いやいやいや、大丈夫。しかし丁度よかったな、今迎えに行こうと思ってたんだ」> b r <

「ミー？」> b r <

「ユー」> b r <

会う約束してたっけかな？……まさかっ！？> b r <

「遂にうちの親父様が神崎法律事務所にご厄介になるような事でも！？」> b r <

「いや、ご飯に誘いに来ただよ。大体あいつには昔から個人的にご厄介になられてる」> b r <

ううん、笑顔ですけど目がマジです神崎さん、こりゃ根は深いな。> b r <

「実家から大量にカニが送られて来てね。俺と姉貴じゃ食べ切れないから」> b r <

「あなるほど。それじゃあご相伴に上がります」> b r <

上がり切った脈拍を整えながら、家に向かって神崎さんの車に乗り込む。> b r <

これまた高そうな外車ですよ、この人実家もお金持ちだもんなあ。

> b r <

「悠ちゃん？行くよ？」> b r <

「え？あ、はい」> b r <

助手席に乗ってから慌ててシートベルトをして、発車した中で流れて行く窓の景色を眺める。> b r <

目頭が熱いのは、多分カニを食べられるのが嬉し過ぎるからなんだ。> b r <

だってカニなんて久しぶりだもん。> b r <

そうに決まってる。> b r <

「もー腹減って死ぬー。亮太、キリキリ飛ばせやー」> b r <

「貴様はそのまま死ぬ。大体貴様を呼んだ憶えはない」> b r <

「親父様もいたんか……」> b r <

後部座席の下にだらりと寝そべっている親父様はわきやわきや騒いでいたが、突如下がった運転席に押し潰されて完全沈黙した。> b r <

つまり、乗車は座席に着いてシートベルトを締めましようって事です。> b r <

> b r <> b r <

17. 家族団らんも大事に！

思うに、これがもし夜中だったのなら、家政婦なんかが目撃した挙句、死体隠蔽の犯行現場にしか見えなかった事だろう。>br<完全沈黙したままの親父様をぶつぶつと呪いの言葉を吐きながら、自宅である事務所の二階まで担ぎ上げる神崎さんの形相を見ていたら疑う余地もないに違いない。>br<

面倒見いいとか旧友だからとかじゃなしに、曰く「こいつがうちの事務所の前で死体になっている所を発見されでもしたら俺が事情聴取等で面倒臭い死ぬなら人様に迷惑のかからない所で一人でひっそり埋まって死ね」らしい、ご尤もです。>br<

しかし未だにこの人達の関係ってわかんないわ、神崎さんに改めて自己紹介された時なんて親父様を指差して「こいつとは縁も所縁もないし今後も絶縁したいくらいだけど、悠ちゃんとは仲良くしたい」と思っているからよろしく」だもんなあ。>br<

神崎さんのお姉さんも弁護士で、また似たような事言われたし。>br<

ホント一体何やらかしたんだかうちの親父様は……想像つきそうな感じがまたアレだな。>br<

「お邪魔しまーぎゃふ！」>br<

「悠ちゃん久しぶり！」>br<

二階のドアを開けたとたん突進して来たのは神崎さんのお姉さんの明日香さん。>br<

弟のキッチリとした見た目に反してこちらはふわふわの綿菓子って形容がお似合い、物凄く可愛い。>br<

しかしこの十代とも思わしき外見に惑わされていると痛い目に遭うと業界じゃ有名のやり手弁護士なんだとき。>br<

「よかったあ、悠ちゃんが来てくれて。パパもママも私達がラーメン一つ作れないの知ってて色々送って来るんだもの、殆ど嫌がらせ

よね。残ったのは持って帰ってね」>br<

「ありがとうございます。あ、じゃあ早速作りますね」>br<

神崎さんが親父様をその辺にごろりと転がすのを横目で見つ、
勝手知ったる何とかでキッチンへ移動。>br<

いつも思うけど二人して料理出来ないってのに何だってこんな料理
人仕様なシステムキッチンにしたのやら。>br<

若い内から独立した経緯とか、親父様との関係とか、まあ何かと謎
の多い姉弟だ。>br<

「こりゃまた……一杯貰いましたねえ」>br<

「月遅れのお中元の余りが多いんだけどね。生物は最近送って来た
から大丈夫よ」>br<

キッチンの下には両手で抱え切れないほどの発砲スチロールの箱
に入った大量のカニ、そしてはみ出る肉。>br<

そしてお高そうなブランドロゴの付いたあれやらこれやら。>br<
一体時価幾らの食事が出来上がる事やら。>br<

「私、向こうの方用意しておくわねー」>br<

これまたふわふわという擬音を飛ばしながらキッチンを鮮やかに
出て行く明日香さんを見送って、とりあえず棚の下からカニ茹でる
鍋の用意。>br<

積まれた山の中を探してみるとまたお高そうな食材が出て来たので
投入決定。>br<

カニとかこれ一体何匹いるんだろうなあ、ていうか箱開きっぱにし
てたら脱走謀ってるよ。>br<

はいはい残念ですけど美味しく食べさせて頂くんて観念してやって
下さいねー。>br<

あとは冷蔵庫に野菜もあるようだしスキヤキにしようかな。>br<

「……………」>br<

ちらちら。>br<

「……………」>br<

ちらちらちらちら。>br<

「……」>b r<

ちら。>b r<

「チラ見ウゼエ」>b r<

「パパの気配に気付くなんて流石我が娘成長したな!」>b r<

「チラ見のくせにガン見とはどういう了見だ」>b r<

キッチンの入口の壁からこちらをチラ見していた親父様が人差し指同士をつんつん合わせながら内股でやって来る。>b r<

我が親ながらウザイしキモイぞ。>b r<

「んー、いや、大丈夫かなあと思って」>b r<

「何が」>b r<

大丈夫じゃないのはそっちの頭だろうに、何を仰る。>b r<

「あー、……いー、うー、えー、おー」>b r<

「ナメてんのか」>b r<

「ナメてなーい!……えーと、その、なんだ。泣きたい時は、パパの胸を貸すぞ!さあ、どんと飛び込んでおいで!ウエルカム!カモン!早く来てええええん!」>b r<

……。>b r<

「のーさんきゅー」>b r<

「お前、今俺がどれだけ勇氣出したかわかってんの!? こんなパパらしい事言ったのある意味初めてなんだよ!」>b r<

私が生まれてから十六年と弱、これが初めてと言う事実が世間ではどう言うかを知りなさい。>b r<

何一体、こんな時に。>b r<

大体「パパらしい」の見解の相違には深く大きな溝が横たわっているようだ。>b r<

「別に泣きたくないし」>b r<

「でも泣きそう」>b r<

「黙れ」>b r<

「あの説教クソジジイの孫となんかあったんか」>b r<

「別に。あと変なあだ名付けんな」>b r<

「何か変な事されたんか。何か嫌な事言われたんか」>br<

「別に。大体笹原君はそういう事しない」>br<

「でもあのガキが原因か」>br<

「思春期によくある箸が転んでも泣きそうになる時期なんだよ」>br<

「ああ、あのよくある……なるほど納得」>br<
漫画の読み過ぎだボケ。>br<

「……そか、わかった。まあでも、垂れて来ちゃったら我慢すんناよ。お前泣くの我慢すると昔っからブサ——ぎゃばばばばばばばばばばばばばばばあ！」>br<

——……。>br<

「パードウン？」>br<

「ナンデモアリマセン。つかおま、回し蹴りで壁に焦げ跡で。俺は弁償しないからな！」>br<

サラバ！とか捨て台詞を吐いたかと思うと親父様は高笑いと共にキッチンを出て行く。>br<

あいつ一体何しに来たんだか………別に泣きたい訳じゃないし。

>br<

まだカニを食べられる感激の余韻が残ってるだけなんだってホント。

>br<

「ねえ悠ちゃん、今天地がバカ丸出しな高笑いしながら出て行ったけど、何かあったの？」>br<

「親父様の脳内に何か嫌な革命が起きたみたいです」>br<

「毎度のやつね」>br<

「ええ、毎度で」>br<

しかし出て行ったって、親父様のカニを見逃すなんて珍しいな。

>br<

……また余計な事しかさなきやいいけど。>br<

あれが自分を本当に父親だと思ひ出す時は碌な事やらかさないからなあ、経験上。>br<

「こっちの準備は出来てるから。天地の分まで食べるぞー」>br<
バンザイとして笑顔でキッチンから出て行く明日香さんは本当に可愛い。>br<

昔は明日香さんに憧れたもんだったなあ、容姿もそうだけど言動がとにかく可愛くて（仕事時以外は）。>br<

初の失恋後も私が明日香さんみたいだったらよかったのと思った
つけ、無理なのはわかってるんだけど。>br<

せめてこの余りある体力だけでも平均値だったらなあとか、……今
更なのもわかってはいたんだけど。>br<

笹原君はあの子とちゃんと話しをしただろうか。>br<
今のあの子とちゃんと向き合って答えを出す事が出来るんだろうか。

>br<
その結果が、私の二度目の失恋だったら、どうしよう。>br<

ふと明石君が言ってた言葉を思い出して苦笑いが零れる。>br<
私もやっぱり立派なエゴイストだ。>br<

>br<>br<>br<>br<>br<>br<
「鍋出来ましたよー」>br<

「ああ、ありがとう。あ、俺が持つからそっちに置いて」>br<

「はい」>br<

キッチンに来た神崎さんが鍋を持って行ってくれるのと一緒に私もダイニング兼リビングの方へ行くと、すでに出来上がった様子でソファの上に寝転がっているのは明日香さん。>br<
えー、ええーと。>br<

「悪い。止めたんだけど、酒飲んじゃって」>br<

「あーわー」>br<

「まあその内起きると思うから」>br<
だといいんですけど、結構大量に作ったから二人で食べ切れそう
にないし。>br<

「よし、と。あ、後は俺がやるから座ってて。飲み物麦茶でいい？」

> b r <

「はい」> b r <

スキヤキ鍋をセットして座る間もなくキッチンへと消えて行く神崎さんの後姿を見送る。> b r <

ああ、どうせなら神崎さんがお父さんだったらと夢見た事もあったっけなあ、なんて現実は厳しいの。> b r <

しょんぼりしながらも神崎さんと談笑を交えつつ鍋を突付いていたら、復活した明日香さんも加わって久しぶりに賑やかな夕食となった。> b r <

テッドが帰国しちゃってから親父様と二人だけだったし、まあ親父様一人でも充分煩いんだけど。> b r <

「只今帰っ——ああああああああ俺の分のカニはあああああああああ!？」> b r <

「食べたよ」> b r <

私達の綺麗なハモりに何故か戻って来た親父様はがっくりとその場に膝をつく。> b r <

「一体どこ行ってたのよー。まあ心底どうでもいいけど」> b r <

「いいなら聞くなよ!」> b r <

けらけら笑って再び寝入ってしまった明日香さんに不貞腐れて見せてから、親父様はテーブルを挟んだ私の前にどっしりと座ってこれから食べる場所だったおじやを抱え込んで貪り食べてる。> b r <

本当にどこ行ってたんだかな、相変わらず神出鬼没だ。> b r <

「全く。お前、あまり悠ちゃんに面倒をかけるんじゃないぞ」> b r <

「真っ赤な他人のお前に言われたくないですー」> b r <

「そんなだから俺は悠ちゃんが生まれた時うちで引き取るって言ったんだ」> b r <

え、初耳。> b r <

「重度のアニオタのテメエらなんか引き取られる方がよっぽど迷

惑なんだよ」>br<

……え、初耳。>br<

「恋愛漫画オタクの貴様にだけは言われたくないセリフだなあ？」

>br<

「はっ、二次元しか相手に出来ないお前とは違って俺は立派に娘まで儲けたもんねー」>br<

「その娘に散々迷惑かけて父親面か、いい度胸だな」>br<

「どうせお前は娘に迷惑かける事も出来ないもんなあ、何せ二次元だからガキも出来ない」>br<

「俺の嫁を侮辱する気か！」>br<

「あー、あのテレビ画面から出て来れない嫁ね。プッ」>br<

「その挑戦状受け取った。俺のまりりんを馬鹿にする奴は万死に値する」>br<

「久々にやるかコラ」>br<

「表出ろ」>br<

「待て待て待て待て！やるな出るな！ご近所迷惑だから。やるなら南極かどこかでやって」>br<

いきり立って立ち上がった二人は暫しの間を置いて座り直す。>br<

いや行ってくれても構わないんですけどね、全然。>br<

しかし親父様から聞かされてはいたけど、神崎さんも明日香さんもアニメオタクだったとは……人間奥が深い。>br<

仕事忙しい所為だと思ってたのに、姉弟で二人暮らしの理由がなんとなくわかってしまった。>br<

そして二人がそれぞれの自室に足を踏み入れるなど再三言ってきた理由も……。>br<

「悠ちゃん、本当にうちはいつ来てくれても歓迎するから」>br<

「前向きに検討しておきます」>br<

「検討しちゃうの、悠たん！？こいつ美少女キャラの抱き枕抱いて寝てんだぞ、その上高校ん時そのキャラの寝言呟いた挙句いかがわ

しい夢見てたような奴なんだぞ!？パソコンの壁紙も猫耳女の画像だしカーナビも声優仕様の救いようのないキモオタなんだぞ!！」
>br<

マジでか。>br<

残念なイケメンと言うより、いっそ無駄に他ステータスの高いイケメンだったか。>br<

「まあ親父様よりはマシだし」>br<

「はっはっはっはっ! ほら見ろ」>br<

「キイイッ」>br<

いい大人が低レベルな争いをしている。>br<

出来ればこうはなりたくないけど、不安な呪わしい血だ。>br<
一通り食べ終わったし片付けようと思ったら神崎さんがいいよと制してくれる。>br<

ううん、真面目に検討したくなって来た。>br<

アニメオタクに弊害はないしなあ、何よりこの気遣いは親父様じゃ望めまい。>br<

「じゃあそろそろお暇します。ご馳走様でした」>br<

「俺達歩いて帰るから」>br<

そう勝手に宣言するなり親父様は私の手を引いて歩き出す。>br<

「え、ちょっと」>br<

「こうして帰らないと外で泣き喚くジタバタする」>br<

「神崎さん今日はありがとうございました」>br<

「全く……。悠ちゃんごめんな、こんなバカで」>br<

「いえいえ、こちらこそすみません、こんなバカで」>br<

「君達、イジメ、カッコワルイ!」>br<

神崎さんは律儀に後日お中元の残りを届けてくれると約束して下まで送ってくれた。>br<

本当によく出来た人だなあ、救いようのないアニメオタクでもいいって言うってくれる人が現れればいいんだけど。>br<

一体どれだけ救いようがないのかはちょっと考えたくないな、何せこの調子だと高校時代からそうみたいだし。>br<
そして明日香さんもか……向こうはやっぱり美少年キャラが旦那なんでしょうか。>br<

すっかり暗くなった中を何故か親父様と手を繋いで歩くという何とも不思議なこの状況。>br<

こんな風に手を繋いだ事なんてなかったなあ、そういえば。>br<
「ごめんなあ」>br<

「心当たりが多過ぎて何に対しての謝罪かわかりかねる」>br<
「んー、最初から。色々。わかってると思うんだけど、俺お前の事怖くてさあ」>br<

秋口にピツタリのカミングアウトですねウフフ。>br<
まあ確かにわかってはいたけど。>br<

人とは違った意味で親父様は私の事が怖い、それは物心付いた時に気付いた。>br<

多分それは親父様が今もお母さんの事が好きだからだ、……きっと好き過ぎる所為だ。>br<

親父様はあまりお母さんの事は話さない、それも多分親父様がお母さんの事を独占していたいという表れだろう。>br<

「でもお前の思ってる理由とはちよつと違うかもって、さっき思った」>br<

「私がまた何か持って行くんじゃないかって、心配だったんじゃないの」>br<

お母さんは私を産んだ所為で死んだ、詳しくはわからないけど私を選んだしまった事が原因だったんだと思う。>br<

親父様はこう見えて大事なものが一杯あるんだ。>br<
だから私にそれを取られるのが怖くてあまり家にも帰って来ない――そう、思ってた。>br<

「俺お前の事大事なんだ、すげー大事なんだ。でも俺臆病モンだからさ」>br<

「ああ」>br<

「いや納得しないで！ここ、そんな事ないよって言う場面！パパは超カッコイイ大好きって抱き付く場面！」>br<

「あーほーかい」>br<

「ああそうかいと、アホかいをかけるなんて我が娘ながらお主出来るな！」>br<

「本題に戻りなさい」>br<

親父様は忙しく頭を掻いたりした後、こほんと小さく咳払いをする。>br<

「んだから、お前までどっか行ったら嫌だなあと思って。あんま顔見なけりゃそう思わないで済むかなあって」>br<

「直刃さんが親父様を人の親になる訳ないと思ってた理由がわかるよ」>br<

「だからごめんって！いや、今思うと真面目に育児放棄ってやつだったと思うんだけど。でもお前も悪いんだって！お前ガキの頃からあれこれ一人でやっちゃうし、俺の出番ないし！あんま懐かないし！」>br<

そういえば物心付くまでは明日香さんがもろもろ面倒見てくれてたみたいだ、返す返すも有り難い。>br<

明日香さんが老後の面倒とか必要になったら私が見よう。>br<流石に画面の中の旦那にそれは出来ないだろうし。>br<

「逆ギレか」>br<

「うー。たいへんもうしわけございませんでした」>br<

「別に端から期待してないからいいって」>br<

「うーうー」>br<

面白い顔だ。>br<

「琳子さんさあ、年々お前と似て来る」>br<

琳子はお母さんの名前だけど、それ逆じゃね？>br<

ていうか、四年に一度のオリンピックペースでお母さんの事を親父様が話す時は決まってる。>br<

きつと親父様の中でお母さんはまだ生き生きとしていて、世界の中心にある。>br<

「あの人な、由緒ある代々華道の家元とかったのの出なのよ、よくわかんねえけど家とか超デカイの。んで、その為に自分でも頑張ってたらしいんだわ、家継ごうって。何せ一人娘だったし」>br<

初めて聞いた、親戚なぞいないと思ってた。>br<

親父様自身が孤児だって言ってたし、自然お母さんもそうなのかと思ってたよ、意外だ。>br<

「でもそれなりだったにも関わらずさ、父親の兄さん？の息子が家元の座に置かれちゃった訳。男だから、理由はそんだけ」>br<

……面倒臭いな。>br<

「しかも琳子さんお前みたいに凶悪な体力の持ち主でさあ、趣味でやってた空手だなんだってのも親にはよく思われなかったみたいだった。多分そういうのが寂しかったんだと思う。で、まあ、そんなような頃出会って俺必死で口説き落として、お前が出来て琳子さんは完全に勘当された」>br<

……面倒臭いな。>br<

道理で親戚だ何だって、影すら見えない訳だよ。>br<

「俺細かい事色々出来ねえから、親の説得とかも出来なかった。どこのウマノホネとか言われたしな。琳子さんはもういいって言うってたけど、そうじゃなかったと思うんだ」>br<

「そうかもね」>br<

「でもお前が出来たってわかった時からあの人あんまそういう事で寂しそうな顔しなくなってるさ。俺もすげー嬉しかったんだ、本当に琳子さんはあの世逝っちゃったけど、お前が生まれて、本当によかったなって思ってるんだよ。病気には勝てなかったとかいう奴もいたけど、琳子さんは勝ったからお前を遺していったんだ」>br<

「わかってるよ」>br<

わかってるんだ、別に親父様は私を疎ましく思うから遠ざかっていたんじゃないって事は。>br<

ただまた失くすのが怖かったんだな、お母さんみたいに――私を。

> b r <

「今更で、怒ってないか？」> b r <

「怒ってないよ。皆、親は選べないし」> b r <

「ううっ。……亮太んとこ、行ったりしないよな？」> b r <

「それは前向きに検討するけど」> b r <

「しちゃらめええええっ！」> b r <

「まあ、当分は、行かないよ」> b r <

ぎゅっと、親父様の手に力が籠る。> b r <

もしかしたら進歩のなさもこの親譲りなのかもしれない。> b r <
親父様は未だお母さんが好きだ、きつとずっと好きなんだと思う。

> b r <

普段は腐った魚のような目をしているくせに、時折こうしてお母さんの事を話す時の親父様はそんな目をこれ以上なくキラキラさせてる。> b r <

小さい頃、思った。> b r <

そんな風に私も誰かを好きになれたらいいなって。> b r <

だって数少ない写真の中で、お母さんはいつも楽しそうに、カメラの向こうの親父様に向けて笑ってる。> b r <

なんか癪だから、教えてはやらないけど。> b r <

「悠、お前、幸せになれよな」> b r <

親父様はまるでお母さんに語りかけるみたいに、天を見上げてそう言った。> b r <

> b r <> b r <

18. 覚悟を決めろ!

ふふ、ふふふふふふ、ふふふふふ。>br<

この一週間の自分を顧みて言うわ、このチキン野郎が!!>br<
相庭悠、お前はそんなチキンだったのかへタレだったのか!相庭悠
(パート2)は情けないぞ!見ろ、田舎の相庭悠(パート3)も泣
いているぞ!>br<

し、しかしなんだ、やっぱ一週間で心の準備とか出来ないっす!>
br<

わかってる、逃げてても状況は変わらないのはわかってる、むしろ
悪化する可能性もある、わかっているが心と体と頭が分離反応をし
てしまう!>br<

「あら、悠」>br<

「ひぎゃ!」>br<

この一週間、逃げに逃げ回ってやっとの事で見つけた秘密の間(別
名第二資料室兼倉庫)に人が!?>br<

と思ったらアキちゃんじゃないすか、おや隣にはドMの彼氏。>b
r<

「あ、こんにちは。お久しぶり」>br<

「お久しぶりです、悠さん」>br<

今中二なんだっけか、中二でもうドMたあ極めてるわ。>br<
まあそれを言い出したらアキちゃんなんて小学ですでに縄跳び用の
縄を鞭に見立てて振り回してたしな。>br<

いやいや、あービックリした、……………。>br<

「不法侵入!」>br<

「ちょっと大声出さないでよ。あんたもどうせまた逃亡者ごっこや
ってんでしょ」>br<

ガチにも関わらずごっこ呼ばわりとはこれ如何に。>br<
いやいやいやいや、中学生の子がここ入って来てたらマズイだろー

！しかも今昼休み！>br<

何やってんだこんなところで………ナニの可能性じゃありませんように。>br<

「こいつの学校今日早く終わったのよ」>br<

「ちよつとでもアキ様に会いたくて来ちゃったんです」>br<

えへへって照れたように言われてもな……。>br<

「まあいいや、とにかく、時間までは私ここにいるから。嫌ならそっちが出て行け」>br<

「別にいいけど。ていうか、あんた達はホント最近何やってんの。あいつと新しい遊びでも始めたの？」>br<

「そういう訳では」>br<

「笹原があんたの事追い掛け回してんの見た時は流石に我が目疑ったわよ」>br<

ある意味私も度肝抜かされましたが。>br<

まさか私が笹原君から逃げる日が来るなどとはお釈迦様でもわかるまいて。>br<

「オラまだ年貢が納めらんねえんですだ」>br<

「訳がわからんが、大体把握した」>br<

「マジで!？」>br<

「笹原、あの女の事であんたに何か言おうとしてんじゃない？でもって、あんたは聞く体制が整ってないと」>br<

お、恐ろしい子！この一言でほぼ全ての経緯を把握するとは！>br<

この彼氏君にもちよつと忠告しておいた方がいいかな、アキ様怒らせると何されるかわかんないって……あ、目えキラキラさせてうっとりしてるダメだこりゃ。>br<

「えーあー、つい頑張れとか言ってしまったって、頑張った結果聞かされんのかなあと思うと体がつい」>br<

「……あんたバカなの？」>br<

へえ、申し開きもねえです。>br<

「あのねえ、何事も弱肉強食、世の中綺麗で弱い事ばっか言ってる
と食われんのがオチよ?」>br<

へえ、返す言葉もねえです。>br<

この一週間何とか覚悟決めるべく寝ずに勉学に励んでみたり親父様の
サンドバッグを三つほど粉碎してみたりしたんですけど、何とも
さっぱり勇気も出ませんで。>br<

聞く前からこんなんでどうするよって話ですけど。>br<

笹原君の口からあの子がカノジョになりましたなんて報告聞くかと思
うと……あああああ心臓痛い。>br<

しかも笹原君であればこれから毎日鬼気迫る勢いで追いかけて来るもん
だから、上手く行ったのかどうかすら全然わからん。>br<

いや元気にはなったなあとは思うんですけど、ええ、とても、すご
く。>br<

ホントもうドキドキしちゃって、遠目から確認も出来ず、笹原君が
カノジョ出来て浮かれてんのかどうかすらわからん。>br<

うおおおおおおおおおおチキン!ヘタレ!>br<

「アキちゃん、何していらっしゃるんで?」>br<

「ん?ああ、頼子にメールしてる。あの子も心配してるから。て言
うより、学校中が天変地異の前触れかと思ってるわよ」>br<

「後半不本意だが、重ね重ねすまん」>br<

こんなんじゃないダメだ、逃げちゃダメなんだ逃げちゃダメなんだ逃
げちゃダメなんだ。>br<

「よし!今日の放課後こそは話聞いてくんぞ!」>br<

「その意気ね。ほら、失恋するまでも恋愛だから」>br<

「不吉パネエエエエエエエエ」>br<

果たして、その女王様の不吉な宣言が影響してしまったのかどう
か。>br<

「笹原さ、午後の授業で腹痛起こして早退したんだよ。弁当の何かに
当たったらしくて」>br<

おおう、やっと放課後根性入れて笹原君とこのクラス来てみたら

それですか。> b r <

はあ、笹原君が腹痛……」。> b r <

「しよしよしよしよしくちゅうどつく!?」> b r <

「相庭、超言えてねえ」> b r <

「何かの生き物みたいだな」> b r <

冷静に突っ込んでる場合じゃないだろ鈴木君も明石君も!> b r <
「別に大丈夫だと思うよ、出すもん出してから痛みは治まったつ

つてたし」> b r <

「なんかげっそりしてたけどな」> b r <

「大丈夫じゃないじゃん!」> b r <

なんてこった!> b r <

「つー訳で、これ、頼む」> b r <

渡されたのはノート………こ、これは、つまり。> b r <

「ここに来たって事は逃亡者ごっこは終わったんだろ?それ届けて
やってくれ。中にプリントも挟まってるし」> b r <

「えー、……ハイ」> b r <

「よし。何だかよくわからんが、まあ頑張れ」> b r <

「いつの間にか喧嘩でもしてたんか、お前ら。さっさと仲直りして
来いって」> b r <

ううう、だがお膳立てして貰った以上はやらねばなるまい。> b
r <

いつまでもおめおめと逃げ回ってる訳にもいかんしな。> b r <
ドカンと来た二度目の恋だ、ドカンと失恋するのだってまた人生。
> b r <

「いざ参る」> b r <

「戦にでも行くみたいだな」> b r <

「頑張れよー」> b r <

見送られるまま教室を出て、荷物片手に校舎を出て暫くで足を止
める。> b r <

具合悪いならお見舞い持って行かなきゃなあ。> b r <

でも腹痛なのに食べ物のお見舞いじゃダメだろうし、笹原君に花贈っても喜ばれそうにないし。>br<

あれ、別の課題が増えてしまった。>br<

「とりあえずコンビニ行こ……」>br<

近場のコンビニに入って物色して、またふと手が止まる。>br<もしかしたらあの子も笹原君ちに行つてるとかいう可能性がなくなかね?>br<

あの距離越えて迎えに来ちゃうくらいだもん、具合悪いってわかったら行っちゃってるよね!?!>br<

あーわー、ど、どうすべ。>br<

あの子私にいい印象持つてなさそうな気配だし、どうしたもんか。>br<

……とりあえずお腹にも負担なさそうな飲み物買つて行くしかないか。>br<

ノートとプリントないと笹原君も困るよね。>br<

心配だし、それにやっぱりちゃんと顔が見たい。>br<

ちゃんと聞かなきゃダメだ、だって笹原君は私の話もちゃんと聞いてくれた。>br<

それにいい加減……笹原君を避けているというこの現実にも耐え切れない。>br<

ああもう我ながらなんて矛盾か。>br<

「買い過ぎた……まあいいか」>br<

笹原君ちは大家族だしねと言いつつ両手一杯にコンビニ袋を抱えて、いつの間にやら笹原君宅にご到着。>br<

そういうばインターホンでどこだっけ?>br<

門の前できよろきよろしていたら、家の隣の道場の方でバキバキツとかいう大木がなぎ倒されるような音がした。>br<

え、ちょ、今度は何事ですか!来る度何か起きるとか何だここの家!>br<

思わず袋放り出して庭から道場の方にダッシュする。>br<

庭に面した側にある木製の扉だったようなものが、庭に散々と散らばっていた。>br<

ぽっかりと開いている状態の中を恐る恐ると覗いて見ると、中にはこちら側に背を向けて立っている男が三人、それから門下生だろう子供達を後ろに庇うようにしている笹原君が一人。>br<

――なんだ、この状況。>br<

「いいから、あのクソジジイ出せつつってんだよ!」>br<

「だからいないって言ってるだろ」>br<

道場の中にも散らばった木片を蹴り上げて男が怒鳴ると、低い声で笹原君が返した。>br<

後ろでは子供達が顔を隠すようにして皆で固まっている。>br
えっと、これは、所謂道場破りみたいなやつ、か?>br<

一歩踏み出すと木片が私の足の下でバキリと音を立てて、それと同時に一斉に視線がこちらに向いた。>br<

今の内にと考えたけど、この道場こっち側からしか出られないんだったな!なんて不便設計!>br<

「なんだ、お前」>br<

なんだと言われたら答えてやるが世の情けですが。>br<

「生憎この状況で名乗る名はない」>br<

のーさんきゅー。>br<

「お前、この坊主の女か?へえ、割りといい趣味だなあ坊主」>br<

へらへらと笑った男共は見た目私達とそう歳も変わらなさそうだ。

>br<

ううん、この辺でまだこういうのいたのか、夏前に一応言っておいたんだけどなあ。>br<

「あんたらねえ、道場に土足で入っていいと思ってんの?」>br<

入る私も勿論靴は脱ぎますよ、と。>br<

小さいのが刺さると嫌なので大きな木片に乗っておく。>br<

「相庭、帰れ!」>br<

「笹原君さあ、腹痛だって聞いたけど大丈夫？」> b r <

「いいから、こっち来んな！」> b r <

おう、いっそそっちのがダメーじ食らうんですけど。> b r <

「何、キミが俺達の相手してくれ——」> b r <

んの、と続けたかったんですね、わかりますわかります。> b r <

「え——？」> b r <

「はい次はどなた？」> b r <

私の足元に大の字で転がっている男を凝視した二人が再度顔を上げて私を二度見する。> b r <

「言っておくけどさあ、私怒ってるから、あんまり手加減出来なかつたらごめん、ねっ！」> b r <

「うわ……っ」> b r <

一匹は蹴り一発、二匹目は上段突き。> b r <

三匹目は果敢にも拳振り上げて来たから受け流して回し蹴り。> b r <

「ゲホッ、うえ……な、んだ、おま……」> b r <

最初の一人が復活して殴りかかって来る。> b r <

「相庭！」> b r <

「ぎ——」> b r <

笹原君が叫んで駆け出そうとした瞬間にはその足元に自分の拳を顔面に受けた男が吹き飛んだ。> b r <

おお、凄い威力、割りとこいつパンチ力はあったんだな。> b r <
ただこの技、自分の力がそのまま自分に返っちゃうんだよね、残念。
> b r <

「な、なん、で」> b r <

男達が口々にそう呟きながら床に這ってずるずると私から距離を取り始めた瞬間、見てしまった。> b r <

驚きとも何ともつかないような、笹原君の見開かれた目、固まった表情。> b r <

——なんだ、私やっぱバカなんじゃん、全然気付かなかった。>

b r<

その目に恋をして、その目に失恋したのに、また同じ事を繰り返してたんだ。>b r<

同じ人を二度も好きになって、ちっとも気付かなかったよ。>b r<

「お前ら、何やって――あ」>b r<

「あ？」>b r<

「あああああああああああああああああああ」>b r<

「あ」>b r<

振り返ればそこには人に人差し指突き付けて驚愕の表情のままプルプルしちゃってる人が。>b r<

「ああああ相庭悠うううううううううう！」>b r<

どいつもこいつも人をフルネームで呼ぶな。>b r<

「そういうあんたは米屋のせがれその2。久しぶり。ていうかあんたまだこんな事やってんのか」>b r<

「うっ。そ、それはどうでもいいだろ！つかお前引越したんじゃ

……」>b r<

「舞い戻って来たんだよ。で、これはあんたのお仲間でオーケー？」>b r<

「……チガ―ーいたいいたいいたいいたいいたいいたいいたい
いみみひっぱらないでたすけてっ」>b r<

「聞こえませんかーハイ元気よくもう一度ー」>b r<

「おともだちです！」>b r<

「じゃ、キリキリ撤収。あとちょっとお話がある」>b r<

「……ハイ」>b r<

米屋のせがれが這い蹲ったお友達をずるずる庭の方に引っ張り出すのを確認して、私は制服の胸ポケットから手帳を取り出して挿していたボールペンで必要事項を書き、それを破って笹原君に押し付けた。>b r<

「一応昔の顔見知りではあるから、私からもきっちり後で謝罪と弁

償させるけど、訴えるつもりがあるならここに相談してみて。相談は無料に出来るようにお願いしておく。それから、門の方にお見舞い品と鈴木君達から頼まれたノートとプリントあるから、後で回収しておいて。――道場壊して、ごめんなさい」>br<

笹原君達と、それから扉粉碎された道場に深く一礼。>br<

「な、なんなんだよ、この女……」>br<

「バカ！いいからさっさと歩け！こいつに逆らうと碌な事がねえんだよ」>br<

「碌な事してないのはあんたでしょ、魚屋のせがれ」>br<

「米屋だよ！」>br<

男四人の背中叩いて歩かせて、夕暮れの中を家に帰るののしよっぱい事ときたら。>br<

終わった――完全に完璧に終わった、聞くまでもなくまたしても終わった。>br<

努力の日々も空しく、やっぱ人はそう簡単には変わらないらしい。

>br<

「わざとらしくトボトボすんな、シャキシャキ歩け」>br<

「ち、力が入んねえんだよ……お前何者だよ」>br<

「相庭悠だよ、兄貴のチーム解散させた相庭悠っ。だからこの女を見たら一瞬で逃げろつつたろ！？」>br<

「名前しか聞いてねえよ！」>br<

虚しい内輪揉めか、それすらどうでもいい……って訳にもいにかんか。>br<

「ホラ、そこ家だから入れ」>br<

「マジ殺さないで！更正します！」>br<

「そうだねえ、昔あんたが憧れてた兄貴の一派はそう言って見事更正したらしいねえ。あんたも少し真面目にやったらどうなの、八百屋のせがれ」>br<

「米屋です！」>br<

何もかもが懐かしい、しかしあの頃とちっとも変わり映えしてい

ない自分に絶望した!>br<

家に入ればスキップで出迎えて来る誰かも進歩がないと言えないな。>br<

「うわああああああああ相庭天地iiiiiiiiiiiiいいいいいいいいいいいい」>br<

「あれ、お前、酒屋のせがれ?」>br<

「米屋だよおおお!」>br<

最早どうでもいいなそれは。>br<

「悠たん、何こいつら。もしかして久しぶりのやんちゃっ子?」>br<

「そうだね。親父様が言うところの説教クソジジイの道場ぶっ壊した」>br<

「俺にとぼっちり来んだろそれ!?!?!?!おい、クソガキ共、ちよつとこのダンディが世間の厳しさ教えてやる」>br<

「ぶわああああああああああ」>br<

四人纏めて引き摺って行く親父様が振り返る。>br<

「悠、どした?」>br<

「べーつーに。おにぎり作っておくから、さっさと教えちゃいな」>br<

「らじゃ!」>br<

キッチンに引っ込むと、奥の部屋からバキバキドコンという音がする。>br<

ふむ、逆エビ固めにDDTか、ナイスチョイス。>br<

「あーあ、もう」>br<

タイマーしていた出来立ての白米を取り出して握る。>br<

ばたばたばたばた、その上に目から落ちる。>br<

塩を使う事ないから、丁度いい。>br<

ばたばたばたばた、止まらない。>br<

「もー……バカじゃん」>br<

バカは死んでも治らないって言うけど、本気で一生そんな気がし

て来た。>br<

思えばちっとも変わってなんかいなかったんじゃないか。>br<
あの頃と同じ、笹原君のあの目もあの表情も。>br<
きつと憶えてるよね、むしろトラウマになってるかもだね。>br<

同じ年頃の女が自分よりデカイ奴にかかって行って一瞬でのしたら
トラウマにもなるよね、しかもこれで二度目だもんね。>br<
道場の子達もそうになってなきゃいいんだけど……これも謝らなきゃ。
>br<

あーあ、あーああ。>br<

「悠たーん、終わったよー、パパンお腹空いたー」>br<

……あーあ。>br<

「あ、悠、チャイム鳴ってる」>br<

「聞こえてる」>br<

とぼとぼと足を引き摺って玄関に行っておもむろにドアを開く。

>br<

「どちらさーま？」>br<

何故、ここにいる？>br<

「あの、こんばんは」>br<

……田辺、かすみさん。>br<

>br<>br<

19. 一難去らずにまた一難

えーと、ええーと、……ダメだ、この状況がよくわからない。>br<

なんでこの子家にいるんだ？ どうしてここ知ってるんだ？ ていうか何で来た？>br<

「ごめんなさい、突然来て。ちょっと、貴女にお話したい事があって」>br<

「えっと、はい、えーと、上がります？」>br<

「ごめんなさい、お邪魔します」>br<

こくと頷いた田辺さんはおずおずと玄関の中に入って靴を脱ぐ。>br<

えっと、……よくわからんけど、とりあえず明石君、大当たりでした。>br<

いやまあ屋内だし滅多な事は出来ないと思うけども。>br< いや、何を話しに来たって？>br<

「あの、二階上がったとこでちょっと待ってて、お茶淹れて来るから。えっと……」>br<

「お構いなく。あ、田辺かすみです、私。同年」>br<

「あ、はい。相庭悠です」>br<

「知ってる。勝利君がそう言ってたから。それで、貴女の名前聞いて、調べて来ちゃったの。ごめんなさい」>br<

「いえ……じゃあ、あの、待っててね」>br<

そそくさとキッチンに引っ込んで、思わず深呼吸。>br<

いやまさか自宅に来るとは明石君でも予想出来なかったに違いないよ、確かにこりゃ突飛だ。>br<

「悠、友達か？」>br<

「あ、うん。あいつら上に寄越さないでね。それから、直刃さんとか行って謝らせて来て。いないって言ってたから、もう少ししてか

らでも」> b r <

「えー、俺があ？」> b r <

「別に親父様は関わってるんじゃないからいいでしょ。私も後でもう一度行こうと思うけど、ちょっと話し長引くかもわかんないし」

> b r <

「友達じゃねえな……浮かない顔」> b r <

「まあ、友達ではないな。とにかく、よろしく」> b r <

お茶とお菓子をトレイに載せて二階へ上がると、壁に凭れていた田辺さんが背を離して会釈して来る。> b r <

それにこちらも返しながら二人で部屋の中に入った。> b r <

「あ、あの、着替えていいよ？ ちよっと裾汚れてる」> b r <

「え、ホント？ ああ、じゃあごめんね、ちよっと隣で着替えて来る。それ食べてて」> b r <

タンスから服を引っか抜いて隣の部屋で着がえを済ませてから戻ると、田辺さんは何とも大人しく正座をして待っていた。> b r <
な、なんとなく漂う緊張感。> b r <

「あの、本当に突然ごめんね。でも私、どうしても……」> b r <

「いいよいいよ。それで、話って？」> b r <

田辺さんはじつと俯いて、それから漸く少しだけ私を見上げる。

> b r <

「勝利君の事、取らないで欲しいの」> b r <

「え？」> b r <

思わず私が仰天している間に田辺さんは大きく息を吸い込んで一気に話し始めた。> b r <

「勝利君が教えてくれないから、あの学校の子に聞いたの、貴女の事。凄いいね、誰に聞いても貴女の事知ってた。面白いって、皆言ってた」> b r <

面白がられているのはわかっていたが、目に浮かぶようだチクシヨー。> b r <

どうせイロモノゲテモノですよ。> b r <

「友達沢山いるんだよね？それなのに勝利君まで取らないで欲しいの。貴女可愛いし、彼氏なら他に幾らだって出来るでしょ？」>br<

私、彼氏を百人も千人も作るつもりはありませんが……。>br<

「私には勝利君しかいないの。お願い。お願いしますっ」>br<

「あ、頭上げてよっ」>br<

な、なんつー……突飛な……。>br<

ヤバイ、未だ嘗てのどんな攻撃よりこれのインパクトに勝るものなし。>br<

「いやあの、取るも取らないも、私と笹原君そういう関係じゃないから」>br<

「でも貴女は勝利君の事好きなんでしょ？」>br<

そりゃ、笹原君を普通に下の名前で呼んでいる貴女にハンカチを噛み裂きたい気持ちになるほどには。>br<

「好き、だよ。田辺さんは？」>br<

「……私には、勝利君しかないの。勝利君だけなの」>br<

あれ、なんか混乱して来た。>br<

気持ちはわからないでもない、好きな相手に仲良くしてる異性がいたらそりゃあんまり仲良くして欲しくないと思う。>br<

前に中川ちゃんから聞いたのもそういう事だろうし、私もそう思わない訳じゃない、むしろガンガン今思ってます。>br<

でもなんでこの子、さっきから笹原君「だけ」って言うんだろう。

>br<

別に田辺さんだってその気になれば他に好きな人とか彼氏くらい作れるだろうと思う、笹原君が好きだからそう言ってるのかと思ったけど……。>br<

「なんで、笹原君だけなの？」>br<

「わ、私、貴女みたいに可愛くないし、友達も、いないし」>br<

友達は確かにいないようけども、だからってなんで笹原君だけがその理由に当て嵌まるんだ？>br<

笹原君は容姿や友達がいるかどうかで人を好きになる人じゃあないと思うけど、でもぶっちゃけ他にだってそういう人がいない訳じゃないだろうに。>br<

なんでこの子、好きだから、って言わないの？>br<

「どうして私が笹原君を取るなんて思ったの？」>br<

「だ……って、貴女、勝利君といつも一緒にいたし、あの日だって、勝利君は貴女の事追いかけてた」>br<

消えそうな声を何とか拾って、思わずビックリ。>br<

あの日って、もしかして私がカニ食べた日だね。>br<

笹原君、追いかけて来てくれてたんだ……こんな状況下でも嬉しい複雑な乙女心と秋の空。>br<

「あの日、笹原君と何か話した？」>br<

田辺さんは間を置いて小さく首を縦に振る。>br<

「勝利君、いつもあんまり話さないから、ちょっとだけだけど」>br<

「田辺さんはいつも楽しそうに話しかけてるよね？」>br<

「だって楽しいもの」>br<

ああああなんだこの違和感、自分の希望と願望がそう思わせるだけなのか。>br<

なんかこの子と話していると根本的なところが噛み合ってる気がしない。>br<

こっちもなんて言ったらいいのか、迷う。>br<

「だから、確かに私は笹原君が好きだけど、笹原君は私の事友達と思ってくれてるだけで」>br<

今日のもそれともうだか怪しいもんですがね。>br<

……今は泣かない、我慢の子！>br<

「だったらどうしてあの時貴女を追いかけたのよっ！」>br<

さっきまでの田辺さんの口から出たとは思えない叫び声に思わず全身が揺れた。>br<

はっとした彼女はすぐに勢いをなくしてまた俯いてしまう。>br<

ああつ、俯いてだんまりよりは叫ばれた方がマシッ。>b r<

「あー、いや、笹原君優しいからじゃないかな。えっとほら、笹原君的には私も送ってくれる気持ちだったと思うし」>b r<

「……ねえ、お願い。もう勝利君に甘えないで」>b r<

うっ、キタ、今のガツンとキタ。>b r<

「うん、……そだね。ねえ、笹原君と……付き合ってる？」>b r<

暫くして、田辺さんは首を、縦に、振った。>b r<

そして私は、振られた、と。>b r<

笑えねえっーの……はは。>b r<

「あ、お菓子、食べて」>b r<

「ありがと。……ごめんね、こんな事言って。でも勝利君は気を遣ってるだけだと思う。相庭さん、凄く可愛いスタイルもいいし、すぐ彼氏出来るよ。ちゃんと相庭さんの事好きになってくれる人」>b r<

「うん……」>b r<

そう、だといい、んだけど、な。>b r<

なんだろう、うわー、一人になりたい。>b r<

「えっと、あの、時間大丈夫？ 駅まで送るよ」>b r<

「あ、ううん、いいの、近くのバス停使うから。じゃあ、私帰るね。ごめんね、こんな事言って」>b r<

「ううん。でもやっぱり、途中まで送らせて。暗くなって来たし」>b r<

笹原君の……カノジョ……に、何かあったら、笹原君が悲しむよ。>b r<

>b r<

「お邪魔しました」>b r<

下に行って玄関でそう言った彼女の後を追って隣を歩く。>b r<
下にいなかったところを見ると親父様ちゃんと連れてったのかな。>b r<

私も行きたいけどもう遅いし、明日改めて行こうかな。>b r<
でも笹原君はもう私と顔合わせるのも嫌かな。>b r<

あー……。>br<

「あ、もうこの辺でいいから。それじゃ」>br<
そう言って田辺さんが頭を下げようとした時、声が聞こえた、聞こえてしまった。>br<

「相庭！」>br<

うわ、しかもこっちご指名ですか……。>br<

「勝利君……」>br<

「田辺？なんで相庭と一緒に……」>br<

ううー、ダメだ、イカン、一人になりたい、頼むよまだこの2ショットに心が耐えられないんだっ。>br<

「相庭、鞆忘れてっただろ」>br<

「あ、……ごめん、ありがとう」>br<

のろのろと差し出された鞆を受け取る。>br<

「それから、ちょっと話しある」>br<

「今日の事なら、明日改めて私も謝罪に伺ー」>br<

「そうじゃなくて」>br<

「あの、田辺さん送ってってあげて。話は明日ちゃんと聞くから」>br<

すみませんチキンですヘタレです、もう限界です。>br<

人生二度目のダッシュの時、それが今のようです。>br<

>br<>br<>br<>br<>br<>br<

と、なんだか恒例にいつもの公園に来てしまったという……ワンパターン。>br<

私が前に通ってた公園はなくなっちゃってたんだよなあ、でっかいマンションが建っててビビッたの何の。>br<

かしなんだ、来ておいてあれですけど、夜は流石に冷えるな。>br<

えーと、そうだ、入口にあった自販機で何か買おう、鞆返してもらって助かった。>br<

もう会いたくもなかったかもしれないのに、やっぱり笹原君は優し

いなあ。>br<

買ったホットミルクティーの缶でぬくもりつつ公園の端にあるベンチに座る。>br<

じつと手の中の缶を見下ろしながら、出て来るのは溜息ばかり。>br<

明日はちゃんと笹原君の話も聞かないと、それで直刃さんにも謝らないとだ。>br<

米屋も行っておこう、こんな事なら兄の方だけでなく昔の内に弟の方も更正させておくんだった、あそこの親父さんまた怒鳴り過ぎて血圧上がらなきゃいいけど。>br<

ちゃんとしなきゃ、田辺さんに言われるまでもなく笹原君にもう甘えてられない。>br<

もしかしたら友達付き合いはしてくれるって言うってくれるかもしれないけど、田辺さんにああ言われた以上それも出来そうにないな。>br<

でもずっと好きだった子と恋人同士になれたんだもん、これからは笹原君は何の気兼ねもなく笑えるよね。>br<

あとは私のケジメをつけるばかりですが……めり込む。>br<ああもう何度目だよ溜息、脳内が酸欠になりますって。>br<

こういう危険状態には体が察知して脳とかが自然回避命令に出るものじゃないんですかね、聞いてますか相庭悠（脳）さん。>br<

いやいや、おめでたい事ですよ、だって好きな人の片恋が成就したんだよ。>br<

おめでとうって、言わないとな。>br<

「……言えるか……？」>br<

「何を」>br<

「いや、だから、こりゃめでてえなど。いや違う、おめでとうって」>br<

「何かめでたい事でもあったのか」>br<

「あー、まあ、私じゃないのが残念無念」>br<

「で、そろそろ戻って来い」>br<

「はあ、どこに」>br<

「ここに」>br<

ミルクティーの缶と会話をしていた私の両頬が挟まれて持ち上げられた。>br<

「わあ」>br<

「おい、どうした、いつものアホみたいなりアクションがないぞ」>br<

「すみません。あれ、笹原君、なんでここに？」>br<

私の目の前に膝を折った笹原君は深い溜息をついて自分が着ていた上着を私の背中にかけようとする。>br<

「いやいやいやいや！ダンナ、そりゃいけませんぜ！」>br<

「流石にお前でも風邪くらいひくだろ」>br<

「そりゃひくけどね？こういうのはもうダメですよダンナ」>br<

「何がダメか知らんがいいから被ってろ」>br<

被るというより袖を使って巻き付けられてしまった……ここですかさかの緊縛プレイなんて。>br<

で、カノジョさんを近場のバス停とは言え送って戻って来たにしては時間がかかり早いような？>br<

恋人同士は別れ際にもイチャイチャするもんなんじゃないんですかねって言ってまためり込む自虐ダメゼッタイ。>br<

「全く。さっきお前んとこの親父があのだ連中連れて謝らせに来た」>br<

「うん。私も明日直刃さんに謝りに行くよ」>br<

「お前が謝るとこ一つもないだろ」>br<

「なくもないだろ」>br<

「ない。ガキらがいたから俺は動けなかった。だから、正直助かった。情けねえけど」>br<

「……皆、怪我とかない？」>br<

「ああ」>br<

よかった、でもトラウマを植え付けたかもしれないし、笹原君にはまた引き起こしちゃったかも。>br<
そういえばなんか普通に会話してくれてるんですけど、我慢とかさせてるのかな。>br<

ああ違うか、優しいから、気を遣ってくれてるんだっけ。>br<
「本当に、ごめんなさい」>br<

「だからお前はさっきから何謝ってんだって。大体お前が扉壊したんでもないし。むしろこっちが謝って感謝すべきところだろ。実際親父達もそう言ってる。だから俺がお前の事呼びに来たんだ」>br<
「暴れちゃったし」>br<

「そうしてくれて助かったつつってるだろ。あのままだったら俺が下手に動いた挙句ガキらが怪我してたかもしれねえし」>br<
「トラウマになってない？」>br<

「は？」>br<

「皆、あれ見て」>br<

少し沈黙した笹原君は漸く思いついたようにああと声を上げた。
>br<

「そりゃ驚いたみたいだけどな。あいつら後でえらい騒ぎだったんだぞ？」>br<

「申し訳ないです」>br<

こりゃ一人一人の親御さんにまで謝罪か。>br<

「いや、だからそうじゃなくて。お前の技がすげえて、どうやってあれ出来るんだって大騒ぎで」>br<

「古武術の応用編」>br<

「そうなんか。あれ確かに凄いな、他のもお前軽く蹴ってるって言うか、逆にゆっくりで触ってるようにしか見えなかった」>br<
「接触してから力を一点集中するから、逆に速さとか勢いは要らない」>br<

「そういうもんなのか」>br<

……あれ、なんか話が……。>br<

「あれってさ、俺も教われるか？」> b r <

「私で、よければ」> b r <

「じゃあ頼む。型がすげえ綺麗だし、無駄を省いてるってのが気に入った」> b r <

「そりゃ、よかった……」> b r <

あれ？え、ちょっと待て、この人は自分のトラウマに自ら進んで行く超人なので？> b r <

もしかして……気付いて、ない？もしくは昔のあれを憶えてない？更にもしくはトラウマ過ぎて記憶にも残ってない？> b r <

「で、まああの連中には金払って貰って、ついでに親に引き取らせました。ジジイがちょいふんだくった金で寿司頼んだから、お前も来い」> b r <

「怖く、ない？」> b r <

「何が？」> b r <

立ち上がった笹原君は手を差し出す。> b r <

ぼんやりそれを見ていたら、手が近付いて来て私の片手が引っ張り上げられた。> b r <

「ちょ！だ、ダメだ！もうこういうのはイカンよ！」> b r <
慌てて繋がれた手を離そうとしたら、逆に強く握り返されてしま
う。> b r <

「だから何言ってるんだって。コラ、今は暴れんなっ」> b r <

ぐっと手を引かれた瞬間に腕が突っ張って、巻かれていた袖が解
けた挙句上着が落ちてしまう。> b r <

「ごめんっ。あ、何か落ちた」> b r <

上着から零れた小さい物を上着と一緒に拾って砂を払う。> b r <
ガラス玉？——いや、待て、これ……。> b r <

「こ、こっここっこ」> b r <

「ニワトリか？」> b r <

「これどこで見付けたの！？これ！私の！昔失くした私のトンボ玉
！」> b r <

ぎゃー！お懐かしゅうございます！約十年ぶりくらいですね！>br<

「って、痛！」>br<

「あ、悪い」>br<

思いつ切り今手え握られたと言うより潰される勢いでしたよ。>br<

「今なんつった？」>br<

「え、あ、これ、私が昔失くしたトンボ玉。ホントはね、ここにゴム付いてて、髪飾りだったの。水色のガラスともう一つトンボ玉も付いてただけど。ガラスの方は割っちゃったんだよねえ」>br<
いやあ、そういえばあの時失くしたと思ってたけど、笹原君が拾っててくれたのか。>br<

ちよつといい事あった、よかった。>br<

「なんでお前の物だってわかるんだ？」>br<

「ん？だってこれ、五丁目のガラス工房で作って貰ったんだもん。世界に一つしかないんですよ。ホラ、こっちの花の中央にUって彫ってあるでしょ。私の名前のつもりで入れて貰ったの」>br<

笹原君は私の手からトンボ玉を奪い取るなり恐ろしいほど真剣な目でじっと手の中のそれを見た。>br<

うう……この真剣な目もう人のもの………あんま見ないようにしよ、うっかり惚れ直す。>br<

「五丁目のガラス工房って、あの偏屈ジジイがやってるところか？」>br<

「うん。こっち引越す前に来た時ちらっと会ったんだけど、今も相変わらず偏屈だったよ。でも記憶力はいいんだよね、私の事もその事も憶えてた。失くしちゃったって言ったらまた作ってくれるって言ってたから、いい人ではあるんだけど」>br<

よかったー、なんかちよつと地獄に仏的な気分。>br<
だってこれ凄く気に入ってたんだよ、あの職人！て感じの親父さんと物凄い相談して一緒に製作したんだから。>br<

あの頃私が唯一持ってた女の子アイテムと言っても過言じゃないし。
> b r <

失恋現場で失くしちゃって物凄いがっかりしたっけな。 > b r <
でもまた会えて嬉しいよ、キミ。 > b r <

「一杯探したんだけどもう見付からないと思ってた……笹原君が拾
ってくれたんだね、どうもありがとう！」 > b r <

「……それ、俺が持ってたんじゃない」 > b r <
え？ > b r <

「それは、田辺が自分のだって言って持ってたやつだ」 > b r <
ええ？ > b r <

> b r < > b r <

20. ガマンも必要!

いやいや、いやいやいやいや! ないって、ないないない! > b r <
私が勢いよく首を振ると、笹原君はまたじっとトンボ玉を見てから顔を上げた。 > b r <

「もう一つ付いてたって言ったな。どんなやつか憶えてるか?」 > b r <

「えっと、これよりもちょっと濃い水色で、あっちは白じゃなくピンクの花だよ」 > b r <

ピンクとか嬉し恥ずかしながら親父さんに言ったんだよなあ。 > b r <

実は好きなんですけど、あれ以来こっちも軽いトラウマでピンク色なんて他に持った事ない。 > b r <

あっちも凄く可愛かったんだよ、っていうか実はあっちの方が気に入ってた。 > b r <

笹原君はまたしても鬼気迫る表情で私を凝視する。 > b r <

ななななななんすか! 私がピンクの花の髪飾りを持っていた事に何か問題でも!? > b r <

あると言われたら流石に人差し指を突き付けて高らかに異議ありいいいいいいいと叫ばなくちゃならない訳ですが。 > b r <

「これ、まだちょっと預かっていいか?」 > b r <

「うん。……あ、でもそれ田辺さんが持ってたって」 > b r <

「確かめる。そういえばなんで田辺と一緒にだったんだ?」 > b r <

「聞かなかったの?」 > b r <

いや、そりゃ来た理由は言えないか。 > b r <

恋は時折突飛な行動に出させるもんだよね、うん、覚えがあり過ぎて何も言えんわ。 > b r <

「聞いても答えないんだ、あいつ。この辺の昔の事ばっかで、自分の事も話したがないし」 > b r <

あーうー、それは確かにそうかもしれない、ちよつと自分からは
言い辛いよね。>b r<

「そうだ、笹原君、お腹大丈夫なの？」>br<

「ああ、今は別に。ところでここんところ、かなり逃げ回ってくれたな」>br<

がつつりと手を捕獲され、事情聴取開始らしい。>b r<

「えー……思春期ですから箸が転んでも逃げたい時があるよね」>

「俺から？」
 >br<

「あー、そう、じゃなくって。なんと云いますか、誰にも縛られない盗んだバイクで走り出す的」>br<

「相庭って、昔から武術とかああいいうのやったのか？」> b r <
また急に話題変わるとか一体何なの、この会話の先に何があるの
やら。> b r <

とりあえず頷くと笹原君は眉を寄せて考え込むように視線を逸らし、やがてまた私を見る。>br<

本当に何で気付かなかったのか自分のアホっぷりには完敗で乾杯です。>br<

だってもうこの目なんて全然変わってないところもいいとこだよ、流石私が二度惚れただけある、その目に見られると魂が抜ける。>

顔とか背とか体格とかはまあすっかりあの頃とは変わってるけど。

$$\begin{matrix} > \\ \mathbf{b} \\ \mathbf{r} \\ < \end{matrix}$$

しかしあんな小さくて如何にも内面的そうだった子がこうなるとは……人間って神秘。>br<

でもそうか、優しそうだなと思った印象も変わってなかったって事か。
 $\gt br<$

あああああだから惚れ直してどうするううううううう
うううう。>b r<

「悠たあああああああばばばばばばばば」

ばばばばばば」>br<

「叫ぶな、ご近所迷惑」>br<

飛び込んで来た親父様にアイアンクロウをかますとあっさり完全沈黙だ。>br<

「こんなところにいた！勝利兄ちゃん、悠さん、寿司来たよ、早く食おうぜ。遅いから迎えに来ちゃったよ」>br<

「お前ら待ちだってクソジジイが煩えんだ。悠たん、早く！パパ腹減り過ぎておかしくなっちゃおうう」>br<

「それで平常運行でしょ」>br<

やれやれ、なんかちよっと助かったようなそうでもないような。

>br<

しかし笹原君の話したい事ってさっきの事だったんだろうか？毎日人追いかけてまで聞きたがる事か？>br<

でも私が古武術やってるのは今日わかった訳で……あれ？>br<

親父様に引っ張られながらちよっと振り向くと、笹原君と目が合った。>br<

ただじっと、真っ直ぐに私を見つめている。>br<

どうしてなんだろう。>br<

あの時も、今日も、確かに笹原君の顔には驚愕が浮かんでいたはずなのに、私を嫌悪していたはずなのに。>br<

今の表情からは、いっそも読み取れない。>br<

>br<>br<>br<>br<>br<>br<

ひとまず、表面上は元通り。>br<

「本当に表面上ね」>br<

「それは言わないお約束でしょマダム。一杯いかが？」>br<
紙コップにレモンティーを注ぐと、やはりマダムはワイングラスよろしくそれを器用にくりりと回す。>br<

「逆に面白いからいいけど。今までと立場逆転してて超笑える。あんた達見ると飽きなくていいわあ」>br<

だからオモロオカシイ見世物じゃねえっの。>br<

「色々言われてるよ。笹原君が本気になり過ぎて逆に悠が引いちゃったとか、悠に他に好きな人が出来たとか、ある意味これも悠の作戦の一つだとか」>br<

「あっはは！こいつに駆け引きが最初から出来てたんならもっと上手くやるわよねえ」>br<

「ねー」>br<

久しぶりに三人で昼食だって言うのに……笑い合う友人達の声が何故か心に痛いんですけどこれなんて現象？>br<

「で、実際どうなの。あの大魔神が自らあんたに声かけにご光臨してんのに、あんたの方はなんか引き気味じゃない。興味失せた？」>br<

「NOT失せた！いや、うう、だから困る」>br<

「え、やっぱオトモダチでいましょう路線？」>br<

「始発が出たのかどうか定かではないんですが。んー、しかし別の路線の始発はすでに出たようで」>br<

「悠、意味わかんない」>br<

「察して下せえ、頼子さん」>br<

笹原君がいつ言うかいつ言うかとこっちも気が気じゃないもんで、なんかこうつい上の空に。>br<

こうなったらもう笹原君にも自ら聞くしかないんだろうか。>br<
カノジョさん的には私と笹原君が友達でいるのも嫌だって感じだったし、でもそれを笹原君にどう言ったもんか。>br<

難しい、どう転んでも恋愛は難しい。>br<

失恋して後は自分の気持ちにケリつけようねハイ終了って訳でもないんだな、逆に厳しい。>br<

「でも最近笹原一人で帰ってるみたいじゃない」>br<

そうなんですよねえ、それも解せないと言うか。>br<

でも笹原君が流石に校門での待ち合わせは止めさせたただけだとも思う。>br<

カノジョさんが納得する友達の距離って難しいな。>br<

あの調子じゃ私と笹原君が話すのもダメって感じだったし、でも笹原君は気にしてないみたいだし……うううう。>br<

「ダメだー、ストレス堪り過ぎてここ最近マジで辛い。ねえ、自ら失恋確認しに行くのってアリ?」>br<

「まあ、私ならうざいけどね。空気読めよって感じ」>br<

相庭悠は12000ポイントのダメージを受けた!>br<

アキ様と言う名のラスボス是不敵に微笑んでいる!相庭悠はまごまごしている!>br<

「やっぱりあの子と付き合ってるの、笹原君」>br<

「うー、あの子はそう言ってた。笹原君は話し出してくれないんだけど」>br<

やっぱり気を遣われてるなら、私から特攻すべきだよな、うざいけど。>br<

「別に聞くくらいいいんじゃない?悠はさ、笹原君に事実言って貰って、区切りつきたいんでしょ」>br<

「そう、なのかな。うん、でもそうしなきゃなんだよね。笹原君てバイマイチわかってないみたいって言うか、もうちょっとカノジョの気持ちも考えてあげろよって言うか」>br<

「あいつそこんとこ天然ぽいわよね。カノジョがいても友達付き合いはそのままって感じじゃないの」>br<

それを肝心のカノジョさんが嫌だって言うんだからダメなんだよなあ。>br<

私の区切りはともかく、まず笹原君にとってもそこが一番重要のはずだ。>br<

何せ笹原君があればほど好きだって言ってた人なんだから、そんな人が嫌だという事はしれないと思う。>br<

「よし、さり気なく言ってみよう」>br<

「あいつにそれで通じるかねえ」>br<

「あはは。笹原くんてさ正論で、友達友達、カノジョはカノジョ、とか真顔で言いそう」>br<

……言いそう。>br<

溜息を堪えつつも午後の授業を終えて、笹原君とこのクラス行ってみたらすでに帰ったと言われ。>br<

タイミングもよろしくない。>br<

なんと言ったらいいもんかなあと家へ帰りながらごにやごにや頭の中で言葉を捏ね繰り回す。>br<

田辺さんという人が出来たんだから、これからはあんまり話はしないようにしよう、とか？>br<

あああああ、なんでとかあつさり言われそう、しかも私もそんな事言うの微妙だ。>br<

私から田辺さんの学校生活を話す訳にもいかんし、どうやったら納得してもらえるのか。>br<

つか、私がそんな話し切り出すのも何か変じゃないですかね。>br<

ここはホレ、カノジョ出来たからやっぱお前ムリとか言われるとこなんじゃないですかね。>br<

そりゃあ複雑だ、正直辛い。>br<

でも全然話せなくなったりするのはもっと辛い。>br<

でもでもカノジョさんとしたらそれ以上に辛い訳で……あぎやぎやぎやぎやぎや。>br<

「うがあー!」>br<

「道端で奇声を上げるなよ、お前は」>br<

「上げたくなるお年頃!……うわあ、笹原君」>br<

「最近そのリアクションばっかだな……」>br<

そ、そんな悲しそうな顔するなよう!こっちも色々複雑な乙女心が摩訶不思議なアドヴェンチャーで林檎色のモンスターが駆けて来たりナッツの匂いのエイリアンが飛んで来たりするのよ!>br<

顔見れて嬉しいよ、泣きたいくらい嬉しいよ。>br<

でも寂しい、今までのように駆け出しちゃダメって線を引かれたから。>br<

ああ、首輪引かれる犬の気持ちがよくわかる……息苦しい。>br<

「あ、えーと、逆ストーリーキングで待ち伏せ?」>br<

「そうなのよもん」>br<

「冗談だからそんな怒らなくてもってマジすか!……な、何かご用?」>br<

「五丁目に付き合え」>br<

ワオ、命令されちゃったわ、バウワウ。>br<

「五丁目って、例の?」>br<

「昨日行ったら閉まっていた。それにどうせならお前も一緒のがいいだろうと思って」>br<

な、何しに行くんだ?>br<

ドキドキしつつも探偵の助手よろしく笹原君の一步後ろを付いて行く。>br<

「なんで下がるんだよ」>br<

「え、えーと、なんででしょうね」>br<

もー!この際逆に察しろよ!カノジョ持ちの男が違う女と隣並んで二人で歩いてたらアレでソレだと誤解されるだろうが!>br<
キー!こういうところちょっとやだ!あークソ、でも嫌いでもない!キイッ!>br<

「あそこだよな?あ、今日は開いてる」>br<

「お、久しぶりー」>br<

天の助けとばかりに見えて来た店に駆け寄ると、気配に気付いたのか奥にいた親父さんがこちらを振り返った。>br<

店の入口でも熱気が籠ってて、どこか懐かしい匂いがする。>br<

「悠坊!」>br<

「おっちゃん、数ヶ月ぶり!」>br<

「なんだよ、ちっとも顔見せねえで。いつでも来いっただろ」>br<

赤ら顔で汗を拭きながら出て来た親父さんは大きな声で笑いながら私の頭を撫で回す。>br<

「こんでも学校とか忙しかったんだよ」>br<
「へえ、そりゃ難儀なこったな。なんだ、カレシ連れて来やがったのかあ」>br<

ありがちに誤解されてしまった、おっちゃん……今その誤解は相庭悠に痛恨の一撃です。>br<

笹原君はちよっと驚いたようにしながらも中に入って来て会釈する。
>br<

驚くよなあ、この親父さん、テンションが仕事モードの時は物凄い仏頂面の無愛想だから。>br<

「で、新しいの作りに来たんだろ？」>br<

「いや、今日はちよっと別の用で」>br<

そう言っただけで笹原君を見ると、笹原君はポケットの中からハンカチに包んだ物を親父さんに差し出した。>br<
って、え、それ。>br<

「え、え！？なんで！？なんで両方持ってたの！？」>br<
この間笹原君から見せられたトンボ玉の横に、もう一つトンボ玉が並んでいる。>br<

今でもつやつやとした丸いそれにはピンク色の花が咲いていた。>br<

「これ、ここでこいつが作って貰った物ですか？」>br<

「あー、そうだなあ。なんだ悠坊、失くしてねえじゃねえか」>br<

いやいやいやいや、実際失くしたんですって！もう一つの方まで拾ってくれてたなんて初耳ですって！>br<

「こいつ昔猿みたいな奴でよお。それがこれ髪飾りにしたいとかぬかしやがって。俺あこいつも色気付くようになったもんだって感心したもんよ」>br<

「超余計なお世話！」>br<

「まあお前、あのクソ坊主の娘だからなあ。あのまま一生猿みてえの育つのかって、こんでも心配してたんだぜ」>br<

自分のだつて言ったのかわかんないけども。>br<

「そういえば、もう一つも田辺さんが持ってたの?」>br<

「いや、これは……あ、バス来た」>br<

さっさと二人分の料金払って乗り込んでしまう笹原君はそれから椅子に座ってじつと窓の外を眺める。>br<

その隣で私も訳がわからないまま同じく窓の外を眺める。>br
えーと、この展開の終点はどこですか?>br<

本気で何だかよくわからないが、折角田辺さんに会いに行くんだ、これが機会と思って帰りにちゃんと笹原君に言おう。>br<

また一緒にいる事になっちゃって田辺さんには申し訳ないけど、一緒に出かけるのはきつとこれで最後になるから。>br<

この一回だけ、目を瞑って欲しい。>br
こっちこそ、ごめんね。>br<

「あの人、フツーだったな。前に見た時通り掛っただけなのに怒鳴られてさ。職人てそういうもんかと思ってた」>br<

ふと笹原君が言うのにちょっと笑ってしまう。>br
「仕事モードじゃなければあんな感じだよ」>br<

まあ余計な事までべらべら喋る口を持っていやがるのは私も今回初めて知りましたが。>br<

「やっと笑った」>br<

小さい溜息と共に呟かれた言葉に顔を上げると、隣の笹原君はもう窓じゃなくて私を見てた。>br<

あ……、心配とか、掛けちゃってたかな。>br<

「え、えーと、なんだ、最近、その、ごめん。ちょっと色々情緒不安定な乙女心なのですよ何せ秋なのだから」>br<

「よくわかんねえ理屈だな」>br<

「秋はメランコリックになるとか言うでしょ」>br<

「道場での事、逆に気にしてんのかと思った」>br<

よかったって、そんな風に優しく言わないでよ。>br<

そんなだからこっちの欲も出ちゃうんだよ……なんて、笹原君が悪

い訳じゃないのに。>br<

まるでエサを前にお預けをされている犬だ、バウワウ。>br<

「ねえ、帰り、私もちよつと話したい事ある」>br<

「ん、わかった」>br<

ぎゅつと心臓が締め付けられるように痛む。>br<

もっとうしていたい、色んな事話したり一緒にいたい。>br<

友達でも嬉しいのに、苦しい。>br<

笹原君の一番大事は別の人だと思うと、寂しい。>br<

でも笹原君が笑ってくれるならいいや。>br<

自虐だろうが偽善だろうが何だろうが、その方がやっぱずっといい。

>br<

大事な彼女の望みなんだもん、それがわからないでも叶えられないでもない笹原君じゃないって信じてるよ。>br<

だからちよつと女友達は遠慮しなきゃだね、それも友達ってもんだよね。>br<

うん、待て、せめて後数時間は出番を待ってくれ、その時が来たら今度は思いつ切り垂れ流しさせてやる。>br<

涙も鼻水も、だからちよつと今は「待て」だ。>br<

>br<>br<

21. 悲鳴

暫くバスに揺られてそこから十分くらい歩いた先の公園で、すでに待ち人はいた。> b r <

笹原君がバスの中でメールしてたのは田辺さんにだったのか。> b r <

う……暗くなって来た中一人佇む田辺さんの悲しそうな視線が突き刺さって痛い。> b r <

ちよつとだけ我慢して下さい田辺さん！なんかわからんけど、笹原君はこれを確かめないと気が済まないようであります！> b r <

「どして……相庭さんも一緒なの？」> b r <

悲しそうに笹原君を見上げる田辺さんは、やっぱり悲しそうな声でそう言う。> b r <

で、ですよ、ホントぶっちゃけなんでお前までくっ付いて来てんじゃコラと睨み効かせたいところですよ。> b r <

「これが、相庭のだったから」> b r <

笹原君が差し出して見せたハンカチの中身をじっと見て、田辺さんは暫くしてから泣きそうな顔をする。> b r <

「なんでその人の言う事信じるの？これ、私が持ってたんだよ？」

> b r <

「じゃあこれ、どこで買ったんだ？」> b r <

「憶えてないよ。相庭さん、こういうの止めてって私言ったよね？」

> b r <

そう言われても正直こちらこの件では巻き込まれ組なんですけども。> b r <

うううう、痴話喧嘩ならいつ他所でやってくれよう。> b r <
何だか知らないけど、そのトンボ玉がそんなに欲しいならもうあげるよう。> b r <

「相庭に何言った？」> b r <

田辺さんが俯くと、笹原君が大きく溜息を吐き出す。> b r <
ああっ、カノジョにそんな呆れたみたいな溜息ついちゃいけません
っ。> b r <

「なんでお前、俺がこういう事聞くと黙んの？」> b r <
だからそんな責めるみたいな口調で言ったら出るもんも出なくな
るでしょーっ。> b r <

「ずっと確信がないのにお前に言うのもどうかと思ってたけど、お
前がそういう態度ならもう言う。田辺さ、俺に嘘ついただろ、最初
から」> b r <

「嘘じゃない！じゃあどうしてあの時の事私が知ってるって言うの
？」> b r <

「それはわかんねえ。でももう、お前が嘘ついてるってのはわかる。
お前が主張してんのって、あの頃の事ばっかだから」> b r <

——…：いかん、この場にいながら話がさっぱり通じない、さっ
きから何の話だ。> b r <

何この壮絶なおいてきぼり感、私ここにいていいんかな。> b r <
えーと、なんだ、トンボ玉を自分のだって言ってたのが嘘か、……
で？> b r <

ていうかマジで痴話喧嘩なら他所でやれよ、私涙目！> b r <
「嘘続けんのは勝手だけど、俺はもうそれに付き合う気ないから」
> b r <

ちよちよちよちよちよ、いきなり別れ話か！？なんだこの現場！
？事件が現場で起きてんぞ！> b r <

「どうして私が嘘ついてるなんて言えるのよ……酷いよ、勝利君」
> b r <

「お互い様だろ。どこであの時の事知ったのか知らねえけど、もう
止めろよ。これ、ちゃんと相庭に返したいんだ。見つかって、涙目
になって喜ぶくらい大事なもんだったんだよ」> b r <

そう言って笹原君はハンカチごときゅっと手を握った。> b r <
田辺さんは痛々しいくらい唇を噛み締めて震えてる。> b r <

「それに、例えお前の言ってる事が本当だったとしても、同じ事だ」
> b r <

笹原君のその言葉に田辺さんは勢いよく顔を上げた。> b r <
「なによ……なによあんななんてっ!!」> b r <

思わず全身がびくつと震えるほど大きな田辺さんの叫び声が響く。
> b r <

これは、悲鳴だ。> b r <

田辺さんは真っ赤になった目で笹原君を睨む――あれ、ここは流れるに私の方を睨む場面じゃ?> b r <

え、あれ?ここは突飛に任せてこのドロボウネコ!とか言われるような場面じゃ?あれ?> b r <

いかん、親父様の影響を受け過ぎたのか私。> b r <

「虐められっ子だったくせに!叩かれてもなんにも言えないような奴だったくせに!なんでよ、なんであんなだけいい思いしなきゃならないのよっ!」> b r <

田辺さんは噛み付くような勢いで笹原君に怒鳴り続ける。> b r <
充血した目からはぼろぼろ涙が零れて、全身がぶるぶると震えている。> b r <

「友達もいて彼女までいて、なんで!なんで……私ばかりこんな思いしなきゃなんないのよお……っ」> b r <

それって、……。> b r <

「どういう事だよ、それ」> b r <

「あんななんかにわかんない!私の気持ちなんてあんなにわかるはずない!」> b r <

ずるずるとその場に膝を折って蹲って田辺さんは泣き出してしまった。> b r <

子供みたいにわんわん声を上げて泣く。> b r <

多分ずっと彼女はそうしたかったんだ、誰かの前で。> b r <

「た、田辺さん」> b r <

「触らないで!もういいよ、あっち行って!」> b r <

うう、手負いの獣のようになってしまっている。>br<

わたたと私もポケットからハンカチを取り出して、やや力技で田辺さんの顔を拭いた。>br<

「同情なんてしないで」>br<

「いや、同情も出来んけど。私きつと田辺さんみたいな思いした事ないからわかんないし」>br<

色々言われたりもしたけど、別に気にもしなかったしなあ。>br<

「だったら放っておいてよ。そうよ、その人と付き合ってるとか嘘だから。これで満足でしょ。よかったね」>br<

「よかあねえよ」>br<

暴れる彼女を押さえ付けてごしごしと溢れる涙を拭い続ける。>br<

「あのさあ、言おうと思ってたんだけど、こっちもごめん、私田辺さんの事人伝に聞いた」>br<

そう言うのとたんに田辺さんはびくりと体を大きく弾ませて腕の中に顔を隠す。>br<

あああああああごめん、マジでごめん。>br<でも調べたのはお互い様で折半て事にして!>br<

「えっと、そんでさ、もし田辺さんが今の生活望んでないもんだったら、生物学室行ってみて」>br<

「何、それ……」>br<

「私の友達がいる。相庭から言われて来たって言えばそれでいいから。まあ、ちょっと学校生活変えてみたいと思ってるんだったら、騙されたと思って、よければ行ってみて」>br<

田辺さんはそれから何も言わず、少ししゃくり上げながら自分で顔を拭いっつゆっくり公園を出て行く。>br<

私達も何も言わず、暫くその後ろ姿を見送った。>br<

「なあ、あいつ、虐められてんのか?」>br<

「そうと言えるような言えないような」>br<

「あの時あいつもどっかで見てたんだな……」> b r <

笹原君が何事かを小さく呟いてまたそっと小さく息を吐き出す。

> b r <

ああ、きっと彼女にとってはあの言葉の通り「笹原君だけ」が仲間だったのかもしれない。> b r <

学校で自分から姿を消さざるを得ないような事が、笹原君と同じような時期にあったんだろうと思う。> b r <

それでどこでか笹原君の話聞いて見に来てみたら同じだと思った人はすっかり変わっちゃって、自分だけが置いてかれたような気になっちゃったのかもしれないな。> b r <

なんで偽ってまで私のトンボ玉持ってたのかわからんけど、それもまあ何か理由があったんだろう。> b r <

でもこれからまた幾らだって変わって行けるって、私も信じて生きたい。> b r <

> b r <> b r <> b r <> b r <> b r <> b r <> b r <

「ちょっと、向こうの公園行かね？」> b r <

帰り道でそう言った笹原君の言葉に頷いて、また二人でバスに揺られていつもの公園に行く。> b r <

今思うと私、引越す前によく行ってた方の公園とここを勘違いしてたんだよなあ。> b r <

向こうの公園探したってそりゃ笹原君は見つからない訳だよ、笹原君がいた公園はこっちだもん。> b r <

境目の隣町とはいえ紛らわしいほど似た造りさせやがって。> b r <

いやほら、何せ子供の時の事ですから、記憶がその辺は曖昧でオホ。> b r <

別に記憶力がアレとかあの時は他がすっぽ抜けてたとかじゃないんだから勘違いしないでよねっ。> b r <

「これ、返すな」> b r <

「あ、うん、ありがとう」> b r <

公園の奥に歩きながら渡されたトンボ玉を握り締める。> b r <

なんかぶっちゃけ嵐のようだった気がしないでもないけど、昔の思
い出の一つがまた私の所に帰って来た。>b r<

懐かしい感触にちよっとほっとする。>b r<

「で、お前の話って何?」>b r<

「え」>b r<

あー……あー! そういうええそんな事言っちゃってましたね!>b
r<

いやだって私すっかり笹原君と田辺さんが付き合ってるもんじゃない
てたもんだから何と言いますかその!>b r<

「えー、えーと、……なんだっけ」>b r<

えへっと誤魔化し笑いしたら容赦なくデコピンされましたよ。>
b r<

痛い、でも嬉しいぞ、Mじゃないしなんか複雑だけど嬉しいぞー!
>b r<

喜んでいいんだよね、とりあえずカノジョさんを気にする事はない
でいいんだよね、その点でここは狂喜乱舞していいところなんですよ
ねっ。>b r<

「あ、笹原君も話しあるって言ってたよね。武術の事でよかったの
?」>b r<

「……や、別にある」>b r<

「じゃ、今聞くんよ。何?」>b r<

聞く体制は万全にしてるんですけど、そこからどうも笹原君がじ
っと黙り込んでしまう。>b r<

ただじっと、その真っ直ぐな目で私を見ている。>b r<
う、うう。>b r<

「あ、あのさあ、前から言おうと思ったんだけど、そうやって見つ
められると流石に照れるんですけど!」>b r<

嬉し恥し恋する乙女ですからね。>b r<

だと言うのに笹原君は何故か噴き出して笑い始めやがりました。>
b r<

オイコラ喧嘩売っとんのかワレ。>br<

「いや、お前、顔赤い。流石元猿」>br<

「それはもう忘れて！」>br<

キイイイツ、いいネタ仕入れたみたいなお顔しやがって！>br<
あーあー、どうせ猿でしたよ、野生でしたよ、正しくほぼ野放しで
育ちましたよ、それが何か！？>br<

「あのさ、そういえば笹原君の好きな人、結局まだ見つからないんだね」>br<

田辺さんが違ってたんだから、そういう事だよな？>br<

人気のなくなった公園でいつぞやのようにブランコに乗ると、笹原君はその前にある柵に腰を下ろす。>br<

ちよっと地面を蹴ってブランコを揺らすと、やっぱりギコギコ鳴った。>br<

しかしショックだろうなあ、そうだと思ってた人が思いっ切り偽ってたんだもんね。>br<

田辺さんにも理由があったとは言え、だからって笹原君を利用してよかったとも言えないよなあ。>br<

でもそうしなきゃならないくらい、彼女は必死だったのかも。>br<

学校にわざわざ迎えに来たり、仲良さそうな感じがした女友達に距離置いてって言うてみたり、そうして笹原君を独りにして自分の仲間を取り戻したかったんだろうと思う。>br<

それって今も田辺さんが独りだからだ。>br<

……生物教室、行ってくれるといいんだけど。>br<

「そうでもない。て言うより、どっちの意味でもやっと思つた」>br<

——マジすか。>br<

え、この流れでまさかの爆弾発言投下とかどんだけドSなんすかこの人。>br<

さっき喜んだばっかなんですけど、やっぱ現実厳し過ぎないすかこ

れ。> b r <

大体どっちって、そっち？こっち？あっち？どっち？> b r <

「そ、なんだ……」> b r <

「相庭、前に言っただろ、過去はきっかけで今が大事的な事」> b r <

言いましたっけねー、言っちゃいましたっけねー。> b r <

心の準備体操してなかったもんだから胸から突き出て来そう、他内臓とかもろもろ出そう。> b r <

だと言うのにまた嘔き出してると何なのこの人っ。> b r <

「わ、悪い……今度はしょぼくれた顔してる」> b r <

笑いながら言うかね。> b r <

「しょうがないでしょ、……好きなんだもん」> b r <

上がった下がりたりした所為かこっちのテンションまでおかしい。> b r <

幾ら体を鍛えても体の内側の事ばかりはどうにもなりませんよ。

> b r <

「悪かったって、おい、泣くなよっ」> b r <

「勝手に出るんだからしょうがないでしょ！」> b r <

「逆ギレか」> b r <

「だってやっぱり嫌なんだもん、辛いんだもん！笹原君にカノジョが出来ちゃったら、今までみたいにも出来なくなっちゃうじゃない

！」> b r <

「なんで」> b r <

ぎゃー！やっぱ言ったよ、言いやがったよ！> b r <

「笹原君がカノジョ以外の女の子と仲良くしてたらカノジョがヤキモチ妬くじゃん！」> b r <

「お前も、妬く？」> b r <

「決まってるでしょー！なんなの、やんのかコラ！おう、表出ろや！」> b r <

「だからキレんなって」> b r <

「キレもするわ!」>b r<

笹原君が立ち上がったって私の前に屈むと、鎖を握っていた私の手を上から包む。>b r<

くっ、こうして無意識に何十人と女子を惚れさせたとか言うんじゃないだろうな。>b r<

もー!天然タラシとか性質悪い!でも好きだコンチクショー!>b r<

「もしかして、妬いたから、逃げ回ってた?」>b r<

「……笹原君、流石にその喧嘩はガチで買う」>b r<

「売ってねえよ。ふうん、そうなのか」>b r<

うう、意地悪くなってるよ、どうしたの、こんな一面もあったと
か見れてちよっとラッキー………私はバカなのか。>b r<
ああもういいよ、恋をするとバカになるって言うし、元からどうせ
バカですからねっ。>b r<

「そう不貞腐れんなんて。面白い顔だな」>b r<

「こんなのがいいって言う人もいるんですー」>b r<

面白いとこがいいって言うってくれる人だっているんですー。>b
r<

「……へえ?誰」>b r<

「え、えーと、三年の羽柴先輩とか、五月辺りに告白されたし」>
b r<

「ああ、あのバスケット部のイケメンな。他には」>b r<

「え?ええーと、弓道部の佐藤先輩とか、隣のクラスの田中君とか、
あとは」>b r<

「もういい」>b r<

恐ろしく低い声で制止するくらいなら聞くなよ!>b r<
て、言うか。>b r<

「な、なんで顔掴む?」>b r<

「逃げられないように」>b r<

「逃げるような事すんの?」>b r<

「お前の受け取り方次第だけど」> b r <

「怒ったの？」> b r <

「まあ、ちょっと」> b r <

自分で聞いておいてどこに怒る要素あった！？> b r <

「女の顔殴る気か貴様！」> b r <

「なんでそう発想がバイオレンスなんだよ」> b r <

顔掴んで逃げられないようにするって、殴る三秒前じゃないのか。

> b r <

慌てて逃げ出そうとしても時すでに遅し、両頬をがつつり両手で挟まれて首すら振れない。> b r <

いつ！どこで！何のフラグが！立ったのか！> b r <

バイオレンスルートじゃなかったら何なんですかこの状況！？> b r <

「怖かったら目くらい瞑れよ？」> b r <

「わー！怖くて目を瞑れない！」> b r <

これが真理！> b r <

「お前ってさあ、ホントーむかつく」> b r <

その言葉に一瞬心臓が縮み上がりそうになった。> b r <

けど近付いて来た顔が少し角度を変えて、笹原君がふと目を閉じたのに思わず私もぎゅっと目を閉じる。> b r <

触れたのは唇に、だった。> b r <

——え。> b r <

え、え、え、え、ええ？> b r <

「わあああああああああああああああああっ！！」> b r <

「いって！」> b r <

突き出した拳を握ったまま、全身がぶるぶる震えているのがわかる。> b r <

笹原君は前方で米神の辺りを押さえながら尻餅について私を見上げた。> b r <

「きさーん！なんばしょっとかー！！」> b r <

「どこ出身だお前は！」>br<

「殴って悪かった！だがそっちも謝れ！乙女の唇を奪って悪うございましたと誠心誠意スライディング土下座で謝れ！！」>br<

自分で言って血管爆発する！ななななななでき、キスされた！？>br<

ファーストなチッスだったんだぞ！？>br<

「わあ！わあ！わあ！」>br<

「落ち着け。悪かった。した事については謝らないけど、唐突だったのはホント悪かった。お前のこの性格考えりゃよかった」>br<

「開き直る気か貴様この狼藉者そこになおれーっ！！」>br<

「だから落ち着けて」>br<

「なんでした！」>br<

「したかったから」>br<

「したかったらしていい事じゃないの！」>br<

お母さんあんたをそんな子に育てた覚えはありません！>br<
両想いでもない男にキスされて喜ぶほどの相庭悠安くはないつもりでございます！とっとお帰り下さいまし！誰か塩持って来とくれ！塩！>br<

「好きだから」>br<

「はあ！？」>br<

「相庭悠が、好きだから」>br<

>br<>br<

22. ぶち壊された、モノ（前書き）

※今回のみ笹原視点です。

22. ぶち壊された、モノ

>br<>br<

俺の人生は真っ暗だった、少なくとも園児の頃にそう諦めるくらいには。>br<

誰が悪い訳でもないが、同じ年頃の奴らとは明らかに体が小さくて言葉も遅かった。>br<

そういう子供を集めた施設に入れた方がいいとあちこちの幼稚園で両親は実際に言われて回ったらしい。>br<

それでも何とかやつの思いで見つけた先で、当然の如く俺は爪弾き者だった。>br<

遊び一つ満足に出来なかった俺は体力を持て余した奴らの格好の玩具で、そして俺はそれに逆らう術も持たなかったし知らなかった。

>br<

正確にはもう何もかもがどうでもよくて、知ろうとしなかった。

>br<

剣道場も持つ家で、家族の誰もが少なからず賞状やトロフィーを持っているのに対し、そんなだから俺は家も嫌いだった。>br<出来ないと言うとかソジイには飯抜きで夜中まで稽古をさせられたし、逃げ出した暁にはあちこちに閉じ込められた。>br<

年齢とか個性とか個体差なんてものはうちのクソジイには通用しない。>br<

俺が弱いのは俺の体じゃなく精神が弱いからだと言われ散々虐待よろしく剣道をさせられた。>br<

巷で幅を利かせているそんなジイの孫だからとどこへ行っても虐められる。>br<

俺には楽しみも逃げ場所も、何もなかった。>br<

ただ辛くて、そんな毎日が嫌だと思いつつながら、思っているしかない自分にも嫌気が差すだけ。>br<

なんでこうなんだろうって、それこそ毎日いつも呪いみたいに思っていた。> b r <

同じ年の連中は皆毎日楽しそうに過ごしているのに、なんで俺だけがこうなんだろうって。> b r <

いつまで経っても背が伸びないのも、出かけると必ず風邪をひいて帰るのも、友達の一人もないのも、虐められているだけの日々も、何かも嫌で嫌で仕方なかった。> b r <

そうしていつの間にか、どうでもよくなった。> b r <

いつかこのまま行き過ぎた虐めで誰かに殺されればいいと思った。

> b r <

クソジジイはあんなだし、親父は仕事で毎日帰りが遅い、お袋は弟を妊娠していて実家に帰ってる、兄貴は俺と違って何もかもが優秀だったしジジイに怒られるから口を挟んでも来ない。> b r <

精々俺が死んだらトミさんだけが泣いてくれるだろうなって程度だった、でもトミさんだっていずれは俺の事なんか忘れる、弟は俺の事なんか憶えてもないだろう。> b r <

そんな風に、ただ俺はその時をひたすら待つだけだった。> b r <俺はただのモノだった。> b r <

あの日もそうだった、俺はジジイに外でたまには遊んで来いと放り投げられて、行き着いた公園でやっぱり俺を知っていた誰かに虐められた。> b r <

正直俺を殴る奴なんて一杯いたからそいつらの名前も憶えていない。> b r <

公園の誰も見えて見ぬフリをした、子供連れの大人はそそくさと我が子を抱えて公園から出て行くだけ。> b r <

殴られたり叩かれたりして、いっそその辺の石でも殴ってくれりゃいいのと思った。> b r <

もうそう言おうかと思ったんだ、だからその時初めて顔を上げて殴ってる奴を見た。> b r <

――が、次の瞬間には、俺より一回りほど大きい体だった奴が視

界から消えたんだ。>br<

まさかいつぞや俺が心底願った、皆消えてしまえばいいなんて願いを神様辺りが叶えてくれたのかと正直心底信じそうになったくらいだ。>br<

何せ一瞬だった。>br<

でもまた次の瞬間には、そうじゃなかったと知った。>br<

俺と同じ年くらいいの、しかも体格に似たような、女の子が俺を殴ってた奴らにかかって行ってた。>br<

正直ビビった、そりゃビビるだろ。>br<

しかも恐ろしく強いんだ、どこかに引っ掛けたのか血を流してもその子は何事か怒鳴り散らしながら立ち向かうのを止めなかった。>br<

それで、その時閃いたように理解した。>br<

ジジイの言う通りだった、俺は最初から自分はどうだからって諦めていたんだ、それがジジイの言う精神の弱さだった。>br<
世界が引っ繰り返ったような気がした、ある意味では実際引っ繰り返った。>br<

あいつらが逃げて行って女の子が立ち上がると、その子の友達だろう奴らも周囲にいた連中も一斉に歓声を上げたんだ。>br<
助けてくれた事にお礼を言うべきかと思った、でもあまりにもショックで足が動かなくて声も出ない。>br<

何より、俺は生まれて初めて悔しかったんだ。>br<

こんな小さな女の子に助けて貰って、そんな弱い自分が今までとは違う意味で嫌で悔しかった。>br<

振り返った女の子は俺の顔を見てビックリした顔をしていたっけな。>br<

礼の一つも言えないような奴でと思ったのかもしれない、女の子は何も言わずすぐさまぱっと踵を返して公園を出て行った。>br<
それを女の子の友達が追いかけるのを、俺はただ呆然と見送るしか出来ないでいた。>br<

それから、確かに俺の意識は少なくとも変わって行ったと思う。

> b r <

そりゃ意識が変わったところですからすぐ上手く行く事はなかった、相変わらず風邪は引くし虐められるしジジイはクソだし。> b r <
でもその日から俺は剣道の稽古に泣き言は言わなくなった。> b r <
やる気が出れば出るほど、逆に歯痒い思いをする事も多いと知った。
> b r <

強くなりたくて、あの女の子みたいに誰かに臆さず立ち向かって行けるようになりたくて、そう思う度に自分の壁にぶち当たる。> b r <

ジジイとは何度もやり合った、小学に上がってから上手く行かず家出らしき事もした。> b r <

適当な話をする奴は何人か出来たけど友達という感じでもなくて、俺はやっぱ相変わらずだったけど。> b r <

それでも不思議と、もう殺されてもいいと思う事はなくなった。> b r <

新しい何かが出来る度に俺は公園に行ってあの子をこっそりと探した。> b r <

もし見つけても声をかける勇気はなかっただろう。> b r <
それが出来るのは俺もあの子みたいに強くなれてからだ、なんでかそう思い込んでいた。> b r <

あの子がこの近所の子じゃないかもしれないと気付いた時にはすっかり後の祭りだ。> b r <

あの時も自分のバカさ加減にうんざりしたな。> b r <

しかも厄介な事に、俺は暇さえあればその子の事を思うようになっ
っていた。> b r <

あの時拾ったあの子が付けていた髪飾りの欠片を持ち歩き続けて、
そんな些細な事に接点がある気になっていたのがまたイタイ。> b r <

小学も高学年になる頃にはすっかり体格も変わって、虐められる事

はなくなった。>br<

少しずつ友達と呼べるかもしれない連中も出来た。>br<
でもずっと、あの女の子の事ばかり考えた、また会いたくて仕方なかった。>br<

中学に入って急激に身長も伸び始めると、周囲もまた変わった。

>br<

当時から女子に騒がれるのは苦手だった、対人関係なんて培わないまま育ったから正直扱いに困るし。>br<

そしていつの間にかあれほど嫌だった剣道をやるのが楽しくなっていた自分に気が付いた。>br<

ついでにジジイともそこそこ遣り合えるようになって、一方的に稽古させられているという意識もなくなった。>br<

今の俺をあの子に見せられたらと何度も思った。>br<

正直これが恋だと自覚するに至った時点で、実に微妙だと思い知った訳だけど。>br<

普通に考えてないだろ、虐められてるのを助けたって、普通男女逆だろ。>br<

あんなに強い子なら尚更弱い男なんて論外だろ、そうだろ？>br<
最初からやり直せたらいいのになんて、どうしようもない事を考え
ては落ち込んだ。>br<

最初の方は多分懂れだったんだと思う、俺もあんな風に強くなれた
らと願った。>br<

でも段々と、今度は俺があの子をあやって守れたらと思うように
なった。>br<

守る以前に会えないんだっつーのな。>br<

バカな俺はあの公園をうろうろしたり眺めるのが癖になっただけ
だ。>br<

情けないにも程がある。>br<

例えば再会出来たとして、そんな情けない男にあの子が靡いてくれ
ると思えなかった。>br<

漫画のヒーローみたいに颯爽としてた女の子。>br<

あの子が持つにしてはちょっと可愛らし過ぎる、ピンクの花の付いたガラス玉は俺の密かな宝物だった。>br<

いつか会えたら、そう願いつづけた。>br<

あの時言えなかったお礼と、そして出来れば好きだと言いたかった。

>br<

こんな俺でも、ずっと、ずっと好きだったと言いたかった。>br<

>br<>br<>br<>br<>br<>br<

実は前から知ってたんだ、俺に告白しに来たのが「相庭悠」だって言うのは。>br<

高校の入学式後ほどなくして行われた体力テストの時に、その姿を初めて見た。>br<

最初に気付いたのはボールを投げていた時、女子なのに随分遠くまで投げられるんだなと、記録係が叫んだ記録を聞いてそう思った。

>br<

それで友達だろう女子に「あいば」「ゆう」って呼ばれてたから。

>br<

次にその姿を初めて見たのは短距離だかを走っている時だ。>br<フォームの綺麗さに目が行った、それから単純に速いなど。>br<

周囲の女子や男子がやっぱり「あいば」とか「ゆう」って声援かけて、ああ、あのボール投げてた奴かと気付いた。>br<

印象に残っていたのは多分走り切った後を見たからだだったと思う。

>br<

一般的に見て恐らく「可愛い」だろう彼女は、何を気にするということもなく、大口開けて笑って周囲にガッツポーズしていた。>br<

「あ、あいばゆうだ」>br<

そう言ったのは多分鈴木だった。>br<

聞けば「相庭悠」はあの通り、入学式から相当目立っていたようだ。>br<

気付かなかった俺が相変わらずなんて事は明石にも、ましてや鈴木

にも言われたくない。>br<

ああいう女もいるんだなとある意味感心したんだ、いやマジで。

>br<

明石曰く成績もいいし（うちは貼り出されるタイプじゃないってのに何故明石が知っていたかは突っ込まないでおく）顔もスタイルもいいときて、おまけに性格もオープンだと。>br<

中学になって以来女にはうんざりしていたから、目新しい気持ちで素直に聞いたのを憶えてる。>br<

だからだろうか、その「相庭悠」に告白された時、結局こいつも他の連中と同じだったのかと勝手にガツカリして、だからいつも以上に言葉がキツかったかもしれないのは。>br<

正直誰かにどう思われようと思っただけだ、精々泣かれたら面倒だなとか。>br<

表向き出来過ぎなこの女はどう出るだろうかと一瞬は考えたんだ、泣くのか怒るのか嫌悪するのか無視し出すのか。>br<

で、まあ、どれでもなかった訳だけど。>br<

それがある意味俺の世界を覆された瞬間だったんだろう、ある意味な。>br<

この女ときたら、フルオープンにも程があるって態度で、こっちが何言っても堪えやしない。>br<

正直、「あの子」がこんな女になってもアレだなと思った事は事実だ。>br<

まあでも、今までの女よりかはマシだなと思ったのも本当。>br
少なくとも「イメージ」と違うと言っては勝手に幻滅したり失望したりされる事はなかったから。>br<

どうせよくある恋に恋するタイプってやつなんだと、放っておきやその内飽きるだろうと思われた。>br<

そして俺は相庭悠をナメていたと言わざるを得なかった。>br
何度なんなんだと思ったか知れない、マジでなんなんだあのバイタリティは。>br<

ある意味あの体力テストで恐ろしい数字を叩き出したらしいのわかる話だ、本人の容量がまず異常過ぎる。>br<

だがそれも後日世界的な（裏の意味で）格闘家の娘だと聞いて漸く納得した。>br<

あらゆる意味であれは血だろ。>br<

俺にも順応力なんてものがあつたのかと驚きもしたな。>br<アレに慣れるとは当初露ほども思わなかっただけに。>br<

いればいたで厄介だが、いなければいないで物足りなさまで覚える始末だ。>br<

慣れというのは心底恐ろしい。>br<

でもいつからか、だからいいんだと思うようにもなった。>br<俺のダチと言えるのは本当に少数で、しかも相庭同様癖のある連中だけだ。>br<

言ってみれば、俺自身がそうだから結局類友なんだろう。>br<俺と友達になってくれるなんて奴は、いちいち俺の言う事ややる事を真に受け過ぎててもダメだって事だろうな。>br<

不本意だが、相庭は鈴木や明石と同じで絶妙にそのバランスがよかったんだと後になって思う。>br<

本当に変な奴だ。>br<

自分の感情にはしゃいでいるだけの奴かと思えば、俺自身でも気づかないような事ずばっと切り込んで来たりするし、かと思えば頓珍漢な事は言い出すしやるし、真っ直ぐしてるのか曲がりまくっているのか……ただ俺自身退屈はしなかった。>br<

鈴木や明石でさえ距離を置いているような所まであっさり入って来るくせに、妙なところは自分からストップかけて踏み止まって。>br<

俺の事ばかり考えてんじゃねえのかって、我ながら恥しい事まで考えさせられたりもした。>br<

でもどんなに相庭がいい奴で気の置けない奴になっていっても、俺の中にいるあの子は消えなくて。>br<

相庭に聞かれた時、なんでか誰にも言った事のない情けない事まで喋った気がする。>br<

今思えば俺はすっかり相庭に気を許していて、こいつならそういうところを知られてもいいような気がしていたんだろう。>br<

そしてその時の相庭の嬉しそうな泣きそうな顔が、何故かあの子と初めて重なって見えた瞬間でもあった。>br<

頑張れとそう言った相庭の姿と、颯爽と敵に立ち向かって行ったあの子の姿に、似たものを感じたからかもしれない。>br<

それからだったか、そう感じる事に妙に落ち着きのなさを覚えたのは。>br<

ぶっちゃけあの子の顔はあんまり憶えてなかったし、女は年取る毎に別人になるとか言うから、面影を探そうにも結構無理があった。

>br<

精々憶えているのは、当時あの子を見て「あんなに可愛い子が」と感じた記憶があるから、まあそうなんだろうと思うけど。>br<だからってその子が当時のまま可愛く育っているかというのも疑問だし、子供の可愛いさと言うのもあるし、大体人の美醜はどうでもよかったから気にしない俺自身が問題点の一つだった。>br<

相庭を気にし出してからというもの、何故か益々あの子に会いたいという願望は強まった。>br<

それも俺自身が過去と現在の感情に振り回されていたからなんだろう。>br<

相庭の事を何だと言っておいて、どっちか言えばストーカー気質なのは俺の方だと思う。>br<

我ながらあの一瞬の出来事で恋をして、ここまで長年執着し続けていられるのは空恐ろしいものがあるしな。>br<

相庭でさえ過去の初恋には後悔があると言ってもその恋愛感情までは区切りをつけているようだったのに。>br<

俺ときたら何をするでもなく、諦めるでもなく、しかも新しく幅を取り始めた現在の感情さえ上手く動かせなくて。>br<

それを大いに自覚させられたのは、相庭が連れて来たあの外人の一件だろう。>br<

あんまり思い出したくはないんだ、流石に恥ずかしいし、……何よりむかつく。>br<

同時に俺の感情が相庭によって動かされる幅がどれだけあるのかも自覚した。>br<

自分じゃ無意識だが、だからこそ後からその行動の意味を考えると恐ろしい事になる。>br<

未だ俺を好きだと言う相庭に伝えられる訳でもないのに、自分のその行動や感情が酷くずるい気がした。>br<

あいつが真っ直ぐで、俺の事で笑ったり怒ったり拗ねたり落ち込んだりはしゃいだり……そういうのを見ていると、尚更。>br< 改めて友達になってくれというあいつに、上手く答えてやる事が出来たか、あまり憶えていない。>br<

早く答えを出してやりたいと思った、何より相庭の為に。>br< 過去と現在を行ったり来たりしているような俺じゃなく、一つの心でちゃんとこいつの思いに返事をしてやりたいと思った。>br< 本当はわかってたんだ、俺は今が居心地よくてある意味相庭の俺を好きだという気持ちに甘えていたっていうのは。>br<

あの子が好きで応えられないなら、初対面の時みたいなあんな言葉じゃなくて、ちゃんと俺の気持ちを伝えて断ってやるべきだ。>br<

多分そうすれば相庭はわかってくれる、メチャクチャな奴だけどあいつは俺の気持ちを否定しない。>br<

ただ情けない事に、俺はそれが怖くなっていた。>br<

流石に断りを入れれば相庭だって距離を置く、いずれまた他に好きな男も出来るだろう。>br<

……それが、嫌だなんて、自分勝手過ぎる。>br<

あいつが俺を見て顔一杯に嬉しいって浮かべるだとか、バカな事言っただけとか、俺の事心配してくれるだとか、そういうのが全部

他の奴に向けられるのかと思うと堪らなくなる。> b r <

よくストイックだと言われたが、本当にこんな俺のどこがだよと思う。> b r <

たまに鈴木や明石に笑いかけるのでさえ嫌なんだ。> b r <

こんな俺からなんて、さっさと解放してやる方が相庭の為なのに。

> b r <

俺は昔から自分の保身の事しか考えていない、進歩のなさには呆れた。> b r <

でもきつと相庭だけはそんな俺でもいいって言うんじゃないかって。> b r <

そう考えて、また自分に嫌気が差す事を繰り返す。> b r <

> b r <> b r <> b r <> b r <> b r <> b r <

田辺かすみと名乗った女が来たのは、だからこれも転機かと思っ
た。> b r <

俺が憶えていない時点で田辺の言葉を信じるしかなかったが、それでも俺の何かが違和感を訴え続けていた。> b r <

ただそれが相庭への感情の所為なのか、それとも純粹に記憶にある
あの子とあまりにもかけ離れ過ぎている田辺の所為なのかはわから
なかった。> b r <

だから田辺の言葉を余さず拾おうと、いい加減俺も気持ちの置き所
を決めなくちゃならないと覚悟を決めたんだ。> b r <

ぶっちゃけ田辺に関して信じられるのは彼女が持っていた「髪飾
りの破片」だけ。> b r <

俺が持っているのと同じ花の柄だというのはすぐにわかって、探
りを入れようとすると田辺は肝心なところですぐ口を噤む。> b r <
信じようとした、確かに俺の記憶が曖昧だし女は特に変わるもの
だから。> b r <

でももやもやとしたものは俺の中に溜まり続け、鈴木や明石にも相
庭にだって散々心配かけたと思う。> b r <

けどそれでちょっと気付いた、田辺は俺自身を見ようともしてい

ない事に。>br<

懐かしいからとか会いたいとか言って、それこそ校門で待ち伏せされた時には流石に引いた。>br<

だからこそ相庭が如何にノーマルだったかに気付いたけど。>br< 田辺は全然違う、恩着せがましいと言うか、断るところがちが罪悪感を抱くような言い方をする。>br<

その上彼女が話すのは殆どあの時代の事ばかりで、今お互いにどうしているかなんて一言も口にしない。>br<

大体周囲がビビるくらい自分でもピリピリしてんのがわかるのに、田辺はどうしたともこうしたとも聞いては来なかった。>br<

少しずつ少しずつ違和感は確信に近付いた。>br<

でも田辺が嘘をついているという疑問を持っても、確信もないのに問い質す事も出来なくて、そして話題を振ろうとしても避けられ続けて。>br<

田辺の言う事が本当だとしたら、彼女は確かに俺の好きな人のはずなのに。>br<

どこでまでも定まっていけない自分自身の心が、もどかしくてイライラする。>br<

>br<>br<>br<>br<>br<>br<

そんな中で相庭が俺に背を向けた事が途方もなくショックだった。

>br<

こんな事をやっている俺に愛想を尽かしたって当然だろうに、頑張れと言いつつ残して走り去ったあいつを見送る事も出来ず、田辺と何を話したかも憶えてないまま足はいつの間にか後を追っていた。>br<

何を言うつもりかなんて考えもしないで、漸く見つけた姿が見知らぬ男と親しげに車に乗り込んで行くのを見て、あいつがどれだけ田辺の事でショックを受けただろうかと今更になって考える。>br< 自分の無神経さに眩暈すらした。>br<

その時の俺はまさしくストーリーカーだった。>br<

相庭が戻って来ないかと彼女の家の前でうろうろして、実際通報されてもおかしくはなかったな。> b r <

そして俺の前に現れたのは相庭でも警察でもなく、彼女の父親だった。> b r <

心許ない街灯に照らされているその姿は、以前見た陽気な男という印象は微塵もない。> b r <

「お前、俺の娘、泣かしたな」

じっと俺を見据えて唐突に言われたその一言に心臓が突き刺された。> b r <

相庭の気持ちをもう本気だとわかっていたのに、それぐらい傷付けたという事にも思い至らなかった自分が酷く情けなくて腹が立つ。

> b r <

どんなにバカみたいだってめげなくたって、あいつは男の俺とは違う……女の子なんだ。> b r <

俺みたいなのをあんなに好きになってくれた、他の奴が好きだって言う俺の事すら励ましてくれた。> b r <

今の俺はいつの間にか、そんなあいつに支えられてたんだ。> b r <

「泣いて、たんですか」> b r <

「多分な。あいつ昔から人前じゃ泣こうとしねえし。まあ主に俺の前だけど」> b r <

「すみません、俺の、所為です。俺が、無神経だったから」> b r <

「わかってるつつつてんだよ。あいつが泣きそうなの見たのなんて後にも先にも前の失恋以来だからな」> b r <

恐ろしいほどの眼光で気圧されるだけじゃなく、その言葉に全身が衝撃を受けた。> b r <

本当に俺はどうしようもない、あいつの過去に妬いたって仕方ないのに。> b r <

俺の好きな奴の話しなんかされて、一体相庭はどんな気持ちで俺を励ましてくれたんだろうか。> b r <

そんな事すら俺は考えていなかった。> b r <

「お前に何かすると俺があいつにボコられるからしねえけどな。でもクソガキ、お前も男ならケジメつけろ。テメエにフラレりゃあいつはまた泣くかもしれねえけど、あいつはちゃんと立ち直る。ただ今みたいにあいつの気持ち振り回して泣かすような事はすんな」>br<

そうか、この人――あいつの事、大事なんだな。>br<

「わかってます。ちゃんと、ケジメつけます」>br<

「あークソ、胸糞悪い。あいつが泣くとあいつの母親に怒られてるみたいで嫌なんだよ」>br<

ガンと横の壁を蹴り付けて、暗い道を引き返して行くその後姿をじっと見送った。>br<

そして俺もその場から踵を返す。>br<

もうわかった、俺が今大事なのは誰か。>br<

会いたいのも声を聞きたいのもいつもの笑顔が見たいのも、バカな事言って笑い合って、これからも一緒にいたいのも。>br<
今、俺は――。>br<

それから一週間、逃げ回る相庭を追いかけ続けた。>br<

改めてあいつの身体能力の高さを思い知らされると同時に、自分が知らずどれだけの事をしたのか痛感した。>br<

もう二度とこのまま触れる機会を失うんじゃないかって、俺も全力で追いかけた……にも関わらず逃げられている。>br<

運動部が揃いも揃ってあいつを追い掛け回してもまず捕まらない訳だよ。>br<

そして今日こそはと思っている内に毎日の全力疾走が祟ったのか消化不良起こして腹痛ときた。

その上爺さんが出かけてる時に限ってまた厄介な奴らが来る。>br<

たまにあるんだ、道端で爺さんに説教さてた挙句どつかれて恨み晴らしに来る奴が。>br<

ただ日と時間が悪かった、よりによってガキ共が稽古に来ている時

だったからだ。>br<

しかも相庭がそんな中來た時には、正直ぞつとした。>br<
あいつを傷つけられでもしたら、自分自身が、何をするかわからなかったから。>br<

――で、俺は心底バカだったんだなと思い知らされる事になった訳だが、まあいい。>br<

結果よければ全てよし、だ。>br<

しかし今になって思えば本当にどうして気付かなかったんだろうと半ば真剣に悩む。>br<

大体最初から規格外だったじゃないか、今まで俺に最初からなんて例外はあの子以外にはなかったんだ。>br<

無意識に気付いていたんじゃないかとさえ思う、誰かに目を奪われるのは相庭で二度目だったんだから。>br<

迷う事無く相手に立ち向かっていったあの時とちつとも変わらないその姿に、すでに二度目の恋をしていたと知った。>br<

田辺にもちよつと感謝したいくらい。>br<

だからあいつもいつか見つけられればいい、自分自身が作り上げた鬱屈とした世界をぶち壊してくれる奇想天外な誰かを。>br<

>br<>br<>br<>br<>br<>br<

ところで相庭は気付いているんだろうか、俺が気付いている事に。

>br<

それから俺がああ時の情けない虐められっ子だって事に。>br<
でもまあいいか、何せ本人が大事なのは今だって言っただからな。

>br<

昔の俺をどう思っているようにと、それはきっかけに過ぎないんだろう？

>br<

大概俺も相庭の事を言えないくらいアレな奴だったらしいしな。>

br<

そんなんもいいんじゃないかと思ってしまう、毒されてんなとも思
うけど。>br<

他の誰かじゃきつと俺はダメだった。>br<

慰められても優しくされても叱られても心配されても、俺はあの場所から出れなかった。>br<

あの頃の俺をぶち壊したのは、確かにあいつだけだったから。>br<

多分、あいつが拳振り上げて飛び掛って行った瞬間、俺の心も決まっていたんだろう。>br<

それに今も同じだ、あいつ以外には他の誰も口に出す以上の行動には移せなかった。>br<

とはいえ、実は負けっ放しも嫌な性格だと俺自身がもう知ってるから。>br<

今後は俺も負けてやるつもりはねえけどな。>br<
まだまだ先は長い、逆転するチャンスもまだまだ転がってる。>br<

r<

「お前ってさあ、ホント——むかつく」>br<

ある意味ちっとも思い通りにならない。>br<

いつもどこか俺の予想を超えて、お前は俺の先に行く。>br<
でも今度はこっちから。>br<

>br<>br<

これが俺の宣戦布告だ。>br<

>br<>br<

23. あなたが好きです

> b r < > b r <

ぽかんとした。> b r <

目の前では笹原君が笑ってる、可笑しそうに……嬉しそうに、あの、優しい目で。> b r <

「うわ！？ ちょ、お前なあ！」> b r <

笹原君は焦ったような声を上げて自分のポケット探って取り出したハンカチを私の顔に押し付けた。> b r <

「なんつー泣き方すんだ。滝かつ」> b r <

「なんでえ？」> b r <

「とりあえず涙止めろ、鼻水拭け」> b r <

だばーっと出ちゃってどうにもこうにも。> b r <

なんだ、幻聴か、それとも妄想か。> b r <

触覚までするなんてなんつー末期症状だ、オラもうダメだ。> b r <

「ホントお前は俺の想像の斜め上を行くな。まあ別にいいけど」> b r <

「笹原君、私病気だよきつと脳の病気だよ、幻覚とか幻聴障害出るとて前にテレビでやってたもん」> b r <

「幻覚でも幻聴でもないからとりあえずお前がリアルに帰って来い」> b r <

「リアルの住所がわかりません！」> b r <

「現在地で合ってる」> b r <

イエーイ、合ってる！……ん？> b r <

「ここ？」> b r <

「そう。……ここ」> b r <

一通り拭き終えた笹原君はそう言って私に向かって両腕を伸ばして来る。> b r <

ぎゅっと強く体にその腕が回された。> b r <

「マジで？なんで？」>br<

「疑り深い奴だな。それとも何か、俺は惚れてない女にこんな事をするだけでも？」>br<

今度は額に唇が押し付けられた。>br<

——…もう一度リアル住所聞いたら怒られるかな。>br<

「なんで、私？だって、私が昔笹原君と会ったのなんて一度だけだよ」>br<

「そうだな。俺も探したんだけど、そもそも学区違いの上引っ越してたんじゃ会える訳ないよな」>br<

「やっぱあの時の事言っただけの！？尚更おかしくない！？え、ちょっと、趣味大丈夫か！？」>br<

笹原君の立場でしかもあの状況下で初恋発動するとか逆にねえよ！>br<

私が言うのも何だがここは敢えて言おう、ねえよ！>br<

「まあ多少趣味はどうかしてるんだらうけど」>br<

オイ、この状況下でそう言うのもどうかと。>br<

複雑な乙女心をもうちょっと気遣ったら如何です。>br<

「でもお前がいいんだ。こんだけ近くにいて全然気付かなかったくせにな」>br<

「私も、気付いたの最近……」>br<

「そか。じゃあまず、お互い様か」>br<

「ほ、ほんとに？」>br<

「まだ疑うか」>br<

だって早々信じられないでしょ、というかなんか全てにおいて付いて行けてないよ。>br<

本当に現在地ここかよ、世界地図レベルでテケトーにこことか言っ
てんじゃないだろうな。>br<

「トラウマにでもなってるのもその時の事忘れてんのかと思った。
普通、虐めっ子に殴りかかってた女とか好きになる？」>br<
「まあ衝撃的ではあったな。むしろそうだったから逆に惚れたんだ

ろ」>b r<

ううううううっ、そんなさりと何度も言わないでよっ。>b r<

嬉しいやら恥しいやらもう何が何やら。>b r<

笹原君てもしかして恥ずかしい事結構天然に言えちゃうタイプ？>b r<

逆に意地でも言いそうにもないと思ってただけに新発見だ、私今コロンブスを越えたね。>b r<

そういえば前にも好きな子の事で色々言ってたしな……ってあれ私の事なのか。>b r<

……我ながら信じられない、たかにえのはにゃとか言ってますんデシタ？>b r<

田辺さんもその事知っててトンボ玉が自分のだって嘘ついてたって事？>b r<

そうならよっぽどこで笹原君が私を探してくれてたって事だ、そうでなきゃ笹原君があの時初恋したとか思わないよなあやっぱり。

>b r<

「知ってるだろ、俺割りと真面目に虐められっ子だったんだよ。毎日もうどうでもよくて、ぶっちゃけ死ぬ事ばっか考えてた、どっかの誰かが殺さねえかなとか」>b r<

「殺伐！」>b r<

「そう。ところがどっかの誰かは見ず知らずの誰かに一瞬で立ち向かって行く訳だよ。俺一体何やってんのかと思ったね」>b r<

笹原君は私を抱き締めたまま頭の上で笑う。>b r<

嘲笑とかじゃなくて、可笑しそうに笑う。>b r<

「自分の事すらいっそどうでもよかったのに、あの時初めて誰かの事をすげえなと思ったんだ。悔しくて、俺もあんな風になりたいって懂れて、気付いたら好きだって感情すら心の支えにしてた」>b r<

田辺さんと同じように、私には想像もつかないほど辛かったんだ

$$\begin{matrix} \text{ろ} \\ \text{う。} \\ > \\ \text{b} \\ \text{r} \\ < \end{matrix}$$

少しまた強く抱き締める腕が、そう言ってるような気がする。>b
r<

「でもな、お前があの子かは、別にいいんだ。ただあの時、助けてくれてありがとって、ずつと言いたかった。――俺は今、今のお前が大事だし、好きだと思ってる」>br<

$$\begin{matrix} \vdots \\ \circ \end{matrix} \begin{matrix} > \\ \mathbf{b} \\ \mathbf{r} \\ < \end{matrix}$$

「笹原君、好き。好きーっ！」

笹原君が声を上げて笑う。
＞b r＜

どうしよう、それが嬉しくてまたこっちは泣きそうだ。＞b r＜
ぎゅっと抱き付いても同じだけの強さで抱き返して貰える、それが許される。＞b r＜

嬉しい、嬉しい嬉しい、嬉しい……。>b r<

「また泣く」>br<

近いのに遠くにあったあの目が、今凄く近くにある。>br<
それが、私だけに向けられてる。>br<

「お前ホント笑ったり怒ったり泣いたり忙しいな」>br<

「恋をすると情緒不安定になるものなのよ」>br<

「そう、かもな」>br<

[illegible]

「なんだそのリアクション」>br<

イタイイタイ、好きな女の鼻を割りと全力で摘まないように！>
b r<

「情緒不安定だったりとかしたの？ちよつと前はピリつてたけど、それって田辺さんに対して確信持てなかったからでしょ？」>br<
「女にこの複雑な男心をわかれとは言わねえよ」>br<

「超心外！乙女なんて繊細過ぎて箸が転んでも泣いて笑うんだからね！」>br<

「どこで張り合ってたんだ」＞br<
くすくす笑う、本当に箸が転んでなくてもなんだか笑いが零れて

しまう。>br<

下がったり上がったたり、気持ちがふわふわだ。>br<

「そういえば田辺にどこか行けとか言ってたの何だったんだ？」>

br<

「うん、ちょっとK高に昔馴染がいましたですね、三人ほど」>br<

「……お前と同じ人種か」>br<

「大まかにジャンル分けするなら、まあ、そう、かな」>br<

「あいつの苦勞が目に見えるみたいだ」>br<

どういう意味ですか。>br<

「でもま、それならあいつも大丈夫そうだな」>br<

「行くと思う？」>br<

「行くよ、必ず。むしろあいつ昔の俺よかバイタリティあるだろ。

しかし嵐みたいだったなあ」>br<

全くだ、でも出来ればこれをきっかけに今度は田辺さん自身が楽しく過ごして欲しい。>br<

結局色んなものをどう捉えてどう行動するかは自分次第だから。>

br<

でもきつと大丈夫だよな、だってあの子叫んでたもん、私だって楽しく生きたいってあんなに。>br<

独りは寂しいって、ちゃんと感じてたんだもんね。>br<

「笹原君は、今楽しい？」>br<

「楽しいよ。少しずつだけど、俺あの頃とだいぶ変わっただろ」>br<

「うん、昔可愛かったよねえ。人間て神秘」>br<

「お前の野生児ぶりは変わってなかったけどな」>br<

うぬう。>br<

「じゃあ気付けよ」>br<

「ははっ、全くだ」>br<

ぐりぐりと頭を撫で回される。>br<

「悠」>b r<

「うん?…え!」>b r<

「そう呼んでもいいだろ。あのエセ外人には呼ばせてたし」>b r<
「じゃあ私も名前で呼ぶ!ていうかそれはヤキモチか、ヤキモチなんだな!」>b r<

「どうせお前だって田辺が名前で呼んでるのに妬いてただろ」>b r<

「ハンカチを噛み裂きたいくらいにね!…よし、…よし、しよ、しよ、…おとおおとおお」>b r<

「アル中かお前は」>b r<

いざ呼ぼうと思うとなんかハードル高いんだって。>b r<
わああ、まさか呼べる時が来るとも実際はそう考えてなかったから口がむずむずするっ。>b r<

しかも笹原君がニヤニヤしてるよ!こいつ隠れSと見た!>b r<
なんだよ、テッドにヤキモチ妬いてたくせにさ。>b r<
そうだよっ、あいつと張り合ってたのだってそうだったんじゃないの?>b r<

「そんな頃から無意識に好かれていたのか!色々惜しい事をした!」>b r<

主に夜這い的な意味で。>b r<

「脳内と繋げて喋るな」>b r<

「テッドにヤキモチ妬いちゃって張り合っちゃったんですね、勝利君はー」>b r<

お、呼べた…でもなんか照れるっ。>b r<

「そういえばあいつ国帰ったってメールでお前言ってたけど、また来るんじゃないよな」>b r<

「どうだかね。毎日DMかってほどメール来るけど」>b r<

あれ、黙っちゃった、ここはまたヤキモチねとドキドキしちゃうところなんでしょうがぶっちゃけ何の計画練っているのか恐ろしくてとても軽々しく言える雰囲気ありません大佐!>b r<

でもなんでかそんな勝利君が可愛く見えちゃう不思議！わー！脳内でも勝利君とか呼んじやったよ！>b r<

「あ、イカーンッ！」>b r<

「今度はなんだよ」>b r<

「勝利君、じゃ田辺さんと被ってる！」>b r<

「もう呼びもしないだろ。最終的にアンタ呼ばわりだったし、実は俺すげー同属嫌悪されてんだろアレ」>b r<

「でもなんかやだ」>b r<

「負けず嫌い」>b r<

ああもう笑え、笑うがいいさ。>b r<

だってさあ、よくよく考えたら下の名前で呼ぶ女子（脳内除く）は私だけって事になるんだよね。>b r<

だったらさあ、やっぱりそれらしく呼んでみたいって言うか、ぶっちゃけこれで私ハジメテの女に！>b r<

「勝利！」>b r<

「なんだよ」>b r<

「……なんかさあ、名前呼んでる感じがしないんだけど。慣れない所為？」>b r<

「明らかに名前の所為だろうな。俺この名前心底嫌だったんだよなあ」>b r<

だろうねえ、友達に「真実」っているけどコナソって呼ばれててイライラしてたっけ。>b r<

大体笹原家は皆揃って壮大な名前だもんなあ、うちの親父様もそこそこアレだけど。>b r<

「でも今となっては名前負けしてないね」>b r<

「まあ、な。そういうえば、そうだな。俺の名前、勝利だった」>b r<

なんだ今更、家族しか呼ばないから忘れたとか言い出すんじゃないだろうな。>b r<

何故か口角を上げた勝利（こちら早速脳内でも使用）は私の顔を

覗き込む。> b r <

何と問う間もなく再びキス、された。> b r <

「んっ？んん……っ」> b r <

わあ！わあ！わあ！下！違う、舌！> b r <

うわ、わ、唇食まれて、舌で、中、掻き回され……っ。> b r <

「ふぁ」> b r <

「因みに俺も割りと負けず嫌い」> b r <

散々ディープかまして挙句にやりと笑ってそういう事言いますかね！？> b r <

ううううっ、とんだテダレだこやつっ。> b r <

人の唇指で拭うとかなんかエロス過ぎるぞ！> b r <

「すでに誰かとやってんじゃないでしょうね！？」> b r <

「やってねえよ、名誉毀損だぞ」> b r <

神崎さんみたいな事言うな。> b r <

「だって、なんか慣れてるっぽ！」> b r <

「知らねえよ、大体教わってするもんかこういうの」> b r <

「そう言われると、まあ」> b r <

大人のレッスンとか言い出すとどこかのアダルトな話になってしまいうしね。> b r <

ていうか、天然で取得してる方も充分アレだと思いますセンサー。

> b r <

「なんかちょっとわかったな」> b r <

「何が？」> b r <

「いや、これする奴の気持ち。意外に気持ちいい」> b r <

言ってまた塞がれる。> b r <

探るみたいに舌があちこちを嘗めたり突付いたりして来て、唇から溢れそうになるものを飲み込むので精一杯。> b r <

でも、うん、ちょっと、いい気持ち。> b r <

弱いところを接触させるのは相手を信用してないと出来ないって言うけど、本当にそうかも。> b r <

このまま、もつと繋がっていたくなる。>br<

「ン、……」>br<

ちゅっと音を立てて離れるのさえ、離れ難くて追いかけたくなつた。>br<

あつたかくて、ふわふわする、あたままわんない。>br<

「うん、きもちい」>br<

「……」>br<

「しょーり？」>br<

「……いい、お前なんぞに男の機微がわかって堪るか」>br<

「しんがい！」>br<

「なんか呂律回ってないぞ。……あーもー」>br<

「わうっ」>br<

突然体が持ち上げられて後ろにある木の陰で下ろされたかと思うと、幹に体を押し付けられて唇をぶつけられた。>br<

ちよっと下唇が痛かったんだけど、それを察したように舌で優しくなぞられる。>br<

何度も何度も角度を変えて唇を重ねて、そつと擦り合わせたり啄ばんだりを繰り返す。>br<

はあ、どうしよ……凄く気持ちいい。>br<

「なんで、止めるの……もっと」>br<

「……ダメ、また今度な」>br<

「えー」>br<

「はあ。流石にここじゃまずいだろ」>br<

「もうしたのに」>br<

かなり今更じゃないですかね？>br<

「だから……いい、いい。男は繊細で複雑なんだ」>br<

よくわからんが、大変なんですね。>br<

「もう暗いし、帰るか。送ってく」>br<

ひとつ髪を撫でて、勝利は私に手を差し出す、当たり前みたいに。

>br<

そつと手を伸ばしたら更に手が伸びて来てぎゅっと握られた。>br<

「なあ、お前が最初に俺になんて言って来たか憶えてるか?」>br<

「告白した時?」>br<

「そう、開口一番の」>br<

「勿論憶えてるよー」>br<

ハイテンションの傍ら、物凄くドキドキした。>br<

二度目の恋をして見つめ続けて、あの時初めて勝利の目が私を見てくれたのが嬉しかった。>br<

嬉し過ぎて逆にテンション上がった……上がり過ぎた結果色々すっ飛ばしたけど。>br<

なんでこんなに好きなのか私だって今もよく説明が出来そうになり。>br<

彼を知る度に良い所も悪い所も発見して、顔を見るたび声を聞く度嬉しくなって切なくなって。>br<

私の中にも色んな感情があって、でもその中心で、この人が好きって気持ち今は物凄く大きくなって。>br<

いつでも好きだった、でも彼の事を知っていける度前よりもっと好きになれてる気がするんだよ。>br<

「もう一回、言ってくれないか」>br<

私の手を引いてちよつと先を歩いていた勝利は、灯った公園の明かりの下で立ち止まって言った。>br<

それに私は頷く。>br<

正面に立ちその目を真っ直ぐ見て、あの時と同じように心が震える。>br<

>br<>br<

「相庭悠です。あなたが好きです」>br<

>br<>br<

「笹原勝利です。あなたが好きです」>br<

$\begin{matrix} > \\ b \\ r \\ < \\ > \\ b \\ r \\ < \end{matrix}$

24. 恋愛、先手必勝法！ (完)

> b r < > b r <

「バカップル」> b r <

「バカップル」> b r <

……何もそんな心底呆れた目で言わなくてもよろしいんじゃないでしょうか、明菜様頼子様。> b r <

大体あんたらに言われたくないっの。> b r <

アキちゃんなんてあの年下美少年と秘密の間でイチヤイチヤイチヤしてやがってくせにさ。> b r <

おまけに頼子は40代のダンディズムと付き合ってるって何だよ！
聞いてないよ！イイ人フェチの上オジサマ趣味かよ深過ぎて底が見えないよ！そいつロリコンじゃないのか大丈夫なのか頼子さーん！
……と言ったところで大丈夫だよと真顔で返されるに決まってるんですけどね。> b r <

ホント人の趣味ってわかんないわー。> b r <

「ふっ、まあ何とでも言いたまへ」> b r <

「うわーなんかむかつくわー。でも改めて、大魔神ゲットおめでとう」> b r <

「その言い方もどうかと思うが、ありがとう」> b r <

ああでも今は何言われても特に気にする気にならないわ。> b r <

「でも皆も二人にちよつと慣れて来たよね」> b r <

「ああ、あんた達がお手手繋いで登校して来た日には教師含め早退者が続出したけどねえ。天変地異が起きなくてホントよかったわね」> b r <

どういう意味だ。> b r <

「でも笹原君でああいうキャラだったんだねー。無愛想は相変わらずみたいけど」> b r <

「いやいや、顔緩み過ぎてて中川なんかサバイボとか言ってたわよ」

>br<

という意味だ。>br<

「あ、そういえば中川ちゃんと最近会ってないな」>br<

「あーダメダメ。向こうもすっかり出来上がってるから。あっちも頭ん中タンポポの綿毛じゃないの」>br<

あっちもってのが気にはなるが、まあいい。>br<

「マジすか！そりゃお礼参りに行かんとっ」>br<

「悠、なんか意味違う」>br<

ううん、でも中川ちゃんとはまた話したいな、大崎君とどこでどうなったのかも聞きたいし、ニヤニヤ。>br<

「あ、そろそろお昼行ってくるー」>br<

「はいはい、バカップル」>br<

「行っってらっしやい、バカップル」>br<

なんのっ、その称号有り難く頂戴する！>br<

「ありがとう、友よ！いてきまーす！」>br<

「鱈男か」>br<

>br<>br<>br<>br<>br<>br<>br<

で、今日は晴天、気温もお高めなので屋上で昼食と相成っている訳ですが。>br<

「鈴木君、明石君、最近食の進みが悪いよね」>br<

「こんな環境で食が進むかよ！」>br<

「笹原……流石に俺はお前を見る目が変わった」>br<

「やっかみはいいからさっさと食えよ」>br<

まあ恐らくお二人が言いたいのは、私が後ろから勝利に抱っこ状態にされているという環境だと思いますが。>br<

ついでに私が勝利にお弁当作ってアーンとかやってる環境だと思われませんが。>br<

ま、いんじゃない？ほら、若いし。>br<

これが成人してて場が社員食堂とかだったらどうかと思うけど。>br<

ほら、まだ高校生だし？空のバカヤローとか叫ぶ為の屋上だし？いんじゃない？>br<

「変われば変わるもんだ」>br<

「達観してるなあ、明石君」>br<

「何か極めてんのはむしろそっちだろ」>br<

「まあでもよかったな、相庭。笹原も」>br<

「ありがとう、鈴木くーんぐっ」>br<

今度は抱っこではなく羽交い絞めにされました、ギブギブギブ！

セコンド、タオル！>br<

「笹原、男の嫉妬は見苦しいぞ。つか相庭窒息するって」>br<

「うわー、同小中の奴らにこれ見せてえ。絶対信じないだろうけど。写メっていい？」>br<

「いい訳ねえだろ」>br<

首に回った腕が漸く再び腰に回されて酸素が戻って来た。>br< ふう、両想いってのも苦しいもなんだな、うっかり酸欠になりかけたよ物理的に。>br<

「で、なんで毎回お前らが一緒にくっついて来る訳だよ。食の進みが悪いなら他所で食え」>br<

「あんなあ、お前らバカップル二人っきりで野放しにするなってあっちこっちから苦情来てんの、俺に。何故か俺に！」>br<

鈴木君、そういうの言いやすそうだからなあ、流石我が校のいい人選手権代表。>br<

お前なら世界を目指せる！立て、立つんだ鈴木君！>br<

「そこいらで若気の至りに及びそう、しかもギャラリーも気にせずおっぱじめそう、だど。お前らまだそこまで行っていないのにな」>br<

笑う明石君に勝利の投げたお弁当の蓋が飛んだ。>br<

しかも避けてるよ、やっぱりこれで運動部じゃないとか明石君もある意味サギだな。>br<

大体学校でギャラリーを前に若気の至りをおっぱじめるとか、ど

んなイメージ持たれてんだよ私達は。＞b r＜
してません、……しませんよ!？＞b r＜

そりゃあ勝利が望むなら吝かではないけど、これでこの人時と場所
は選ぴそうだからね、しっかりと。＞b r＜

そうそう、両想いという事になってまた新しい一面を知った。＞
b r＜

昔の事があったからなのかそれとも元からなのか、物凄くスキんシ
ップ好きでヤキモチ妬きだ。＞b r＜

本当にもう比喻じゃなく、物凄く。＞b r＜

登校は手を繋ぐし隙あらば触るし昼休みはこの通りだし放課後も部
活のない日は夕飯前までデートするし今度の休日だってずっと一緒
にいる予定。＞b r＜

……何度も言うが、夢じゃないよな。＞b r＜

うう、幸せ過ぎて脳が飽和状態っ、その内耳とかから何かが出そう、
ふわっと出そう。＞b r＜

「だから、そういう事は学校外でやれてっ！特に俺の見てない所で
っ」＞b r＜

すまん鈴木君、幸せ過ぎると人は抱き付いてしまいたくなるらし
い。＞b r＜

そんでもってまたぎゅうぎゅうと抱き締め返されるものらしい。＞
b r＜

心も体もぽかぽかとして暖がとれてしまうスグレモノ、ぬくいぬく
い。＞b r＜

「鈴木も誰か見つけられば？」＞b r＜

「お前が言うなよ明石っ」＞b r＜

「俺、狙ってるのはいるから」＞b r＜

「誰だよ!？」＞b r＜

OH、思わず鈴木君とハモってしまった。＞b r＜

けどなんだそれ超気になるな、この裏大魔神に狙われるなんてある
意味生贄的な女の子は誰よ!＞b r＜

「なんだあ。勝利兄ちゃんがぐずぐずしてんなら俺が悠さん狙——
なんでもありませんごめんなさい！俺は悪い弟！俺は悪い弟！」>
b r<

なんかその辺に頭を叩き付けそうな勢いだな。>b r<

「下らねえ事二度と言ってんじゃねえぞ」>b r<

「へい！肝に銘じやすアニキ！」>b r<

「悠、俺ちよつと道場の方見て来るから、適当に上がってて」>b
r<

そう言い残してトミさん呼びながら家の中に入ってく勝利を二
人して見送る。>b r<

「やべえ、いつもの七割り増しで怖かった……」>b r<

「そうか、勝利と付き合うようになったのか」>b r<

「うん、……って広太さん！」>b r<

この家の人達は気配断ちの技でも会得してんのか。>b r<

「剣矢は知らないだろうけどな、あいつ物凄い執着心も独占欲も強
いぞ。未だに同じ竹刀直して使ってるしな」>b r<

「マジかよ。どうすんの、悠さん。その内携帯とか勝手に見出した
ら」>b r<

「超愛されてる！」>b r<

……なんですか二人揃ってそのダメだこりゃみたいな視線は。>
b r<

「はは、勝利の奴、目が高かったって訳だな」>b r<

「あーああ、折角俺にもカノジョ出来るチャンスと思ったのに」>
b r<

「剣矢君モテるって聞いたけど？」>b r<

「ああ、こいつはダメなんだよ。勝利とはまた違った意味で我儘だ
し頑固な上根性もないから、付き合う女の子は苦勞する」>b r<
ナルホド、長兄の言葉は重いな。>b r<

「ヒドくね!？」>b r<

「さあ、上がって」>b r<

涙目になっている剣矢君はとりあえず置いてお邪魔すると、トミさんがにこにこ満面の笑みで出迎えてくれる。>br<

「お久しぶりです、トミさんっ」>br<

「まあまあ悠ちゃん、いつかはありがとうね。勝君から今聞いたのよ。まあまあまあよかったこと！」>br<

エプロンで涙拭ってるよトミさん……勝利ってば超愛されてるなあ。>br<

「あいつの太刀筋が変わったんは悠ちゃんのお蔭所為だったんじゃない」>br<

「直刃さん」>br<

「未熟な奴だがな、孫をよろしく頼むよ」>br<

「——はい」>br<

トミさんの隣で直刃さんもにこにこしてる。>br<

やっぱり、勝利は愛されて育ったんだよ、うん。>br<

「……しかしあの天地の馬鹿小僧との縁も切れんようだな……はあ」>br<

……そこは……すみません。>br<

「お菓子を持って行きますからね、そっちの奥の勝君のお部屋で待っていてね」>br<

トミさんはエプロンで涙を拭き拭き反対側の奥へと引っ込んで行く。>br<

それを見送って私は言われるまま勝利の部屋にお邪魔した………はあ、これが勝利の部屋かあ、入口で暫し感動を噛み締めよう。>br<

あんまりって言うか殆ど物がなくて、如何にも勝利の部屋って感じだな、期待を裏切らない。>br<

あ、私も読んだ文庫本がある、本の趣味似てるかも。>br<
まだまだお互い知らない事だった一杯あるし、これから知っていき
れると思うと嬉しいなあ。>br<

「悠ちゃん、お紅茶でよかった？それからチョコレートケーキね。」

ハイ、座布団も」>br<

「ありがとうございます。うわっ、美味しそう」>br<

部屋に入って来たトミさんはテキパキと支度を整える。>br<
しかしこれブランド物のケーキじゃないんですかね？>br<

「今日悠ちゃんが来るって言うから、政子さんが奮発してって。お夕飯も食べて行って頂戴ね、政子さん達はお仕事で残念がっていたけど。またいつでも来れるものね。何せ勝君の彼女になったんですものねえ。本当にあの勝君が大きくなって……」>br<

ああああああまた泣き始めてしまった。>br<

なんとか宥めるとトミさんは小さく手を振って部屋を出て行く、相変わらず可愛い人だ。>br<

って、夕飯と言われるとは思わなかったな、まあ親父様は腹空かせておけばいいとしても。>br<

前は私がお手伝いをしたからともかく、ただご馳走になるってのもまた勝手が違う。>br<

でも折角言ってくれてるのを断るのも……うううううん。>br<

とかやってたら携帯にメール来た。>br<

「何唸ってんだ」>br<

「わあ！……あ、もういいの？」>br<

「ああ、元々修繕しなきゃなんないとこあったから、修理自体はまだかかるんだけどな」>br<

勝利は私が座っていた横に胡坐をかいて後ろのベッドに凭れる。

>br<

それに倣って私も大きなベッドに背を付けてみた。>br<

すると勝利が私の手の中の携帯を覗き込んで来る、……剣矢君、君のお兄さんは勝手にどこか突っ込む間もないほど堂々と見えます。>br<

「なんだこのメール」>br<

そう言いながら勝利が覗き込んでいる画面には「なんなのあの人

達！絶対何かおかしいって！今日なんか廊下で大道芸人みたいなことするし、しかも」――以下延々とぶっちゃけた文字が。>br<

「カスミン、楽しそうでしょ。よかったよねえ」>br<

「……もしかしくなくても田辺か、これ」>br<

「もしかしてもそうです」>br<

いやはや、あいつらに関わってさえくれば大人しい学校生活など送れる訳がないとは思っていたけど、予想以上の成果を上げたようだな、結構結構、グッジョブ、クリティカルだ。>br<

もうカスミンはどこにしようとも独りになどなれませんかよ、あいつらしつこいから。>br<

私としても毎日毎日毎日トイレにまであいつらが追いかけて来た日々が走馬灯のように蘇る……。>br<

「いつからメル友になってんだよ」>br<

「あれから二日後にはすでにこんなメールが届きました。勝利にもね、ごめんねって言うって言うたよ。いつかちゃんと謝りに行くからねって」>br<

「そか……。まあ、楽しそうでは、ある、か？」>br<

勝利が今何かを妥協したようだ。>br<

「あ、そうだ。テッドから昨日勝利宛にメール貰ったんだった。ハイ。私見てないから」>br<

「……。何書いてあるか聞きたいか？」>br<

「ケッコウデス」>br<

その笑っていない目を見れば大体想像つくわ、あの野郎また余計な事書きやがったな。>br<

やっぱ遠慮しないで消せばよかった、あいつ今度日本に来たら覚えてろよ。>br<

「ねえ、修理の間ずっと道場お休み？直刃さん寂しいねえ」>br<
話題転換に努力してみる。>br<

「そう。爺さんは前からあちこち出てって教えてるからあの人の生活は変わってないよ」>br<

そっか、じゃあ門下生の子達の方がつままないのか。> b r<

「お前、ガキらに会ったら煩いぞ」> b r<

「まあ個人的になら教えてもいいんだけどね。あ、勝利はどうする？」> b r<

勝利はうーんと同じように唸ってから下に置かれた紅茶に口を付けた。> b r<

ふわりといい香りがする、トミさんお茶の淹れ方上手だなあ。> b r<

いつか笹原家の好みを把握すべくご指南頂きたい。> b r<

「お前色々やってるって言ってたけど、昔からどこで習ってたんだよ」> b r<

「始めは親父様だよ。それで、親父様の連れて来るお客。段々新しい事やりたくなって近所の道場とかも行ったよ」> b r<

そういえば当時近所な事もあったのにこの剣道場を親父様が教えなかったのって直刃さんがいたからか。> b r<

もしここの存在知ってたなら、もっと早く再会出来てたのかな。> b r<

今となっては言っても仕方ない事だけど、でもこうして数年の歳月を経たからこそよかったのもあるんだろう。> b r<

大事にしたい、今度こそ後悔と共に失くさないように。> b r<

「危ねっ……急に抱き付くなよ、茶が零れる」> b r<

「勝利だっていつもやってるじゃん」> b r<

「だから、ここでやられるとなあ……」> b r<

ぶつぶつ言いながらも肩を抱き寄せて顔が近付けられるのに自然に顎を上げて目を閉じる。> b r<

しかしこういう時の動悸ってまだまだ治まんないなあ、いずれ慣れるようになるんだろうか。> b r<

凄く嬉しくて、あとちよっとの緊張で、ドキドキするよ。> b r<

「え、あれ？」> b r<

幾ら待ってもいつもの感触がしないから目を開けると、勝利は顔

を上げてじっとドアの方を見つめてる。> b r <
……あー、これは、お約束のイベントですね、把握しました。> b r <

ちらりと目を向けて来る勝利に行ってらっしゃいとトミさんを真似て小さく手を振る。> b r <

立ち上がった勝利は音を立てずにドアの方へ。> b r <

「ぎゃ！」> b r <

「うわ！」> b r <

「おう！」> b r <

「あら！」> b r <

ドアを勢いよく開けた向こうにはお約束の光景が。> b r <

剣矢君はまあともかく、……広大さんに直刃さんにトミさんまで。

> b r <

「盗み聞きすんな！」> b r <

勝利の怒声にそれぞれが何やら愛想笑いを残しつつ引っ込んで行く。> b r <

「勝利は本当に愛されてるなあ」> b r <

「お前だって親父さんに大事にされてるだろ。俺の事殺しそうな勢いで来た事あった」> b r <

「ええ！？ここに！？」> b r <

「いや、お前が田辺と俺残して逃げてった日にお前んちの前で会ったんだ。お前がスーツのイケメンと車乗ってた日」> b r <

OH……物凄くチクチクグサグサと何かが刺さって来てます。>

b r <

ってそれ神崎さんの事かな、だとすると親父様がカニ食べないで姿消した時か。> b r <

「どこ行ってたのかと思ったら。あ、あの人は神崎亮太さんって言って、私の育ての親の一人みたいなもんなんだよ」> b r <

「あんまりそうは見えなかったな」> b r <

「神崎さん、お姉さんと一緒であんまり三十代には見えないから」

> b r <

人間て神秘。> b r <

「大体あの人凄い嫁がいるんだよ!」> b r <

「そうなのか?」> b r <

テレビ画面の中にですがね。> b r <

後日神崎さんの(脳内の)嫁を確認したら凄いんだこれが、ピンクの髪の毛のツインテールで超アニメ声で魔法少女で語尾が「にゃう」…あんまり深く考えない事にしよう、人の趣味はそれぞれだから。

> b r <

「しょーり、もういつかい!やりなおし!」> b r <

を、要求する!………要求出来ちゃうようになれたんだなあ、じいーん。> b r <

感動を噛み締めつつ再度体勢を整えようとしたら、腰に両手を当てて持ち上げられると膝の上に正面から座らされる。> b r <

丸つきり跨ぐ格好がちょい恥しいんですが、本人がご満悦のようなのでいいか。> b r <

本当にこういうの躊躇いなくやっちゃうんだもんなあ、鈴木君達がこれ聞いたら卒倒しそう。> b r <

「お前、今何考えた?」> b r <

「勝利の事だよ!」> b r <

おまけに勘も鋭いときてる、というより最近妙な方向に益々研ぎ澄まされてるよ。> b r <

だがそこもいい!そうだ、そこもいいんだ!> b r <

「春より髪伸びたな」> b r <

私の首から肩にかかる髪を後ろに払いながらそう言う。> b r <

「短い方が好き?」> b r <

「特にない」> b r <

学級日誌の一言コメントみたいな事言うなよう!先生悲しいです!> b r <

けど正直今までの生活聞いた手前、ホントこの人女に興味あったの

かな……性的な意味で。>br<

「激しく今更ですが、好みのタイプとかなかったの?」>br<

「それはお前だったんだろ」>br<

ぐふう! 相庭悠ときめきハートに5963の攻撃を受けた! 相庭悠はざわざわしている!>br<

うおおおおおお、最近頓に攻撃が激しくて堪らんです。>br<

「客観的にさあ、髪長い方がいいとか何とか」>br<

「お前はそのまま伸ばすのか? 昔も春くらいの長さだったよな」>br<

「あー、あの長さだと却って面倒でね、もっと伸ばそうと思ってるんだけど」>br<

「じゃあ、それで」>br<

ぎゃああああああっそれはかの有名な「ありのままのお前なら何でもいい……」発言ですね! これが萌え殺しか!>br<

神崎さん、私二十歳になったら貴方と美味しいお酒が飲めそうです。>br<

何なのここに来て私的萌え発言の連発とか悶えるっ。>br<

「一体私をどうする気か!」>br<

おっと口に出してた。>br<

「こう」>br<

そう言っただけで今度こそ近付いて来た唇に目を閉じようとした瞬間。

>br<

まあ、ね、わかってるんですけどね。>br<

「うな重と聞いて俺が来ましたあああああああああああああああ
ああ」>br<

「誰もお前なんぞ呼んでおらんわい!」>br<

「あら直刃さん、私が呼んだんですよ」>br<

「トミさん!」>br<

「TENCHIだー!!」>br<

「またお会い出来て光栄です!」>br<

……えーと、なんだ、その。> b r <

「すまん」> b r <

「いや、……」> b r <

次いで私達を呼ぶトミさんの声、……ああああああ。> b r <
「行くか」> b r <

勝利は小さく笑って立ち上がると、私に手を伸ばす。> b r <
私はその手を取って、——思い切り引いた。> b r <

一瞬だけ重なった唇に、見開かれる勝利の目。> b r <

「まだ勝ちはありませんよ？」> b r <

そう、どうせ先は長いだろうから、まだまだ勝負の結果はわからない。> b r <

これから色んな事が起きるだろう、笑ってばかりじゃいけないような事だって。> b r <

「上等」> b r <

でも貴方がそうやって笑ってくれるなら、私も笑っていられる。> b r <

そうであろうと、頑張って行けるよ。> b r <

とりあず、始まったばかりの私達の関係に。> b r <

> b r <> b r <

先手必勝！> b r <

> b r <> b r <

24. 恋愛、先手必勝法！ (完) (後書き)

恋愛、先手必勝法！これにて本編完結です。

お読み頂き本当にありがとうございます！

後書きなどもありますのでよかったらどうぞ↓<http://nekokichin.blog2.fc2.com/blog-entry-133.html>

今後は番外編等を更新予定。

下の拍手かブログからご感想などをお寄せ頂けると嬉しいです！

番外編1 ちょっとその後（前書き）

※笹原勝利視点、超バカップル警報。それとなくエロス漂うので注意。

番外編1 ちょっとその後

>br<>br<

悠と付き合い始めてかれこれ二ヶ月弱、日数にしては少ないが俺の生活は劇的に変わった。>br<

明石に言わせりゃ悠中心に世界が回ってる、らしいけど。>br<別にも前とそう変わらないんじゃないかと思う。>br<剣道に打ち込み始めたのだって、元々はあいつみたいになりたかったってのもあったし。>br<

我ながらかなり危ないと思うが特に直す気はない、と言うか今更直せないだろこれ、最早ライフワークみたいなもんだ。>br<

ある意味今好きになったのが悠本人でつくづくよかったんだよ。

>br<

あんなに突進して来ておきながら、俺を好きな奴と橋渡ししようとすらするような奴だから。>br<

なまじ恋愛に自分の損得挟む女だったらこうはいかなかったと思う。

>br<

色んな意味で自分の心のままに動く奴だから、……最初から惚れたんだよな。>br<

だがしかし、遅い。>br<

美容院に行くからと言われ現地集合なのはいいけど、駅前で待っているとさっきからちらちら女に見られて鬱陶しいし、声をかけて来る奴までいる。>br<

俺の見てくれだけはそこそこいいらしいから寄って来るだけで、口開いたとたんに回れ右するのはまあ面白いと言えなくもないけどな。>br<

とか言ったら、噂をすれば影だ、しかも悪い方の。>br<

「ねえ、貴方一人なの？ 私達とよかったらカラオケでも行かない？ 今ちよっと暇で……」>br<

「キシャー!!」>br<

寄って来た女共にもその威嚇が聞こえたかどうかは知らないが。

>br<

「あ、なんだ、彼女連れか。じゃあね」>br<

「キッシャー!!」>br<

「もう行つたぞ、威嚇すー」>br<

んな、と俺は漸く来た待ち人に振り返って言うはずだった。>br<

「遅れてごめんね!混んでるわ色々されちゃうわで時間かかったやつて。ね、今のなんか待ち合わせのカップルっぽいセリフでよくない!?」>br<

「……悠、なんだその顔」>br<

俺は詰まる喉から漸くそれだけを搾り出して言った。>br
ていうかマジでなんだその顔!?!>br<

「え、変?いや、プロのメイクさんが来てるとかで、なんだか色々弄られちゃってね。まさか奇抜!?!でも他のお客さん達にも大人っぽくなって似合ってるって言わあああああああれええええええええええええええええ」>br<

悠の手を取って引き摺り歩く、とにかく俺のすべき事は一刻も早くどこかの店に入る事だ。>br<

「ちよちよちよ勝利!勝利!なんだ、どしたっ」>br<

「お前がなんだどうしただ!メチャクチャ目立ってんぞ」>br
早足でくっ付いて来ながら悠は通り過ぎて行く辺りの人に目をやって、ああと頷く。>br<

「ここに来るまでこんなもんだったよ」>br<

「お前はバカか。お前はバカだ」>br<

「即座に訂正イクナイ!しかも訂正にナッテナイ!」>br<

いいや、すでに救いようのないバカだ、鏡見て自分の顔がどうかすらもわかんねえのかこいつは。>br<

悠と付き合い出してから、その手の事にはまるで疎かった俺も流石

にわかるようになって来た。>br<

確かにこいつは目立つ、良くも悪くもだ。>br<

そもそも校内で写真まで出回っていた時点で俺も察するべきだった。

>br<

——可愛いんだ、こいつ。>br<

「あんまり早く歩かないでよ、リーチの差が——」>br<

「ウルサイ、キリキリ歩け」>br<

「もー、どこ行くんすか」>br<

その言葉に俺は目を走らせてその辺にあったカラオケ屋に入り、お互いコート脱いで個室奥のソファにとりあえず正座させた。>br<

「な、なんですかこの状況。おでえかんさま、オラァ無実だ!」>br<

「黙れ有罪。まず言っておきたい事がある」>br<

「何それ関白な宣言?」>br<

「お前はバカだ」>br<

「本日三度目!」>br<

わかるまで何度でも言う、バカ。>br<

「大体お前、その格好もなんだ。今何月だと思ってんだ、もう冬だぞ!」>br<

短い茶色のコートの裾に付いているふわふわしたものの下にはスカートらしきもののレースがちよつと見えるくらいで、あとは剥き出しの太腿ときた。>br<

「あのねえ、乙女のオシャレに寒さとか言ってられないの。第一それが物理的に出来るのは若い内だけなの、わかる?」>br<

わかって堪るかボケ!>br<

「どこぞの地域ではもうとつくに雪降ってるってのに、短過ぎるだろそのスカート!」>br<

「勝利、私の実の父親でも言わなかった事言うねえ」>br<

「……参考程度に聞くが、お前の親父さんその格好見てなんつった」

>b r<

「これで勝利悩殺して来いグッドラック！って」>b r<
幸運を、じゃねえよ。>b r<

「それでお前はなんつった」>b r<

「まかせろ！」>b r<

「任せられるか！」>b r<

「ダメ？」>b r<

正面に座った俺を肩を落としながら見上げて来る。>b r<
そりゃわかつてる、俺だってわかつてんだよ、こいつが俺の為に
てギアアギア騒ぎながら選んで来た服だったのは。>b r<
俺とてこれでも健康な男だからな、それがあらゆる意味で嬉しくな
いとは思わない。>b r<
嬉しいよ、嬉しいに決まってるんだよ、ただ時と場所を考えろ！むし
ろこここそ俺の身になれ！>b r<

「……ダメ」>b r<

「間があったな」>b r<

「ウルサイ。大体それで電車乗るとかお前の頭に入ってるのは藁か
？」>b r<

「あわわわわー！髪も折角セットして貰ったんだってー！」>b r<
いつもは結んでいる事が多い、今日もアップに結い上げられた髪
をぐしゃぐしゃと撫で回すと、……マズイ、妙な具合に解れた。>
b r<

「折角綺麗に巻いて貰ったのに」>b r<

悠の毛先が剥き出しにされた鎖骨辺りでくるりと波打ってる。>
b r<

そして細い指がそれを辿るように払う。>b r<

「これもう下ろして帰んなきゃーわ、ンッ」>b r<

「……犬？」>b r<

「違う！何、急に」>b r<

ちよっとだけ吸い付いた鎖骨から唇を離すと、少し悠の目が揺れ

た。>b r<

その鎖骨が妙に色っぽかったからって言ったら、何かまた俺がマズイ事になりそうだから止めておこう。>b r<

とりあえずまだコトには及んでないんだ、まあ最後までしてないだけでも言うけど。>b r<

それと言うのもまずは俺が一月前から始めたバイトにある。>b r< と言っても今まで道場でやってた事にちょっと仕事を追加してバイト代を貰ってるだけだ。>b r<

それでもジジイが嬉々としてこき使うから、正直文化祭やら部活やらも相俟って余力がないって言うか。>b r<

ぶっちゃけ剣道部にそう力を入れていないあの高校を選んだのは心底正解だったと思える（大会や何かは中学で懲りた所為だ）。>b r<

それに状況的に場所を選ぶとしても、家族がいる手前お互いの家だけでは絶対に最後までなんか出来ないし、その流れで場所を決めるとなるとちょっとまだ金に余裕がない。>b r<

初めてはそれなりの場所で、とやっぱり思うから。>b r<

どうせこいつは聞けばどこでもいいとか言い出すんだろうしな。>b r<

でもそれじゃ、俺が嫌だ。>b r<

俺の事をそれこそ何でも喜びたがるような奴だから、それにもう甘えたくはない。>b r<

「そういう格好してると、こういう目で見られるって事だろ」>b r<

「勝利ならオーケーバッチコイ！さあカマン！」>b r<

「他の奴の目にも止まるって言ってんだよボケ！」>b r<

「そんな事言うなら勝利だって逆ナンされてんじゃないのー！キツシャー！」>b r<

「思い出し威嚇すんな」>b r<

そうは言うが、悠と付き合い出してから俺のその手の事はすっか

りナリを潜めた。>br<

明石曰く悠がいい虫除けになっているらしい、確かに一人でいる時に街で今日みたいに声をかけられても悠を見るとさっと女は逃げて行く。>br<

けど男相手となっちゃそうはいかねえだろ？>br<

こいつだって一人でいればあれこれ声をかけられてる、まあ対処出来ない女じゃないからその辺は心配ないけど。>br<

女はどうだか知らないが、男は通り掛った女を脳内で一瞬の内に脱がす奴だっているんだ。>br<

……ああクソ、想像に腹を立ててどうする。>br<

余裕がねえなと自分で戒めようと思っても、このバカ相手じゃそうするだけこっちこそバカを見るんだ。>br<

そうやってるのがどれだけ難しい事なのか、こいつはちっともわかってない。>br<

いつも俺の事が好きだって何にも表れているのを見せられると、堪らなくなるんだよ。>br<

可愛くて仕方ないから、俺も無茶を言ってしまう。>br<

「がつつり化粧されてんな」>br<

手を伸ばして頬に触れると、施されたものだけではく頬がほんのり色付く。>br<

「普段しないから、なんか違和感あるけどね」>br<

「睫毛とか近くで見るとすげえな」>br<

「付けてはないんだよ、長く見せてるだけ」>br<

そう言われてもいつもの顔じゃないだけに化粧の違いなんかわかるかっての。>br<

指を少し落として唇の中央に親指を這わせる。>br<

「ここもか。つか、なんで女ってこの光ってんの塗るんだ？」>br<

「濡れてるように見えるんじゃないかったっけかな、アレ的な意味で」>br<

「ああ、こう」>br<

唇に落としていた手を首の後ろに回してそれを引き寄せる。>br<

ぐっと近付いて来たそれを、食べた。>br<

「まっず」>br<

「そりゃ、美味しいもんじゃないでしょうに。あ、でも今使ってるリップはメイプルシロップ味だよ。あれは美味しかったでしょ？」>br<

ああ道理で最近妙に甘ったるいなと思った、菓子食った後じゃなかったのか。>br<

近付いたままの体制でもう一度舌を伸ばして柔らかいそこを舐めると、赤く塗られたそれが唇からはみ出て少し滲む。>br<

俺の唾液に濡れたそれは、滴り落ちそうな果汁にも見えた。>br<なるほどな、なんとなく美味そうに見える、濡れていると舌を伸ばしたくなるもんだ。>br<

「わ、わ、……勝利、勝利っ」>br<

「何」>br<

そのまま赤い雫を舌で拭いながら悠の体を腕に抱き込んでソファへ倒すと、緩く胸を押し返される。>br<

「ここじゃダメでしょっ」>br<

「誰も来ないだろ……最後までやってない限り」>br<

「そ、じゃなく、て……わ、あ、あっ」>br<

ずるずると上に這って逃げようとする体に手を這わせるとぶるりと細かに震えた。>br<

こいつは運動系神経だけじゃなく、基本的に神経が敏感に出来ているらしい。>br<

つまりくすぐったがり、更につまり、感じやすいって事なんだろうな。>br<

「ん、だめ、ホント……にいい」>br<

「今日に限ってなんで抵抗すんだよ」>br<

そもそも流石に最後までやる訳もないんだから、女子特有の日だってのはあんま言い訳にならないぞ。> b r <

ぴくぴくと跳ねる体を片腕に閉じ込めて鼻先を首筋に擦り付けると、また面白いくらい体が震えて仰け反る。> b r <

「あ、そ、ぶなっ」> b r <

バレた。> b r <

「しょうりっ、だめって……」> b r <

「なんで」> b r <

「き、もちよく、なっちゃ、うでしょーっ」> b r <

喘ぐ声を抑えて言ってるつもりだろうが、その方が擦れてて妙にエロイ。> b r <

不思議なもんだ、今までダチとその手の映像見たって別にどうとも思わなかったのに。> b r <

中学の時には明石も一緒にいて、揃って顔色変えないから「超人」とか呼ばれたっけな。> b r <

いやあいつは絶対俺とは違う意味で、単に慣れてただけだろ。> b r <

だと言うのにこういう時、こいつの全部が、なんか、こう……説明し難い。> b r <

「あっあっ、や」> b r <

「嫌って言うなよ、傷付くだろ」> b r <

「うそつけえ！」> b r <

まあな。> b r <

「ほんと、ほん、とにっ……いく、な、る」> b r <

「だから何抵抗してんだって。ほら」> b r <

「わうっ」> b r <

腰の辺りを這っていた両手を使って下から上へ持ち上げるように胸を包む。> b r <

服の上からでも指が沈んで、その柔らかさがよくわかる。> b r <
「なんか、やっぱデカくなってないか？」> b r <

「しょーりがっさわる、から！それにまだまだせーちよーき！」>br<

懲りずに指を何度も沈ませたり円を描くように揺すったりしていると、すっかり抵抗は止んで感じ切っているはずなのに、いつもと違って恨みがましい目を向けられる。>br<

でも少し涙目のそれも妙にイイなと思ったらも………わかってるよ、俺もバカだし重症なんだ。>br<

それに言うだろ、こういうのにつける薬はないって。>br<

「きゃ、わあ！マジで、ちよっ」>br<

「支離滅裂意味不明」>br<

長いカーディガンの中にある薄い素材の服のまた中にあるキャミソールを捲り上げる。>br<

表れた水色の下着の中に中央から指を差し入れると潤んだ目が俺を縋るように見上げた。>br<

直接触れた肌の温かさとか柔らかさだけじゃなく、俺の中で何かが疼く。>br<

「嫌？」>br<

「そういう聞き方、ずるいつ」>br<

「ズルイのはお前だ」>br<

いっそ何もしてなくても俺を動かす事なんてこいつには容易い。

>br<

その視線だけで俺をどうにか出来るなんて、これをズルイって言わずになんて言うんだよ。>br<

こんな風になるなんて想像もしなかった。>br<

俺も歴とした男だったんだなって、ちよっとほっとしたりもする。

>br<

どこか、悔しくはあるけど。>br<

結局男なんて複雑で至極単純なものだって事なんだろう、歴史だって裏には常に女がいる。>br<

まるで糸で操られてるみたいのに、引き寄せられて離れられない。>

b r<

「ん、ン、しょう、り」>b r<

「嫌？」>b r<

「やじゃないよ、すき」>b r<

するりと首に腕を巻き付けて来る動作の緩やかさときたらどうだ。

>b r<

こういう時、もう負けてもどうでもいいって気になる。>b r<

もう一度唇を食むと舌が伸ばされて来てそれに吸い付く。>b r<
ぷちゃ、というこの音を、いつだかこいつは可愛いと言った。>b r<

「で、もね、しょうり、ここ、いちじ、か、ん」>b r<

キスの合間にそれだけを漸く告げて、ぎゅっと俺を抱き寄せた悠はくすぐるように唇を擦り付けて来る。>b r<

胸の先端を指で挟むと上がった声は重ねた唇の隙間から少し漏れた。

>b r<

とろりとろりと、少しずつ悠の目が蕩けて行くのがわかる。>b r<

「延長するか？」>b r<

下着を完全に上までずらし沈ませた指のお蔭でふっくらと盛り上がった胸に唇を押し付けながら言う、ふるりと首が振られた。>b r<

まだ落ちてないのか、今日はやけに粘るな。>b r<

そう思って少し強く肌を吸うと大きく体が跳ねる。>b r<

「もー！離して離して！これ以上はマジでマズイってー！」>b r<

言葉だけ聞くと切羽詰った男のセリフみたいだぞそれ。>b r<

「もっと触って欲しくなるでしょ！それが自然の摂理、いやさ、恋人達の生理なのだから！」>b r<

「正論だが妙に言葉が悪いな」>b r<

「とにかく！これ以上ここでやっちゃったら一体何時間ここにいないきゃなんないと思ってんのー！」>b r<

「何時間で別に……」>b r<

まんま「休憩」する訳でもあるまいし。>br<

流石にこんなところでこれ以上出来るかっての。>br<

「そうなの！普段の自分の行動を省みてみなさい！」>br<

がしつと肩を掴まれて、……それが胸丸出しなもんだから妙な絵面だ。>br<

こうも一気に色気が出たり引っ込んだりする奴も珍しいんじゃないんだろうか。>br<

とか余計な事を考えていたら察したのか悠が睨んで来る。>br<

……いや、俺の普段の行動なんて言っただって、別に今とそう変わりがあってもいいような……と思う自分が流石に少しどうかと思うが。>br<

でもいつもならそもそも悠はこんな事を言い出しはしない。>br< 羞恥はあるようでも、悠自身も俺に触りたい欲求が勝っているらしい。>br<

ああだのこうだの理由をつけては触らせなかったり何やらを試したりする女はいるらしいから、その点こいつにはほっとさせられる。>br<

だと言うのに俺が一体何したってんだか。>br<

普段通りと言うなら今頃は大体お互い触りに触りまくって、後は大抵ぐったりする悠を寝かし付け……ああ。>br<

「わかった、納得した、止めよう」>br< ぱつと手を離す。>br<

「その一斉撤去みたいな離れ方もどうかと！」>br<

「じゃ、時間までこうしてるか」>br<

ぶつぶつ言いながら服を直した悠を膝の上に抱き上げて正面から抱き合う形にする。>br<

店員から電話が来る頃にはこの疼くような俺の熱も治まるだろ、……そう願いたい。>br<

考えてみりゃそうだった、ここが室内だったからうっかり失念した。>br<

最中もアレだけど、こいつ事が終わってからの顔がやたらに酷いだ、余韻が残りまくってると言うか。> b r <

そんなただ漏れの顔で外歩かせるとか、ある種の猥褻物陳列罪だろ。> b r <

俺は法律を守って、事後は数時間ばかりはこいつを外出させていない。> b r <

「もーもー！早く家帰りたいー」> b r <

「俺が言うのも何だけどな、今日買い物行きたいとか言ってなかったか」> b r <

「帰って、もつとする……」> b r <

……俺って実は他の男から見たらすげえ羨ましがられる奴なんじゃないか？> b r <

「ん、わかった」> b r <

しかし今朝親父さんがいるとか言ってたしな、あの人もいい加減フリーダムだけど流石にどうか。> b r <

娘のアレ的な事情なんか知りたくもないだろうし、俺も親のは土下座してでも知りたくない。> b r <

「明日休みだし、泊まってってね」> b r <

「いい、けど……帰りなんか買ってくか？親父さんいるんだろ？」> b r <

むしろ全く全然ちっとさっぱり気にはしないだろうが、一応土産の一つでもと思う。> b r <

どうやらうちの連中に負けずよく食うみたいだし。> b r <

「え、いないよ」> b r <

「は？」> b r <

「は？」> b r <

「は？じゃねえよ！聞いてねえよ！」> b r <

「言ってねえよ！」> b r <

「出掛けにその服見せたったつただろ」> b r <

「それから出かけたよ、今度は……どこって言ったっけかな」> b

$$r <$$

あのなあ。
>br<

「ハンカチ持ってるか」>br<

「バックの中」>br<

言われた通り脇に置かれていたバッグの中を漁って取り出したハシカチで悠の口元を拭う。>b r<

いつかこいつもこういうのを付けるのが当たり前の日が来るんだろ
うな。 > b r <

俺もその頃にはその姿に慣れていて今よりはもう少し余裕が出来るかもしれない。> b r <

そうなるようには、精進したい。

「ありがと。ちゃんと拭けた？」
＞br＜

そうやって笑いかけるこいつの隣に、ずつといたいと思うから。

$$\begin{matrix} > \\ \mathbf{b} \\ \mathbf{r} \\ < \end{matrix}$$

「よし、
帰るぞ」
＞br＜

[illegible]

いつか本当にあの家に「帰る」日が、早く来ればいい。>br<

$$\begin{array}{c} > \\ \text{b} \\ \text{r} \\ < \\ > \\ \text{b} \\ \text{r} \\ < \end{array}$$

ただ、親父さんが家にいないのは、ちよつと自分が心配だ。

$$\begin{matrix} > \\ \mathbf{b} \\ \mathbf{r} \\ < \end{matrix}$$
$$\begin{array}{c} > \\ \mathbf{b} \\ \mathbf{r} \\ < \\ > \\ \mathbf{b} \\ \mathbf{r} \\ < \end{array}$$

番外編2 親父様の溜息（前書き）

※相庭天地視点、過去と十八歳の娘と娘の彼氏と。やや非コメディ。

番外編2 親父様の溜息

>br<>br<

可もなければ不可もなく、それまでの人生はそんな感じだ。>br<

親の顔も憶えちゃいないが、あちこちたらい回しにされて行き着いたらしい施設の先生や俺と同じような連中は皆そこに気がいい奴の集まりだった。>br<

毎日はそれなりに楽しく、それなりに退屈。>br<

ただ手に残っているものがない、掴んだと思った瞬間には指の隙間から零れ落ちていく、その繰り返し。>br<

でもそんなもんだとって思ってたよ、人生一期一会って言うだろう？あ、意味違う？>br<

だから何かが欲しいと思った事はない。>br<

ずっとガキの頃はオモチャの類は皆で共有するもので、俺だけが独占出来る物なんてなかったから。>br<

違うな、別にあつたとしても俺はそれに執着しなかっただろう。>br<

人並み以上に勉強も運動も出来るようだったから、精々テキトーな学校行つて会社入って、施設に恩返しの一つでも出来りゃ御の字だった。>br<

その時の自分がそれ以外を持ってるなんて、想像した事すらなかったんだよ。>br<

ガキの頃の一年はデカイ、当時施設には俺と同じ年のはいなくて話自体はあんまり合わなかった。>br<

だからいつそ幼馴染みとも呼べたのは、近所に住んでた神崎くらい。>br<

とはいえあいつは当時からオタクだった姉の影響を幸か不幸か受けまくり、やっぱ昔から女子が見るようなアニメが好きだった、プツ。

>b r<

そんなこんなで、まあ神崎ともそんなに遊んだって記憶はないんだよな。>b r<

あいつに影響されるとも思えなかったが、万が一神崎菌を移されるとやだし。>b r<

ただ時折酷く、面白かったアニメを語るあいつが羨ましく思えて、何度か殴り合いに発展したっけな。>b r<

学校でも施設でも一瞬一瞬は楽しいと確かに思っているのに、次の瞬間には何やってんだって我に返るようなのは流石に気分がいいものとは言えなかった。>b r<

それでも周囲に人がいた点では恵まれていたんだろう。>b r<
毎日毎日「楽しい」を継続して感じていたくて、近所でイタズラしまくった挙句追いかけて来る親父には事欠かなかったくらい。>b r<

中学に入って女子と「お付き合い」つつもんをしてみても、やっぱり何かぱっとしなくて。>b r<

俺は淡泊と言うか、無感動な人間なのかって、そんな風に諦めてみたりもした。>b r<

多分このまま独身で一人で、老後も施設に逆戻りして死ぬんだろうなって。>b r<

何か楽しい事あったっけかなとか、死ぬ間際にも思い出せずにいるんだろうなってさ。>b r<

クソつまんねー奴。>b r<

周囲にもそんな奴がいなかった訳じゃない、でも俺みたいに何の趣味もなくて食べ物や服の好き嫌いもないような極端な奴はいなかった。>b r<

いたのかもしれない、ただ俺と同じくそうだと言ってる奴を見た事がなかった。>b r<

年を取る毎皆が妥協を重ねて行く中、俺はある意味違ったのかもしれない。>b r<

それは空虚な自分を正当化したいだけの言い訳かね？>br<

高校の時は面倒な事が増えると同時にその一瞬だとしても楽しい
と思える事も増えた。>br<

その頃辺りから学力も体力も異常にあると明らかに周囲に判断され
た所為もあるだろう。>br<

しかし俺の根性がなっていないとか、当時隣のクラスの担任で剣道
部顧問の笹原に追い掛け回されたのは流石に参った。>br<

竹刀振り回して鬼みてえな形相で追いかけて来んだもんな、よくP
TAとかで問題にならなかったもんだよ、今の時代なら問題になっ
てんじゃないの？何とか世代の負の遺産とかニュース賑わせてたん
じゃねえの？>br<

あの時でさえすでにジジイだったくせにどこにあんな体力あるんだ
かと感心はした、あれこそ化け物だろ実際。>br<

なんだかんだの腐れ縁で一緒にいる事が多かった神崎は巻き込まれ
て、よく一緒にあのジジイに廊下で正座させられたっけな。>br<
あの頃ばかりは廊下が絨毯引きの高校にでも行きゃよかったと心底
後悔した。>br<

ただちよつとジジイにやらされるようになった剣道は、ある意味
楽しかったと言えなくもない。>br<

まあ楽しいと思う事もなく無心になれる気がした。>br<
つまるところ、だからその時ばかりは楽しさだけでなく虚しさも追
って来なかったって訳だ。>br<

とはいえ続ける気もなかったから、後は適当に空手とか柔道とか片
っ端からやってみたりしたけど。>br<

唯一、体を動かして無心になれるのはいいなと思った。>br<

俺これでも頭良かったからさ、イイ大学も行ったんだよ、いやマ
ジだね。>br<

そこでも相変わらずで、やっぱテキトーに日々暮らしてたまに体動
かせりゃそれでいいかって感じだった。>br<

うん、所謂、運命の女って奴に出会うまでは。>br<

> b r < > b r < > b r < > b r < > b r <
「いよう」> b r <

俺がいるとは思ってもいなかったんだろう、俺の娘のオトコは僅かばかり目を見開いてから無表情に頭を下げて来た。> b r <
改めて見ると硬派っぽいイケメンだな、まあ俺には全然劣るけど。

> b r <

あのクソジジイの孫らしく、嫌味なくらい背筋が伸びてる。> b r <
俺が学生だったらあんま近付きたくはないタイプだな、目付き怖えし、コイツマジでコーコーセーかっての。> b r <

「こんばんは、お邪魔してます」> b r <

「まあ、ちよっと付き合えや少年」> b r <

手招きすればもう一度会釈して俺の正面のソファに座った。> b r <

俺の居ぬ間に人んちに上がり込んでた男としては堂々としたもんだな、つっても俺殆ど家にいないけど。> b r <

「あー、ラクにしろよ。別に家に上がり込んでて人の娘にどうたらとか説教垂れる訳じゃねえし」> b r <

そんな事した日にゃ俺の方が娘に説教されるだけじゃ済まないというこの理不尽。> b r <

第一あいつが選んだ男に俺が口を挟む権利もない、あいつだって親は選べなかったし俺も娘のオトコは選べない。> b r <

しかし、まあ、なんだ、ちよっと、寂しくはある、か。> b r <

「悠は二階にいんのか？」> b r <

「寝てます」> b r <

おう、親のセックス事情を聞くのもエグイだろうが、娘のそれを聞くのもこれまたなかなか。> b r <

いやしかし俺だって成人そこそこであいつ出来てるしなあ、したい気持ちはよくわかるぞセイ少年。> b r <

むしろこの状況下で仲良くトランプでもしてる方が度肝抜かされるわ。> b r <

……はー、娘がまた大人になりやがったよ、ただでさえあいつ妙なところで俺より大人なのに……パパ困っちゃうん。>br<

メランコリックだかセンチメンタルだか、そんな気持ちだぜジャーニー。>br<

「そんなら丁度いい。これ、お前に渡しとく」>br<

「何ですか？」>br<

差し出したのは小難しい文字が印字された白い紙。>br<

俺が長年、避けて続けて来た物。>br<

こんなものにさえ俺はビビリでしょうがねえ。>br<

「読めよ」>br<

目の前の少年が訝しげにしながらそれに目を通す間、チキンの俺はビールを道連れに。>br<

俺だって改めてそれを見たのは十八年と少し振りだった。>br<

こんな俺を見たら俺の嫁はきつと怒るだろうね、いや笑うかな、いやいや殴られるかも、もしくは回し蹴りの可能性も。>br<

「あの、これ、何ですか？」>br<

「理解したか？」>br<

「概ねは。つまりこれ、病気の――」>br<

ああホント情けねえ、それを聞くだけで心臓が縮み上がる。>br<

大体これを取りに行くのだって十年分の体力要ったんだ、何せ俺病院大嫌い。>br<

風邪一つひいた事もないし、マトモに足踏み入れたのなんか娘が生まれる時の産婦人科だけだったの。>br<

男が産婦人科しか用がなかったって、ある意味凄くね？>br<

あの消毒液とか薬っぽい匂いが嫌なんだよなあ、ガキの頃も学校で注射ってえと鼻に洗濯バサミと目隠ししたもんよ。>br<

何プレイだっつうんだよな。>br<

これを取りに病院行った時、当時世話になった医者すら目を丸くしてたくらいだ。>br<

「悠の母親がそれにやられた」>br<

「え、じゃあ……っ」>br<

今はもうぼんやりとしか憶えちゃいない。>br<

琳子さんが病院に運ばれて、俺は間抜けにも海外から帰国して彼女が退院後にそれを聞いた。>br<

彼女のかかりつけの医者が俺にも説明に来てくれたが、正直病名すら耳に届いてなかった。>br<

治る見込みは少ないみたい、って、なんで笑って言うんだよって、琳子さんにそう言ったのだけは憶えてる。>br<

でもそこで検査して、彼女自身さっぱり気付いていなかった妊娠に気が付いたらしい。>br<

あの時それとも言われて、俺は顎が外れるかと思ったよホント。>br<

「まだ今はわかんねえ。けどそれが遺伝する可能性だってない訳じゃない」>br<

少年の顔が一瞬で白くなって、大理石の像か何かみたいだなと、思った。>br<

俺はあの時、一体どんな顔してたんだろう。>br<

「あいつは、この事知ってるんですか」>br<

「知らない。知らせないでおこうと思ってる。知ってる事で無意識にストレスになるかもわかんねえし、医者によれば発症もしてない内からそれも拙いんだと。病は気からって言うしな」>br<

神妙に縦に振られる首を見て、俺は飲み干したビールに息を吐き出す。>br<

俺の生涯に残るものなんて考えた事もなかった、やる事やってりや当たり前のはずなのに。>br<

けど琳子さんと出会って、悠が出来て、俺はある意味自由を失って――欲しかったものを手に入れた。>br<

だからそれを失いたくなくて現実逃避し続けた。>br<

琳子さんは悠が出来てから笑ってる事の方が多くなった、今じゃも

う楽しそうな顔しか思い出せないくらい。>br<
そんな彼女を失って、悠ですら失うのかと思うと、怖くて触れられなかった。>br<

物心付いた時には「おじさんだれ?」とか言われても、悠が本当の意味でいなくならないならそれでよかった。>br<

命が消えて行く瞬間を二度も見るのはご免だった。>br<

逃げて逃げて、逃げ回って、でも結局一周回ってスタート地点に逆戻りだ。>br<

まだ大丈夫、まだ大丈夫、――現実にはそんな呪文は何の効果も齎さない。>br<

そんな事をしている内に娘はさっさとこの少年を選んで、自分だけの道を行ってしまう。>br<

「言わねえ方がよかったか?」>br<

娘と同じまだ十八そこそこの少年にキツイ事知らせたのはわかってる。>br<

多分俺がオトナでもっとマシな親父なら、上手く回避出来る方法も見付けられただろう。>br<

でも俺はそういう器用な事はこの先も一生出来とは思わない。>br<

だからこれは俺の、俺なりの、親父としてのやり方なんだ。>br<
「いえ……、ありがとうございます」>br<

すつと頭を下げる様子に、ああこいつは確かにあのジジイ譲りの剣士なんだなと思った。>br<

「何が?」>br<

「俺に、知る許可をくれて、ですかね」>br<

そう言って少し苦笑する様が酷く大人びて、そして子供っぽく見える。>br<

俺の娘はこいつのどこに惚れたんだかわかんねえけど、なんとなく、こいつを選んだ娘が誇らしくなった。>br<
柄にもねえや。>br<

「俺が気を付けなきゃならない事はありますか？」> b r<

「今生活に問題はねえよ。あの通り恐ろしいほどピンピンしてるしな。ソレは一応、だ。こういうのは周囲の人間が知っておくに越した事はねんだと」> b r<

「そう、ですね」> b r<

じっと紙を眺め、それでもさっきよりか幾分表情が和らぐ。> b r<

これは俺の勘だが、こいつは俺と違って逃げたりはしないだろう。

> b r<

何せあのジジイの孫だからな、こうと決めたらとことん突っ切って行くように見える。> b r<

俺の娘はそう見えてある意味違う、その辺俺に似たのはちょっと失敗だぞ琳子さん。> b r<

「お前さあ、大学行くくらいになったら、ここ住まね？」> b r<
顔を上げた少年はやっぱり無表情だ。> b r<

「んで、あいつの事、見ててやってくんねえ？」> b r<

無責任な父親丸出しのセリフ。> b r<

「わかりました」> b r<

笑うとも戸惑うとも頷くともせず、少年はただ真っ直ぐ俺を見てそう言う。> b r<

うわ、言っちゃったよ、こいつ。> b r<

「そっちも許可頂けたと思っていいんですよね。ありがとうございます
ます、よろしくお願いします」> b r<

うーわーあ、言ったよ、言いやがったよこいつ！何こいつ！無表情だけど今絶対笑ってるだろ内心小躍りしてるだろ！> b r<
げー、こういう奴かよ、こういう奴なのかよ。> b r<

あいつは自分で捕まえたとか言ってたけど、これ完全にあいつがとっ捕まってるだろ。> b r<

十八でこれとか末恐ろしいな、もう一度言うが何こいつ、パネエ。
> b r<

まあなあ、俺が惚れに惚れた女にそっくりな娘が相手だ、そうなるのも仕方がないよな。>br<

ハイ、親バカ。>br<

「お前、イイ性格してんね。前の方がちったあ可愛げあったぞ」>br<

「まあそれもそれ、です。あの時もハツパかけてくれて、感謝します」>br<

「俺思うんだけど、お前んちの人間とは馬が合う気がしねえわ」>br<

「大丈夫ですよ、爺さんなら。あの人、女には徹底的に弱いんで。悠の事も気に入ってるしって言うか、もう孫扱いだし」>br<

ああそれ俺も高校時代に聞いた事あったな、確か息子産んで早くに亡くなったんだよなジジイの嫁さん。>br<

そんだからあんな鬼みてえになったのかと思うけどよ、程があるだろ。>br<

きつとこいつも苦労したに違えねえわ、絶対あのジジイの教育がマズかったんだって。>br<

見ろよこの斜め上に真っ直ぐな伸びっぷり。>br<

俺が言うのも何だが、こいつも相当だわ。>br<

やっぱ笹原家とは妙な因果があると思えん、天地コワイッガクガクブルブル。>br<

「孫の孫が生まれるまで生きそうだなあのジジイ」>br<

「否定出来ませんって」>br<

まあでも、俺みてえにどこのウマノホネとか呼ばれるよりヤマシ、か。>br<

「で、とりあえず孫のガキは早めに生まれそうだな？」>br<

「そうしたいと思います」>br<

「……キミは、背中にチャックとか付いてて中に四十代のオヤジとかが入ってんじゃないよね？」>br<

「はは、中の人なんかいませんよ」>br<

何それ逆に怖い。>br<

「まあ、頼むわ。俺が言うのも説得力ねえけど」>br<

「そんな事ないですよ。あいつも親父さんの事大事に思ってますよ」>br<

「そうかねえ。え、寝言でパパ大好きとか言ったりし」>br<

「ないですけどね」>br<

ですよー。>br<

「うわあ、近い将来の息子にフォローされっとか、ある意味マジヘこむ」>br<

「そのまま置いて下さい。あいつも、それを望んでると思うから」>br<

ちえっ、俺の娘なのに何こいつの方がわかってる感じなのかしらね、いやだわ奥さん聞きました？もう婿気取りですってよ？ちよつとアナタ、その窓の枠にまだ埃が残っていてよ？今時の婿は掃除も満足に出来ないのかしらねーイヤだわーどんな教育受けてきたのかしらー。>br<

あーああ、そりゃこういう日が来るとか思っではいたけど、十八年でとか、早くね？流石に早くね？>br<

俺がヒーコラ逃げ回ってる間に、ガキはでっかくなるもんだなあ。>br<

明日香姉ちゃんも殆ど悠を育てた所為か、女としての任務は全うした感で最近オタイイベントに出まくりだって言うし……あれはもうダメだな、何とか出来る時期は弟と共にとっくに過ぎた。>br<

もう一本のビールを呷ろうとすると、少年が持っていた紙をさつと折り畳んでポケットに突っ込む。>br<

抜け目ねえな、流石俺の将来の息子、カッコ飯。>br<

「あ」>br<

「あら悠たん、腰は大丈夫？」>br<

「キメエ」>br<

「悪い、今ちよいテンパってて自分でもそう思った」>br<

やれやれと立ち上がると、律儀に少年も合わせて立ち上がる。>br<

それに少し苦笑した。>br<
そんな立てられるほどいい親父じゃねえんだっつーのなあ、ある種
皮肉か。>br<

「ちよい出て来るわ」>br<
「夕飯どうする？」>br<

「んー、あ、近くにラーメンの屋台あったろ、そこで食うわ。てな
訳で、後は若いお二人さんでごゆっくりいゝん。年寄りも退散しま
すからねホホホ」>br<

「一度一年ばかり意識失ってみる？」>br<

「脳三級」>br<

よし、俺相当テンパってるわ。>br<

でも娘が彼氏と一緒にいる時にどう対応していいかなんてパパわか
んないんだってばよ！>br<

>br<>br<>br<>br<>br<>br<>br<

花も線香もなしに墓前に座るのはいつもの事。>br<

真っ暗になった中で目の前の灰色の墓の輪郭だけがぼんやりと浮か
んでる。>br<

「ない、どうするよ琳子さん。あいつもう婿連れて来やがったよ、
しかも向こうやる気満々だよ、逆に俺が引くっつーのな。あれが若
さか！認めたくないものだな！」>br<

琳子さんの分に関けた缶ビールを自分のと少し音を立ててぶつけ
る。>br<

墓の前の壇に座って真っ暗な空見上げて呷るのも、たまにやる事。
>br<

「あいつは、……俺達の娘はさあ、大丈夫だよな。琳子さん言った
もんな」>br<

陣痛ってもんが始まって、おろおろしてるしかない俺の胸倉掴ん
で、真っ白な顔で言った。>br<

「私達の娘は強く産む。そんじよそらの奴にも病氣にだって負けないような最強の娘産んでやる」――きっとその通りになる。>br<

実際俺あいつに一度だって勝てた事ねえしな、何あの凶悪な強さ。

>br<

ああ、琳子さんにだって勝った例ねえんだった。>br<

初めて会ったのは高校卒業頃だったかな、……俺が痴漢に間違われるという何ともドッキリハプニングイベントでした。>br<人の手掴んで電車降りて駅のホームの端引き摺ってかれて、あら告白？とかお花畑だった俺の脳天に容赦のない踵落とし。>br<正直あらゆる意味でシビれたね。>br<

幾ら油断してたとは言え、俺避ける事も受け止める事も受身とする事すら出来なくて一気に落ちたもんなあ、意識が。>br<

ま、恋にも落ちちゃった訳ですけどね、キャハッ。>br<

それからだよなあ、毎朝毎朝駅で張り込みの刑事かって勢いでアパンと牛乳のお約束両手に待ち伏せしまくって。>br<

んで漸く見付けて「あんたに惚れた」つつたら二度目の踵落とし食らいましたよね、ええ。>br<

その時はやっとの思いで受け止めたら、琳子さんビックリしてたっけなあ。>br<

自分の蹴り受け止めた奴初めてだって言って。>br<

そんでフラグ立つかと思いきや、勢い付いた二度目の告白に「だが断る」だもん、ボク男の子だからちよい涙出ちゃった。>br<

それまで喧嘩でも試合でも無敗だったから、初めて俺に手も足も出させなかった女に興味が湧いたのかと思ってた。>br<

でもその内またどうでもよくなる時が来るんだろうなって、彼女を追いかけてながらも思ってたんだよ。>br<

マジで惚れてるんだと気付いたのは、彼女が自分の家を遠くから、寂しそうに見ていた瞬間だった。>br<

綺麗な女だと思った、「女」なんだと気付いた。>br<

そんで、こいつを捕まえないとダメだと思った。>br<
この時を逃したら、俺は生涯後悔をする羽目になるだろうって。>br<

我ながら野生の勘にはグッジョブだな。>br<
捕まえるのには時間がかかったけど、思い返せばそんな事も楽しかった……ずっと楽しいままだった。>br<

琳子さんは俺に掛け替えの無いものをくれて、そんで俺に掛け替えの無いものを残して、実際あつという間に逝っちまった。>br<

琳子さんの人生はたったの二十一年だった。>br<
その大半が俺とは違う意味で、ずっと欲し続けていたものだったんだろう。>br<

彼女は両親から無償の愛を欲していた、そして認められたかった、それだけだったのに……それは与えられなかった。>br<
子供が出来たとわかった時、今度こそそれを得られる可能性を奪うんじゃないかと柄にもなく気にしていた俺に言ってくれたっけな。>br<

「今更バカじゃないの」って、それが仮にも一緒に子供作った相手を見る目かつー恐ろしく冷たい目で。>br<
そんな時はもう男の子って歳じゃなかったから涙はガマンしましたボク。>br<

今も鮮明にその姿を思い出す。>br<
長くて真っ直ぐな黒髪を靡かせて颯爽と歩く綺麗なあの人が、ずっと心に消えずに残ってる。>br<

ああそういう悠のちよつと癖毛は俺に似ちゃったんだな。>br<
少し惜しい。>br<

でもあんまりそっくりりでも、俺嫁にやるのも婿貰うのも嫌になるだろうから、まあいいか。>br<

「あいつ、もう十八だってよ。早えなあ」>br<

琳子さんが逝ってしまつて、もう十八年。>br<
俺はいつまた彼女に会えるんだろう?>br<

「天地は私が欲しかったものをくれた」って、フォローしてくれただけださ。>br<

本当にそうだったんだろうか、俺は彼女の短い人生に何かを与えられたんだろうか。>br<

思えばなんで俺みたいなのと一緒になってくれたのか、結局怖くて聞けないままだった。>br<

俺って昔からチキンハート、まるで小鳥のようだ、ピチチ。>br<
「そんであつという間に嫁に行っちゃまうんだろうな。あ、婿取りだっけ。まあ元々俺親父らしい事なんて全然しなかったしなあ、寂しいとか思うのもお門違いだよな」>br<

今更娘との時間を取り戻したいとは思わないんだ、何故か。>br<

俺は自由気侖なチキンで、あいつは強くて弱い俺達の最強の娘で、それで今があるから、これでいい気がする。>br<

どっかのパパも言ってるだろう、これでいいんだってな。>br<

「琳子さんも、そういう気分だったかね？」>br<

缶ビールをビニール袋に突っ込んで片付けて立ち上がる。>br<

「愛してるよ、琳子さん」>br<

バカでチキンでイカレてる俺が、貴女にあげられるものはこれしかなかった。>br<

だからきつと、琳子さんは確かにこれを受け取ってくれてたんだって、信じてるよ。>br<

>br<>br<>br<>br<>br<>br<>br<

心許ない街灯が照らす道を歩き続けてその先の赤い暖簾を潜る。

>br<

「オヤジイ！俺の涙よりしょっぱい塩ラーメン一丁！」>br<

「ねえよ！お前の涙とか知らねえよ！」>br<

あー、しかし俺、いつあの家に帰ったもんかな、あの様子じゃそのまま泊まるんだろあいつ。>br<

はあ、娘が大人になっても……パパってタイヘン。>br<

$\begin{matrix} > \\ b \\ r \\ < \\ > \\ b \\ r \\ < \end{matrix}$

番外編3 笹原勝利の秘密（前書き）

※勝利視点、 「嫉妬」 「風邪」 ネタ。

番外編3 笹原勝利の秘密

>br<>br<

シャワーと着替えを終えてから渡り廊下に出る、そして奥の柱に凭れている悠を見つけた。>br<

再会して二年目、背中の半分まで伸びた髪が風に揺れてる。>br<すでに見慣れたはずなのに、たまにどこか酷く別人のように見えるのは何故だろう。>br<

「勝利ー、お疲れさーんっ」>br<

俺を見つけて笑顔で大きく手を振る悠に歩み寄りそのまま廊下を並んで渡り切ろうとしたところで、お互い動きを止め振り返った。

>br<

俺は持っていた竹刀を、悠は筒状になった何かの紙を、後ろの男に突き付ける。>br<

がばっと両手を上げた男にどちらからともなく溜息が落ちた。>br<

このところ毎日これだ。>br<

「いい加減にして下さいよ」>br<

「いいや、俺は絶対に諦めない！笹原勝利、君には絶対に生徒会に入って貰う！」>br<

意気込みが空回りしてるのは格好からも明らかだ。>br<

「君が入れば漏れなく相庭悠が付いてくるからな！」>br<

……俺はバーターか。>br<

「それならこいつに直接交渉すればいいでしょう」>br<

「私、勝利がいない生徒会には魅力を感じないから」>br<

「こういう訳だ！」>br<

どういう訳だ！>br<

「頼むよ、中学剣道覇者の君ならもっと剣道部を盛り上げたいと思うだろう？我が校ときたらそりゃあ進学率は高いかもしれないが、

なんというか部活動のやる気に欠けると思うんだよ。先生方はちつともわかってない！そこで教師対策として相庭悠を我が生徒会に――ってないし！」>br<

長々とした演説は講堂でもやるべきだな。>br<

生徒会の現副会長からさっさと逃げ出した俺達は下駄箱に向かってまたゆっくり歩き出す。>br<

そろそろ暖かくなってきて、悠はシャツの上にセーター一枚という格好だ。>br<

「そういえばうちの学校って基本部活に力入れてないよねえ。まあ、だから入ったんだけど」>br<

「俺もそうだからここ選んだんだっつーの」>br<

確かに高校受験の時には散々言われた、なんで設備も充実した剣道部がある高校に入らないんだって。>br<

ここは殆ど同好会のノリの部活ばかりで、いっそ女子の方が部活としては盛り上がってる。>br<

しかし何せ面倒臭くなった。>br<

剣道はそりゃ好きだが、大会だの何だのが正直鬱陶しい。>br<主にそれにおいてのやたら熱血した対戦相手だとか応援という大義名分引っさげた女子とか。>br<

お蔭でここに入ってからのの方が練習には身が入っていた。>br<爺さんもそれがわかっていたのか、受験の時にはそういえば何も言わなかったっけな。>br<

「お前もそもそも入る気なかったのか？」>br<

「入ってみようかなと思った事もあったけど、体力テストの騒動考えると先々面倒だし」>br<

なるほど、こいつも大体俺と同じという訳だ。>br<

確かにこいつが打ち込めば俺以上に周囲が騒ぐのは目に見えてる。

>br<

ヘタすりゃ学生大会通り越して世界大会になっちまうしな。>br<そりゃあなんだか面倒そうだ、俺も。>br<

「ぶえくしよい！」>br<

「なんつくシャミだ」>br<

校舎を出てすぐ体を折ってクシャミをした悠がずるずると鼻をすする。>br<

「花粉症か？」>br<

「えー、そんな高尚なもんじゃなかったはずなんだけど。風邪かな」>br<

花粉症が高尚なもんだったとは初耳だ。>br<

いつそある意味こいつにとっては風邪の方が高尚なもんなような気がするが。>br<

ブレザーを脱いで手渡してやれば、キャアキャアはしゃぎながらそれを羽織った。>br<

かなり余っている袖をぶらぶらさせながら歩いているのを見ると、

何かのキャラクターに似ている。>br<

何だっけな。>br<

「しっかしつこいねえ、滋田先輩も」>br<

「任期も間もないし、選挙制じゃないのが仇になってるな」>br<

別に先輩の言う事を否定する訳じゃないが、人を巻き込むなど言いたい。>br<

今の体制で満足してる奴らは多いし、大体不満があれば最初からうちの高校は選ばないだろう。>br<

半数以上の奴は部活より塾や校外の活動に力を入れてるからな。>br<

「ぶえくしよい！よい！」>br<

「なんつくシャミだ」>br<

「えらいすんません。あ、今日道場行く？」>br<

俺が首を振るとお菓子作ったから家においてと誘われる。>br<

「悠、手え上げろ」>br<

そう言うとお鞆を掛けた反対側の手を真上に上げ、余った袖がずるりと肘辺りまで落ちた。>br<

「なんですか」>br<

「避妊はちゃんとしろよ!」>br<

「天地さああああああんそうとちゃうううううう!」>br<

「いやお前だって高校ん時子作り騒動みたいなのあってドエライ目に遭っただろうが」>br<

「せやねん。……いや、今その話ええやろこの際!」>br<

ギャアギャアと騒動が続く中、悠に背を押されながら二階へと上がる。>br<

どつしりとベッドに腰を下ろした悠は大きく溜息をついた。>br<

「うるさくてごめんねえ。あの人親父様の友達の息子で昔からの知り合いなんだけど、なんつーかあの調子で」>br<

「類は友を呼んでる訳だな」>br<

「類に私が入ってなけりゃいいが」>br<

そんな訳がない。>br<

「ひ……つくしょ!」>br<

「酷いな、本当に風邪じゃないのか?」>br<

ティッシュ箱を手渡すと、悠は二三枚紙を引き抜いて鼻をかむ。

>br<

高校で出会って以来風邪なんぞひいた気配すら見せなかっただけに、俺ですら疑問だが。>br<

風邪という単語になんとなくその体を引き寄せて膝の上に置き腕の中に収める。>br<

ごろごろと喉を鳴らす猫みたいにべったりとくっ付いてきた悠をそのまま抱き締めた。>br<

「ぬくいー」>br<

「春だつてのに最近また寒いしな」>br<

ベッドの座ったまま向かい合った形で抱き合い、自然と何度か唇を重ねる。>br<

唇を離したとたんふっと俺のそれに掛かった吐息が熱いような気が

した。> b r <

「ゆー」> b r <

「なにさらしとんねんこのこわっぱあああああああ!!」> b r <

パンツとドアを蹴破るように突然上がり込んで来た例の男が俺の背中に足を振り上げてくるのに、立ち上がろうとした悠を片腕で逆に引き寄せて、向かってくる足をもう片方の腕で受け止める。> b r <

びんと骨まで衝撃で震えたのがわかった。> b r <
流石、類友。> b r <

正直吹っ飛ばされないようにするのが精一杯だ。> b r <

「俺の蹴り受けたんは褒めたるわ。せやけどなあ、そんなんでこいつのオトコ気取れる思うたんなら大間違いやで!」> b r <

「気取るも間違いも、実際そうなんで」> b r <

「正兄ちゃん、マジ空気読めって」> b r <

「あー!俺の悠が変わってもうた!こないな男に誑かされて変わってもうた!」> b r <

今度は顔を両手で覆ってわっと泣き出した……なんなんだこの人。> b r <

ちらりと悠に視線を向ければ、どでかい溜息を吐き出して彼の頭を撫でる。> b r <

「兄ちゃん、お菓子食べない?昨日私が作ったやつ」> b r <

「ホンマか!食う!」> b r <

とたんぱっと笑顔になった男は悠に抱き付くなり頬擦りをしだした。> b r <

「勝利ごめん、この人暴れると面倒だから……」> b r <

「面倒でなんやねんなー。んな事よりはよ行こ行こ」> b r <

鼻歌まで歌い出しそうな勢いで彼は悠の手を引いて部屋を出て行く。> b r <

ドアから消える間際、しっかりと俺を見て鼻で笑いながら。> b r <

……これってアレだよな、つまり、牽制されてる訳だよな？>br<

「これってアレだよな、つまり、喧嘩を止めて私の為に争わないでええええん的な？」>br<

次いで階下に行って、リビングでテーブルを囲みつつ、悠の親父さんが言う。>br<

その斜め向かいのソファでは男をべったりと張り付かせた悠が溜息の連続だ。>br<

ぴりぴりとした空気の中、菓子を食べる音と茶を啜る音だけが響く。>br<

何故か悠の親父さんが一番そわそわしてる気がするが。>br<

「いい加減離れてもらっていいですかね」>br<

自然と自分の米神が引き攣るのを感じながら言った。>br<

「ええ訳あるかい。お前みたいな小僧と不純異性交遊なんぞ俺が許さん！」>br<

「何の権利があって」>br<

「俺は悠がこーんなちっこい頃から知ってんねんぞ」>br<

「そいつの小さい時なら俺も知ってますけど」>br<

「知っとるだけのお前と一緒にすんなや」>br<

「むしろ今は俺の方が知ってると思うんですけどね」>br<

恐らく人好きのする顔であろう彼の顔があからさまに冷たく色を変えた。>br<

昔の知り合いだか近所の兄ちゃんだか知らないが、だからなんだって言う。>br<

ああ、なんだこれ……そうだ、イライラする。>br<

当たり前みたいに俺のもんに触ってるこいつに、逃げようともせず他の男の腕の中に収まってる悠に。>br<

自分の体の内側が何かぶつぶつと千切れるような音を立てたのを感じた。>br<

前にもあったような感覚に思うが、それでもここまで酷くなかった

はずだ。>br<

エセ外人の時だって、ここまで苛立った事はなかったのに。>br<

じゃあなんだと考えて思い当たった。>br<

悠の親父さんの友人だとかっていう男が悠に触れているのを見た、あの時に似ている。>br<

でも多分それも比べものにならない。>br<

今俺はもうこいつの腕に収まっているその体の感触さえ知ってるからだろうか。>br<

ああ……あー、ムカツク！>br<

「生意気なガキにちいっとばっかし物の道理っちゅうもん教えたらなあかんみたいやなあ？」>br<

「ガキの事に口挟んでくるのがどれだけ見つとも無いか、言ってもわかんねえみたいだなオッサン」>br<

ガチンと視線がぶつかり合ったのを感じた。>br<

頭のどこかでうっすらと、あの時間こえたのは俺の理性の切れる音だったのかもしれないと思う。>br<

ふつつと血が沸騰したように全身が熱くなって、目の前の男を叩き潰せと本能がそう命じた。>br<

袖を捲って立ち上がる彼に、俺もゆっくり立ち上がる。>br<

「わー！止めっ止めっ！止める親父！」>br<

「いいぞーやれやれー！ぶぎゃんっ……悠たん殴らないでっ、顔は女優の命よ！」>br<

「黙れダイコン！駄目だって勝利！」>br<

叫びながら俺の腕にしがみ付いた悠に、今度は頭のどこかがちんと鳴った。>br<

そして考えるよりも先にその体を抱き上げ、ダッシュで相場家を後にする。>br<

怒鳴り散らす関西弁がしつこく聞こえてきたが、俺の家に近づいて行く度にそれも耳に届かなくなった。>br<

「あれえ、勝利兄ちゃん帰って――って、何悠さん担いでんだよ！
とうとう人攫いか!？」> b r <

「ケン、二時間出て行け」> b r <

「サー、イエッサー!」> b r <

家に入ると棒アイスを銜えたままで出て来た弟はびしつと敬礼するなりサンダルを足に突っかけて脱兎の如く姿を消す。> b r <
流石に荒くなった呼吸を整えながら、部屋のドアを足で開け、最近よく軋むベッドに担いでいた体を放り投げた。> b r <

「ぐわっ」> b r <

イカレたスプリングでは大して弾まなかった体に覆い被されれば、
ちらちらと揺れる目が俺を見上げてくる。> b r <

「しょ、勝利さん、違うんですよ、これにはてーへん深い訳がござ
んして」> b r <

「無理、今聞く耳ない」> b r <

「聞か猿とな!それは親が子供の健やかな成長を願うぶえつつし
よいよい! あー、よいよい!」> b r <

「なんちゅークシャミ……おい、悠?」> b r <

俺の上を彷徨っていたその目が大きく揺れだしたかと思うと、まさ
にぐるぐると回った。> b r <

そして瞼を閉じぐったりと大の字になったその姿にぎよっとする。

> b r <

頭に上っていた血は一気に地の底まで引き下がった。> b r <

「悠!？」> b r <

「うぎょー……」> b r <

「うわ、熱っ」> b r <

気付けば真っ赤な顔をしている悠の額に手を当てれば、思わず声
を上げてしまうほど熱かった。> b r <

咄嗟にポケットを探り携帯電話を探すも、中には財布しかなかった
事に舌打ちする。> b r <

玄関脇にある家電の元へ走り出そうとした瞬間ぐつと体が引かれて、

悠の手が俺のシャツの端を握っているのが見えた。>br<

「おい、聞こえるか？今救急車呼ぶから、手え放せ」>br<

「だが、断、る。……すぐ、治る、まかせろ……」>br<

「任せられるかバカ！」>br<

しかしこの熱だというのにどうにもこうにも放そうとしない。>

br<

終いにゃ病院行くなら暴れるとまで脅しかけてくる始末だ、こいつは本当に風邪なのか。>br<

頭に更なる細菌でも入った可能性を考えたが、とりあえずそうしている時間も惜しい。>br<

駄々をこねる彼女を抱き上げて、台所で水だの氷だのタオルだの用意して、戻った部屋のベッドにまた押し付けた。>br<

適当に俺の服に着替えさせタオルを額に置いてやる頃には、真っ赤だった顔が頬に赤みが差す程度になっていると気付く。>br<

俺はシャツを握られたまま、どっとベッドに凭れ座り込んだ。>

br<

まるで全身の細胞が揺さ振られたみたいなざわめきが、今も色濃く自分の体に残っているのを感じる。>br<

ぞっとした、なんてもんじゃない。>br<

世界をシャットアウトするように、力なく一気に閉じられた目を見た瞬間、言葉には出来ない恐怖を感じた。>br<

「ごめん……酷くなったの気付かなかった」>br<

風邪じゃないかと気が付いていたくせに、下らない喧嘩に乗じてそれを見過ごした事に苛立つ。>br<

布団に手を突っ込んで引き出した熱い手を握りこむと、シャツを掴んでいた手が放されゆるゆると細い指が握り返してきた。>br<
眠っているのだとわかっていても、まるでそうしてさえ俺を安心させているようだった。>br<

もう片方の手をそっと赤さが滲む頬に当てればじわりと熱が指先から流れ込んできて、思った以上に緊張で指先が冷えていたのだと気

が付いた。>br<

何をやっているんだと、自身に失笑する。>br<

彼女の指をゆっくりと外して立ち上がり、もう一度台所に戻ってあちこちの棚を物色した。>br<

台所の事を覚えるより道場に立て、の爺さんだったから未だに何がどこにあるのかさっぱりだ。>br<

今ではいっそ悠の方がこの台所には詳しいだろう。>br<

棚を開けては漁り、また違う棚を開けては漁り、繰り返してやっと見つけたのはレトルト粥と果物の缶詰一つ。>br<

そういえば俺が前に体調を崩した時には、あいつが一から出汁までとった中華粥を作ってくれたっけなと思い出し、鍋に水を入れながらイライラと指がシンクを叩いた。>br<

俺って真面目に役立たずだ。>br<

鍋で煮た粥と缶詰から出した果物を器に移して、それに水と葉を添えトレイに乗せる。>br<

床に散らばったあれこれを足で掻き分けながら時計を見上げれば、探し始めてからすでに一時間も経っていた。>br<

額に手をやりたくなるのを堪えてトレイを手部屋に戻ると、ベッドに寝たままで悠がうつすらと目を開けているのが見えた。>br<

「起きれるか？頭痛とか吐き気あるか？」>br<

「んーん、ない。大丈夫。熱は一気に来るからちよつと疲れた」>br<

一気に来過ぎだ、そして一気に引き過ぎだ、そりゃ疲れもするだろう。>br<

しかしすっかり赤みが引いたような顔にはほつとする。>br<
上半身を枕に凭れさせ起き上がった悠の足の上に持っていたトレイを置いてやると、ぱつと輝いた目が俺に突き刺さるようなビームを放ってきた。>br<

「作ってくれたの！？」>br<

「ただ出してあったためただけだ」>br<

「レトルト一つあったためた事ないような子が私の為に……っ」>br<

確かに事実だが、なんかむかつく。>br<

「早く食え、んで菓飲め」>br<

「はあい。いやあ、ビックリさせてごめんね」>br<

そりゃ驚いた事は驚いたがと言ひ募ろうとしたら、するりと手が撫でられて、視線をやれば俺がいつの間にか悠の右手を掴んでいた事に気が付いた。>br<

「あ……悪い」>br<

「いいよ、左手でも食べられるから」>br<

にやにやと笑いながら俺の手を握るその手を少し強く握ってやる。>br<

そして痛いよと声を立てて笑うその顔を見て、力が抜けそうなほど安堵した。>br<

後から後から、呼吸すら忘れるほど焦っていたのだと気付かされる。>br<

は、と細く息を吐き出し吸い込んで、やっと酸素が体に行き渡ったのがわかった。>br<

「梅干でもあればよかったけど、もうどこに何があるのかさっぱりで」>br<

「いい、いい。ありがとう、嬉しい」>br<

スプーンを銜えたままでにこりと笑う。>br<

「さっき、ごめん。気付かなくて。それから、……」>br<

「いって。あ、あのね、さっき勝利の事止めたの、兄ちゃんが強いからじゃないよ」>br<

見透かされてたか、と思った。>br<

あの時俺の方を止めたのは、俺があつた男より、弱い所為かと思っていた。>br<

それに苛立って気付かなきゃならない事もすっ飛ばしてたなんて、ガキだって言われても仕方ない。>br<

「まあ強い事は強いんだけど、そうじゃなくて――」> b r <

また手を持ち上げてスプーンを嚙もうとした手を止めて、その唇に付いていた粥に舌を伸ばす。> b r <

ぺろりと舐め取って深く唇を重ねれば、こくりと悠の喉が鳴った。

> b r <

「いいんだ、あれは俺が悪かった。結果的に止められてなかったらまずかった」> b r <

そうしたらもっと気付くのが遅くなっただろう。> b r <

何も出来ない俺の横で、あいつが倒れた悠を救い出していたかと思うと、肌のすぐ内側がざわざわとする。> b r <

手を伸ばして抱き締めると、トレイを脇に置いて悠が俺の首にしがみ付いてきた。> b r <

「私、勝利が好きだよ。一番じゃなくて、勝利が、好き」> b r <

「――俺も、俺も好きだ。お前だけ」> b r <

なんで女は強いって言われるのかって、こういう時わかる。> b r <

勝手に歩く男を、そうやって心でも抱き止めてくれるから。> b r <

ふふと笑った悠の吐息が首筋をくすぐった。> b r <

うっかり背中を抱き締めていた手が他所へ伸びそうになるのを堪える。> b r <

「はあ、まあ喧嘩にならなくてよかった。兄ちゃんぶち切れるとアレな事になるから」> b r <

「あの人、そんな強いのか？」> b r <

「いやあ、そうじゃなくてね、……人のアルバム持ち出してきて自慢大会が始まるから」> b r <

「なんだそれ」> b r <

渋々といった感じの悠曰く、一人っ子の彼は昔から妹が欲しかったらしく事ある毎に悠を構い倒していたらしい（妹属性と言うらしいが……なんだそりゃ）。> b r <

彼が高校生になり突然父親と同じ医者になると言い出してからは、

それに過保護が重なったようだ。>br<

悠が何か無茶をしたり寄り付く男が現れては、「昔の悠はああたったこうだった」とアルバムを開きながら一人大会を開催するそうだが、しかも素面で。>br<

「あれはまさにこの世の生き地獄、いやむしろ逝く」>br<

「俺も見たいな、写真」>br<

「やー、あんま変わらないよ?」>br<

そうかなと、ぼんやり初めて会った時の悠を思い出す。>br< 顔はあまり憶えていないが、えらく小さかったのははっきり憶えていた。>br<

何せチビの俺よりチビだったんだ、よくこんなに育ったもんだと思う。>br<

「あ、胸と背はこんなに大きくなりました!」>br< なんとというどや顔。>br<

でも確かに、今年は市民プールにも人の多い海にも行けそうにない。>br<

「確かめてみます?」>br<

「……また今度な」>br<

「チッ、ケチケチしやがって、出し惜しみかよ」>br<

お前はどこのストリップを見に来たチンピラだ。>br<

「そろそろトミさんが帰ってくる」>br<

「じゃあ、こっち」>br<

ん、と目を瞑って顎を上げられた。>br<

その肩を引き寄せてキスを落とそうとした瞬間、いつの間にかとくに帰って来てたらしいトミさんの悲鳴が家中に響き渡った。>br<

……台所散らかしたままだったの忘れてた。>br<

>br<>br<>br<>br<>br<>br<>br<

「こっちはキウイジャム挟んでね」>br<

「あー感じ悪うー」>br<

「それでこっちはクリームチーズでね」>br<

「あーやってられんわー」>br<

「そこでこっちがフルーツ入りのパウンドケーキ」

「あだだだだだだだだだだんまつま！」

隣でにこにこ菓子の説明をする悠の斜め横で彼は足を投げ出し不貞腐れ、親父さんは横から伸ばした手を容赦なく捻り上げられていた。>br<

日曜をいい事にそのまま悠を家に泊まらせ、翌日再び相庭家に行って手作り菓子を披露されている。>br<

最近凝り出したと言っていた菓子は、口に入れば丁度いい具合にふわりと融けて美味かった。>br<

「なんでまた急に菓子なんだ、テレビの影響か？」>br<

「そりゃ花嫁修業の一環に決まってるじゃないの、みなまで言わせんなコノヤロー！」>br<

きやつと言いながら可愛らしく頬を染めたかと思えば、実に可愛らしくない馬鹿力で人の背中を叩き、お茶のおかわりを持って来ると奥へ引っ込んでしまった悠を見送る。>br<

するとすぐさま突き刺し射殺するような視線とにやにやとした不愉快極まらない視線が飛んで来た。>br<

「調子乗ってんなや。悠の体調に気付いたんは褒めたるけどなあ、そんなもん彼氏や名乗るんなら当たり前ん事やで」>br<

「そうっすね」>br<

むしろもっと早く気付くべきだったのには、未だ後悔が残る。>br<

「かー、かわいない！悠もこいつのどっこがええ言うねんな。なんや無愛想やしまだ全然ひよろいし」>br<

「全部いいらしいですよ」>br<

付き合い始めてから、結構自分でも自覚あるなしの欠点は悠にも言われてきた。>br<

でもそれを嫌いなれないと言う、そんなもので消えるほど安い好

きじゃないと言う。＞br<

自分で口にしてみると、かなり恥しい言葉だな。＞br<

「天地さん、こんなんでええんか！こんなが悠攫って行くかもしれないでええんか！」＞br<

「別にあいつが選んだんだし、何でもいいけどな」＞br<

それはそれで大いにテキトーだ、まあ助かるけど。＞br<

実際この男みたいなのが悠の父親だったらと思うと目も当てられない、駆け落ちなんて言葉が頭を過ぎる。＞br<

そしてフツーに俺の先の人生に悠が並んでるんだなと、我ながら可笑しく思った。＞br<

「天地さんはそれがあかん言うねん。あないに可愛い娘おって、信じられへん、考えられへんわっ。要らんならくれ、むしろ寄越せ、こうなったら籍移して俺の正式な妹にする」＞br<

「やーなこった。君達はホラ、血の繋がりもクソもない、精々法律上でしか縁のないスカレードな他人だろうけど、俺と悠さんは遺伝子上の繋がりがあるのよ、わかる？切っても切れない、でーえぬえーなの、わかるう？」＞br<

「オッサン、感じ悪いで」＞br<

流石に同意見だ。＞br<

「大体俺なんかお前らが知らない写真も山ほど持つー……イヤン悠たん、家庭内でも銃刀法イ・ハ・ン」＞br<

やたらと鈍い色を放つ出刃包丁を親父さんに突き付けた悠は、持っていたトレイを片手でテーブルに置いた。＞br<

「よくはわからんが今そうするべきな気配を感じた」＞br<

「んもう、お前は本当に母親そっくりだな。お前のママもよくそんな事言ったよ」＞br<

嫁に包丁をよく突き付けられる夫ってなんだよ。＞br<

「正兄ちゃんも、アレ出したらコレだからな？」＞br<

「ハイ、わかってまーす」＞br<

今度はやって来た宅配便に、判を持って部屋を出て行く悠を見送

る。> b r <

「よかったら、持ってる写真見せて欲しいんですけど」> b r <

「ええ訳あるかい。これは俺の宝物なんやで」> b r <

「ああ、大した写真持っていないと」> b r <

「んな事あるか！お前、これ大した事ない言えるもんなら言うてみい！」> b r <

あっさり彼がどこからか出しテーブルに叩き付けたアルバムを覗き込めば、脳裏でぼんやりしていた悠の小さな時の顔がはっきりと形を作っていく。> b r <

恐らく奇跡の一枚と言ってもいいのだろう、大事そうに大きく引き伸ばされた一枚の写真は他のように傷だらけでもなく、綺麗に着飾った小さな悠が笑ってカメラへと手を振っていた。> b r <

「あーっ、なんだこれ！俺これ知らんぞ！？」> b r <

「あんたがカナダだか行ってた時に写真屋行って撮ったんや。どや、可愛えやろー、始めは恥しがって撮られへんかったけど、実はあいつこういうのむっちゃ好きやねん」> b r <

懇々と自慢しながら別のアルバムを取り出し、その写真屋で撮ったんだろうかなりの枚数の写真を見せびらかされる。> b r <

確かに最初はピンクやらの女の子らしいワンピースやドレスを着て恥しげにもご機嫌にしていた悠の様子は、だが様々な衣装に着替え枚数を重ねる毎に疲れたような表情へと変わっていた。> b r <

最後の方は最早幼いながらの愛想笑いときた。> b r <

……幼児に気を遣わせてどうする。> b r <

「フン、甘い、賛歌亭のロールケーキより甘いな」> b r <

「なん……やて……？」> b r <

「俺はこれだ。君に決めた！」> b r <

訳のわからないセリフを言いながら親父さんがどんとテーブルに叩き付けたのは、中学の時だろうセーラー服姿の悠だ。> b r <

だが明らかに盗撮だ。> b r <

「こ、これは……っ」> b r <

「どうだ、神崎姉弟がひた隠しにしてた超ドレアのセーラーだ。あんま隠すもんだから俺が自分で撮った貴重な一枚よ」>br
最早父親のセリフかと。>br<

「うおーっ、めっちゃ可愛え!」>br<

「そうだろそうだろ、あいつも俺に写真撮られようもんなら力一杯逃げ出すから、入念に計画を重ねてだなあ」>br<

「ほう、この角度だと座敷の柱の陰からだな?」>br<

「そうそう、あそこからだと死角になって……えーっと、えへっ」>br<

親父さんの首の脇からはよっきりと出刃包丁が生えている。>br<

「よし、その二人、そこに並べ、成敗してくれる」>br<

「すんませんったああああああ!!」>br<

脱兎の如く逃げ出した二人を悠が追いかけて、一人リビングに残された。>br<

目の前には、セーラー服を着てスカートを揺らし、これから登校するんだろう中学時代の悠がいる。>br<

「勝利君、その伸びてる手は何かな?」>br<

「あー、……手に取って見ようかな、と」>br<

写真に伸びた手を引っ込めると、いつの間にか戻って来た悠はそれを取り上げ視線を俺に落とした。>br<

「この制服、まだ取ってあるけど?」>br<

僅かに微笑んで言った悠に、俺が頷いたかどうか。>br<

それはとりあえず、彼女以外への、生涯の秘密にしておく。>br<

>br<>br<

番外編4 きょうだいのこと（前書き）

※笹原長兄視点、とオマケ。

番外編4 きょうだいのいっ

> b r < > b r <

「あーつまんね。あー世の中不公平。あーやってらんねー」> b r <
休日家にいてそんな事を繰り返していれば、確かにさぞやっ
てられないだろうと思う。> b r <

ただ気持ちはわらないでもなく、末弟に対して少し苦笑が零れた。
> b r <

すると爺さんがいないのいい事にソファの背凭れに足を乗つけて
引っ繰り返っていた弟はじっとこっちを睨む。> b r <

「笑うとかヨユーこいてんなよな。その歳にもなって休日に家で一
人とか、むしろ笑われるレベルだろ」> b r <

「俺は二週間ぶりのマトモな休日なんだ。学生のお前とそれこそ一
緒にするな」> b r <

「あーあもう、こんな枯れたアニキと休日とか、やってらんねー」
> b r <

じゃあ出て行けよと言いつけて、ふといつもならとつに外に出
て行っているだろう放蕩弟を見やる。> b r <

「なんだ、今日は出掛けないのか」> b r <

兄達にも似ず、一人顔だけは人受けするこいつだ。> b r <
外でいつ見かけても数人の女の子に囲まれているのが常の弟が、そ
もそも家の中で腐っている事も珍しい。> b r <

「だーってさあ、兄ちゃんは虚しく思わない訳？」> b r <

一体何を言っているのかと思う。> b r <

最近仕事がハードで疲れてはいるが、元々あまり趣味を持たない俺
は仕事をしている方が有益だ。> b r <

仕事人間と呆れられる事も多い、それでも毎日は充実していると自
負している。> b r <

大体稽古もそこそこ、特定の彼女も作らず遊び歩いているこの弟に

言われたくはない。> b r <

そしてふともう一人の弟の事を思い出し、なんとなく何が言いたいのかを察した。> b r <

つまりは、拗ねている訳か。> b r <

「ずりーよなあ、勝利兄ちゃんは。昔っから枯れ切ってるのかと思えば突然彼女とラブラブで潤いまくりの溢れ出しまくり。背中の中チャックから別人入ってんじゃないの」> b r <

「あいつは昔から極端だからな。やるにしても、やらないにしても」> b r <

うっかり昔の事が思い出されて、俺も少し苦い思いをする。> b r <

俺もまだガキで爺さんには何も言えなかったとはいえ、あの頃の勝利を思い出すとどうしても複雑な気持ちになった。> b r <

どんどんと目が虚ろになっていく弟に、なんと声を掛けていいかもわからなかった。> b r <

いつ頃からだったか、本当にまた人が変わったように稽古に打ち込み始めて、それでも見ていた俺はどこか不安が拭えなかった気がする。> b r <

あいつの中の何かが振り切れて、そのまま飛んで行くんじゃないかとさえ思えた。> b r <

「大体兄ちゃん達はやれば出来るからいいよ」> b r <

「お前はやれてもやらないだけだろ」> b r <

「あー俺もカノジョ欲しー」> b r <

「くっ付いて歩いてたのが山程いただろう」> b r <

「ああいうんじゃないてさあ、悠さんみたいなのだよ」> b r <

今まではそんな事も言いもしなかったくせに、勝利が彼女を連れて来て以来こうだ。> b r <

それも気持ちはわからないでもない。> b r <

見た目にも可愛いし、料理も上手い、勝利の事が好きで仕方がないという態度、そして何より彼女はT E N C H Iの一人娘だ。> b r <

先に会っていれば俺だって、と思わずにいられたらむしろ嘘だろう。>br<

「どこで捕まえて来たんだか。むしろ悠さんはあれのどこがいいんだよ！無愛想だし爺ちゃん似で鬼だし」>br<

「まあ彼女の前では違うようだけだな」>br<

思うに、あいつは無自覚にしろ最初から彼女を気に入っていたんだと思う。>br<

そうでなければ女の子を家に上げるなんて、天変地異でも起きる方がよっぽど確率が高い。>br<

そういう意味で勝利と剣矢はよく似ている。>br<

こいつもなんだかんだと言いつつ、特定の彼女を作らないでいるのは同じような理由だろう。>br<

「マジで別人つか宇宙人だし。この間なんかさあ、減るから悠さん見るなとか言うの。どこの暴君だよ」>br<

「お前、あいつが気に入ってた物、一度でも触った事あるか？」>br<

剣矢は思い出したのか、苦い顔で首を振った。>br<

こいつが小学に上がった頃だったか、勝手にあいつの竹刀を使おうとした瞬間、物凄い勢いで張り飛ばされたんだよな。>br<

だというのに翌週には同じ事を繰り返したこいつもこいつだ。>br<

「そういえばそうだった。気持ち悪いくらい大事にするよな」>br<

あいつの為に多少反論してやりたかったが、否定する言葉も見つからず苦笑だけが零れる。>br<

「いい彼女を見つけたよ、あいつは。あの子、そういう事で動じそうにないだろ。流石TENCHIの娘さんだよな」>br<

実は対面した時でもかなり半信半疑ではあった。>br<

幾ら謎が多い人とはいえ、結婚していたどころか子供までいたとは思わなかったし、うちの爺さんの教え子だったとも寝耳に水だ。>

b r<

恐らく彼女はすっかり母親の方に似たんだろう。> b r<
ただいっぞや道場の扉が壊された時の事件については、聞き及ぶ限りやはり彼女は父親似だったんだなと心底思った。> b r<

ああ、出来れば俺がその現場にいたかった。> b r<
あれから何度か勝利に頼んでも、やはりあいつは丸きり彼女を独り占めして放そうとしない。> b r<

「ああクソ、ちょっと手合わせするくらいいいだろうに！」> b r<
「……出たよ、剣道馬鹿」> b r<

「そうは言うがな、あのT E N C H Iを黙らせるくらいの彼女の技、見てみたいと思わないか？」> b r<

「まあ、そりゃあなー。つか、兄ちゃんもそんな事ばっか言ってるからカノジヨ出来ないんだろ。トミさん、今度は兄ちゃんにカノジヨが出来ないって泣くなこりゃ」> b r<

手を伸ばして額を掴み、ぐっと押してやったら剣矢の喉がぐうえと奇妙な音を立てた。> b r<

最近まさにトミさんの視線が気になるようになっていただけに、腹の立つ。> b r<

「兄ちゃんも勝利兄ちゃんと同じで、そういうのがいいってマニアがいない訳でもねえんだけどな。違う意味で隙がねえんだよ、兄ちゃん」> b r<

「勝利みたいに女性嫌いと言っても言いたいのか」> b r<

「んにゃ。だって頭いいし、イトコ勤めだし、モテ条件は揃ってるんだよ」> b r<

だったら何がいけないんだ。> b r<
さっきも言ったが俺は女性を毛嫌いしている訳でも、勝利のように自ら遠ざけている訳でもない。> b r<

大体俺が仕事人間になったきっかけも、元を辿れば今までの彼女達に散々フラれてきた所為だ。> b r<

「たださあ、女って自分がしなきゃって使命感に燃えるらしいんだ

よ。だから何でも一人で完璧にやっちゃう兄ちゃんみたいのはダメな訳」>br<

実弟の言葉だからか何なのか、脳天にぐっさりと突き刺さった。

>br<

事実、今まで貰った別れ際のセリフは「貴方は私がいなくてもいいのよ」だ。>br<

一語違わず同じなものだから、密かにそうしたマニユアルでもあるのかと訝しんだくらいで。>br<

弟にまで言われるとは、俺は相当そういう人間らしい。>br<

「だから一人じゃ何も出来なそうなお前には群がる訳だな」>br<

「うっせ。その点ホント勝利兄ちゃんはいいい人捕まえたよ。あの人そういう事考えそうにないじゃん」>br<

だろうなと他人事ながら思う。>br<

恋愛は理屈じゃないとはよく聞くが、本当にあの子は真っ直ぐ過ぎて多分そんな事を考える隙もなさそうだ。>br<

そしてやはり、だから勝利には似合っている。>br<

「おーい、勝手に上がったよー」>br<

そんな声が降って来て、剣矢と共に顔を上げれば、近所の馴染みの顔があった。>br<

「二人して何してんの、この休日に」>br<

「あかり姉ちゃん、この際俺女子大生でもいい。誰か紹介して」>br<

「やだ、目え開けたまま寝言言ってるわこの子」>br<

ころころと笑ったあかりは勝手知ったるなんとかで、台所から三人分の冷たいお茶を出してくる。>br<

昔からこの調子で、俺にはこいつがあまり年下だという感じはしない。>br<

「頼むよー。アニキ達なんかアテになんねえし」>br<

「あんたねえ、悠ちゃんみたいなのとか女子大生とか言う前に、受験の準備でもしたらどう？」>br<

「あーあーあー聞こえない」>br<

「それがダメだったの」>br<

呆れたように首を振ったあかりは、お裾分けを冷蔵庫に入れておいたからねと言う。>br<

「まあ剣矢はこれからまだ時間はあるとして、問題は広大でしょ。

私この間トミさんに相談されちゃったよ」>br<

「スルーしておいてくれ」>br<

「このままじゃ勝利に先越されるんじゃない？」>br<

「余計なお世話だ」>br<

幼馴染みというものは全く、時に実に厄介だ。>br<

こっちが凶星なのもすっかり手に取るようにわかられているというのは、何かむず痒い思いがする。>br<

「そういうお前は就職先決まったのか？」>br<

「当然。手堅くやつとかないとね、このご時世」>br<

全くこの要領のよさは見習いたい、真似出来るとも思わないが。

>br<

「とにかく、早い内に広大は目星つけておいた方がいいよ。近い内に勝利はここ出てくんだしさ」>br<

「なんだそれ、初耳！どゆこと！？」>br<

きょんとしたあかりは、茶を啜って言った。>br<

「え、だって本人がそう言ってたよ。悠ちゃんは一人娘だし、そういう事なんだろうなって納得してたんだけど私」>br<

「はああ！？て、事は、つまり？」>br<

「もうそんな事まで視野に入れてるのかあいつは」>br<

我が弟ながら、少々ぞっとする。>br<

確かにTENCHIの様子を見るからするに、そういう事に向こうも拘りはなさそうな上、うちの両親などは熨斗付けて息子を送り出すだろうが。>br<

でもまだ十六だぞ？普通そういう事を考えて夢見るのは女の子の方じゃないのか？>br<

いや彼女の方から言い出したって事もある、そうすれば勝利にそれを拒否出来る訳もない。>br<

一度気に入って手に入れたら壊れても直して使う、それがあいつの性格だ。>br<

「悠ちゃんは知らないとは思うけどね。勝利、そういう事は不言実行だし」>br<

「うわあ、今俺マジ引いた」>br<

そういえばTENCHIは未だ世界のあちこちを飛び回っていると聞いたし、それを理由にあいつが考えてもおかしくはないかもしれない。>br<

……だが流石に俺もそれはどうかと思うぞ！>br<

「淡々と今外堀埋めようと思ってんじゃないかなあ」>br<

もうそれが正解としか思えなくて何も言えん。>br<

「多分直爺ちゃんは道場を勝利に持たせたがるだろうけど、この家を継ぐのはやっぱり広大になるんだし」>br<

「あかり姉ちゃん、その俺は選択肢にも含まれません的な華麗なスルー止めて頂けますかね？」>br<

うちでは特に長男がという決まり事はないが、確かに勝利の事を現実と考えればそうなるだろう。>br<

俺の予定としては勝利がこの家も道場も継ぐはずだった。>br< なんだかんだで自分に似て一番才能がある勝利を爺さんが一番可愛がっているのは事実だ、方法はともかく。>br<

勝利もそれに特に反対する事もないだろうと思われた。>br< どちらか言えばあいつは独身を通す可能性の方が高かったし、それに嫁さんが出来たとしてその人に付いて他の家に入るなんて事はしそうになかった——今までは。>br<

「待て、それじゃ俺の予定が狂う」>br<

だから俺は家の事は心配せず、ゆっくり嫁さんを探そうと思っていたんだ。>br<

勝利が道場だけを持つとなると、俺が独身のまま家を持つ訳には行

かなくなる。>br<

特にこの辺の爺さん方はそういう事にはまだ煩いんだ。>br<

「わあ広大、顔が緑色」>br<

「あかり」>br<

「何？」>br<

「――俺と結婚して欲しい」>br<

そうだ、考えてみれば身近で一番俺が好意を持っている異性と言えど彼女だ。>br<

昔馴染みの気安さもある上、あかりも昔からうちの道場に通っているから、その辺の事もよく知っている。>br<

歳もそう離れている訳でもない、またとない好物件じゃないか。>br<

「だが断る」>br<

「なんでだ！」>br<

「なんでだ、じゃない。私から面も取れない奴と結婚したくない」>br<

「あかり姉ちゃん、むしろそこじゃねえよ……」>br<

手合わせした回数こそ少ないとはいえ、ご老人方の余興の一つとして一年前に試合をした時すら負けたのは確かだ。>br<

俺が面一本でしか決まらないハンディはあったが、勝てなかった事実は揺るぎない。>br<

「だったら再戦願う」>br<

「面倒臭いよ。これから就職のあれこれで忙しいし」>br<

「俺の人生の一大事を面倒臭いで片付けるなっ」>br<

「こっちだって就職かかってるよっ」>br<

「大丈夫だ、お前一人くらい余裕で養える！」>br<

「養われる為に結婚するなら養殖所にでも行った方がマシ！」>br<

「ああもう、お前は昔からそうだ！ああ言えばこう言う！」>br<
「それはそっちでしょ、この木偶の堅物！」>br<

「その減らず口、きけないようにしてやる。道場へ出る」>br<
「受けて立とうじゃない、その鼻っぱしまたへし折ってやる」>br<

いつの間にか立ち上がっていた俺達は競うように道場へと駆け出した。>br<

>br<>br<>br<>br<>br<>br<

「はあ、それで？」>br<

「まあ結局また兄ちゃんの負けでさあ」>br<

「へえ、あかりさんてそんな強いの」>br<

「もう死んじゃってるけど、あかり姉ちゃんの爺ちゃんがうちの爺ちゃんと超ライバル関係だったんだよ。んで、あかり姉ちゃんも相当仕込まれてたらしい」>br<

「はあ、因縁は孫の代に受け継がれたと」>br<

「それで兄貴達どうしたんだ？」>br<

「や、一本取るまで諦めないつつて、兄ちゃんが姉ちゃん追い掛け回してる」>br<

「仲良く喧嘩する猫と鼠みたいな話だねえ」>br<

そう言って笑った悠さんが持ってきてくれた手作りケーキを頬張って、そんな生易しいもんじゃないよと思う。>br<

あの人達昔からああなんだよなあ、似た者っつか剣道馬鹿っつか。>br<

確かにその点は孫の代まで受け継がれてるわ、呪いかこりや。>br<

俺にはそんな血い入ってないみたいでよかったー、兄ちゃん達はいいなと思うけど実際なりたい訳じゃない。>br<

「しかしまたなんで突然結婚なんて流れになったの。元々広大さんがこの家継ぐんじゃないの？」>br<

「あー、まあ、なんとなく今頃自覚したんじゃない？」>br<

悠さんの隣から無言の圧力が突き刺さりまくって堪らん。>br<
喋りません喋りません、アニキが恐ろしいほど綿密に将来計画練っ

てる事は将来の義姉には喋りませんとも。>br<

だから睨むの止めろって！実兄って事実を全力でスルーしたいくらいこえーよ！>br<

そんな中でも悠さんをフツーに後ろから抱っこしてる状況もいっそこえーよ！>br<

「でもあかりさんが広大さんと結婚するなら気心も知れてるだろうし、色々スムーズだね」>br<

いやいやいやいや、むしろそこに行き着くまでが全然スムーズじゃないって。>br<

多分知られてるだけに兄ちゃんにとっては一番やり辛い人なんだ。>br<

手近で済まそうとすると大きな落とし穴って訳か、怖い怖い。>br<

「悠さん、俺にも誰か紹介して」>br<

「あ、最近カレシと別れた子がいるよ。カレシの方が海外に引っ越す事になったちゃったらしくてねえ。んで新しいの探してるって言うてたよ」>br<

「おっ、丁度イイ感じ。彼女どんなタイプ？」>br<

「うん、超ドS通り越してたまに鬼」>br<

「ワ、丁度イクナイ感じ」>br<

思わず両手上げて降参。>br<

「それって東山だろ」>br<

「正解」>br<

「じゃあ剣矢に丁度じゃないか」>br<

「私も剣矢君には引っ張ってくれる子の方が合ってると思うんだよね」>br<

いやいやいやいやいやいや！引っ張ってくれるどころか引き摺り回される予感しかしねえだろそれ！>br<

「俺は可愛いカノジョが欲しいの！」>br<

「……」>br<

「そんな、そんな事言ってる内はもう絶対出来そうにない予感する
きつとある意味こういうのが一番モテないタイプなんだよなあみた
いな目で見ないで！ちよつとは自覚してる！」>b r<

「……………」>b r<

「そんな、ちよつともしてないだろみたいな目で見ないで！多分し
てる！」>b r<

「剣矢君、うん、まあ、ガンバレ」>b r<

「うわあああああマジ同情カンベン！」>b r<

うう、別に夢くらい見たっていいだろ、悪い事してる訳じゃある
まいしっ。>b r<

俺に言わせりゃ高校生ですでに結婚計画練ってるとか、手近だから
って幼馴染みに突然結婚迫ってる方がどうかしてるっつの。>b
r<

俺の方が非常識みたいに言うな！むしろこの兄達の中で一番マシだ
ろ！？>b r<

「いいよもう、俺は俺なりに女友達とかの中からカノジョ探すから
っ」>b r<

タイミングよく鳴った携帯に飛び付く。>b r<

今メール寄越した奴に惚れちゃいそうだ俺、心折れそう誰か慰めて。
>b r<

「……………」>b r<

「友達？」>b r<

「ん、……………」>b r<

がつがつと押して開いたメールに並ぶ文字に、俺はぱったりとそ
の場に倒れ込んだ。>b r<

手から転がった携帯を勝利兄ちゃんが取り上げて、それを悠さんと
並んで眺める。>b r<

イチャイチャしてんじゃねえや、コンチクショー。>b r<

「うわあ……。カレシ出来たよー、これからも相談乗ってネ。ミー
コ」>b r<

「……悠さん、メール読み上げるのヤメテ……」>b r<

俺のライフポイントはもうゼロよ！やめたげて！剣矢君可哀想だから、超可哀想だから！>b r<

「剣矢君、元気出しなよー」>b r<

「ほっとけ、悠。上行くぞ」>b r<

「はーい」>b r<

………どいつもこいつもイチャイチャしやがってコンチクショ

ー！！>b r<

>b r<>b r<

番外編4 きょうだいのこと（後書き）

次かその次で、番外編の更新を一時停止します。

番外編 5 八年目（前書き）

※勝利、悠視点。

番外編5 八年目

>br<>br<

どうしたものかと頭を抱えて早一年。>br<

どう考えても考え過ぎなのはわかってる、わかっているが疑問は浮かんで解決策は見つけられないままの堂々巡り。>br<

昼休みの間は特にこうだ。>br<

仕事をしている間より、家にいるより、ふと思考が自由になるからかもしれない。>br<

まだ大丈夫、まだ時間がある、そんな言い訳を続けてもう一年。

>br<

そしてうっかり当日まで問題を解決しないまま持ち越すなんて体たらく。>br<

これが仕事ならとくにクビを切られているってもんだろう。>br<

社会人になってまだ一年なんて言い訳出来るのは昔の話、俺だってそんな言い訳をする奴など雇いたくはない。>br<

しかしそれを口実にだらだら問題を先延ばしにしたのは事実。>br<

「笹原、お前まだやってんのか?」>br<

トレイを持って正面に座った同期の青山が呆れたように言うのに反論も出来ない始末だ。>br<

一旦この思考に囚われると、仕事に戻るまでこの状態が続く。>br<

「そういうのはなあ、ぱっと決めてぱっと言えればいいんだって」>br<

「お前に何がわかるんだよ」>br<

「客観的なあり難い第三者の意見だろ」>br<

それが出来りゃ一年もぐだぐだしてない。>br<

「そういう問題は早目が肝心とかうちの婆ちゃんが言ってたよ。後で泣かすなら先に泣かせてな」>br<

それもどうなんだよ。>br<

「何か深刻な問題でもあったんですか？」>br<

「合い席よろしく」>br<

次いでやって来た二人はやはり同じ会社の奴、女の方の部署と名前は忘れた。>br<

「なんだよ、彼女と喧嘩でもしたのか」>br<

「え、笹原さんて彼女いたんですか？あ、ごめんなさい」>br<
いそうに見えないよなあと結構失礼な事を言いながら青山が笑う。

>br<

別にどう見えてもどうでもいいけどな、問題は今そこじゃない。>br<

「上手くいってないんですか？私、相談乗りますけど」>br<

勝手に隣に座った女は、見れば今時の化粧をして今時の女って印象。>br<

どうせ何の役に立たない事もわかり切ってる。>br<

大体これは俺の問題で、俺が自分一人で決着をつけなきゃならない事だ。>br<

そんな虚勢を張ってみても、一人で考え続けているから堂々巡りなのかもしれない。>br<

「あれ、マジなの？」>br<

「もうほっとけって」>br<

外野でごちゃごちゃ言われると益々頭がこんがらがる。>br<
この問題に向き合い始めてからあれこれ考えて、ぼんやり見えてきそうなものまで飛んで行きそうだ。>br<

「本当に大丈夫ですか？私いつでも空けておきますから」>br<

「あー、斎藤さん、もしかして笹原狙いの？」>br<

「そんなんじゃないですよ」>br<

「あやしー」>br<

ああウルサイ。>br<

社会人になっても同年代の奴が業務時間外に集まればまだまだ学生のノリだ。>br<

ふとそのまま高校生の時を思い出して、うっかり溜息が零れる。

>br<

悠と付き合って八年、あいつの家にお世話になってほぼ同棲で暮らし始めて五年。>br<

俺はそれを全て裏切るような真似をするつもりかと、今更自分に言い聞かせる。>br<

ケジメだけはしっかりつけたいんだ、それが一番あいつの為になると思うから。>br<

意を決してポケットから携帯を取り出し、次々と出てくる名前の羅列を探っていく。>br<

「おい、見ろよあれ。すっげー美人!」>br<

「うわ、ホントだ。モデル? 足長っ」>br<

静かにしろと男二人に言いかけた瞬間、後を追って視線を移した窓の向こうで見つけた姿に思わず立ち上がった。>br<

財布から札を引き抜いてテーブルに叩き付けるように置くと、店を出て久しぶりに走る。>br<

スーッってのは走り難いもんだと、今始めて知った。>br<

「あ、うわ、偶然! 今仕事中なの?」>br<

恐らくあの二人が騒いでいた張本人は、俺の足音に気付き振り返ったとたん、いつものように艶やかに微笑む。>br<

彼女のこのとろりとした笑顔が堪らないんだと、見た誰かが言っていた。>br<

「ちよっと、話があって」>br<

「あ……もしかして彼女の事? あの、まだ言っていないんだよね?」

>br<

心底情けなく思いながらも頷けば、彼女は大丈夫と言わんばかりに頷く。>br<

そうされる事で、俺はまた酷く情けなく思う訳だが。>br<
彼女にまで負担をかけるとわかっていながら、けれどもう他に方法
が思いつかない。>br<

袋小路から出れないまま、あいつに言葉を伝えられない。>br<
「私時間大丈夫だから。そうだね、ちよつと話ししようか。言い辛
いのはわかるけど、このままじゃダメでしょ？」>br<

項垂れるように頭を下げれば、彼女はまたにこりと微笑む。>br<

どうして彼女が多くの男の目を惹き付けるのか、よくわかる。>br<

並んで歩き出しながら、この足が今日こそは出口へと続けばいい
と願った。>br<

>br<>br<>br<>br<>br<>br<>br<

「悠ちゃん、あんまり気にしない方がいいよ？どうせガセネタだっ
て」>br<

開店の準備をしつつ苦笑するマスターに、それでもカウンターに
埋まった顔が上げられない。>br<

それと言うのも、ついさっき店に駆け込んで来た常連さんの一言に
ある。>br<

「勝利君が浮気なんかするはずないでしょ」>br<

「わかってますよう！ただ隣並んで一緒に歩いてやがったとかいう
美女情報が解せん！」>br<

なんでも「さっき駅前で悠ちゃんのカレシがすごい美女と仲よ
さそうに歩いてたよ！」らしい。>br<

なんでも「えっらいセクシーな感じで足なんか長いし色っぽいし！
あれはヤバイよ！」らしい。>br<

クソが余計な情報持ってきてやがって、なあーにがせくすいーだ。>br<

「悠ちゃん悠ちゃん、後ろに般若が見える」>br<

そして女は鬼と化す、ですね。>br<

「会社にそんなのいるなんて聞いてない！いや言わんだろうけども！」>br<

「大丈夫だって。そんな美女なんて、俺の奥さんに比べたらスッポンだから」>br<

マスターの嫁と比べてスッポンとか言われても、誰が得する情報だよ。>br<

大体ここに勤めて一年になるってのに嫁なんか見た事ないし。>br<

まさかどこかの誰かみたいな画面から出てこれない嫁じゃあるまいな。>br<

「最近なんか様子おかしいの、そのク……いや美女が原因かも……」>br<

おっと、恐ろしい可能性が浮上してしまった、自分の推理力が怖い。>br<

「様子おかしいって？」>br<

「一人になってる時になんか考え込んでるみたいで。でも一緒にいる時は普通だし。だからそう深刻な悩みでもないのかと思ってただけど」>br<

悩みがあれば結構勝利はわかりやすいからすぐ気付く。>br
それに一緒にいる時でもそういう事を持ち込んどると自覚してる場合は、私にも話してくれる。>br<

就活の時とかはそうだった、一緒にいてもぼうっとしたりしてて。

>br<

でも今は特にそれもない、私が目を離して勝利が一人でいる時に何か物思いに耽っている感じがする。>br<

「勝利君も社会人二年目だし、色々と仕事であるんじゃない？」>br<

「新入社員の美女が来たのかな……」>br<

「あーいや、だってあの子、君以外興味ないって感じじゃない」>br<

「そう見えます？えへっ」>br<

「立ち直り早っ」>br<

「はあ……」>br<

「落ち込み早っ」>br<

うーん、そう言われればそういう事に危機感を覚えた例もないんだよなあ。>br<

もし、もしだ、万が一にでも、勝利がそのビジョとやらに現を抜かしているってんなら、無意識にも後ろめたさがあっていいはずだ。

>br<

でも別に急に優しくなったりしたとか、冷たくなったりしたとか、触れ合いがなくなったなんて事もなく。>br<

いやむしろ逆に学生時代と変わらず色々と精力的で感心するくらいだ。>br<

私が所謂一般の会社勤めをするかについては散々話し合った時期がある。>br<

なんでかある時期を境に、勝利は過保護になったというか心配性になったというかで、一人で電車にも乗せてもらえなくなった。>br<

私は小学生か何かかと。>br<

で、結局電車通勤はダメ、出張はダメ、とか消去法で残ったのがこのカフェ&バーの店だった。>br<

明石君のお兄さんの紹介で、夜にバーとして店を開けるまでの時間働いている。>br<

家で主婦よろしくやってるのも提案にはあったけど、それは私自身が却下だ。>br<

まあ勝利が仕事してる間、何かやってないと待つのがしんどくなるからね。>br<

もう一つは、この近所で評判雑誌でも評判の超イケメンマスターが奥さんに首っ丈だという事もある（架空の人物にしる何にしる）。>br<

そうでなかったら勝利が承知するはずもない。>br<

あらいやだ、こんな時にも惚気ちゃったわ、長年染み付いた習慣で怖いな。>br<

「いや、そんな訳がないんだって、だから。だってこの間の休みの時のセックスなんか四時間ですよ!? インターバルもなしに地上波映画二本分ですよ!？」>br<

「俺は一日中でも頑張れるよ」>br<

だからマスターが二十四時間頑張れたところで誰が得する情報だよ、無駄知識にも程がある。>br<

いやマスター目当ての客はキャーとか黄色い声上げるとこなのか、……心底どうでもいいな。>br<

「気になる女が他にいる男がする行動じゃないでしょ」>br<多分。>br<

「俺は奥さん以外気にもならないよ」>br<

「せめて従業員は多少気にしろと」>br<

「悠ちゃんの事は目をかけてるって。今度俺の奥さんにも紹介するから。あ、でも妬いちゃったりしないかなあ、あいつ」>br<

心底して欲しそうにデレデレ言うな。>br<

ああでもその線も勝利はないよなあ、どっちか言うと自分が存分に目一杯且つ力一杯する方だし、して貰おうなんて頭があるかどうか。>br<

倦怠期とか言うやつならともかく、八年も一緒にいてまだ四時間もやるようなカップルを倦怠期と呼んだら倦怠期から訴えられそうだって。>br<

今倦怠期って何回言ったよ。>br<

「帰ったら聞けばいいよ。今日一緒にいたあのドロボウネコは誰よ!って」>br<

おい、どこの昼ドラ。>br<

駄菓子菓子、いや、だがしかし。>br<

「んー。まあそっか、四の字固めで聞けばいいか」>br<

「それ聞いても答えられない状態になるんじゃないよね」>br<
じゃあエビ固めだな。>br<

>br<>br<>br<>br<>br<>br<>br<
帰路を歩きながら、なんとも言えない気分を抱えた。>br<
まだこれでののかと往生際悪く思ってる所為だろう。>br<
やがてすっかり見慣れた家のドアの前に辿り着き、らしくもなく深呼吸を繰り返す。>br<

こんな姿を道場のチビ達に見られたら一体なんと言われる事やらだ。
>br<

試合の時より、面接の時より、今までの人生の中で一番緊張してるんじゃないかと思う。>br<

途中何度も頭の中でシミュレーションしてみても、泣いてる姿以外の悠が想像出来ない。>br<

仕方ない事だとは思っているが、俺としては出来ればもっと違う展開がいい。>br<

それも俺にとって都合がいいだけの考えか。>br<

「よし。……ただいま」>br<

鍵を開けてドアを開けば、すぐ目の前に悠が仁王立ちしていて、流石にぎよつとした。>br<

違う展開がいいとは思ったが、誰がこの展開を想像するよ!?!>br<

「そもさああああああああああああん!」>br<

「せっぱ!」>br<

あ、いかん、思わず条件反射で応えてしまった。>br<

本当に八年経ってもこいつの行動だけは読めない。>br<

いやもう何年経とうがこいつを把握しようなんて無理に決まってるけどな。>br<

「私の事好き?」>br<

「好き」>br<

これも咄嗟に答えしまうと、般若のようだった顔がとたんふにや

りと柔らかくなる。>br<

物凄い百面相だ、最早手品だこれは。>br<

しかし……そうじゃないだろ俺！>br<

「あ、あと一つ聞きたい事あるんだけど」>br<

「悪い、メシ食って風呂入ってからでいいか？俺も話あるし」>br<

「オッケー」>br<

危なかった、なんなのか知らんけどこのまま計画が崩れるとマズイ。>br<

シミュレーション通りに行ってくれないと、色々とタイミングを計り損ねる。>br<

これ以上ぐだぐだになると、まさしくぐだぐだに終わりそうだ。>br<

「今日は魚ですー」>br<

にこにこそう言っただけ俺を食卓に引っ張って行く姿を見ると、どうにも胸が苦しくなる。>br<

悠に恋をして長い時間が経った、初めて出会った時から数えると我ながら凄い。>br<

俺の人生の殆どを占めてた女だ、だから出来る限り泣かせるような事はしたくない。>br<

ふといつかの親父さんの言葉が蘇る、……ケジメつけろ、か。>br<

「あれ……今日は一緒にいてもやってるな……」>br<

「は？何？」>br<

「いーや。沢山食べて風呂に入っただけで言う事言っちゃいな」>br<

やっぱり察せられてたか、どうも俺は悠に言わせりゃわかりやすいらしい。>br<

まあそんな事を言う奴はこいつくらいのもんだけど。>br<
お膳立てされてもビミョーだ、それってどうなんだ、情けない。>

b r<

とはいえ、いつまでもぐだぐだ引っ張ってる訳にもいかない。> b r<

食卓を彩る手料理をいつになく掻き込み、促されるまま風呂に入ってまた頭の中でシミュレーションを繰り返した。> b r<

こういう事は正直苦手だ。> b r<

俺は少なくとも考えるより行動する方が性に合っていると自覚してる。> b r<

行動する前に二の足を踏む事もなかったはずだった、どんなに悩んだ時だってだ。> b r<

けどそれは今も変わらず、俺があいつを大事だからだろうとも思う。> b r<

大事過ぎて引き出しの奥に仕舞ってだけいてもいい事なんか何もないとわかっていながら。> b r<

時折無性にそうしたくなる。> b r<

一緒に暮らし始める前、親父さんから悠のお袋さんの事を聞かされて以来、覚悟は決めているつもりだったのに。> b r<

こんな自分を見ているとどうにも、本当の意味で理解なんかしていないのかもしれないと感じる。> b r<

自分なりにこの八年頑張ってきた。> b r<

親父さんと俺の両親と爺さんとで何度も話し合った。> b r< 道場の事と仕事の事と、それから悠の事。> b r<

全てにとって一番いい形で収まるよう、努力してきた。> b r< それなのになんだってこんな事になっているのか、自分を罵りた

くなる。> b r<

「長風呂だったねえ」> b r<

散々風呂に出たり入ったりを繰り返した後リビングに行けば、悠は笑いながら麦茶を差し出してきた。> b r<

俺が座った前のテーブルにグラスを置いた瞬間、その手を取って隣に座らせる。> b r<

上手いやり方なんてわからないし、知ったところで俺はその通りになんか出来ないだろう。>br<

俺がどんなにこいつを泣かせたくないと思っても、きっと上手く行かないのと一緒にだ。>br<

「悠」>br<

「はい？」>br<

自分で息を吸い込む音が、やけに大きく聞こえた。>br<

「これで、終わりにしよう」>br<

>br<>br<>br<>br<>br<>br<>br<

は？とも声が出なくて、ぽかんと勝利を見上げる。>br<

ア、エ、……パードウン？>br<

「ずっと考えてたけどな、これ以上先延ばしにするのはお前の為にもよくない」>br<

「はあ……」>br<

「お前はいいって言うかもしれないけど、そう言うだろうけど。これ以上は俺が限界だと思う」>br<

「はあ……」>br<

ぼわんぼわんと耳鳴りがしてるわ、正直何言ってるのかあんまり聞こえない。>br<

えーと、そうか、ここんとこずっと様子が変だったのって、それを言う為だったのか。>br<

ほう、そりゃ様子がおかしくなるわな。>br<

で、何言ってるのこの人。>br<

「俺は正直器用じゃない。自分で誤魔化してる気になって、時々イライラするんだよ」>br<

「はあ……」>br<

自分、不器用ですけど……ってやつですか。>br<

まあお世辞にも器用だとは言えないけど、何を誤魔化すってか。>br<

久しぶりを見る、試合前の時みたいなその張り詰めた緊張感を持

つ目。>br<

よくわかりませんが、超カッケー。>br<

よくわかりませんが、あれ、胸がなんだかバクバクいってますよ私。>br<

「泣くなどは言わない。出来ればそうして欲しくはないけど、それも俺の勝手だと思うから」>br<

ぎゅっと勝利の手が私の両手を包んだ。>br<

「でも勝手ついでに、これで終わりにしたいんだ」>br<

最早、はあとも出て来やしねえよ私の口。>br<

ああ、待て、まだ口を開くな、その先は言うな、待て、怖くて目が
瞑れないんだって。>br<

待て待て待て待て、一年ぐらいちょっと待て、頼む、もっと精神が
落ち着いてる時にだな。>br<

「だから——俺の、嫁に来い」>br<

.....

…ハ？>br<

「……おい、聞いているか？」>br<

「はあ……」>br<

お、出た。>br<

「あんまり何度も言わせるなって。これでもなんて言ったもんか
ずっと考えてたんだぞ」>br<

ああ、つまり。>br<

「そんな事かよおおおおおおおおおおお！！！！」>br<

「いだだだだだだだだ！！おまつ、プロポーズした男にエビ固め
決める奴があるか！」>br<

ここにあるわい！>br<

「大体そんな事とはなんだよ！こっち一年も考えたんだぞ！？」>br<

「うわ、一年も考えてあれとかっ」>br<

「ウルサイ!」>br<

不器用ここに極まったな……不憫な子……でも好きっ。>br<
すっかり拗ねた勝利が盛大に溜息を吐く。>br<

「泣くかと思えば逆ギレとか、八年経ってもお前は想像の斜め上だな」>br<

「そりゃお互い様だ。大体心はもう嫁いでんのに今更な」>br<
「だからっ、……心だけじゃなくて身の方も来い」>br<

「ん、よっしゃ、相庭悠、行っきまーす!」>br<

ぱっと両手を広げて飛び付くと、軽く受け止められて強く抱き締められた。>br<

ぎゅうぎゅうとお互いに羽交い絞めにしてみる。>br<

なんだかむずむずとしてきて、あははと笑いが零れた。>br<

少し腕を解いた勝利が私を見下ろして、小さく苦笑する。>br<

「やっぱ泣いたか。そうならないように色々考えてみたんだけどな」>br<

いつの間にか零れた私の涙を指で拭って、自分のポケットに手を突っ込んだ勝利は引き抜いた手でまた私の両手を包む。>br<

違和感にその手を見ると、絡められた指の一つに光る物。>br<
薦模様のそれはくると円を描いた中に更にキラキラ光る物をくっ付けている。>br<

「これ、勝利が選んだの?」>br<

「そう。散々どうしようか迷ったけど、丁度今日お前んとこのマスターの奥さんに会って。前に少し相談乗って貰ったし、一人じゃ行き辛かったから店にも付き合って貰った。結局俺が決まらなくて、昼カタログだけ貰って出て来たけどな」>br<

そういう事かよっ。>br<

ていうかビジョってマスターの嫁か!……マジでいたのか!>br<
「え、いつマスター妻と会ったの!私でさえ会った事ないのに。てっきり架空の人物か画面の中にいるもんだと。ノンフィクションだったとはなあ」>br<

「前にお前迎えに行った時。お前と入れ違いだったな、そういえば会った事なかったのか」>br<

「超美人て話だけど」>br<

「ああ、そんな感じだな」>br<

全く他人事のように言うその姿は、きっとユニコーンに遭遇しても同じっぽい。>br<

……やだ別に勝利がビジョにうつつ抜かすとか本気で心配してた訳じゃないんだから勘違いしないでよね！そんな目でこっち見ないで！>br<

ふっ、ガラにもなく動揺してしまった、八年経っても勝利の事となるとダメだわ私。>br<

「わー、なんか凄いね」>br<

「何が？」>br<

そう言いながら勝利が笑う。>br<

わかる、だって私も今笑ってるのがわかるもん。>br<
なんだろうなあ、くすぐったくって嬉しくって、笑わずにはいられない気持ちだ。>br<

頬がダラダラ緩みまくってにこにこしちゃうよ。>br<

「恋人じゃなくて、これから夫婦になるんだなあって。こういうの具体的に想像した事なかった」>br<

よもや勝利が自分で指輪なんか選ぶとも思わなかったよ。>br<
精々自然の流れで婚姻届け突き出されて名前と書けて言われるくらいかなあと。>br<

……それはそれでイイな、ぶっちゃけ何でもいいな。>br<
新しい道を行こうって、そう言ってくれる気持ちが嬉しいな。>br<

しかし指のサイズをしっかりと把握してるのは流石私の超近未来の夫。>br<

例の四時間中、なんかやけに指触るなと思ったらそれか。>br<
「なかったのか」>br<

「何をそんな意外そうに」>br<

「女ってそういうの具体的に想像してるもんかと……ああ、お前は規格外だった」>br<

「今度はバックドロップにしてみる？」>br<

「遠慮しとく。まあ、現実的にこれからが大変なだけだな」>br<

そうだろうなあ、式挙げなくて済むなんて環境じゃどう考えてもないし。>br<

ああそういえば、私の超近未来の義母は顔合わせる度に結婚はまだなのって勝利にねちねち言ってたっけ。>br<

それもあつたし、もう少し仕事が落ち着くまでは勝利自身がしたくないかと思ってた。>br<

「お前、俺がしたくないもんだとでも思ってただろ」>br<

OH……早速バレたよこのドエスパーム。>br<

「いやあ、正直言えばこの家住む事もよく了承したなと思ってるよ」>br<

大学入りたてで相手の親から同棲しろとか勧められて実際しますかね？>br<

勧める方も勧める方だが、了承する方も了承する方だろうに。>br<

あれ聞かされた時は流石に自分が超真面目人間に思えたもんね。>br<

でもってあれから六年くらい経ってるって、月日の流れを感じる。

>br<

一緒にいるのが当たり前になって、毎日顔を合わせて、毎日色々な事もある。>br<

そんな日々の中に早々に埋もれて行きやしないかって、心配した事もあったんだよ。>br<

ほら、早い内から同棲とかしちゃうと、逆に結婚概念がなくなるみたいな事聞かし。>br<

私はともかく、勝利がそうになったらどうしようかなって、やっぱちよっと、考えた。>br<

「女神の髪は短いから」>br<

「ああ、その場で掴まないと好機を逃がすって?……好機だったのか」>br<

「好機だっただろ。フツー、男が女の親に頭下げて頼みに行かなきゃなんないようなところを据え膳な訳だし」>br<

同棲くらいで今時そこまでするかねえ、真面目っ子なんだから勝利さんたら。>br<

そうなると親父様はグッジョブだな、今度帰ってきたらうな重作ってやる。>br<

「色々あったな、八年」>br<

「そうだね、結構色々あったよねえ」>br<

高校卒業して、大学生になってそれも卒業して、社会人になって、――言葉にすれば区切りはこんなものだけど。>br<

毎日の思い出が沢山積み重なって、振り返ろうとするとあれもこれもってまろび出てくる。>br<

そうして思い出せる全ての瞬間、隣に勝利がいる。>br<

「明日俺休みだから、一緒に病院行こう」>br<

「え、妊娠とかしてないんすけど」>br<

実はここで妊娠発覚ーなんてオチもないよ、フツーにこの間きてたしね。>br<

そう言うとなわかってると返される、そうだこの人いっそ私より正確に把握してるんだった。>br<

「そうじゃなくて。お前の体の事で、医者交えて話しておきたい事がある」>br<

「私の体とは?」>br<

「悠、お袋さんの事で考えた事ないか?」>br<

言われてみて勝利が何を言いたいのか漸くわかった気がした。>br<

ああ、そうか、そういうばちつとも考えた事なんてなかったな。>br<

だってこの通りピンピンしてるし、それは勝利もわかってると思うけど。>br<

すると勝利は察したのか首を振る。>br<

「お前、俺達夫婦になるって事、真面目にわかってるか？」>br<

「はあ。婚姻届け出すんだよね。いつ行く？」>br<

わかってないとデコピンされた、極近未来の妻に超痛えデコピンとかするなよっ。>br<

「家族になるって事だ」>br<

「うん」>br<

「家庭を作るって事だ」>br<

「うん」>br<

「……察せよ！」>br<

「はは、ウソウソ。わかってるよ、そうか、……そうだね」>br<

これから物理的に私一人の体じゃなくなるという事だ、となるとメンテナンスは必要だ。>br<

うわー、勝利ってば本当に具体的に考えてたんだな。>br<

こうなると逆に乙女顔負けのロマンチストで現実主義者だ。>br<

ううん、相庭悠、24歳、まだまだ心は乙女ですとも！>br<

「あ、これから相庭悠じゃなくて笹原悠になるんです。きゃっ」>br<

「そーいや……そうか」>br<

なんだそっちは考えた事なかったのか。>br<

んもうそんな事に照れやがって、可愛い奴めー！襲うぞー！>br<

と、がっつと飛び付こうとしたらがっつと頭を掴まれました。>br<

おい、ここは感動の抱擁リバーズのターンじゃないんかい、空気読めやコラ。>br<

「だから明日病院行くっつってんだろ！行った傍から妊娠報告する訳にいかないんだよ色々っ」>br<

「……もう作る気なのか」>br<

「ニヤニヤすんな」>br<

またデコピンかと迫ってきた指に目を閉じれば、強く唇を押し付けられる。>br<

強く唇を吸われて捻じ込むように舌が潜り込んできた。>br<
ぬるりとした舌で口内を掻き回されると、頭の中までそうされている気分になる。>br<

もどかしげに何度も、舌を絡めたり軽く歯を立てられたり、キスが続く。>br<

「勝利……」>br<

「わかってる、何も言うな」>br<

「してあげてもいいんだけど。じゃあトイレに行っておいで。早く帰って来てね、ハニー」>br<

人にまたデコピンして、勝利はぶつぶつと言いながら部屋を出て行く。>br<

それを見送ってごろりとソファに横たわった。>br<

広く柔らかな場所にぽんと放り投げられたような感覚がする。>br<

なんだろう、言葉に出来ない感じだ。>br<

やがて戻って来た勝利が私の上に覆い被さって来たかと思うと、腰に手を回してそのままぐいと持ち上げた。>br<

勝利の足の腕に跨るような形で抱き締められる。>br<

暫く言葉はなかった。>br<

多分勝利もこの訳のわからない感覚を体感しているんだと思う。>br<

「お前も、感じてるか？」>br<

だからそんな言葉に頷いた。>br<

「ごめんな」>br<

でもその言葉はわからなかった。>br<

「お前にはもっと色々可能性があったと思う。お前なら好きな職に

も就けただろうし、俺中心に回らせたのは俺の我俣だ」>br<

「んなこたあない」>br<

多分言われていても言われていなくても、一緒だったと思う。>br<

もし私が母さんと同じ病気になる可能性が高かったとして、一体それがなんだっていう。>br<

笹原勝利という人を好きになった、それが事実で現実だ。>br<そこに「もし」はない。>br<

そう考えないほど愛してきた自負がある、愛されてきた自信がある。>br<

私達は一生懸命、この八年を過ごしてきたじゃないか。>br<

「バカ言ってるじゃないよ。あんた中心に回らせただ？私の人生は私のもんだ、私が決めて私が歩くんだよ」>br<

でもきつとこの人は多分ずつと考えてしまうだろう、優しい人だから。>br<

そして何せビジョなど目もくれないほどの私にメロメロなのだからね。>br<

反論は認めない。>br<

「そんでさ、私の人生の隣に勝利の人生があるよ」>br<

きつと結婚をしても同じ道という訳にはいかない、違う考えを持つ違う人間だから。>br<

それが口惜しくなる時もあるけど。>br<

でも手を繋いでいる限り、道は同じ方向に続いてる。>br<

「相庭悠さん」>br<

「はい、なんざましよ」>br<

また持ち上げられて、今度は少し距離を取られた。>br<そしてぎゅつと両手が握られる。>br<

「俺はかなり面倒臭い奴だと思う。我俣だし独占欲は強いし自分勝手だし面倒臭がりだし、あんまりいいところはない」>br<

相変わらず自己評価低いなとちょっと笑ってしまう。>br<

同期の中じゃ出世頭だと期待されてるって、前に同じ会社の人から聞いてるんですけどね。>br<

勝利も私と一緒にであんまり目的以外が見えないタイプだからなあ。

>br<

「それでも、俺はお前が好きだ」>br<

多分自分にとってそれが一番確かで、一番誇れるものなんだと言う。>br<

「俺達にとっても他人にとっても、この関係の呼び名がどう変わっても、これだけは変わらない」>br<

うんと頷いた。>br<

変わらないものなんてきつとないだろう、勝利が言うように私達の関係の呼び名も生活も今後は変わってしまうように。>br<

それでもそう言い切ってしまうこの人が好きだ。>br<

「私も勝利が好き。大好き」>br<

ちょっと悔しいじゃないですか、なんだか勝利の方が私を好きな気がするから。>br<

足してみたら勝利が笑う。>br<

「俺なんてお前なしじゃ生活出来ない自信がある」>br<

「私なんて未だに勝利が他の人も好きになっちゃったらどうしようなんて考えちゃって絶望しかけたもんねー」>br<

「もしかして今日の事誰かに聞いたのか」>br<

ヤベ、バレた。>br<

「むしろお前の方が心配だろ。で、そんなクソみたいな情報をお前に与えた奴の名前を言え」>br<

「NONO、クソみたいな奴なので名前は忘れたよマイケル！」>br<

「思い出させてやってもいいんだぜ、リサ」>br<

「まあ不思議ねっ、記憶の引き出しが綺麗さっぱり消えちゃったわ！まるで魔法ね！スーパーミラクルメモリアル洗剤をお買い求めの方はこちらのフリーダイヤルまで！お電話急いでねっ」>br<

今ならなんと記憶の引き出しの鍵付き！>br<
まあぶっちゃけ洗剤使うまでもなく名前も思い出せない訳だがな。
>br<

「お前」といって、本当にバカな事で笑えていい」>br<
どういう意味だコラ。>br<

「考えようとするとき、お前とずっとそうやっている姿しか想像出来ないんだよな。子供が出来ても、孫が出来ても。俺達爺さん婆さんになっても、くだらない事言い合って笑ってそうだって」>br<

「否定出来ねー。間違っても雑誌に出てくるようなオシャレスマー
トなご夫婦及びご家庭にはなれん」>br<

「だろ？」>br<
肩を揺らして笑う。>br<

毎日ばたばたやかましくて、大声が飛び交ってごちゃごちゃしてて、
それで皆で笑ってるんだ。>br<
「年取ると丸くなるなんて嘘だよなあ。うちの爺さん見てると特に
そう思う」>br<

「ははは、そんな直刃さんに似てる孫、勝利」>br<
「お前だって親父さんそっくりだろうが」>br<
「この世の全てに今絶望した！」>br<

「でもそれでよかった。俺はお前の親父さんにもお袋さんにも感謝
してる」>br<

俺ならビビっていただろうしと勝利は苦笑した。>br<
母さんの話を親父様から今もあんまり詳しく聞いた事はない。>br<

今実際同じような立場に立とうとしてみると、確かにビビらずには
いられないな。>br<

でも、だからきつと、母さんは恐怖も何もかも超えて自信満々に私
を産んだに違いないや。>br<

多分親父様は母さんのそんなところに惚れ直したんじゃないかと思う。

> b r <

「この先色々考えなきゃならない事は多いな。俺達だけの問題でもなくなる」> b r <

「そうだね。でもまあ、任せろ。そんな両親の孫だ、勝利の血が入ったところでびくともしないよ」> b r <

「頼もしい。男は損だよなあ、待ってるだけしか出来ない」> b r <

「おいおいマイク、ジョークが過ぎるぜ。君にも仕事は山ほどあるんだ」> b r <

「そうだったな」> b r <

頷いて勝利は私の頬を包んだ。> b r <

「何でも言ってくれ、何でもする」> b r <

「私、あの月が欲しいの」> b r <

「それなら鏡を見ればいい、もっと美しいものが君の瞳の中にあるよ」> b r <

ぶっはとお互い噴き出して体を屈めて笑った。> b r <

ホントに親父様の本のチョイスはどうなってんだよ。> b r <

そんなセリフを母さんに言えてたとは微塵も思わないけどね、あれヘタレだし。> b r <

「俺はこうやって笑わせられるのは、お前だけだ」> b r <

「勝利も最近ノリよくなってきたねえ。一緒にいると似てくるもんだって言うけど、マジだね」> b r <

ふと目を細めて勝利が微笑む。> b r <

そうだった、この不器用な人は、こういう目をたった一人にしか向けられない人なんだ。> b r <

「ちょっと、疑ってごめんね。まあ勝利をというより得体の知れないビジョとやらにむかっと来たただけだよ」> b r <

「俺には、お前がたった一人の女なんだよ」> b r <

……。> b r <

「勝利さん」> b r <

「わかってる。流れ的にまずかった」> b r <

「この際だし、一緒に怒られてみます?」>br<

「誘惑するな」>br<

「でもしちゃう、それが私」>br<

つんと人差し指で勝利の唇を突付くと、がぶりと食べられた。>

br<

>br<>br<>br<>br<>br<>br<

「勝利君、俺聞いてないよ?」>br<

カフェオレを飲みながら「そもそも言ってないし」と奥さんに返されて「なんで言わないんだよ!」と手に持ったカップを放り出し
そんな勢いで彼が言う。>br<

「なんで俺に黙って他の男とデートなんかしてんだよ!聞いてんのか、由香利!」>br<

「聞いている聞いている。デートじゃないってそれも何べん言えばわかるの」>br<

そんな遣り取りをカウンターで聞きつつ、帰り支度を終えた悠は
戻って来て俺の隣に座った。>br<

「しかし、絵面的に凄い夫婦だねえ。イケメンとビジョ過ぎて、何
あれ怖い。目がつ目がああああって感じ」>br<

「黙ってれば普通にファッション雑誌とかに載ってそうだよな」>
br<

「ああ、黙ってればねえ」>br<

俺のカップを取り上げようとした悠は、一瞬顔を歪めて俺の手に
カップを戻す。>br<

「大丈夫か?」>br<

「匂いがやたらきつく感じるだけだし。ていうか、あれいつ終わる
の。給料貰わないと帰れないんだけど」>br<

手渡しの弊害だな。>br<

「マスター、一旦休止して給料下さい」>br<

「それどころじゃないんだよ!」>br<

それどころじゃねえとか。>br<

まあ気持ちはわからないでもない、同じ事を悠がしたらと思うと……人の事は言わないでおくのが一番だ。>br<

「どうせ明日から産休なんだ、また来週にでも来よう」>br<
俺は肩を竦めて立ち上がり、それに気付いたマスターの奥さんがにこりと笑って手を振ってくれる。>br<

おお、聞きしに勝るヤバさだな、と悠が手を振り返しながら呟いて慄く。>br<

何がと聞いたら笑顔で腕に抱き付かれた……なんなんだ。>br<

「今俺の前で他の男に媚を売っただろ！」>br<

「もーっ、あんたはちよつと黙ってて！」>br<

まだ続く痴話喧嘩を後に店を出ると、悠の手に持った鞆を奪い代わりに手を結ぶ。>br<

「マスターのイメージ超変わった。何がクールなイケメンだよ、雑誌メディアウソツキ」>br<

「俺もそう思った」>br<

のんびりと帰路に着きながら街路樹を見上げれば、草が青々とし
ていて春の終わりを告げていた。>br<

今年の夏は暑くなるかなあ、どうだろうな、そんな他愛もない会話をしながら歩く。>br<

「そういえば明日の夜、家に来いってさ」>br<

「何か作って行こうかな。笹原一家皆いるんだよね？」>br<

「止めとけ、お袋がうるさいぞ。全く自分の時は平気であれこれしてたくせにな」>br<

「そういうもんかもねえ。で、結局直刃さんに名前決めて貰うの？」>br<

「冗談だろ」>br<

うちの男共の名前は全て爺さんが付けたらしい。>br<

重い名前を付けられた方は堪らないと思わず苦い顔になると、それに悠が噴き出した。>br<

いい名前だと思うけどね、と笑う。>br<

「出来た報告を先に医者にしたって、根に持ってるんだ」>br<
「あれは流れるに仕方がなかったような」>br<

しかも報告と言うより検査結果だしな。>br<

「いやあ、あれで本当にすぐ出来るとは思わなかったねえ。さすが勝利さん」>br<

「当たりの良さはお互い様だろ」>br<

結局あの日はあのまま盛り上がって止まれず、そのまま病院先送りにしてたらアレでコレだ。>br<

言うまでもなく医者には散々怒られた。>br<

その後の順調過ぎる検査結果に漸く溜飲を下げてくれたみたいだけどな。>br<

むしろ身体が元氣過ぎるので親父さん共々悠に別な検査をさせてくれと言われたくらいだ。>br<

確かに俺も相庭親子がどんな細胞をしているのかは知りたいところだが。>br<

「どこかに寄るか？」>br<

「ううん、いい。帰ろう」>br<

嬉しそうに笑顔でそう言う。>br<

家に特別な何かがある訳じゃない、ドラマチックな出来事が転がっている訳でもなく、俺達の日常が待っているだけだ。>br<

でもそれが何より待ち遠しい。>br<

こいつと一緒に飯を食い、話し、笑い――そんな日常が、何よりもどこよりも。>br<

「お前が落ち着いたら、明石達が高校ん時の奴ら集めてどこか貸し切って祝ってくれるってさ」>br<

「おおー、そういえば皆に会うのも久しぶりだ。頼子の結婚式以来だなあ」>br<

「ああ、二十離れた男と結婚したっていう？」>br<

「そうそう、とくに母親だし、色々聞こうっと」>br<

そんな言葉を聞いて、どこか少しむず痒くなる。>br<

こういう時は女の方が落ち着いて見えるから、本当に男は所在無いもんだなと思う。>br<

でも不思議なもんだ。>br<

俺の腹には何も入ってないはずなのに、繋がってる手から、もう一つの存在を感じられる気がする。>br<

「今日は俺が飯作るよ」>br<

「おおー、楽しみにしてるよ」>br<

悠が笑う、それで万事が上手く行く。>br<

こいつが笑顔なら、俺の人生も上々だ。>br<
単純上等。>br<

「幸せそうだ」>br<

「勝利が幸せそうだからね」>br<

思えば特別な事は何もなかったのかもしれない。>br<

運命という事も、必然という事も、奇跡という事も、何も。>br<
そんなに難しい事じゃない。>br<

誰かと共に幸せを分かち合いたいと思うのは、自然な事だと知った。>br<

そこに信念はなく、気概もなく、当たり前のように胸に存在している。>br<

気付けてよかったと思う、逃げずにも放り出さずにもいてよかったと心底思う。>br<

幸せだと感じる。>br<

愛する人が隣にいて、愛されていて、すべての事に感謝がしたい。

>br<

ありがとうと言えるのは、今確かに俺が幸せな証拠だろう。>br<

「悠、何が食いたい？」>br<

「んー、カラアゲ！」>br<

ゆっくりと歩く。>br<

繋いだ手が温かい。>br<

「あんまり急ぐなよ」>br<

「子供じゃないんだから、走り出したりしませんて」>br<

「どうだかなあ」>br<

「まだまだ先は長いし、ゆっくり、ね」>br<

「うん」>br<

長い道を、そうして俺達は、これからも歩いて行く。>br<

>br<>br<

番外編5 八年目（後書き）

リクの保留分がまだありますが、必勝法の更新はこれで一旦区切りとさせて頂きます。

番外編までお付き合い頂き、本当にありがとうございます！

因みにマスターとその嫁のなれそめ？は短編「だから、嘘を」でご覧頂きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2692/>

恋愛、先手必勝法！

2011年6月18日20時20分発行